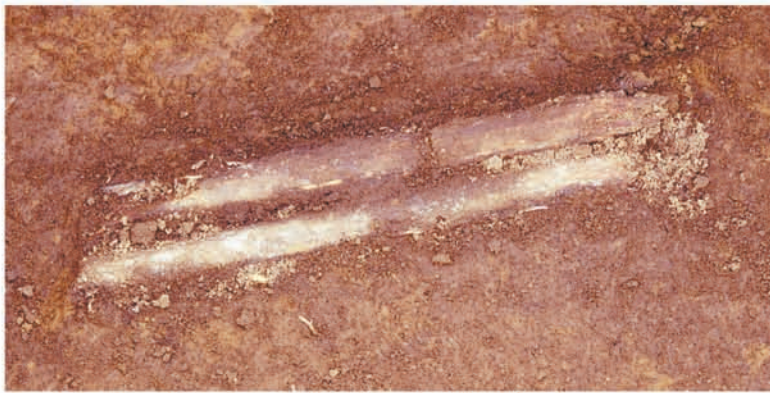


# 思井堀ノ内遺跡中世墓副葬品詳細調査報告





2 軸2の絹絵(合成展開)



1 出土状態(画面上方が北)



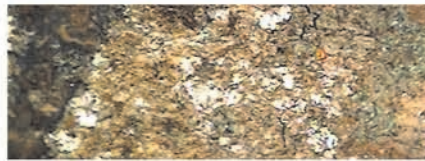
3 軸1の平絹



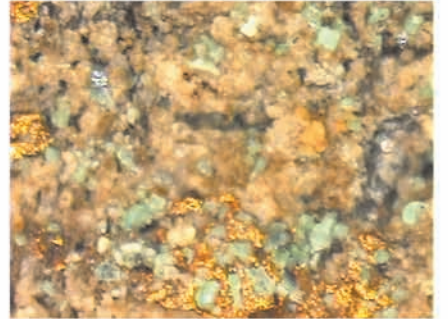
4 軸1の顔料と金箔(合成展開)



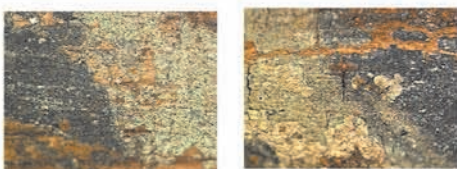
5 軸1の顔料と金箔(合成展開)



7 軸2のきらきら光る部分



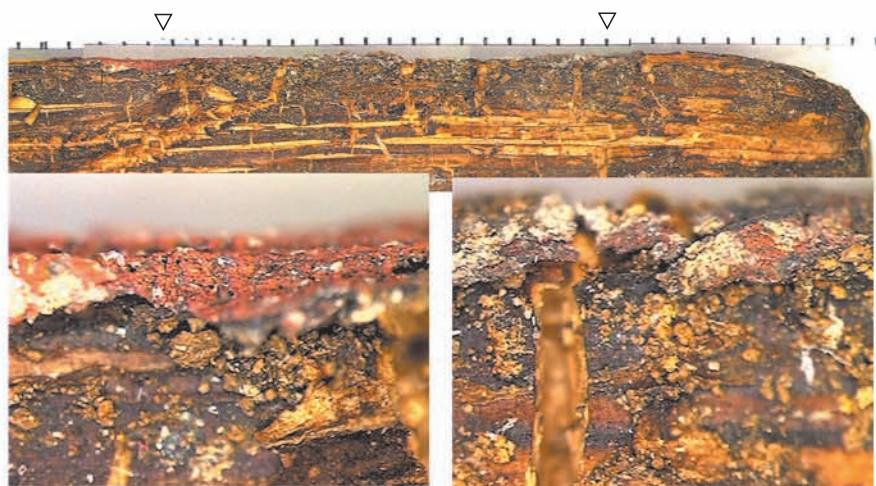
8 軸2の截金と顔料



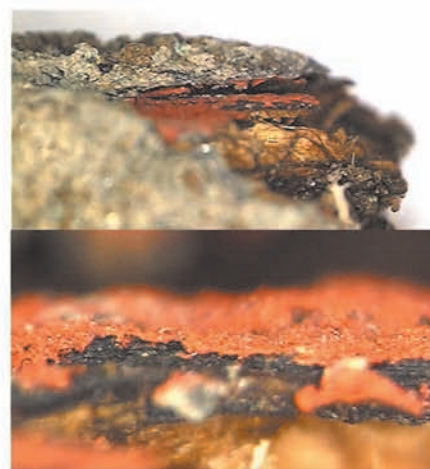
6 軸2の墨と顔料



1 軸2の全体像(合成)



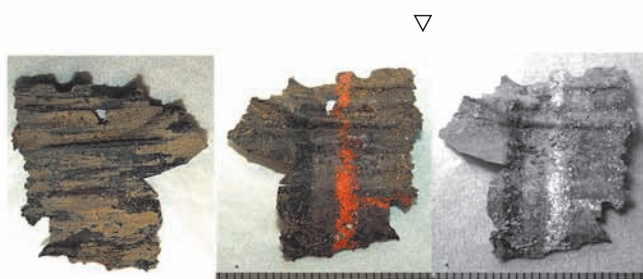
3 軸1の切り合わせ面



2 軸2東端の赤彩



4 軸1の全体像(合成)



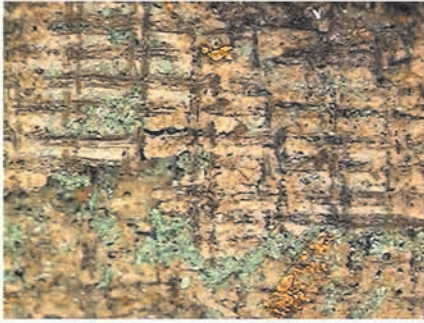
5 軸1西端の漆膜



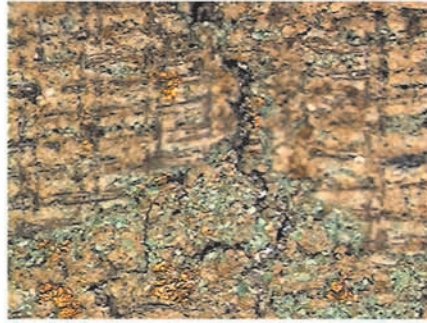
6 漆膜表面の絹地痕跡



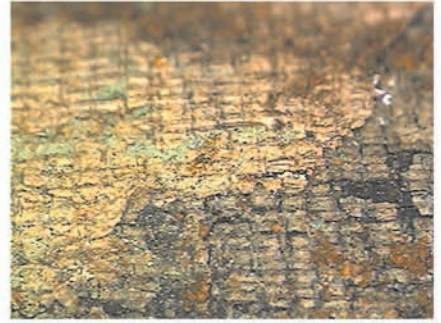
7 軸1と漆膜の境界



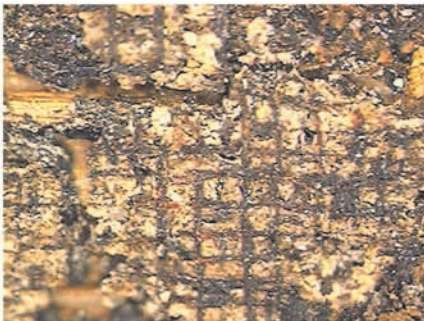
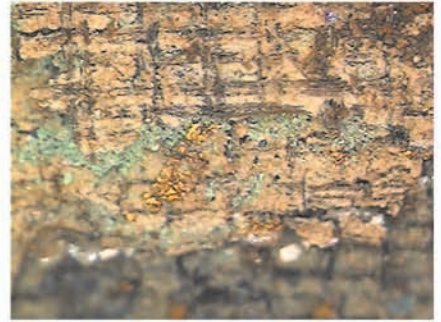
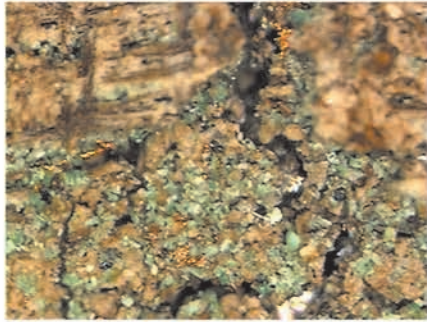
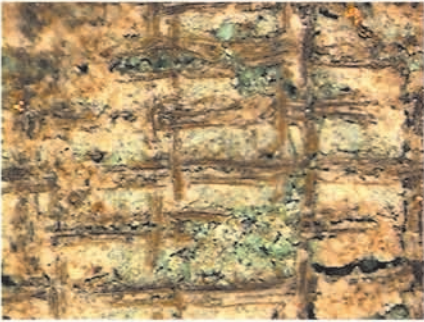
1 (軸 2)



2 (軸 2)



3 (軸 2)



4 (軸 1)



5 (軸 2)



6 (軸 1)



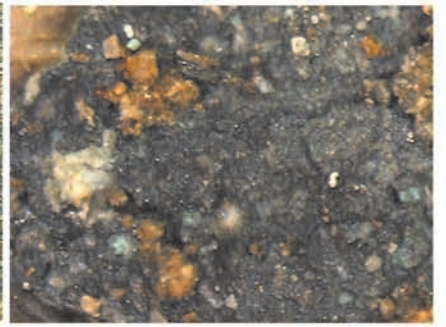
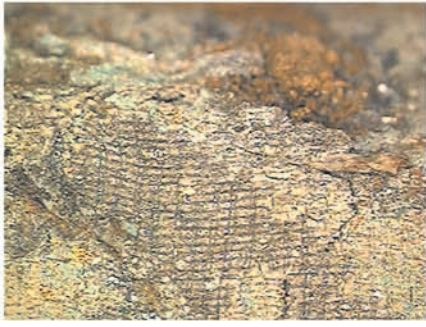
7 軸 1 西端漆膜裏面の黒色部分



8 軸 1 西端漆膜表面の墨線部分



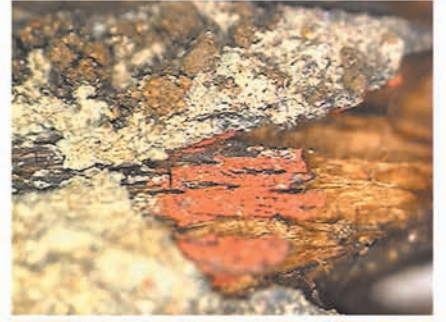
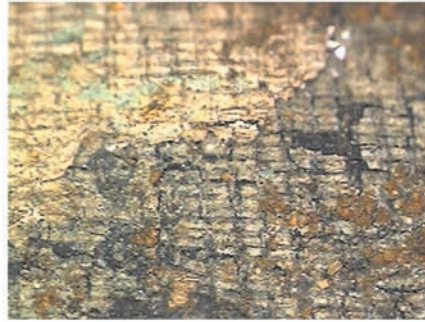
9 軸 1 西端漆膜表面の朱線部分



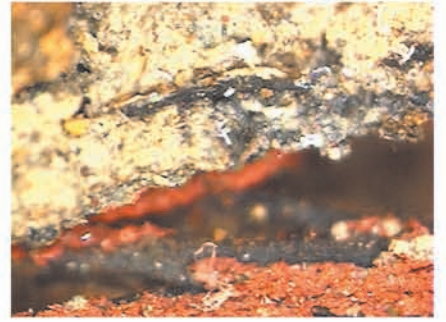
2 (軸2)



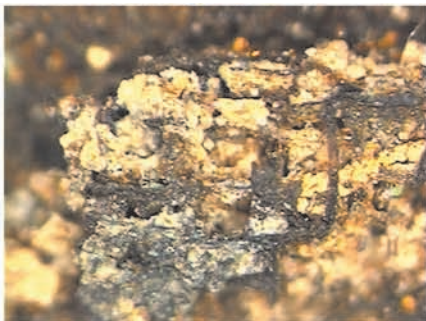
1 (軸2)



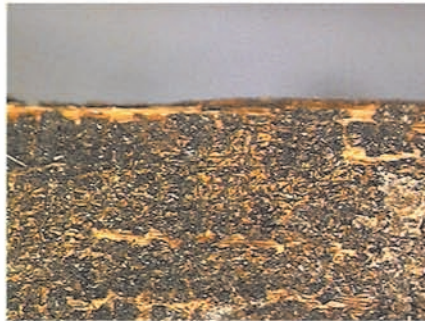
3 (軸2)



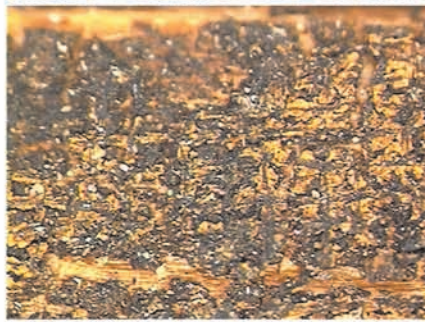
4 (軸2)



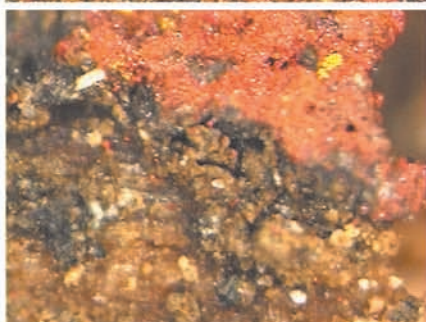
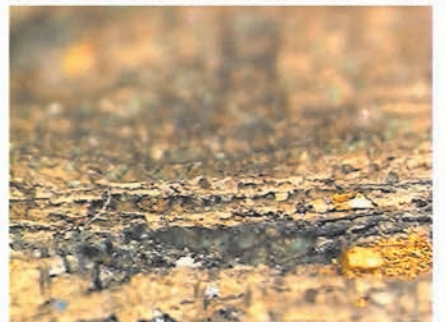
5 (軸1)



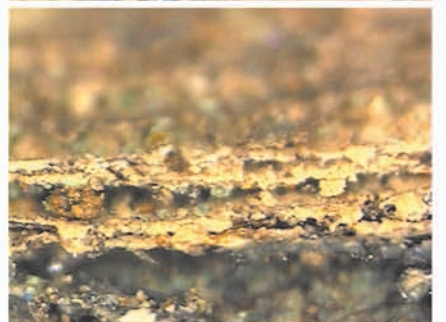
6 (軸1)

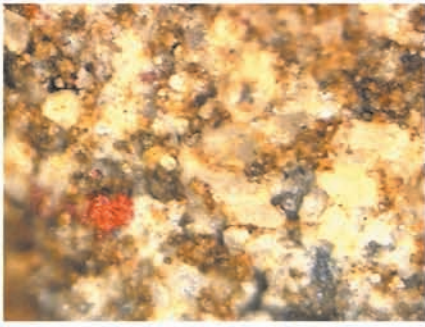


7 (軸1)

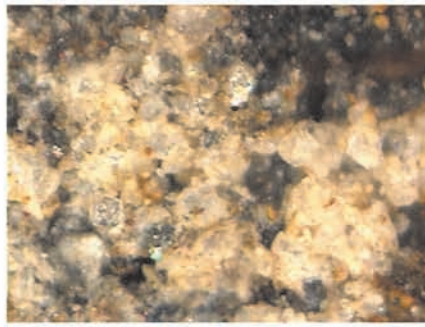


8 (軸2)

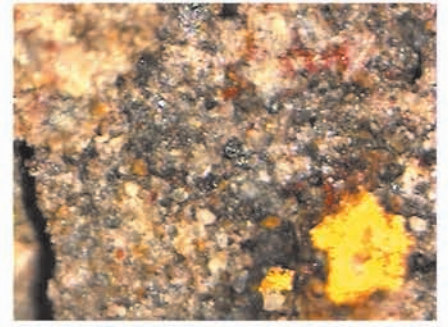




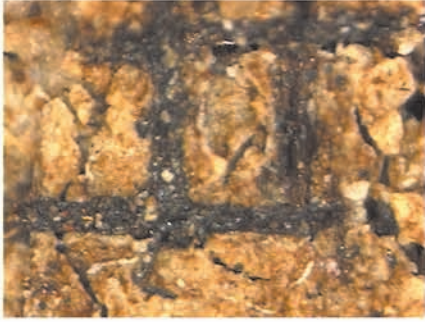
1



2



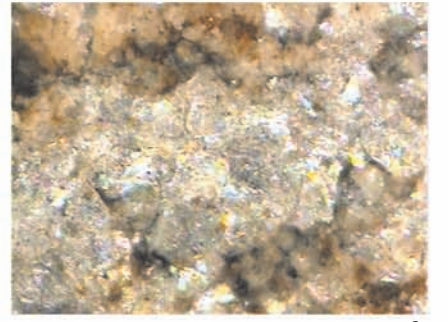
3



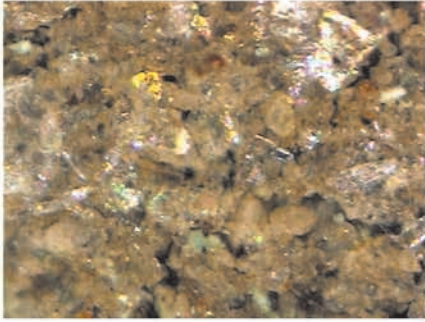
4



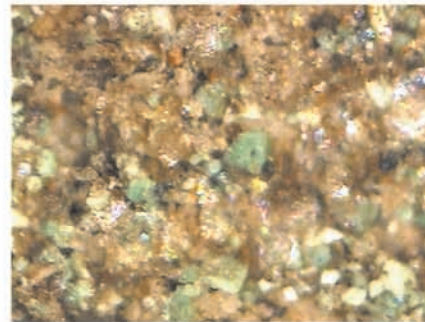
5



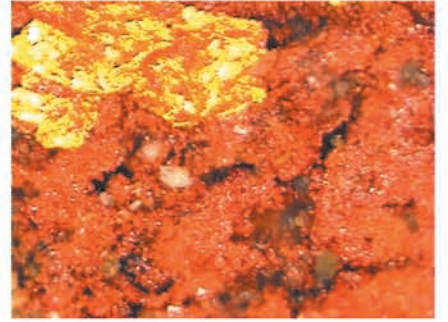
6



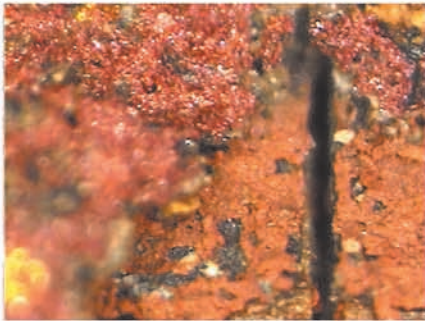
7



8



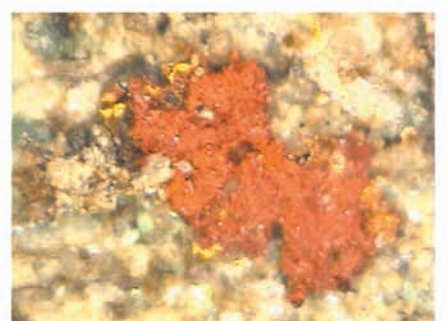
9



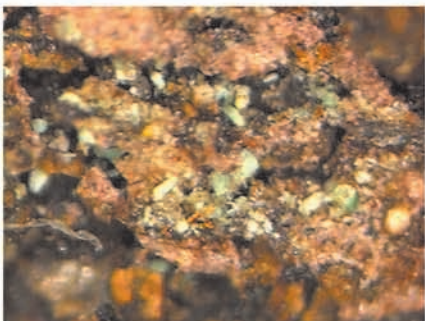
10



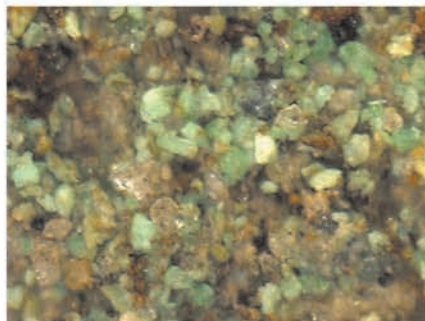
11



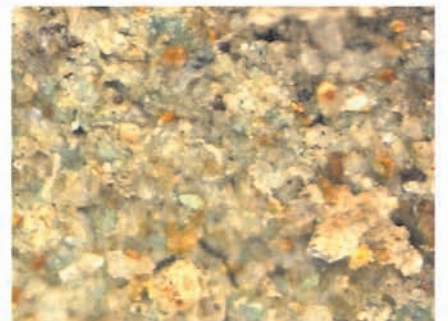
12



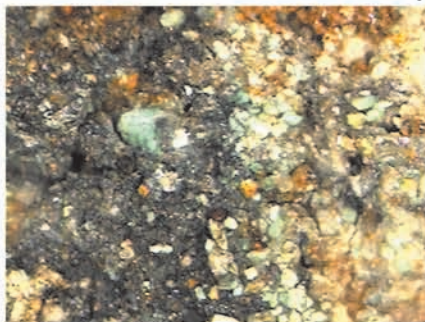
13



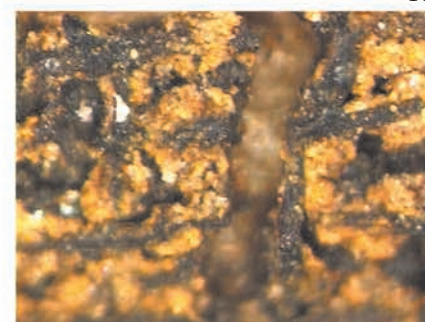
14



15



16



17



18



1



3



5



2



4



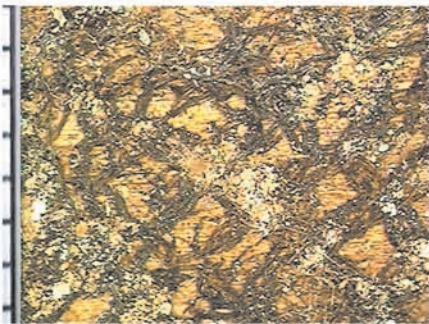
6



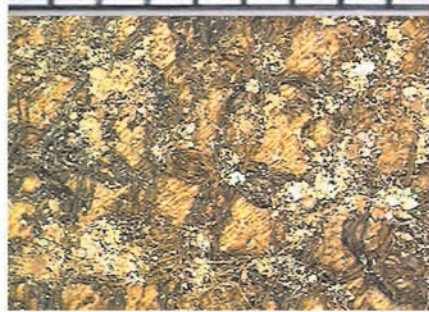
7



8



9



10



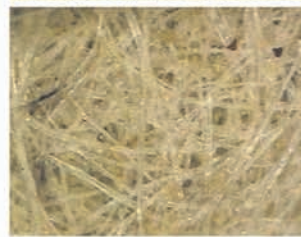
11



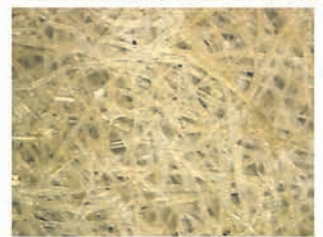
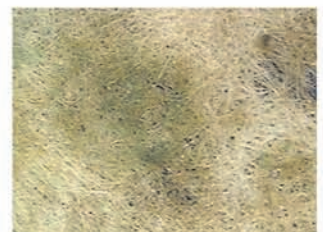
12



13

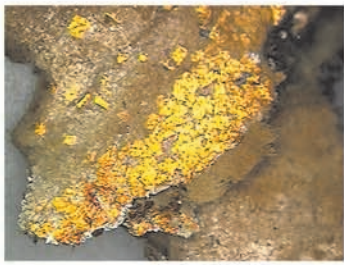


14



15

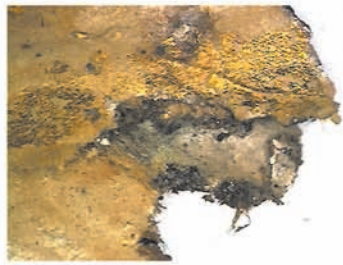




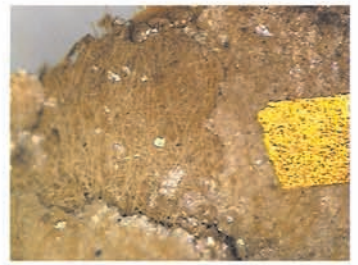
1



2



3



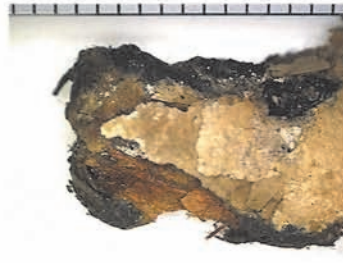
4



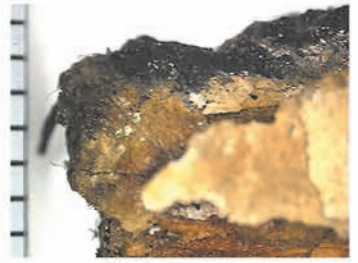
5



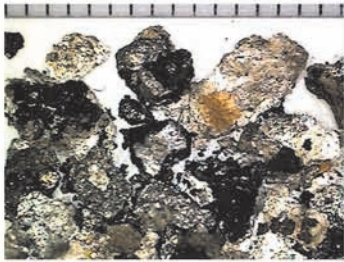
6



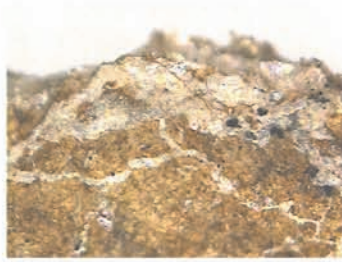
7



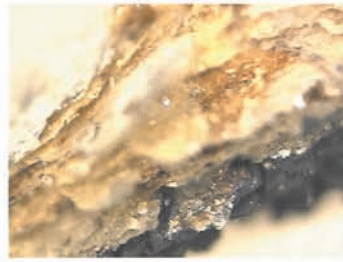
8



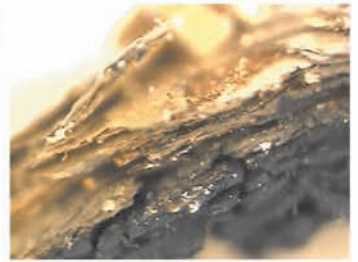
9



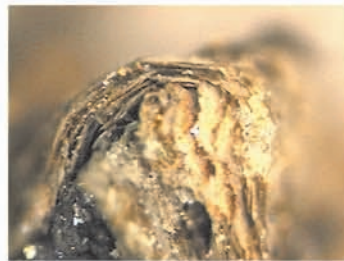
10



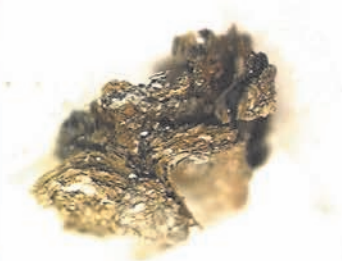
11



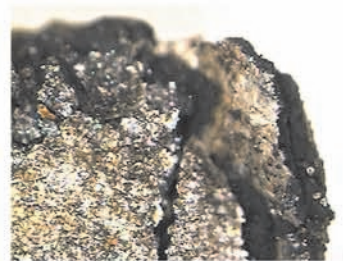
12



13



14



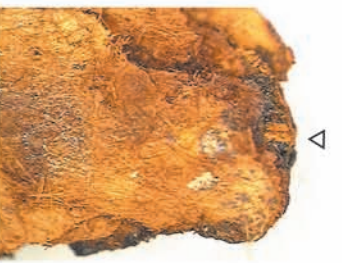
15



16



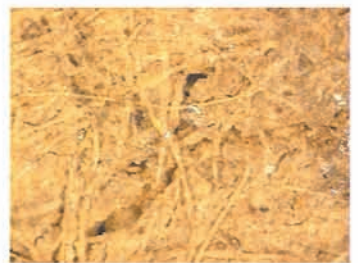
17



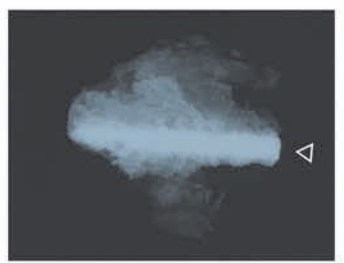
18



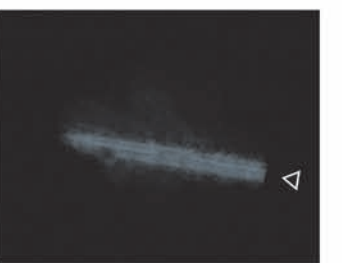
19



20



21



22



23



24



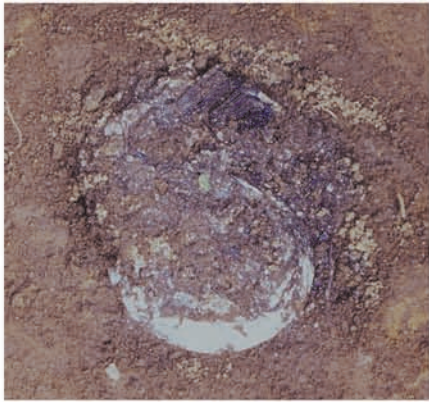
1



2



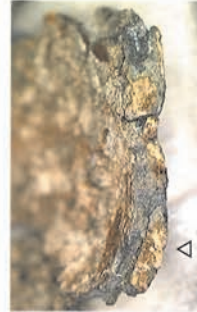
3



5



6



7



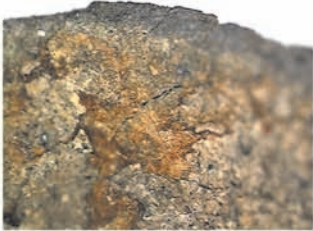
4



8

▼ 内面

▼ 外面



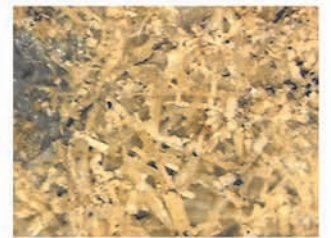
9



10



11



12



13



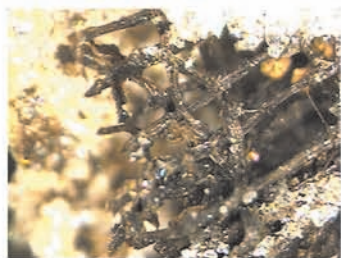
14



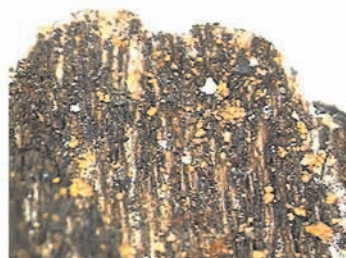
15



16



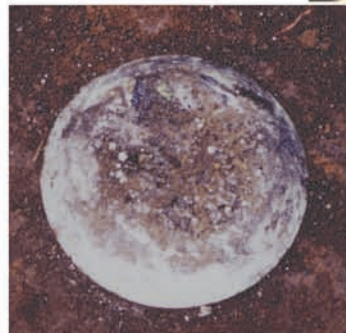
17



18



19



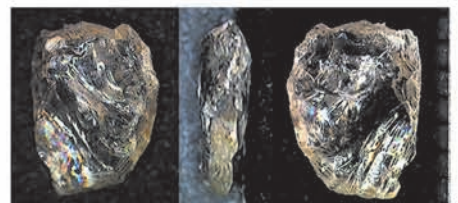
19



18



20



21

## 凡 例

1. 本報告は、平成17年度末に財団法人千葉県教育振興財団が千葉県教育振興財団調査報告第549集として刊行した発掘調査報告書（『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1－流山市思井堀ノ内遺跡（中世編）－』）において、分析鑑定後あらためての報告を明示していた千葉県流山市思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓から出土した副葬品についての詳細調査報告である。分析鑑定の対象は、棺内副葬品のうち、被葬者の頭部付近に納められていた遺物群である。
2. 詳細調査報告の作成は、文化財センター長大原正義、管理普及部長加藤修司、管理普及部普及資料課長栗田則久の指導の下におこなった。
3. 詳細調査の過程において、宮内庁正倉院事務所杉本一樹氏、成瀬正和氏、尾形充彦氏、奈良国立博物館梶谷亮治氏、中島博氏、谷口耕生氏、北澤菜月氏に分析鑑定いただく機会を得、多大なるご指導を賜った（所属は実施時）。
4. 詳細調査の対象は、副葬位置からみて大きく二群に分けることができるが、遺物の種類・形状、そして劣化あるいは断片化の様相においても両者の間に差異があった。したがって、調査方法や報告手順が異なることから、基礎報告は二部に分けて行うこととした。第Ⅰ部では、被葬者の頭頂部付近から出土した軸と鉄釘について、第Ⅱ部では、被葬者の後頭部付近から出土した化粧道具類について報告する。とはいえ、第Ⅰ部対象遺物・第Ⅱ部対象遺物の遺存状態を合わせて俯瞰し、絹や紙といった脆弱な素材の残り方のパターンを総合的に把握することも必要と思われた。そのため、顕微鏡画像を核とする原色図版PL.1～PL.8については、本詳細調査報告の巻頭に一括して掲載した。  
PL.1～PL.5は、主に第Ⅰ部に対応する（撮影データは第Ⅰ部表5参照）。  
PL.6～PL.8は、主に第Ⅱ部に対応する（撮影データは第Ⅱ部表2参照）。
5. 基礎報告第Ⅰ部「思井堀ノ内遺跡中世墓出土掛幅装絹本著色画の構造」および第Ⅱ部「思井堀ノ内遺跡中世墓出土化粧道具類の組成」の執筆は主任主事大久保奈奈がおこなった。自然科学的調査報告は、成瀬正和氏にご寄稿いただいた。
6. 詳細調査の間、多くの方々からご教示・ご助力を賜った。御芳名を記し、感謝の意を表したい。  
天野 努 小笠原小枝 尾形充彦 梶谷亮治 北澤菜月 杉本一樹 谷口耕生  
中島 博 成瀬正和 谷中得應軒 (敬称略 五十音順)

# 詳細調査報告目次

## 〈巻頭図版〉

- PL.1 副葬された軸
- PL.2 軸の形状
- PL.3 素材の重なり（1）
- PL.4 素材の重なり（2）
- PL.5 顔料
- PL.6 木製台座と絹製品二種・紙
- PL.7 帖紙と針
- PL.8 化粧道具類の組成

## 凡例

## 詳細調査報告目次

### 〈基礎報告〉

第Ⅰ部 思井堀ノ内遺跡中世墓出土掛幅装絹本著色画の構造	169
はじめに	173
第1章 遺跡の概要と出土状態	175
1 遺跡の概要	175
2 292号方形周溝区画墓	176
（1）遺構の概要と年代 （2）被葬者に関わる情報 （3）副葬品の配置 （4）一本の鉄釘	
3 掛幅装絹本著色画の出土状態	181
（1）出土状態 （2）軸の員数と名称 （3）用語の確認	
第2章 軸の形状・遺存状態と大きさ	185
1 軸1	185
2 軸2	187
第3章 観察の要点	189
1 織物と顔料	189
2 軸木の形状	190
3 観察と報告の構成	196
第4章 素材	198
1 絹地	198
（1）画絹 （2）平絹	
2 顔料	200

(1) 白 (2) 赤 (3) 緑 (4) 黄か	
3 墨	202
4 金箔	203
第5章 素材の重なり・絹絵の重なり	205
1 絹絵の構造	205
2 観察されない紙の繊維	206
3 層の抽出	209
(1) 軸2の層の重なり (2) 軸1の層の重なり	
第6章 軸木と絹絵の接点	212
1 形の痕跡	212
2 共存する二軸の関係	213
第7章 裏打ちのない絹絵	215
1 絹絵の出土事例	215
(1) 中尊寺金色堂清衡棺内遺存絹本墨画像 (2) 大陸東部の遺跡から出土した絹絵類	
(3) 内陸アジアの遺跡から出土した絹絵類 (4) 中国古代の帛画	
2 軸装の出土事例	229
3 経塚出土絹本および彩絵資料	323
4 埋められた絹と木	234
5 副葬された絹絵の背景	237
おわりに	244
第Ⅱ部 思井堀ノ内遺跡中世墓出土化粧道具類の組成	265
はじめに	269
第1章 遺存状態と調査方法	269
1 出土状態	269
2 調査方法	271
3 遺存状態と組成	272
第2章 副葬された品々	273
1 木製台座	273
2 染織品残欠(1)	273
3 染織品残欠(2)	275
4 紙断片	275
5 蓬莱鏡	276
6 帖紙残欠	277
7 鉄針	278
8 梳櫛	279
9 金属製菊花形皿	279
10 繊維製品断片	280

11 骨角類断片	281
12 白磁皿	282
13 水晶片	282
第3章 身近に置かれたもの	283
1 副葬品の性格	283
2 副葬された形	283
おわりに	285
〈自然科学的調査報告〉	
流山市思井堀ノ内遺跡出土遺物のX線分析調査	293

## 挿図目次

<b>第I部</b>		第6図 絹絵の断面構造模式図
第1図 遺構と副葬品		第7図 観察された素材の重なり
1 292号方形周溝区画墓		第8図 絹本墨画像残欠遺存金箔押木棺（清衡棺） 納置中尊寺金色堂須弥壇
2 埋葬施設の検出状況と土層		第9図 葉茂台7号墓
3 副葬品の配置		第10図 朱檀墓
4 青磁皿・青磁碗・白磁皿	5 軸と鉄釘	第11図 楊公佐墓
第2図 現在用いられている軸装の形		第12図 王鎮墓
1 掛軸の部分名称	2 掛軸の構造	第13図 千葉県袖ヶ浦市境遺跡の中世墓と副葬品
3 軸木の切り合せ	4 卷子の部分名称	<b>第II部</b>
第3図 出土軸木の形		第1図 詳細調査で確認した副葬品の要素
第4図 上人壇廃寺跡SD14溝北東隅出土青銅製 金箔貼軸端		第2図 蓬萊鏡
第5図 鶴岡八幡宮東側境界溝出土漆付着棒状 木製品		第3図 梳櫛

## 表目次

<b>第I部</b>		表6 画像索引対照表（軸1長片）
表1 思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓木棺内 出土遺物一覧表		表7 画像索引対照表（軸1短片）
表2 出土軸木の長ささと径		表8 画像索引対照表（軸2）
表3 経塚出土彩絵資料		<b>第II部</b>
表4 法然上人絵伝（四十八巻伝）に描かれた臨終 の場の掛幅		表1 化粧道具類の遺存状態と組成
表5 巻頭図版（PL.1～PL.5）撮影データ		表2 巻頭図版（PL.6～PL.8）撮影データ

## 第 I 部 思井堀ノ内遺跡中世墓出土掛幅装絹本著色画の構造





# 本文目次

はじめに	173
第1章 遺跡の概要と出土状態	175
1 遺跡の概要	175
2 292号方形周溝区画墓	176
(1) 遺構の概要と年代 (2) 被葬者に関わる情報 (3) 副葬品の配置 (4) 一本の鉄釘	
3 掛幅装絹本著色画の出土状態	181
(1) 出土状態 (2) 軸の員数と名称 (3) 用語の確認	
第2章 軸の形状・遺存状態と大きさ	185
1 軸1	185
2 軸2	187
第3章 観察の要点	189
1 織物と顔料	189
2 軸木の形状	190
3 観察と報告の構成	196
第4章 素材	198
1 絹地	198
(1) 画絹 (2) 平絹	
2 顔料	200
(1) 白 (2) 赤 (3) 緑 (4) 黄か	
3 墨	202
4 金箔	203
第5章 素材の重なり・絹絵の重なり	205
1 絹絵の構造	205
2 観察されない紙の繊維	206
3 層の抽出	209
(1) 軸2の層の重なり (2) 軸1の層の重なり	
第6章 軸木と絹絵の接点	212
1 形の痕跡	212
2 共存する二軸の関係	213
第7章 裏打ちのない絹絵	215
1 絹絵の出土事例	215
(1) 中尊寺金色堂清衡棺内遺存絹本墨画像 (2) 大陸東部の遺跡から出土した絹絵類	
(3) 内陸アジアの遺跡から出土した絹絵類 (4) 中国古代の帛画	
2 軸装の出土事例	229

3	経塚出土絹本および彩絵資料	323
4	埋められた絹と木	234
5	副葬された絹絵の背景	237
おわりに		244
注		246
参考文献		248

## 挿 図 目 次

第1図	遺構と副葬品	第5図	鶴岡八幡宮東側境界溝出土漆附着棒状木製品
1	292号方形周溝区画墓	第6図	絹絵の断面構造模式図
2	埋葬施設の検出状況と土層	第7図	観察された素材の重なり
3	副葬品の配置	第8図	絹本墨画像残欠遺存金箔押木棺（清衡棺） 納置中尊寺金色堂須弥壇
4	青磁皿・青磁碗・白磁皿	第9図	葉茂台7号墓
5	軸と鉄釘	第10図	朱檀墓
第2図	現在用いられている軸装の形	第11図	楊公佐墓
1	掛軸の部分名称	第12図	王鎮墓
2	掛軸の構造	第13図	千葉県袖ヶ浦市境遺跡の中世墓と副葬品
3	軸木の切り合せ		
4	卷子の部分名称		
第3図	出土軸木の形		
第4図	上人壇廃寺跡SD14溝北東隅出土青銅製金箔貼軸端		

## 表 目 次

表1	思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓木棺内出土遺物一覧表	表5	巻頭図版（PL.1～PL.5）撮影データ
表2	出土軸木の長さや径	表6	画像索引対照表（軸1長片）
表3	経塚出土彩絵資料	表7	画像索引対照表（軸1短片）
表4	法然上人絵伝（四十八巻伝）に描かれた臨終の場の掛幅	表8	画像索引対照表（軸2）

## 原色画像索引目次

画像索引1	軸1長片西部分	画像索引5	軸2西部分
画像索引2	軸1長片中央部分	画像索引6	軸2中央部分
画像索引3	軸1長片東部分	画像索引7	軸2東部分
画像索引4	軸1長片東端・軸1短片		

## はじめに

ここに報告する「掛幅装絹本著色画」は、平成17年度末に刊行された発掘調査報告書（天野2006）において「棒状木製品」として概要が報告され、分析鑑定後あらためて報告することが明示されていた千葉県流山市思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓から出土した副葬品である。

詳細調査の過程において、正倉院事務所成瀬正和氏から、顔料の分析調査成果をはじめ、絹や紙などの素材の特性や見方について多くのご教示をいただき、遺存状態の良いといえない資料と向き合うなかで、終始ご懇篤なる御指導を賜った。さらに正倉院事務所において、杉本一樹氏から切り合せのある経軸について、尾形充彦氏から伴出した化粧道具類一括資料中の染織品残欠（箴目のある平絹）についてご教示いただく機会をも与えていただいた。その後、顕微鏡を活用した観察を継続した結果、「棒状木製品」は「絹地に顔料を用いて描いた絵画を巻き納めた軸木」であると判断するに至り、平成19年、奈良国立博物館において、梶谷亮治氏、中島博氏、谷口耕生氏に鑑定していただく機会を得た。そして、本格的な技法で描かれた絹絵であるという評価とともに、出土絵画資料としての報告作成にむけて、数々のご指導を賜った。多くの方々から賜った学恩により、形あるものに対する認識を一步深めることができたその一方で、新たな課題も生じているが、現段階までに明らかにできた成果について報告をおこなうこととしたい。

**出土絵画資料** 本報告は、「掛幅装絹本著色画」という、考古学の領域においてはあまりなじみのない絵画資料についての報告である。

出土絵画資料の多くは、粘土や木、石や金属などで形づくられた実用的あるいは非実用的な器物に絵画表現が付加されたもので、大半は墨画あるいは線刻などの手法による描画である。一方、少数例ながら顔料や金銀泥を用いて描かれた絵画として周知されている考古資料に、古墳壁画や古代寺院の壁画、経塚に埋納された経典の見返絵、彩絵経筒、扇絵がある。また、直接筆の痕跡をとどめないものの、文様が彫り込まれた鋳型や印判・型板・版木など、鋳物あるいは紙や布に絵画表現を付加するための道具が出土しており、これらについても、肌真土あるいは印面に掘り込まれた文様の下絵に遡るならば、絵画資料としてとらえることができる。さらに、漆器を飾る漆絵や蒔絵等の工芸意匠を含めると、実に多様な形状、材質、描画手法による絵画資料が出土しているといえる。

しかしながら、「掛幅装絹本著色画」という、掛軸という表具の形をもち、絹地に顔料を用いて描いた絵画、しかも、のちに詳述するように、裏彩色・截金という技法が用いられ画絹に描かれた本格的な絵画が出土した事例は、これまでのところ日本国内では類例を見出せていない。

とはいえ、本報告の対象資料は、絵画であると言われて見ても、一瞥しただけでは、すぐには肯けない状態にある。これは伝世品とは比べようもない、出土品としての宿命であるといえよう。しかし、地中で700年におよぶ眠りから覚め、再びこの地上に姿をあらわしたものであるからこそ保持している情報があるならば、それらを再生させることをめざし、基礎資料の提示をすすめたいとおもう。

**報告の構成** 詳細調査の具体的な報告に先立ち、平成17年度末に刊行された発掘調査報告書（天野2006）に拠り、本資料を出土した遺跡・遺構の概要および年代、副葬品の配置と被葬者に直接関わる出土

資料の情報と鑑定結果を再確認する（第1章1・2）。また、掛幅装絹本着色画の出土状態と対応させながら、本稿で用いる名称・用語を整理する（第1章3）。そして、軸の形状、遺存状態と寸法に関する基礎情報を確認し（第2章）、続けて、資料の性格を解明する契機となった観察の要点を述べる（第3章）。

具体的観察結果の記述では、まず、絹地、顔料、墨、金箔といった素材を個別にとらえ（第4章）、次に、それらの重なりを押さえながら、絹地を基底層とした素材の重なり単位を抽出し、軸木の上に付着しているものが、絹地に描かれた絵画であること、しかも截金や裏彩色という絵画の技法が用いられている本格的な絹絵であることを実証する（第5章1）。くわえて、絹地の重なりの中に紙がないこと、すなわち紙による裏打ちがないことを明示する（第5章2）。そして、観察の範囲と奥行きを広げ、軸木の上に層状に重なっている絹絵の遺存状態の全体像を把握する（第5章3）。

以上のような観察結果を土台として、画面の大きさや、巻き付け部に関わる情報等、軸木と絹絵の接点の情報を整理し、筆で描かれた輪郭の痕跡を探す。結果として、絵の主題あるいは性格を特定する具体的なモチーフを抽出することはできなかった。しかしながら、掛幅という形状、絹本着色という品質と截金の存在、一括遺物から推定される墓の営まれた時代と墓の時代から推定される絹絵の制作年代の下限から、本出土絵画資料の全体的な性格について、仏画の可能性を十分に考えることができる、という一応の到達点を提示する（第6章1）。また、報告過程で保留してきた、2本の軸木を二幅とみるか、一幅とみるか、という課題について、解釈の根拠となる関連情報を整理する（第6章2）。

以上、第1章から第6章において、鎌倉時代後期、北枕西向き側臥の姿勢で埋葬された在地有力者層の女性の枕元に、掛幅装絹本着色画が副葬されていたこと、絹絵は截金や裏彩色という技法が用いられた本格的な絵画であり、仏画の可能性を十分に考えることができること、表具は紙による裏打ちのないきわめて簡略な形の掛幅であり、修理や解体を経っていない鎌倉時代後期の表具の実物であることを確認した。第7章では、以上のような調査成果を受け、仏画の可能性が高いと理解できる小さな絹絵が中世の墓に副葬されていたと判明したことの意味について、基礎的考察を試みる。

まず、絹絵の出土事例を確認する。とはいえ、国内においては類例を見いだせないため、類例探索の指標を広めに設定して、国内外の事例にあたる。そして、どのような空間に、どのような絹絵が遺存していたかを概観する（第7章1）。次に、出土した軸装という観点から、日本で独自に展開した経塚に着目し、経塚出土紙本経の表具の形を確認する（第7章2）。くわえて、経塚から出土した絹本あるいは筆で描かれた彩絵資料の情報を整理する（第7章3）。また、一般に有機質遺物が遺存し難い日本列島の台地上の遺構において、残欠となりながらも絹絵が消滅を免れた要因を探ることにより、絵画を墓に埋める行為について、裾野の広がり可能性を考える（第7章4）。

被葬者、あるいは埋葬儀礼の場にいた人々にとって、掛幅を棺に納めることにどのような意味があったのだろうか。その背景を探るため、まず、小画面であることに注目して、伝世作品の様相から、個人的な礼拝あるいは崇拜の対象としての小さな掛幅という性格をおさえる。つぎに、簡略な表具が継承を前提としない形であることを、仏像内から発見された仏画の形および埋経の軸装の形をもとに再確認する。そして、国内外の諸事例の様相から、副葬された絹絵は、それぞれの遺跡が営まれた文化の基層にある思想・信仰にもとづき選択された遺物であることを確かめる。さいごに、日本の中世の絵巻の臨終の場面に描かれている掛幅に、出土品の性格を考えるための情報を求め、埋葬の場に持ちこまれた裏打ちのない掛幅の主題に関する解釈として、西方極楽浄土の阿弥陀仏が往生者を迎えに来る様を描いた来迎図であった可能性を推し量る（第7章5）。

# 第1章 遺跡の概要と出土状態

## 1 遺跡の概要

詳細調査の具体的な報告に先立ち、平成17年度末に刊行された思井堀ノ内遺跡の中世に関わる発掘調査報告書（天野2006）に拠り、本資料を出土した遺跡・遺構の概要および年代、遺物の出土状態に関わる基礎事項を確認する。なお、思井堀ノ内遺跡の旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代に関わる発掘調査の成果については、平成22年度に報告書が刊行された（伊藤ほか2010）。

千葉県流山市思井字堀ノ内に所在する思井堀ノ内遺跡は、東京湾へ南流する江戸川の左岸、下総台地北西部末端に位置し、北から南へ細くのびる舌状台地上に立地している。

遺跡の範囲は、舌状台地中央部を南北に貫通する道路の東側部分にあり、その南と北は、東に開析する小支谷により画されている。道路の西側部分には、古墳時代から古代・中世にかけての遺跡である西平井根郷遺跡がある<sup>1)</sup>。

思井堀ノ内遺跡の東に鎮座する熊野神社の小さな森を抜けて、斜面を下ると、江戸川の支流、坂川が南流する谷津に至る。この谷津を遡り、仮に谷頭から分水界を乗越すならば、分水界となる台地上を北東に400mほどすすんだ地点で、香取神宮・鹿島神宮を擁する香取内海へ通じる手賀沼水系最上流部の谷津に出ることができる<sup>2)</sup>。

思井堀ノ内遺跡の発掘調査は、常磐新線建設に関わる流山運動公園周辺地区における千葉県企業庁の土地画整理事業にともない、財団法人千葉県文化財センター（平成17年9月1日財団法人千葉県教育振興財団に名称変更、平成24年4月1日公益財団法人に移行）が、平成10年度以降平成16年度までの間、未調査地区を一部あいだに残す形で断続的に実施した。本報告の対象資料は、平成12年度と平成13年度に分けて発掘調査が実施された中世（鎌倉時代後期）の墓-292号方形周溝区画墓-から平成12年度に出土した副葬品である。

思井堀ノ内遺跡において、中世の遺構は、おもに遺跡周縁部に分布していた。鎌倉時代の遺構としては、292号方形周溝区画墓のほか居館跡がある。

居館跡は、遺跡範囲の北西部、舌状台地中央寄りのエリアにおいて検出された。堀跡をともなう掘立柱建物跡6棟が確認され、出土したかわらけ類・青磁・白磁・渥美・常滑から、12世紀後半から末ころまでの間に造営され、14世紀初頭（ないしは前半）頃までの間、存続していたことが明らかにされている。堀跡は、現在の道路の東方5m付近において、道路と平行するように検出された直線状の南北溝（001号溝状遺構）で、調査範囲において確認された長さは24.8mである。検出面における堀幅は4mを超え、横断面V字形の堀の深さは、最深部で約2.6mあった。

鎌倉時代の遺構群をめぐる歴史的背景について考察された天野努氏は、この地が中世の在地領主の屋敷にかかわる遺跡であることを明確にされ、そのうえで、在地領主の具体像として「香取神宮文書」文永年間（1264～1275）の「造宮記録断簡」にみえる「矢木郷」の「地頭矢木式部大夫胤家」の名を掲げられている。また、天野氏は、292号方形周溝区画墓の被葬者について、胤家の妻等の可能性を指摘され、今後の研究にゆだねたいとむすばれている（天野2006 75頁～78頁）。

なお、居館消滅後、この地に再び人々の活動の痕跡がみられるようになるのは、14世紀後半以降である

ことが、瀬戸・美濃製品を主体とする出土遺物から把握されており、台地整形区画3地点、溝状遺構27条、井戸状遺構1基、地下式坑13基、土坑59基が検出されている。

## 2 292号方形周溝区画墓

### (1) 遺構の概要と年代(第1図)

**遺構の概要** 本報告対象資料が副葬されていた292号方形周溝区画墓は、居館跡から南東に110mほど離れた地点、遺跡の南を画する小支谷に面した台地縁辺部に立地していた。墓標や盛土といった地上標識はまったく残っていなかったが、発掘調査により、ほぼ正方形にめぐらされた周溝と埋葬施設1基が検出された。埋葬施設は土壙内木棺直葬で、周溝で方形に区画された墓域の北半部中央に営まれていた。なお、遺構が検出されなかった墓域の南半部については、祭祀の空間であった可能性が指摘されている(天野2006 28頁)。

検出面での墓域の規模は、周溝内側で東西約12.1m~12.6m、南北約12.6m、周溝の外側で東西15.9m~16.7m、南北16.1m(主軸方位N-22°-E)である。検出面での周溝の幅と深さは、上端幅1.4m~2.2m、下端幅0.4m~0.8m、深さ0.4m~0.65mである。

ほぼ平坦な底面をもつ周溝は、平安時代(9~10世紀)の竪穴住居3棟と土坑4基を切り、墓造営以降の溝3条に切られていた。また、周溝の南西隅には、墓造営以降と考えられる地下式坑が重複していた。周溝覆土から出土した遺物には、かわらけ皿片1点、青磁碗片2点、青磁皿片1点、渥美瓶子片転用砥石1点、常滑甕片2点、近世陶磁器片1点、鉄製品片10点、鉄滓9点のほか、縄文土器片・土師器片・須恵器片多数がある。

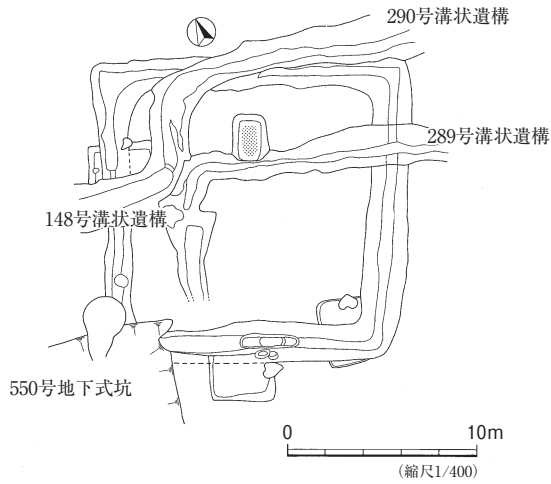
埋葬施設に関わる構築材や棺材は全く遺存していなかったが、土層の堆積状況から、土壙の中央に木棺を据えた直葬であったことが確認されている。土壙埋土には、縄文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器の小片、およびかわらけ碗(13世紀中頃~後半)の底部片1点が含まれていた。

隅丸長方形の平面形をもつ土壙内に納められた木棺の平面形は長方形で、土層断面図にみえるほぼ垂直な立ち上がりが側壁と理解できる状況から、箱形の木棺であったとわかる。土壙がN-23°-E、木棺がN-17°-Eと、それぞれ主軸が若干東に振れているが、以下、本報告の全編にわたり、便宜的に、棺の短辺の側を北あるいは南、棺の長辺の側を西あるいは東、と表記する。

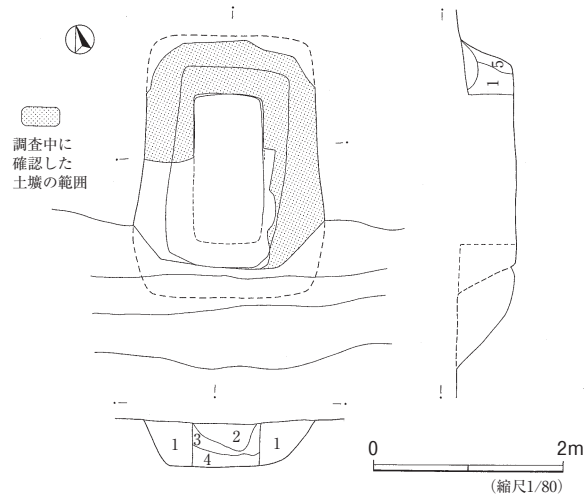
土壙の北辺は攪乱を受けていた。また、土壙・木棺とも南辺を後世の溝に切られていた。そのため、埋葬施設に関わる南北方向の規模は、遺存部から推定された復元値である。土壙の規模は、長さ2.7m前後(検出面上端)~2.1m前後(底面)、中央付近幅1.8m前後(検出面上端)~1.2m前後(底面)である。木棺の規模は、長さ1.6m、幅約0.72mである。土壙・木棺ともに、検出面からの深さは約0.45mである。

**遺構の年代** 292号方形周溝区画墓の年代は、13世紀後半~14世紀初頭頃と位置づけられる。この年代は、木棺内底面付近からほぼ原位置を保って出土した中国陶磁の年代を基準とし、かつ、これらの中国陶磁以外に年代の基準となる時代の下がる資料が一括遺物中にふくまれていないことから導かれたものである(天野2006)。

年代の基準とした中国陶磁は3点出土した。龍泉窯系青磁碗Ⅲ類(横田・森田1978)の碗と皿、および白磁皿Ⅱ類(横田・森田1978)の小皿である。鎬蓮弁文を外面にあらわした青磁碗(口径14.8cm~15.0cm、

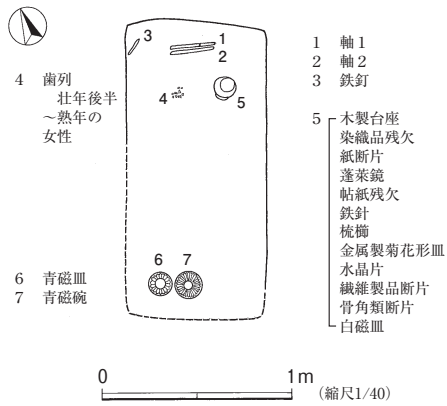


1 292号方形周溝区画墓

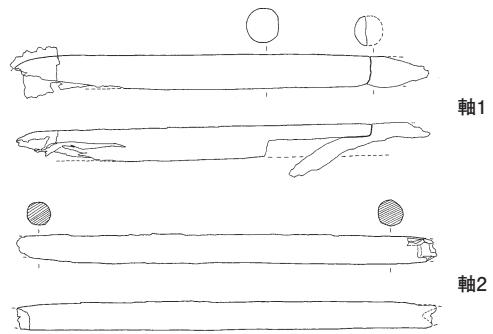


1. 暗黄褐色土 (ハードロームブロック多混, しまる)
2. 暗褐色土 (ハードロームブロック少混, 軟)
3. 暗褐色土 (ハードロームブロック混, 軟)
4. 暗褐色土 (ハードロームブロック少混, 軟)
5. 暗黄褐色土 (ソフトローム混)

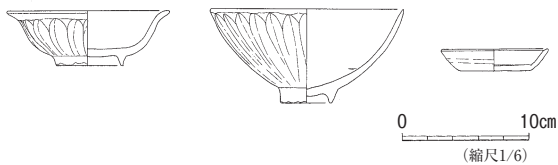
2 埋葬施設の検出状況と土層



3 副葬品の配置



5 軸と鉄釘



4 青磁皿・青磁碗・白磁皿

《出典》発掘調査報告書(天野2006)挿図(一部改変)

第1図 遺構と副葬品

底径4.0cm、器高7.4cm)と青磁皿(口径12.6cm~12.8cm、底径5.0cm~5.2cm、器高4.3cm)は、被葬者の足元に相当する位置に伏せた状態で副葬されていたもので、棺の主軸付近に碗が、その西側に皿があった。口禿の白磁皿(口径8.2cm、底径5.5cm、器高1.8cm)は、被葬者の後頭部東方から重なった状態で出土した化粧道具類の一番下にあったもので、伏せた状態で置かれていた。3点の中国陶磁は、いずれも棺底から出土しており、木棺内一括遺物と認定される副葬品である。

表1 思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓木棺内出土遺物一覧表

区分	出土地点（被葬者は北枕西向き側臥）			遺物の種類・名称	員数	備考
副葬品 第1群	第1図 3-1・2	木棺内北端	被葬者の頭部上方	掛幅装絹本着色画	2	【詳細調査対象資料】 (本報告第I部)  報告書(天野2006)棒状木製品。巻頭図版4、本文30～31頁、第40図5・6。
	第1図 3-3	木棺内北西隅	被葬者の正面北方	鉄釘	1	
被葬者	第1図 3-4	木棺内北部	歯列の北	骨片	—	報告書(天野2006)本文28頁。薄く微細な骨片・骨粉。取り上げられる遺存状態にはなかった。
			骨片の南	歯列	—	報告書(天野2006)巻頭図版3、本文28～29頁。一体分の歯29本。うち24本は、北に上顎、南に下顎、西向きという配列を保持していた。
副葬品 第2群	第1図 3-5	木棺内北東付近	被葬者の後頭部東方	木製台座	1	【詳細調査対象資料】 (本報告第II部)  報告書(天野2006)巻頭図版2・3・5、本文29～30頁、第40図1・2・3・4。
				染織品残欠(1)	—	
				染織品残欠(2)	—	
				紙断片	—	
				蓬莱鏡	1	
				帖紙残欠	—	
				鉄釘	3	
				梳櫛	1	
				金属製菊花形皿	1	
				繊維製品断片	—	
				骨角類断片	—	
				白磁皿	1	
水晶片	1					
副葬品 第3群	第1図 3-6	木棺内南端	被葬者の足元	青磁皿	1	報告書(天野2006)巻頭図版1、本文31～32頁、第40図7・8。
	第1図 3-7			青磁碗	1	



## (2) 被葬者に関わる情報 (PL.1 1)

被葬者に直接関わる情報として、頭骨と判断されるごく少量の骨片と、歯が遺存していた。

歯は29本出土した。そのうち、棺内北部、棺底から2～3cmの間から出土した24本は、上顎、下顎がわさった状態を保っていた。北に上顎、南に下顎があり、西に門歯、東に臼歯が位置していた。この歯列の出土状態は、被葬者が北枕西向きであったことを示している。他の5本は覆土中からの出土であるが、合わせて1体分と鑑定されている。歯の鑑定は、平成17年度に京都大学大学院理学研究科大藪由美子氏により実施され、壮年(25～40才)後半～熟年(40～60才)の女性という鑑定結果が報告されている。

骨片は薄いもので、木棺の主軸線上、北辺から南へ約30cmの地点を中心とした径17cmほどの範囲に、棺底面から2cm～3cm浮いた状態で散布していた。その散布範囲の西南部分に接するように、上記の歯列が遺存していたことから、薄い骨片は頭骨と考えられる。

骨の遺存は上記に限られるため、被葬者の埋葬姿勢の詳細は不明であり、身長も復元できない。とはいえ、頭部と判断される地点から、伏せて置かれていた青磁碗・皿手前までの距離が、105cm前後～110cm未満であることは、情報として提示することができる。

この105cm前後～110cm未満という長さを、被葬者についての間接的な情報であるととらえ、被葬者の年齢から想定される身長をあわせ考えると、膝を折りまげ気味にした横向きの姿勢で埋葬されていたと想定することができる。

以上の諸点から、この墓の被葬者について、壮年(25～40才)後半～熟年(40～60才)の女性であること、北枕西向き側臥の姿勢で埋葬されていたと復元できることを提示できる。

## (3) 副葬品の配置 (第1図3、PL.1 1)

**平面分布** 木棺内に納められていた副葬品について、被葬者との平面的な位置関係という視点からあらためて整理すると、表1のように3群に分けてとらえることができる。

後述するように、既刊報告書において「棒状木製品」という資料名で報告した2点の出土遺物は、詳細調査の結果、それぞれが「絹地に顔料を用いて描かれた絵画」を「巻き納めた軸木」とであると判明した<sup>3)</sup>。顕微鏡観察の成果、成瀬正和氏による顔料の分析調査成果(本報告293頁)、そして梶谷亮治氏・中島博氏・谷口耕生氏による鑑定結果を受け、「棒状木製品」と呼称していた資料の名称を「掛幅装絹本著色画」に改める。したがって、棺内北部から出土した副葬品第1群には「掛幅装絹本著色画」と鉄釘があると整理できる。

被葬者後頭部東方から出土した副葬品第2群は、上下に重なった状態で出土した一括資料である。これらについては、円形木製品・蓬萊鏡・櫛・菊花形皿・白磁皿、紙や繊維製品の断片からなることが既に報告されており、主要遺物は報告済みである。一方、一括資料中の「炭化物を多く含む土」に含まれている断片資料については調査未了であること、および、円形木製品についてはクリーニング途上であること、そして、それぞれについて分析鑑定後あらためて報告することが既刊報告書において明記されていた。表1第2群の組成は、調査未了であった資料に対する詳細調査の成果(本報告第Ⅱ部)を加味した遺物の組成である。帖紙残欠、鉄針、骨角類断片、水晶片を新たに追加し、菊花形皿について金属製と追記した。また、既刊報告書で「円形木製品」としていた資料の名称を「木製台座」に改め、既刊報告書で「籠状繊維製品」「織物」と呼称していた資料を染織品残欠(1)・染織品残欠(2)として掲示した。

棺内南部から出土した副葬品第3群を構成する青磁皿と青磁碗は、この墓の年代を明示する際に基準資料として用いた中国陶磁3点のうちの2点で、既刊報告書においてすでに報告済みである。

**垂直分布** 平面的な配置状況から3群に区分できる棺内出土遺物について、出土レベルという視点からとらえ直すと、棺底に密着していたものと、棺底から浮いていたものに区分することができる。

棺底としたローム地山に密着した状態で出土した遺物は、第2群・第3群の副葬品である。一方、棺底から浮いて出土した遺物は、被葬者の歯列、頭骨と判断できる骨片と、第1群の副葬品である。なかでも、木質が付着している鉄釘は、棺内副葬品中もっとも高いレベルである棺底上5cm付近から出土した。

#### (4) 一本の鉄釘 (第1図5、PL.1 1)

棺内北西隅にあたる位置から鉄釘が1本出土した。出土レベルは、棺内副葬品中もっとも高い棺底上5cm付近である。出土状態はほぼ水平で、木棺の主軸に対して約30°東へ振る形で横たわっていた。鏽に覆われ、かつ広範囲に木質が付着していたため、クリーニング前には、先端がどちら側にあるのか不明な状態であった。そのため、出土時の先端の向きは不明である。

鉄釘は全長7.8cmの完形品で、隅丸方形(横10mm 縦7mm前後)の頭部をもつ。棒状部の断面は方形で、中央付近での幅は約4mm、厚みは約5mmである。頭部から長さ5.7cmほどはまっすぐな棒状であるが、それより先端部分は鉤状に曲がっている。この曲がった形状は、鏽化による変形ではないことが、表面観察およびX線透過画像の情報からわかる。

まっすぐな棒状部の両側面には、木質が付着している。木目は、釘の軸に対しておよそ45°の角度で付着しており、その角度は途中で変化していない。このことから、直交する2点以上の木製部材を結合した釘ではないことは明白である。木目方向を同じくする複数木材の結合に用いられた可能性は残されているが、表面観察では境界部分を見出せなかった。なお、鉤状部に木質の付着は認められない。

以上のような形状と、木質の付着状態からみて、この鉄釘は、厚さ3.7cm前後の木材に、およそ斜め45度の角度から、頭が半ば埋もれるほどに打ち込まれていたと復元できる。さらに、木材から突出した先端部分については、叩き曲げられていた可能性を想定することができる。

木棺周辺から出土した鉄釘は、この一本のみである。また、攪乱などを含めた周囲の埋土中にも鉄釘はなかった。したがって、この釘は、単独で機能していたとみることができる。

出土レベルが棺底から浮いていたことは、鉄釘が打ち込まれていた木材本体が腐朽し、それにとまって鉄釘が上方から落下したと理解する余地があることを示している。出土地点から見て、腐朽した木材は、木棺の西壁ないし北壁、あるいは蓋であった可能性が高いと考えられるが、棺材に打ち込まれたとみる場合、内外面のどちら側から打ち込まれていたのか、あるいは、棺材以外の木製装置が存在した可能性はないのか、といった課題に対して、検討材料となる具体的情報は遺存していない。

### 3 掛幅装絹本著色画の出土状態

#### (1) 出土状態 (第1図3、PL1 1)

「掛幅装絹本著色画」は、棺北辺と平行するよう並べ置かれた2本の棒状木製品としてとらえられる状態で出土した。出土地点は、被葬者の頭頂部と想定される地点から北へ約7.5cmから約12cmにかけての範囲である。平行するように置かれた2点の間には、1cm前後の空隙があった。2点ともに棺底面から1～2cm浮いていた。

なお、「掛幅装絹本著色画」という資料名称は、報告の記述に際し、煩瑣となることから、通称として、「軸」という呼称を併用する。そして、平行していた2点の軸のうち、北側出土品を「軸1」、南側出土品を「軸2」と呼び分ける。なお、軸1と軸2に共通の情報や特徴を記述する場合には、個体を指定する表記を取らず、単に「軸」あるいは本資料などと表記する。

#### (2) 軸の員数と名称

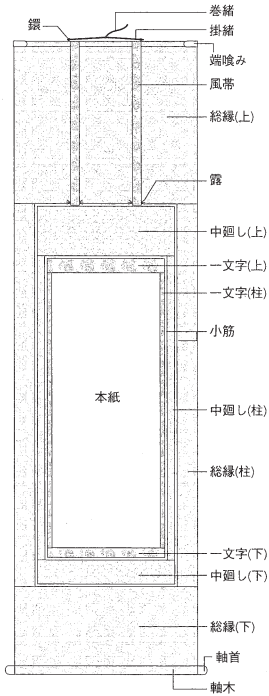
**軸装** 軸木が用いられる表具の形には、掛幅と卷子がある(第2図)。掛幅は、軸木に巻き納められている書画をひろげながら懸け吊るし、再び巻き納めるまでの一定の時間、一定の広がりをもつ空間内において、画面全体を一時に見渡せるように仕立てられた表具である。一方、卷子は、経巻や絵巻物などにみられるように、巻き納められた本紙を少し広げて、開かれた部分を見終わると、巻頭の方を巻取り、続きの部分を開くという動作をくり返ししながら、つまり、画面を見る人が、少しずつ画面を移動させながら、時間の経過とともに順を追って画面を見るよう仕立てられた表具である。

したがって、掛幅と卷子とでは、本紙が広げられている時間の長さに違いがある。また、画面とそれを見る人の距離にも違いがある。卷子の場合、画面を見ている人の手が直ぐ届く範囲に本紙があるが、掛幅の場合は、本紙の大きさに比例するように、掛幅とそれを見る人の間に距離があくことが一般的ととらえられる。

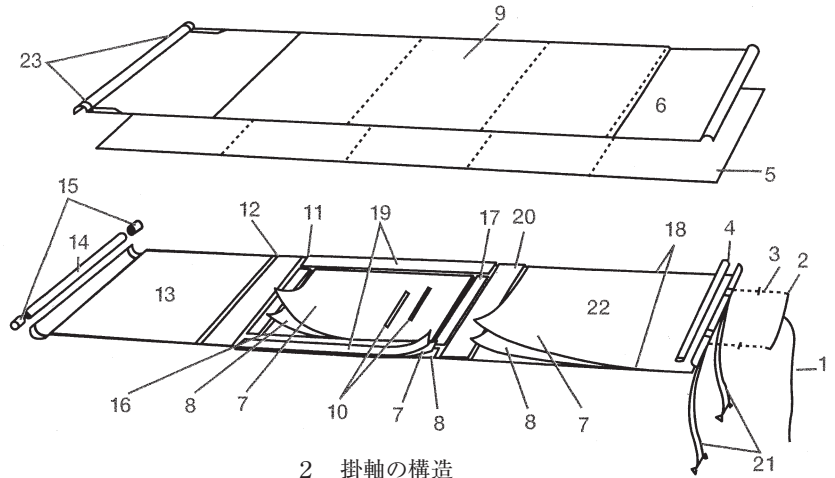
したがって、出土品が掛幅なのか、あるいは卷子なのかを絞り込むことは、資料の本質、すなわち出土品の性格を探る鍵となる。

**絹本** 巻き納められた画面の天地が判明すれば、掛幅か卷子かを判断できる。しかし、天地の確定に至らない場合には、周辺情報に判断材料を捜し求めることとなる。その際に注目される要素となるのが、絹本と、紙本のちがいである。絹本とは絹でできた本紙、紙本とは紙でできた本紙をいう用語であり、本紙とは裏打紙に対する書画の本体をさす用語である。

卷子は、文字資料・絵画資料ともに、基本的に紙本である。絹本著色による卷子の希少例として、鎌倉時代の絵巻である『一遍聖絵』(国宝 正安元年[1299] 神奈川・清浄光寺 東京国立博物館)、『春日権現験記絵』(延慶二年[1309] 東京・宮内庁三の丸尚蔵館)が知られているが、いずれもが、その製作に権力者の関与がある、あるいは関与が推察されている特別な作品である。室町時代の絵巻である『誉田宗庵縁起』(重要文化財 永享五年[1433] 大阪・誉田八幡宮)、『多武峰縁起』(室町時代[16世紀] 奈良・談山神社)、『往生要集絵巻』(室町時代[15世紀] 東京・個人蔵)を含めても、絹本の絵巻が特異な存在であることに変わりない。また、絵巻ではない卷子の絹本の例として、経巻の巻頭部分、表紙の裏にあたる見返しと呼ばれる部分に絹本著色画が付された作例がある。もと興福寺勸学院の本尊像であった文



- |               |                 |             |
|---------------|-----------------|-------------|
| 1. 巻緒・掛緒      | 9. 総裏紙 (字陀紙)    | 17. 一文字 (上) |
| 2. 打ち込み環      | 10. 折れ伏せ (薄美濃紙) | 18. 耳折      |
| 3. 座金         | 11. 一文字 (下)     | 19. 中廻し (柱) |
| 4. 八双 (杉白太材)  | 12. 中廻し (下)     | 20. 中廻し (上) |
| 5. 中裏紙 (美栖紙)  | 13. 地           | 21. 風帯      |
| 6. 上巻絹        | 14. 軸木 (杉白太材)   | 22. 天       |
| 7. 増し裏紙 (美栖紙) | 15. 軸首          | 23. 軸助け     |
| 8. 肌裏紙 (薄美濃紙) | 16. 本紙          |             |

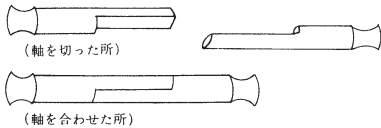


2 掛軸の構造

1 掛軸の部分名称  
(仏仕立て一文字廻しの例)

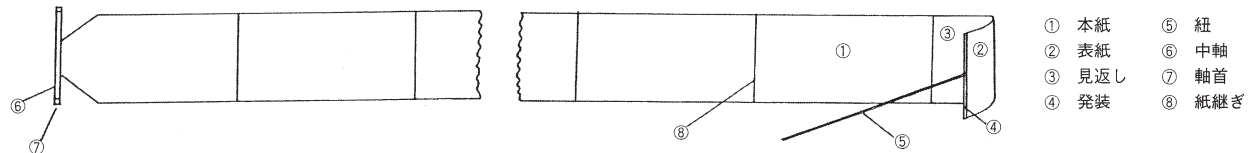
〈出典〉1・2 東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室編 2007 『図解 日本画用語事典』東京美術

- 1 上記文献 123頁挿図  
2 上記文献 131頁挿図



3 軸木の切り合せ

- 3 山本 元 1993 『表具のしおり-表装の歴史と技法-』 芸艸堂 (1922年刊行和装本『表具のしをり』の増補改訂版) 230頁挿図  
4 岡 岩太郎 2002 『絵画』『文化財のための保存科学入門』京都造形芸術大学編 角川書店 194頁 図2 (一部改変)



4 卷子の部分名称

第2図 現在用いられている軸装の形

殊菩薩騎獅像に納入されていた『金剛般若波羅蜜經』見返絵「春日若宮影向図」(重要文化財 文永十年 [1273] 東京・大東急記念文庫)で、軸木に巻き納められている本紙(経文と奥書)は紙本墨書であるが見返絵部分(縦22cm 横26cm)は絹本着色である(中島 2001)。

上記のように、格別な事情のもとで制作されたと理解されている名品に、特異な品質形状として絹本の卷子を見出すことができるが、伝世品における絹本の作品のほとんどは、掛幅である。このことを重んずれば、絹本である本出土品について、掛幅装と考えるのが自然である。

**掛幅の軸木** 先にみたように、2点の軸は1cm前後の間隔をあけて平行に並んでいた。この形をそのままうけとれば、一幅の掛幅の上下に取り付けられた一对の棒状部品と理解できる出土状態である。しかし、

現行の表具を参考としながら、出土品の特徴を確認すると、その判断は保留されることになる。その特徴とは、ほぼ円形を呈する軸木の断面形状で、2点に共通している形である。

現在おこなわれている表具の形をみると、掛幅の上下両端に、それぞれ木製の棒状部品が取り付けられているが、上端につく八双（はっそう）の断面は半月形、下端につく軸木の断面は円形である。八双と軸木の断面形状は、それぞれの部品が担う役割に応じて整えられた形であり、この情報を判断基準とするならば、出土した軸は、2点とも掛幅の下端につく軸木ということになる。

とはいえ、本資料は、表具がほぼ今日見られる形にととのえられた15世紀後半、東山文化の時代より遡る時代の資料である。そして、後世の修理の手がまったく入っていない鎌倉時代後期の表具の形を直に伝える出土品である。この点に注目するならば、現行の表具の形と直接比較する視点とは別の角度から、軸木の断面形状と機能の関わりを検証する必要があるといえよう。

**継承される形** うすい絹地や紙に描かれた日本の絵画を守り伝えてきたのは表具である。なかでも数多く伝存しているのが掛幅という形である。絵巻として親しまれている卷子、あるいは屏風や障子に仕立てられた大きな画面の絵画も伝えられているが、掛幅にくらべるとその遺品の数は限られている。

これらの表具は、刷毛などの道具を駆使し、紙、織物、そして、目には見えないけれども澱粉糊と水を用いて形づくられている。そのため、表具自身、100年を単位とする長い年月の間には、使用にともなう傷みや経年劣化が進むことが避けられない。したがって、修理あるいは新調することが不可欠となる。絹地や紙といった脆弱な素材に描かれているにもかかわらず、日本列島という風土のなかで、古代・中世の絵画が今日まで数多く伝えられてきたのは、表具の技術を継承し、その改良に勤めてきた人々の手と、作品を後世に遺すべく心を尽くした人々の連鎖の賜物ということができる。

しかしながら、そのような事情から、伝世作品において、絵画が製作された当初の表具は残っていないことがほとんどである。

一方、木棺直葬という構造の埋葬施設から出土した掛幅装絹本著色画は、副葬された時点、すなわち鎌倉時代後期の表具の情報を保持している。したがって、出土品ゆえに遺されている鎌倉時代に遡る表具の実物のあり方を明確にすることが、この出土絵画資料についての観察と記述がめざす地点のひとつであるとわかる。なお、行事や儀礼における繰り返しの使用に耐えるような表具、あるいは、永く後世に伝えるべく仕立てられた表具と、土中に埋められ再び懸けひろげられることのないと予めわかっている表具の間に、機能や構造の差がなかったのか、同じ時代の表具は、画一的であったのかという視点を持って、検討することも課題となろう。

**員数** 表具をめぐって浮上した課題にもとづき、現行の表具の形からいったん離れ、出土軸の形と出土状態が示すことならについて、白紙の状態から観察をおこなうこととした。そして、表具のあり方と絵画の員数を検証することとした。そのため、出土した2点の軸木について、絵画としての員数を一幅とみるか、あるいは二幅ととらえるかについては、保留としたまま観察を重ねていくこととしたい。とはいえ、具体的な記述を行うにあたっては、2点の出土品それぞれのあり方を大切にするために、上のような状況にあることを踏まえたうえで、便宜的に二幅として扱うこととする。

**資料名** 「掛幅装」という形状、「絹本著色」という品質はおさえられても、描かれている内容－主題－を特定できない現状から、この出土資料については「画」と表わさざるをえなかった。「掛幅装絹本著色画」という、主題部分に関しておさまりの悪い資料名を用いているのはそのためである。しかし、逆の見方をすれば、この資料名が本出土絵画資料の遺存状態を示しているといえる。

### (3) 用語の確認

**軸・軸木** 表具の用語で軸という場合、軸装された絵画全体を示す場合と、棒状の木製部分の呼称として用いられる場合とがある。後者については、軸木、軸棒、中軸、丸棒とも呼ばれ、いずれも表具の用語として同じ意味で用いられている。

本稿においては、付着遺存している絵画部分を含む全体を指す場合は「軸」、棒状の木製部分を指す場合は「軸木」と使いわけるとする。

**出土情報の保持** 軸のどの部位についての記述であるかを示す指標として、「東」「西」および「天」「地」「南」「北」を用いる。これは出土状態に従ったもので、出土時の位置関係を重視する視点から採用した。この表記方法により、巻き納められた状態にあって、連続している軸表面のなかで、表記の対象部分がおよそどのあたりであるかを、出土状態に遡って示すことができる。たとえば、東端部、天面、地面～北面というように用いる。ただし、それぞれの境界はあいまいである。

地面（ちめん）が、普通名詞の地面（じめん）と同じ表記になってしまうことが躊躇されたが、本稿において、普通名詞の地面（じめん）としてこの表記を用いることはないことを明記したうえで、地面（ちめん）を用いることとした。

なお、本稿における「天」「地」は、特別に断り書きのない限り、掛幅装の部位を示す表具の用語である「天」「地」をさすものではない。

**観察視野** 「上」「下」という場合には、顕微鏡で観察する視野において、視点から見ての重なりの上と下をさす。したがって、軸木に近い側が下、巻かれた状態でより外側にあるものが上となる。軸全体を視野にいれた場合の天地とは全く基準を異にする。

なお、本稿における「上」「下」は、特別に断り書きのない限り、掛幅装の部位を示す表具の用語である「上」「下」をさすものではない。

## 第2章 軸の形状・遺存状態と大きさ

### 1 軸1 (第1図5、PL.1 1・3・4・5、PL.2 3～7、画像索引1～4、表6・7)

北側から出土した軸1の現存長は21.8cmである。両端に若干の欠損があるが、遺存部の形と出土状態の記録から、ほぼ原形に近い長さをとどめているとおさえることができる。なお、西端部分約6cmの範囲は、出土時の上面(天面～北面)を中心として、根の攪乱による損傷が目立つ。

軸木の樹種鑑定は未実施である。軸木の木目は通直、均整、密で、木口面から見通した木目から、二方桎の材を丸棒状に加工したものと理解できる。釘などが取り付けられていた痕跡はない。

**切り合せ** 出土当初、1本の棒に見えていた軸1は、ほどなく東寄りの部分で2片に分離した。組み合わせられていた2片の部品が、天地に分かれたという状況で、のちに、「切り合せ」とよばれる軸の一形態であることを確認した。分離した2片は、西側の方が長く、東側の方が短い。各片の中央寄り部分長さ5.6cmほどが、丸棒を半截した形に加工されている。西側(長片)の半截部の上に、東側(短片)の半截部が重なり、合わせ面がちょうど水平になる状態であった(PL.1 1)。

西側の長片は、切り合せ部分を含めて、現存長18.6cmである。形状は比較的安定しているが、西端部分に損傷があるほか、表面の各所に、亀裂および小面積の圧痕・剥離といった変形が生じている。

東側の短片は、出土後の乾燥収縮により、変形が進行している。長さの3分の2近くが半截部分であり、東端部3.2cmのみが、あたかも軸首のように残されている。天地方向への扁平化、半截部分における反りと振れが進行している。軸首のような東端部においてどの程度長さが収縮しているか不明であるが、出土時に切り合せ部分同士が密着していた状況から、長さ8.8cm前後に復元できる。

比較的遺存状態のよい長片によれば、切り合わせ面は平滑に仕上げられており、暗褐色を呈している。切り込み部分の小口面は、見通すとおよそ半円形で、段違い状の小口は東西2ヶ所とも同じ傾斜方向に、約2mm分斜めになるよう切り込まれている。

付着している顔料や金を除いた軸木表面の色調は暗褐色で、後述する軸2よりも全体的に暗い。この暗褐色にみえるという表面情報は、のちに顕微鏡画像で確認するように、表面に貼りつくように遺存している絹地の存在によるものと考えられる。

なお、切り合わせ面の表面の色調も暗褐色である。切り合わせ面の色調に関しては、絹地の影響を考える必要が全くないことから、木材の劣化の影響を別として、接着剤に由来している可能性を考える余地がある<sup>4)</sup>。このことは、切り合わせ面以外についても、目でとらえることが困難な接着剤などの素材が、現時点で観察される色調に影響を及ぼしている可能性を示唆している。

肉眼でとらえられる現時点での遺物の色調は、木材、接着剤、絹地、顔料、墨、金など、さまざまな素材が、それぞれの遺存状態をもって映し出した色である。

**絹絵** 金と赤色顔料の付着が印象に残る軸1は、肉眼観察では、織物の遺存をほとんど見分けることができない。ルーペによる観察で、出土時の下面(地面)に小面積の織物の付着を何とか確認できる、といった状態である。しかし、後述する軸2で得られた観察の要点をよりどころとし、顕微鏡下であらためて

観察をおこなうと、軸木表面のほぼ全面にわたって、小さくちぎられたような絹絵が、斑状に付着している状況を確認できる。しかし、そのことを意識した場合であっても、肉眼およびルーペによる観察では、付着物を絹絵の層としてとらえるのはむずかしい。

なお、「切り合せ」の短片が分離した際に倒れこんだと判断される絹絵が、長片の切り合せ面エッジ部分に覆いかぶさる形で遺存している（PL.2 3▽部分2か所）。

**根の攪乱** 肉眼観察ではさほど損傷を受けているように見えない部分であっても、顕微鏡で観察すると、根による攪乱を痛々しいまでにとらえることができる。白い繊維が帯状に貼り付いて見える部分、黒く溝状にくぼんでいる部分は、一部に残っている残骸から、いずれも根の痕跡と判断できる。また、かろうじて遺存している絹絵部分にも、顔料層をもちあげるように、ひからびた根が挟まっている。ひからびた根の色調は、軸木本体の色調と似ているため、木目に沿って走る根は、軸木本体と一体化して見える。

**断面形状** 軸1は、絹絵層の遺存状態がきわめて悪い。そのため、肉眼観察的距離感でとらえた外面情報の多くについて、軸木本体部分の情報であると理解することができる。

軸1の中央付近の径は1.8cmである。外観から読み取れる断面形状は円ではない。丸棒というには帯状の面と面にはさまれた稜があるように観察される。とりわけ、切り合せ小口部を断面方向からみると、面取りがあるように見える。この面を、当初の加工に由来すると見るか、木材の木目に沿った変形にと見るかは、のちに表具について評価する際に鍵となる要素である。

軸木がもつ機能、すなわち、長い画面を巻き納めて画面を保護し保管するという機能を考えるならば、軸木に稜を意図的に残すことは考えられない。したがって、稜を当初の加工痕とみる場合には、丸棒にむけての仕上げが丁寧ではなかった、つまり、巻き納めた絵が傷むのを防ぐという機能がこの軸木には求められていなかったと、という解釈が可能となる。

一方、変形とみる場合には、表具のつくりの精粗とは別次元での検討が必要となる。軸木表面にあらわれた早材・晩材の密度差と、土圧あるいは乾燥収縮等のかかわりを検討する余地がある。現時点で観察される軸1の断面形状の意味については確定するには至らなかった。今後の課題である。

**軸端** 軸1の両端は、西端・東端ともすぼまっている。先端部は、傷んでおり原形の詳細は不明であるが、西端には、漆塗の装飾がある。

西端の漆塗り装飾は、現状では軸木から剥離し、板状に開いた漆膜として遺存している。この漆膜は、根の攪乱により大きな損傷を受けている西端周辺部において、比較的状态の良い地面～南面に付着している。漆膜が剥離した部分の軸木表面は、黒色を呈している。

東端は、扁平化は進行しているが、表面の欠損はなく、すぼまった先、ぎりぎりのところまで顔料が付着している点が注意される。東端には、漆塗り装飾、およびその痕跡は全くない。

**漆膜** 西端から剥離した漆膜は、横2.5cm、縦2.7cmの不整形で、波打っている（PL.2 5）。元来は、西端から約2.7cmの範囲に施されていた軸端の装飾である。

漆膜表面の色調は、暗褐色で、その上に平行する2条の色線が、軸周囲を巡る方向に引かれている。よ



り西端にちかい側が黒、内側が赤で、線幅は、黒が約2.5mm、赤が約3mm、両者の間には約3mmの間隔がある。赤い線から漆膜東縁までは約8mmあるが、一箇所、東の方向にむかって枝分かれする。この直交して東へのびる赤い線の幅は約1.5mmである。

なお、漆膜が軸に密着していた状態を復元したとき、この枝分かれ部分は、後述の軸上の赤い直線に連続する（PL.2 4・5・7▽部分）。

**赤い直線** 軸1の地面には、幅約1.2mmの赤い直線がある。この直線状に続く赤色顔料について、直線として直接軸木に描かれたものなのか、あるいは、絹地に塗られた赤い顔料が軸木表面に転写しているのかを検討する必要があると思われる。というのは、現行の表具の技法を参考とするならば、軸木に絹絵を接着する際に、つよい糊を線状につけることが想定され、仮に顔料がのせられている絹地部分に糊を置いた場合には、顔料が糊に食われて、軸木に密着し、直線状に遺存する可能性があるかと推測されたためである。

しかしながら、先に記したように、軸木地面の赤い直線は、西端の漆塗装飾の赤い線から枝分かれした細線の延長上に続いていることを確認した。したがって、赤い直線は軸木に引かれたものと判断できる。

この赤い直線は短片にも及んでいる。短辺を含めて現在確認できる赤い直線の東の端は、すぼまった東端から西へ1.1cmのところ、このポイントで絹絵層に被覆され見えなくなっている。絹絵層の下にどこまで続いているかは確認できないが、この絹絵層は、軸東端から西へ0.37cmのところまで付着していることから、赤い直線について、ほぼ軸端まで引かれているととらえてよいだろう。

## 2 軸2（第1図5、PL.1 1・2・6～8、PL.2 1・2、画像索引5～7、表8）

南側から出土した軸2の現存長は22.1cm、切り合せのない1本の棒状品である。両端付近、長さ3cmほどの範囲はややすぼまっている。両端にわずかに欠損があるものの、遺存部の形状と出土状態の記録から、長さについては原形に近い情報をとどめていると判断できる。

軸木の樹種鑑定は未実施である。軸木の木目は通直、均整、密で、木口方向から見通した木取りから、二方柁の材を加工したものと理解できる。釘などが取り付けられていた痕跡はない。

**絹絵** 軸2を肉眼でみたとき、まず、緑色の顔料が斑状に広範囲に付着しているという印象をうける。そして、次に、織物の付着が目に残る。織物は、ルーペを用いた観察で、じゅうぶんに目の細かい平織とわかるほどに明瞭な状態で遺存している。また、顔料と織物の一部に、金箔の付着がはっきりと認められる。これら顔料の付着した織物は、後述するように、画絹に描かれた著色画の残欠であり、金箔は截金という本格的な技法の一部である。出土時の下面側（南面～地面～北面）、中央部分から西部分に、より多く遺存している（画像索引5・6、PL.1 2）。

**根の攪乱** 肉眼観察ではあまり大きな損傷を受けているように見えない軸2であるが、顕微鏡で観察すると、絹絵や軸端の傷んだ部分に、細い根が入り込んでいる様子を確認できる。截金文様を突き破って、軸の内面から突出しているやや太い根もある（PL.1 8上段）。

また、軸表面、絹絵層を抉るように走る横断面U字状の溝も、一部に残っている被膜のような残骸から、

根が這いそしてはがれた痕跡とわかる。凹面部分が炭化したように見える溝は、根そのものが残っていても、根の攪乱痕跡とみてよい。木目に沿った攪乱も多く、凹面を追いかけると、根が表面を這うだけでなく、いったん絹絵層や軸木の内部に侵入したあと、再び表面に出ていると理解できる部位を見出すことができる。

**断面形状** 軸2は、広範囲に絹絵が密着遺存している。そのため、直接、軸木を観察できない部分が多い。そのことをふまえたうえで、可能な範囲で、観察された事項について記述する。

軸中央付近の径は、遺存している絹絵の厚みを含めて約1.5cmである。絹絵部分の厚みをぬきだして計測値として提示できる状況にはない。断面の形状は、外観から読み取れないが、丸棒ではなく面取りがあるようにみえる。絹絵に覆われ表面には亀裂のない部分にも、明瞭な稜が認められる。この特徴は、軸1と共通の様相である。そして、軸1と同様、加工痕と断定するのはむずかしい。

**赤い軸端** 軸木の両端は、すぼまっている。乾燥収縮により、どの程度変形しているのか、また、端部に面があったか否かは不明である。なお、西端を小口方向からみるとくぼんでいる。東端はくぼんでいない。

軸端に関して、軸2でとりわけ注目されるのは、東端・西端の双方に赤い顔料が付着している点である。赤い顔料が付着している木胎の破断部分を観察した結果、両者の密着状況が確認されたため（PL.2 2）、軸木に直接赤い顔料が塗られていると判断した。西端から0.5cm、東端から0.65cmの範囲に確認できる。軸端には、乾燥収縮にともなう変形と理解できる亀裂があり、さらに、赤の上に別の顔料（絹絵）が付着している（PL.2 2、PL.4 4）。したがって、外面から確認できるのは斑状であるが、面的に塗布されていたととらえることができる。

上述の観察事項から、軸端の装飾として赤彩が施されていたと理解できる。なお、この軸端の赤い色は、軸1・軸2の絹絵の広範囲にみられる赤と、概ね同じ色調と受けとめられる。

## 第3章 観察の要点

### 1 織物と顔料

**解明の契機** 本資料の具体的な観察報告に入る前に、資料の性格を解明する契機となった観察の要点を整理しておきたい。要点の第一は、織物と顔料の付着状態である。

通常、織物を顕微鏡で観察すると、倍率を上げていくにしたがって、経糸・緯糸の一本一本がはっきりと見えてきて、ピントが合う範囲内であれば、糸と糸に囲まれた空隙がとらえられる（PL.6 12・13）。ところが、軸2において、明確に織物が付着しているとみえた部分を顕微鏡で観察したところ、異なった様相が浮き上がってきた。顕微鏡の倍率を上げていくにしたがい、糸の流れが途切れ、のっぺりとした壁のような面が見えてきて、織物に見えなくなってしまったのである（PL.1 2・8）。

当初、顔料を用いて装飾を施した棒に織物が付着していると漠然と思い込んでいたため、なぜこのように見えるのか、と思索を繰り返していた。しかし、顔料と織物、それぞれが木に付着しているのではなく、顔料に埋もれた織物が木に付着している、と視点を変えるに至り、ようやく、顔料に埋もれた織物とは何か、少し角度を変えて、顔料が塗り込められている織物とは何か、絵ではないかという見方をすることができるようになった。

また、織物に関して、糸の流れがよく見える部分の組織から、経糸が2本1組に見える箴目のある平絹であると把握でき（PL.3 1）、これが画絹と呼ばれる、絵を描くために織られた絹地であることを確認した。

検証として、高精細デジタルカメラで撮影された『国宝絹本着色十一面観音像』の拡大画像（奈良博・東文研2006）と、出土品の顕微鏡画像を比較し、軸2の表面に付着している織物と顔料は、画絹とよばれる絹地に顔料を用いて描かれた絵画である、という解釈に矛盾がないことを確かめた。

**表面の起伏** あらためて軸2の表面を観察すると、棒に巻かれて貼りついた状態にある絹地に描かれた絵画であると判明する以前には、不規則な斑状の付着物にしか見えなかった織物と顔料の遺存状況が、意味をもつ重なりとして読み取れるようになった。

顔料と織物が付着した軸の表面は平滑ではない。顕微鏡で観察するとかなりの凹凸がある。観察当初、この凹凸は、付着物に覆われて表面からは見えない、木質部分の変形が反映しているものと思い込んでいた。しかし、軸木に幾重にも巻き付けられていた絹絵がどのように遺存しているか、あるいは破損しているか、という視点から顕微鏡観察を続けると、凹凸は、部位によって異なる絹絵層の遺存状態を反映していると理解することができた。

つまり、絹絵が複数層重なった状態で遺存している部分は、軸木表面の付着物層に厚みがあり、そうでない部分は厚みがない。この絹絵の遺存状態が、軸の表面に凹凸を生じさせていたのである。

**素材の重なり** 詳細に観察すると、表面情報はかなり複雑である。それは、絹絵という面としてとらえられる造形が、のちに詳述するように、複数種類の顔料・金箔・画絹が重なって形成されていることによる。すなわち、絹絵の断面は、単体の段階ですでに層状構造をもっており、それが幾重にも積み上げられ

て付着しているのが、軸に巻き納められた状態にある絹絵層の断面構造なのである。

したがって、出土品のような遺存状態にある資料について、今日観察される表面情報は、消滅を免れた最上層の絹絵を構成している、消滅を免れた素材の層ということになる。

顔料・金箔・画絹といった絹絵を構成している素材には、それぞれに独自の色と形があって相互に区別される。そして、それぞれの素材は、独自の密度で層を形成している。そのため、密度と重なり、あるいは、画された一定の範囲をもつ面としてとらえうる素材層の大きさによっては、複数の素材層が同時に見えることになる。

たとえば、緑の粒子がまばらにひろがっている顔料層の下に、線状（拡大しているため帯状に見える）の細長い輪郭をもつ金箔があり、金箔の下には、密度の濃い白い顔料層がより広い面として広がっている、といった具合である（PL1 8）。さらに、遺存状態によっては、一枚下の絹絵の素材層が同時にとらえられるという状況も生じている。

**根の攪乱による分断** 遺存状態に関わる出土品ゆえの最大の特徴は、植物の根による攪乱である。絹絵層を破断するように、根が入りこみ、亀裂のような損傷を与えている。根の攪乱は、複雑に入り込んでいため、ひとつの連続する面として遺存する絹絵の範囲は小面積であり、その輪郭は不整形である。また、破損面の多くは傾斜をもっている。

したがって、軸木を俯瞰すると、異なった色調と質感を持つ素材が混在し、棒の表面に斑状に複雑に付着していると観察される。

**出土絹絵の遺存状態** 軸2で確認された「表面の起伏」「素材の重なり」「根の攪乱による分断」という特徴は、軸木に巻かれた状態にある絹本著色画の遺存パターンとして、視覚的指標となる。具体的には、遺存状態が良好でない別の出土品に関して、それが絹本著色画であるかどうかを判断する際に、観察ポイントを探す指標となる。

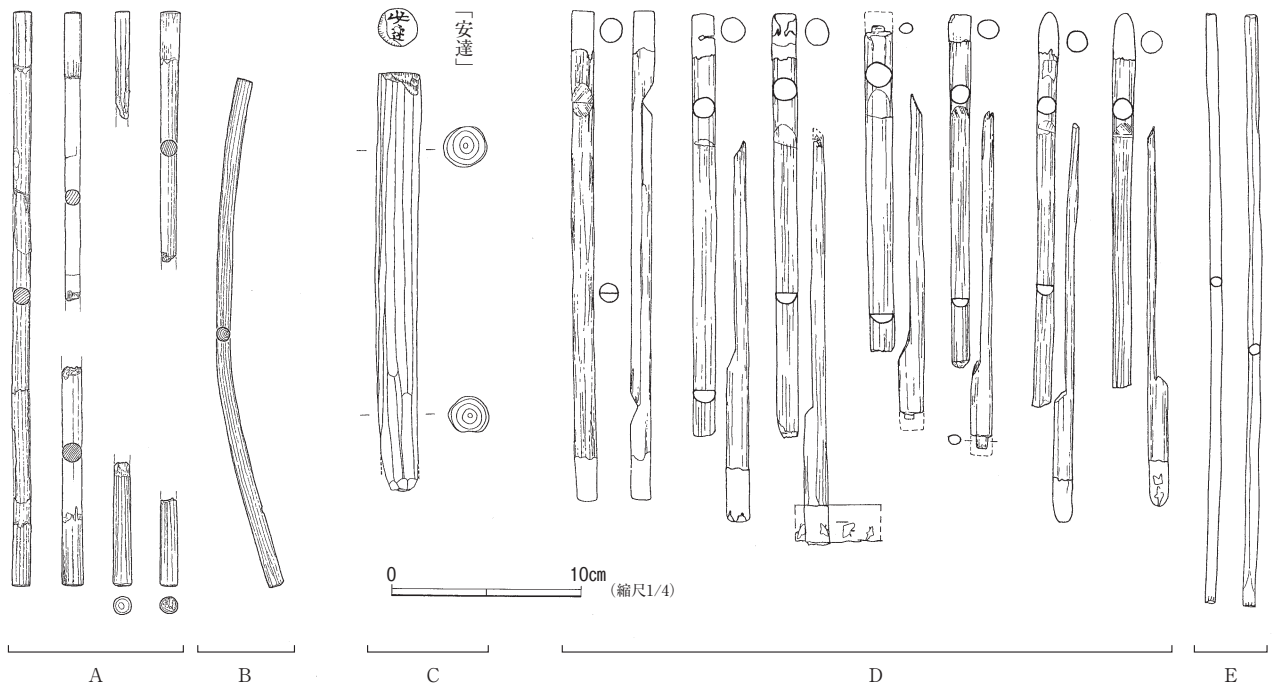
今回の観察においても、顔料と織物の付着がより少ない軸1の観察において、この指標を活用した。そして観察のポイントをしぼり、細部の構造を確認することによって、軸1に関しても軸木に巻かれた状態にある絹本著色画であると実証することができた。

## 2 軸木の形状

**軸木の機能と形** 掛幅装絹本著色画は、絹絵に軸木という別個のものが具わって構成されている。軸木は絹絵に対して脇役的な存在であるが、独自の役目を果たしている。

軸木は、長いものを均整な状態で巻き納める芯として、径が一定で通直であること、さらに、巻き納める対象を傷めないために、軸木表面に稜のないことが求められる。したがって、丸棒が基本となる。そして、それぞれが巻き納めるものに対応する長さをもつ。

この軸木の特徴は、細部の工夫を除けば、掛幅と卷子という軸木をもつ二種の表具に共通する。一方、掛幅と卷子それぞれにおいて、用いられ方に適う軸木の重さや太さが備えられたと思われる。掛幅の軸木には、懸吊した画面を安定させるための重さと太さが求められ、卷子においては、手で繰る際の扱いやすさが考慮されたと推測される。そして、卷子のなかでも、読経に際し、両手で捧げ持ちながら繰り続ける



A 山田寺跡出土 漆塗巻物軸  
 B 山田寺跡出土 素木巻物軸  
 C 市川橋遺跡出土 文書軸の可能性ある木簡  
 D 興福寺旧境内出土 切り合せ漆塗経軸  
 E 上記Dおよび柿経と一括出土した素木経軸

〈出典〉A・B 奈良文化財研究所 2002 『大和山田寺』（『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報 第63冊）挿図木製品3（26～33）  
 C 滝川ちか子 1996 「宮城・市川橋遺跡」『木簡研究』第18号 129頁 挿図(1)  
 D・E 西藤清秀 2003 『興福寺旧境内-県分庁舎建設に伴う調査-』奈良県文化財調査報告第78集 99頁 図7（一部抜粋）

### 第3図 出土軸木の形

経典の軸木には軽量化が意識されたであろうし、奉納を目的とした経典や、披見台に置きゆっくりと画面を展開させる絵巻、保管を目的とした文書軸などには、安定感がもとめられたと推測される。

また、周知のように、掛幅と巻子のいずれにおいても、製作の目的あるいは製作の背景によって、付加される装飾性の有無や仕上げの丁寧さに、多様性が認められる。

**出土軸木の形** 思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓から出土した軸の木製部分、すなわち、丸棒状の木製品について、絹絵が巻き納められた状態で遺存していることから、軸木と理解して観察を進めてきたが、ここで、絹絵の存在とは別の角度から、つまり、木製遺物という視点から見直し、軸木と認定することが妥当か否かを確認しておきたい。

国内の遺跡から出土した木製品のなかに、掛幅に用いられたと特定されている軸木の事例は見出せていない。しかし、文書軸や経軸、あるいは巻子の軸木である可能性が想定されている棒状木製品を見いだすことはできる（第3図、表2）。

棒という単純な形をもちながら、巻子の軸木であると判明している棒状木製品の出土事例には、以下のような7つの型があると整理できる。各項の特徴は、完形ではない出土品の性格を判断する際の指標ともなる。

- 1 巻き納められた紙本経あるいはその残欠が遺存・付着している棒状木製品

表2 出土軸木の寸法

区分	出土遺跡・出土遺構	寸法 cm		出典		備考
		長さ	径	文献	挿図番号等	
軸木木簡	平城京左京二条二坊五坪東二坊坊間路西側溝 SD5021	31.5	1.9	奈文研1990 渡辺1990	図版5 図版5	和銅八年(715)計帳/大倭国志奈上郡大神里
軸木木簡	平城宮南面大垣東端地区 SD11640	32.0	2.2	奈文研2004	PL50 木簡番号9884	養老七年(723)肥後国益城軍団兵士歴名帳。檜。
軸木木簡	平城宮南面大垣東端地区 SD11640	29.5	1.6	奈文研2004	PL50 木簡番号9883	神亀五年(728)出羽国考状帳か。杉。
軸木木簡	平城京左京三条二坊八坪二条大路濠状遺構(南) SD5100	29.4	1.8	奈文研1995	図版2	天平八年(736)伊勢国封戸調庸帳/植科
軸木木簡	平城宮中央区朝堂院南方 SD3715	31.5	2.2	奈文研2010	PL75 木簡番号11948	天平寶字四年(760)考状帳か。心持ち丸木材。檜。
軸木木簡	平城宮東南隅部南面大垣北側溝SD4100A	28.1	1.8	奈文研2004	PL3 木簡番号8518	渋川(河内国渋川郡のこたか)。檜。
文書軸の可能性ある木簡	市川橋遺跡(8次調査)	22.2+	2.4	滝川1996	129頁挿図(1)	「安達」(陸奥国安達郡)下端がわずかに欠損。心持ち丸木材。
巻物軸	山田寺跡 宝蔵SB660	復元26.9	中央部0.75	奈文研2002	挿図木製品3-26	素木。心持ち丸木材。両端にむかって徐々に太くなる。端部径0.9cm。
巻物軸	山田寺跡 宝蔵SB660	30.1	0.9	奈文研2002	挿図木製品3-27	両端黒色塗塗り。檜。
経軸	金峯山経塚	25.6	—	石田・矢鳥1927	91~92頁〔1〕~〔4〕	荒削りの檜。両端に鍍銀素文六角形軸端を装着する柄あり。両端は軸端に合わせて六角形に削る。軸端を含めた長さは、〔1〕全長31.25cm、〔2〕全長31.25cm、〔3〕現存長28.5cm、〔4〕現存長30.6cm。
経軸	金峯山経塚	—	—	石田・矢鳥1927	91~92頁〔5〕	軸端を含めた長さは、全長30.3cm。軸端は唐草文と魚子施文撥形金銅製。
経軸	高野山奥之院経塚	—	—	奈良博1977	298~300頁2-15	永久二年(1114)比丘尼法葉の願文をとまう。紺紙金字法華経の経軸は切り合せ軸。本紙の幅に合わせて、丸棒をそいだ部分を接ぎ合せ、紺紙の帯で巻き留めている。軸端は無文の白銅鍍金八角形。個別寸法は下記参照。
経軸	高野山奥之院経塚	28.0	—	和歌山県教委ほか1975	表 妙法蓮華経一	本紙縦25.0cm、総横918.0cm。
経軸	高野山奥之院経塚	28.0	—	和歌山県教委ほか1975	表 妙法蓮華経二	本紙縦25.0cm、総横1075.7cm。
経軸	高野山奥之院経塚	28.0	—	和歌山県教委ほか1975	表 妙法蓮華経三	本紙縦25.0cm、総横1008.1cm。
経軸	高野山奥之院経塚	28.0	—	和歌山県教委ほか1975	表 妙法蓮華経四	本紙縦25.1cm、総横872.1cm。
経軸	高野山奥之院経塚	28.0	—	和歌山県教委ほか1975	表 妙法蓮華経五	本紙縦25.1cm、総横966.6cm。
経軸	高野山奥之院経塚	28.0	—	和歌山県教委ほか1975	表 妙法蓮華経六	本紙縦25.0cm、総横924.9cm。
経軸	高野山奥之院経塚	27.9	—	和歌山県教委ほか1975	表 妙法蓮華経七	本紙縦25.0cm、総横861.6cm。
経軸	高野山奥之院経塚	28.0	—	和歌山県教委ほか1975	表 妙法蓮華経八	本紙縦25.0cm、総横770.3cm。
経軸	高野山奥之院経塚	27.9	—	和歌山県教委ほか1975	表 無量義経	本紙縦24.8cm、総横838.8cm。
経軸	高野山奥之院経塚	27.9	—	和歌山県教委ほか1975	表 佛説観音菩薩行法経	本紙縦25.0cm、総横752.4cm。
経軸	高野山奥之院経塚	28.0	—	和歌山県教委ほか1975	表 摩訶般若波羅密多心経・佛説阿彌陀経	本紙縦25.0cm、総横270.2cm。
経軸	高野山奥之院経塚	残存長8.8	—	和歌山県教委ほか1975	紙本墨書法華経断簡 経軸残片①	木製の経軸で粗製である。
経軸	高野山奥之院経塚	残存長0.7	1.2	和歌山県教委ほか1975	紙本墨書法華経断簡 経軸残片②	経軸の先端部と思われる。
経軸	堂ヶ谷経塚	24.1	0.8	奈良博1977	334~335頁25	愛媛県伊予市。久安六年(1150)刻銘金銅経筒内に、経巻8巻分の麻紙付着軸木が遺存。荒削りの素木で、断面は不整形。竹製八双(長さ15.5cm、幅0.2cm)1点も遺存。
経軸	宝満山経塚	22.5	0.7	奈良博1977	338~339頁28	福岡県太宰府市。平安後期。出土地点や出土状況は不明。経巻(1巻)は素紙(天地20.8cm)が固着。軸木は完存。竹製八双も遺存。
経軸	四王寺山経塚 第三経塚	27.3	1.1	奈良博1977	340~342頁30	福岡県太宰府市。元永二年(1119)。宋代六耳壺内に経軸10本(現存9本)と紐長短3~4条が遺存。断面円形の素木軸両端に、軸端装着用の柄を削り出す。
経軸	柏尾経塚	残存長5.5	1.7	奈良博1977	354~356頁41	山梨県甲州市(旧勝沼町)。康和五年(1103)。断面は正円に近く、木口には多少のふくらみがある。
経軸	日石寺裏山経塚	25.3	0.6	奈良博1977	356頁42	富山県中新川郡上市町。仁安二年(1167)。棒軸を半截したものを2本合わせて1本としたもので、炭化した紙片が付着する。軸木8本は法華経八巻を埋納したと推定。
軸木転用品か	鶴岡八幡宮東側境界溝第2面第1溝	参考8.4	—	研修道場用地発掘調査団1983	189頁Fig.111-4	黒漆付着一端に向かって徐々に太くなる。
軸木転用品か	鶴岡八幡宮東側境界溝第3面第5B溝	参考11.4	0.8	研修道場用地発掘調査団1983	189頁Fig.111-5	すぼまる端部に漆付着。切り合せ軸か。
掛幅軸木	思井堀ノ内遺跡 292号方形周溝区画墓 木棺	21.8	中央部1.8	天野2006本報告	112頁第40図5軸1	切り合せ。両端がすぼまる。一端に漆塗装飾。
掛幅軸木	思井堀ノ内遺跡 293号方形周溝区画墓 木棺	22.1	中央部1.5	天野2006本報告	112頁第40図6軸2	両端がすぼまる。両端に赤彩装飾。
経軸	興福寺旧境内 土坑24	平均27.0	平均1.1	西藤2003	99頁図77 101~102頁表96	切り合せ軸14点のうち、長さは全長がわかる13点の計測値を集計した。最小22.9~30.0cm。各片26点の平均長は20.6(最小17.4~最大23.0)cm。軸端塗塗の平均長は2.1(最小1.2~最大3.1)cm。径は28片の平均値(最小0.9~最大1.4cm)。
経軸	興福寺旧境内 土坑24	(1片のみの平均)20.4	平均0.9	西藤2003	99頁図77 101~102頁表96	切り合せ軸のうち、組合せ不明11片の計測値を集計した。最小19.2~最大23.4cm。軸端塗塗の平均長は2.1(最小1.8~最大2.6)cm。径最小0.8~最大1.0cm。
経軸	興福寺旧境内 土坑24	平均29.6	平均0.6	西藤2003	99頁図77 101~102頁表96	素木角棒状軸44点の計測値を集計した。長さの最小19.6~最大31.6cm。径の最小0.4~0.9cm。

- 2 金属製の軸端が装着されている棒状木製品（第4図）
- 3 軸端部分に漆塗りが施されている棒状木製品（第3図A・D）
- 4 木口に削り出された柄について、軸端を取り付けた痕跡であると判断できる棒状木製品
- 5 出土遺構の性格や出土状況、伴出遺物から軸木と判断できる棒状木製品（第3図E）
- 6 墨書により文書軸という性格を想定できる棒状木製品（第3図C）
- 7 「切り合せ」という、軸木の機能を明確に示す固有の形をもつ棒状木製品（第3図D）

思井堀ノ内遺跡から出土した2本の軸木について、経典と絹絵の違いに由来する一部の要素について置き換えを行ったうえで、上記1～7の各項と対照した。その結果、1（紙本経を絹絵に置換）、3（漆塗りを漆塗り及び赤彩に置換）、7の3項目について、該当することを確認できた。なお、1と3は軸1・軸2の双方が当てはまり、7は軸1のみが当てはまる。

80点余の経軸が一括出土した奈良市興福寺旧境内出土事例<sup>5)</sup>（西藤2003）に明確に示されているように、出土軸木個々の形には、様々なものがあり、つくりの精粗は一様ではない（第3図D・E）。このような出土軸木に見える様相は、経塚出土品について明らかにされている軸木の特徴と分類（奈良博1977）にそのまま対応させることが可能である。

なお、卷子は、巻物の本体部分を軸木に糊付けする際、両角を裁ち落とした巻末部分を軸木中央に巻き込む（第2図4左端部分）。この構造をもとに出土品を見ると、山田寺出土事例（第3図A・B 奈文研2002）にみえる棒の中央部分がやや細くなるように仕上げられた軸木の形について、巻末と軸木の接点のあり方に関わりをもつ形状と理解することができる。すなわち、中央部分が細くなっている軸木に、糊付けする三角形の巻末部分の厚みが加わると、本紙部分を巻き納める際には、軸径が均されて通直な丸棒となる。出土品において、中央部がやや細くなるよう丁寧に作られている棒状品があった場合、卷子の軸の可能性を考慮する余地があるかもしれない。

上記1～7のうち、6以外はすべて経塚出土品にあるが、1の紙本経遺存事例は、経塚という埋納環境においてのみ顕著に遺存例を見出すことができる（関1990、奈良博1977）。

2に関しては、金属製軸端内部に木質が遺存する、まさに痕跡といった遺存状態の例が含まれる。福島県須賀川市上人壇廃寺跡出土事例の木質遺存状態のばらつきに示されているように（第4図）、木質を確認できない軸端についても、消滅してしまった軸木の存在を想定してよいであろう。上人壇廃寺跡の軸端は、主要伽藍を区画する溝SD014の北東コーナー付近から昭和50年代の調査で出土したもので、鉄製金鼓も出土した溝SD014出土土器の年代はおおむね9世紀後半を示し、堂にあった仏具類が投棄されたものと



第4図 上人壇廃寺跡SD14溝北東隅出土青銅製金箔貼軸端

推測されている（皆川編2011）。

3の軸端に漆塗りがある軸木例は、奈良県桜井市山田寺跡（奈文研2002）や興福寺旧境内北東隅の土坑内（西藤2003）から出土している（第3図A・D）。この特徴は、思井堀ノ内遺跡出土軸1においても、明確に認められる。なお、端部の形状がややすぼまる思井堀ノ内遺跡出土軸2の両端に見られる赤彩についても、漆塗りに準ずる装飾とみなすことができるといえよう。

4の柄を削り出した軸については、その柄が軸端取り付けるために機能していたことを示す情報が必要であり、その確認がとれない場合には、指物部材との識別が困難であると予想される。

5の遺跡・遺構の性格という点では、経塚例が大半をしめ<sup>6)</sup>、寺院跡出土品が若干加わる。遺存状態が良好でない棒片であっても、経筒内遺存資料であれば経軸と判断できる。寺院関連の事例としては、山田寺跡から出土した心持材の素木軸がある。第3図Bは、軸端に漆塗りを施した経軸とともに出土したもので、これらは銅板五尊像・漆塗仏具類・厨子部材・経典の出納に関わる木簡、および宝蔵SB660の茅負・垂木・瓦とともに、宝蔵SB660の基壇上や雨落溝の上層から、黒灰色粘質土に覆われた状態で出土した。11世紀前半に回廊とともに倒壊したと推測されている宝蔵SB660の倒壊により、宝蔵内に収納されていた経軸が散乱し埋没したととらえられている事例である（奈文研2002）。

6については、墨書の内容によって文書軸という性格が想定されている資料群である。見方を変えれば、文字情報がなければ、用途や性格を特定するのが困難であるという丸棒状軸木の特徴を明示している。平城宮・平城京から出土した丸棒状の木簡は、断片を含めて約20例あり（奈良文化財研究所木簡データベース）、そのうち、元来の軸長と径の情報を残す資料は6例ある（表2）。

丸棒状の軸木木簡は、軸の木口部分に墨書する形が基本で、文書の見出しの要素をもつ内容が記されている。なお、木口の墨書にくわえて、軸側面に習書「土師器埴埴科科科文甚大大大大」が認められる例もある（平城京二条大路SD5100出土）。また現状では木口に全く墨痕が見られない例として、縦に半截した平滑面に紀年（天平十五年）を墨書した断片資料（平城宮東辺基幹排水路SD3410出土『平城宮木簡』四、PL.1 19、木簡番号3705）や、側面に判読できない墨痕多数を残す例がある（平城宮東南隅SD4100A出土、木簡番号8518）。

平城京以外の地域から出土した事例としては、宮城県多賀城市の市川橋遺跡8次調査出土木簡がある（第3図C）。市川橋遺跡例は、心持材の表面を削った丸棒状木製品で、現存長22.2cm、径2.4cm、一端がわずかに欠損するが、一方の木口に「安達」の墨書がある。多賀城南方に展開する方格地割の東西大路南側側溝の可能性のある10世紀前半の溝から出土したもので、陸奥国安達郡（福島県二本松市周辺）関連の文書を保管するための軸として使用された可能性が指摘されている（滝川1996）。

なお、伝世資料においても、墨書をもつ旧軸の存在が注目されている。解体修理時に卷子や掛幅から取り外され見出されたもので、制作年、制作の事情、絵師の名前などが記されている。また、修理銘から来歴が判明する場合もある<sup>7)</sup>。

**切り合せ** 軸木固有の形として注目されるのが、7に掲示した「切り合せ」である。「切り合せ」は、一端を相欠きにした丸棒2片を接いで1本の軸棒とするもので（第2図3）、思井堀ノ内遺跡出土軸1は、この「切り合せ」の特徴を持つ。

「切り合せ」は、軸木を取りつける表具の工程において、すでに仕上げられている軸首部分の形状を保



持したまま、本紙の幅に合わせて軸長を調整できるよう工夫された形である。経塚出土紙本経軸木のほか、伝世する作品の旧軸、及び現行の掛幅・卷子のいずれにも用いられている。2片の相欠き部分を重ね合わせる際に重ねをずらす、あるいは、相欠き部分の端を削ることにより、長さを微調整して、巻き納める本紙の幅に軸長を合わせることができる。なお、現行の大型の表具で太い軸を用いる際には、材の反りや変形を少なくするため、数材を接ぎ合せ、また、重量を軽くするために内刳を施すことも行われている（西川・増田1977）。

出土品では、興福寺旧境内から出土した事例（第3図D）や、高野山奥之院経塚出土紺紙金字法華経に明確な切り合せを見ることができる。高野山奥之院経塚例では、軸長を長くするために、切り合せをずらして重ね合わせ、中央部分にテープ状の紙を斜めに巻きつけて固定した様子が良好に遺存していた（和歌山県教委・高野山文化財保存会1975）。

なお、伝世絵画作品の掛幅の旧軸には、3つに分割された切り合せの事例がある。永徳三年（1383）の紀年墨書銘をもつ奈良市春日大社に伝わる「鹿島立神影図」（縦106.5cm 横35.9cm）の旧軸で、切り合せの加工が2箇所があり、両端が半截された中央部と、一端が半截され他端に短い柄が削り出された軸端部2点の3つに分割されている（春日大社社務所1973、奈良博1995）。

軸木の長さを微調整するためのこれらの工夫は、木工という技術系列と、表具という、おもに紙・織物・糊・水をあつかう技術系列の接点において生み出された形であるといえよう。形の特徴は明確であり、仮に軸木部分のみが出土しても、転用などの要素をひとまず除外して考えるならば、切り合せの軸木と判断できる可能性がある。ただし、1片のみ、とくに短い1片が出土した場合には、他の木製品との識別が困難なことが十分に予想される。

ところで、切り合せの軸が出土した場合に2片合せたままの形状を維持しつづけることができれば、軸の周囲に巻かれている絹あるいは紙などの崩壊を最小限に抑えることができると理屈の上ではいうことができる。出土品の場合、土などの除去作業も必須であることから現実にはかなわないが、意識することによって、少しでも多くの情報を記録できる可能性があるといえよう。

**樹種と木取り** 現行の表具では、軸木には通直で樹脂が少ないスギの辺材（白太）部分を削った丸棒が用いられる（西川・増田1997）。このような木取りを木口方向から見通すと、二方桁のように平行な木目が見えることになる。なお、出土軸木においては、杉とともに檜も多く用いられていることが、山田寺出土経軸および平城宮・平城京出土軸木木簡において明らかにされている（表2）。木取りについては、大半が二方桁加工品とみられる中で、心持ち丸木材を用いた例も報告されている（第3図B・C）。

**転用の有無** 軸木や八双は、表具を解体した場合に、手ごろな大きさの木の素材として、再利用されうる形と大きさをもっている。したがって、それらが最終的に廃棄あるいは埋納された段階で、転用されていることも十分に考えられる。

軸木を転用した可能性が指摘されている資料に、平城宮東南隅部南面大垣北側溝SD4100Aから出土した木簡がある（木簡番号6218）。長さ29.6cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、檜材の板目平滑面に遣高麗使への叙位に関する墨書がある木簡で、断面が半月形を呈している（奈文研1996）。

逆に、軸木そのものが転用品であることも十分に考えられる。形がシンプルであるため、軸木の形その

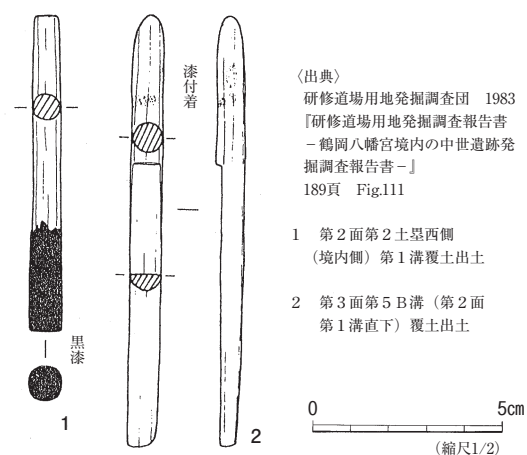
ものから判断することはかなわないと思われるが、墨書銘から転用であることが明確な伝世作品の実例を紹介し、出土品についても、今後同様の事例が出現する可能性があることを確認しておきたい。

転用材であることが判明しているのは、国宝に指定されている「法華経 卷第八 運慶願経」一卷（寿永二年〔1183〕紙本墨書）の軸木である。書写された法華経は、平氏による焼き討ちからの再興を祈り、仏師運慶が発願したもので、詳細な奥書に、数多の結縁者を得て実現した書写の経緯が伝えられている。軸の墨書には、東大寺焼失の柱の残りであること、夢想のお告げによれば春日大明神の守護し給う木であること等が記されている（西山2002）。

**軸木の可能性** 木簡以外の出土木製品について、表具の部品である可能性を検討する際には、形状のほか、遺構の性格や出土状況、付着物あるいは使用痕・再加工痕にかかわる情報の確認が求められる。

もっとも判断しやすい要素は、軸端装飾の可能性が高い均質な漆塗が、軸棒の両端部に遺存している場合であろう。しかし、一端を欠損している場合や、漆塗り面が荒れている場合など、再加工や転用の有無を含めて、髹漆要具との識別が困難なことが予想される。

そのような事例の候補として、神奈川県鎌倉市鶴岡八幡宮境内出土品を掲げることができる（第5図）。鎌倉市の市街地には地下水位の高い地区が多いため、構築部材や、漆器を含む多種多様な木製品が出土している（大三輪1985、斉木1993）。第5図に転載した木製品は、大三輪龍彦氏、斉木秀雄氏らにより発掘調査がおこなわれた鶴岡八幡宮の境内東側境界を形成する中世の溝覆土から、多様な木製品や漆器とともに出土した遺物で、漆塗用具類として分類されている。1は、長さ8.4cmほど、断面円形で、全長の三分の一ほど（2.8cm前後）の一端に黒光りした漆が付着していると報告されている。2は、長さ11.4cm、径8mm、丸棒を途中から平らに削り出したもので、上部に若干漆が付着、一部を欠損するもので、ぶんまわしと報告されている（研修道場用地発掘調査団1983）。これら2点は、漆付着部を軸端ととらえ、また、丸棒を途中から平らに削りこんだ形を切り合わせとみるならば、軸木の一部、あるいはその転用品の可能性のある資料の候補といえよう。



第5図 鶴岡八幡宮東側境界溝出土漆付着棒状木製品

### 3 観察と報告の構成

**画像索引** 観察結果について画像を提示しながら記述をおこなうが、具体的な細部の観察部位（PL.1～PL.5）が、軸のどの部分であるかを検索できるように、撮影データ（表5）とあわせて、全体を概観する画像索引を作成し、稿末に一括して掲載した（画像索引1～7、表6～表8）。

画像索引は、軸木上を西から東へ、視野をすこしずつ移動しながら撮影した1枚1枚の画像を、軸木表面を展開したかたちとなるよう配置したもので、「撮影列」（索引横列）ごとに、西から東へ昇順で撮影番号が付されている。但し、この撮影番号は、索引全体としては通し番号になっていない。

「撮影列」の名称としては、出土時に、軸表面がどの方向に面していたかを示す「南」「天」「北」「地」を基本とし、これに枝番を派生させて記号とした。

撮影画像は視野の周縁部へいくほど歪みが生じ、また軸表面のわずかな高さの違いによってピントも変わることから、観察ポイントが中心にくるよう、撮影視野を移動させた。そのため、撮影列によって撮影枚数が異なる。したがって、索引の縦列の並びは任意で画像は連続していない。

なお、1枚の画像では面的な広がり不足特徴を示せない場合には、複数の索引画像を合成して提示した。この合成展開画像について注意されるのは、画像と画像の境界部分については、顕微鏡情報として不正確な部分が生じていることで、細部の確認に際しては、1枚1枚の画像に戻る必要がある。

**撮影倍率** 索引作成に用いた連続撮影画像は、ピント調整が可能な範囲での最大視野で撮影した。撮影対象である資料の表面が曲面であることにくわえ、軸木や絹絵の遺存状態により表面に凹凸があるため、ピント調整は1コマごとに変化している。したがって、1コマ1コマの撮影視野、および撮影倍率は均一ではないが、およその目安としてタテ方向の撮影視野5mm～6mm前後という数字を掲げることができる。

一方、PL.1～PL.5に掲げた画像のうち、観察テーマに即した画像は、何段階かの設定にしたがって拡大し撮影している。しかし、索引画像と同様、ピント調整にともない撮影視野は変化しているため、撮影データに記載した掲載倍率（表5）についても画像により若干の差は生じている。

**報告の構成** 観察結果の記述に際しては、軸1・軸2、それぞれのあり方の把握よりも、観察テーマの設定を優先した。これは絵画として遺存している情報量がきわめて少ないことを考慮し、判断材料がわずかでも多いほうが、正確な理解に近づけると思われたためである。軸1・軸2を対比しながら、両者共通の特徴、それぞれがもつ独自の特徴について記述することとしたい。

## 第4章 素材

### 1 絹地

#### (1) 画絹

**軸2の絹地** 軸2において観察される織物は、画絹とよばれる箒目のある平織の絹地である（PL.3 1）。織物が顔料層に貼りついたようにみえる遺存状態のよい部分を顕微鏡で観察すると、直交する経糸と緯糸を明確にとらえることができる。

うっすらと褐色を帯びた半透明の糸は、まっすぐで、ほとんど撚りがかかっている。そして、つるつるとした質感をみてとれる。以上のような特徴は、目視において素材を絹であると判断する根拠となることを正倉院事務所尾形充彦氏からご教示いただいた。

経糸は低倍率では2本1組に見える。しかし、高倍率では1本ごとに交互に上下し、緯糸と交差している様子を確認できる。この2本1組に見えるという経糸の間隔の粗密は、交互に上下する綜統に1本ずつ通された経糸が、経糸密度を一定にたもつ箒目の目に2本ずつ通されたことによって生じたものであり、画絹と呼ばれる日本画を描くための絹地基底材の組織の特徴である。

軸2における経糸密度は48本/cm前後である。緯糸には複数の繊維が通っているような筋が見えるが、繊維を合わせたものを1本として数えるならば、緯糸密度は50本/cm前後である。

**画絹** 画絹は平安時代から用いられた基底材である<sup>8)</sup>。制作に際しては、画面状態を整えるために、事前に染色し、にじみ止めの処理として膠水に明礬の水溶液を混合した礬水（どうさ）を塗布する。そして、絵を描くときには、絹目がゆがまないよう方形の木枠に糊でぴんと張って用いられる。

2本1組にみえるという2本の経糸の密な間隔は、経糸と緯糸の押さえ合う力をつよめ、1組の経糸と隣の1組の経糸との間につくりだされた透き間を崩れにくいものとしている。また、透き間がある、すなわち、透けるといふ特徴は、下絵を写し取ったり、木枠に張られた状態の画面裏側から彩色したりすることを可能としている。画面の裏から彩色する技法は、裏彩色（うらざいしき）とよばれ、表からみたときに、微妙な色合いを表現できる技法として、また、線描による表現に効果が得られる技法として発達した。

なお、絹絵の基底材としては、少数例ながら、画絹の特徴をもたない一般的な平織や綾織の絹地<sup>9)</sup>なども用いられた。これらは、絵が描かれている絹であっても画絹とは呼ばれない。

**黒い色調** 軸2の表面のうち、肉眼観察で薄墨色にとらえられる部分を顕微鏡で観察すると、顔料層の上に、黒味を帯びた糸が貼りついている様子を見ることができる（PL.4 1）。黒く見える糸の上には顔料がほとんど付着していないため、顔料層上面に貼りつくように遺存している経緯の流れをはっきりと追うことができる。

一部の糸のみが黒く見える要因は、不明であり、墨の浸透、あるいは繊維の劣化の度合いの差といったことが推測されるが、複数の要因が複合している可能性も想定される。なお、糸が黒く見える部分は、軸木表面に近い、顔料層に半ば覆われ見え隠れしている部分にも認められる（PL.4 3）。

## (2) 平絹

**軸1の絹地** 軸1に付着している織物の遺存範囲は、軸2と比べきわめて小さく、組織を確認できる部分は限られるが、顕微鏡観察により、平織と判断できる部位を見出すことができた。また、糸には、ほとんど撚りが認められず、繊維の毛羽がみられないことから、繊維の種類について、軸2と同様に、絹と判断された。

すなわち、軸1において観察される織物は、平絹ともよばれる一般的な平織の絹地である<sup>10)</sup>(PL3 4・5)。

顔料層に埋もれるように固定されている経糸と緯糸の交差の仕方には、歪みを生じている部分もあり、軸2の画絹にくらべると均整ではない。また、遺存範囲が小さく分断されていることから、糸密度をとらえにくいのが、平均的と思われる糸密度の数値を復元的に示すならば、経糸密度は40本/cm前後、緯糸密度は60本/cm前後となる。遺存部分の繊維の色調は、暗褐色～黒褐色に近い。繊維の色調の要因は不明である。

**黒い付着物** 白い顔料に半ば埋もれている平絹のうえに、黒い付着物がある(PL3 6)。一見したところでは織物に見えないが、顕微鏡で拡大すると、繊維が縦横に交差している様子をとらえることができる。明確な組織は拾えないが、状況から、織物がしわが寄ったように付着している部分と理解することができる。画絹に比べて、経糸と緯糸の押さえ合う力が強くないと理解できる平織の場合、外部からの少しの力で糸が寄せられ、経糸と横糸が均整な状態ではりっと広がったまま面を維持できない可能性があると思定するのは容易である。

さらに、同じ軸木に巻かれた絹地のなかで、面が均整なまま遺存している部分と、しわが寄ってしまった部分の違いは何によってもたらされたのか、という点に思いを巡らせると、顔料にパックされて経緯が固定されている部分と、顔料にパックされていない部分の違いであると解釈できる。

すなわち、一見黒い付着物とみえ、顕微鏡観察によってしわが寄った織物であると理解可能な部分は、画面のなかで顔料が塗り込められていない背景の部分であると推測できる。

**絹地の痕跡** 組織は不明瞭ながら、繊維が交差しているという特徴を確認できた黒い付着物について、顔料が塗り込められていない絹地の痕跡であると把握することができた。このことを出発点として、軸1の他の部分をあらためて観察すると、軸木に貼りつくように遺存している黒い付着物の多くに一定の方向性を見出すことができる(PL4 7)。明らかに繊維ではない微粒子が積み重なった墨とみられる部分(PL4 2)と比較すると、その特徴をより明確にとらえることができる。

**絹絵の痕跡** 顔料が付着している部分を顕微鏡で観察すると、ところどころに細長くのびる黒いものがあることに気づく(PL4 5)。顔料層の縁から突出している黒い部分だけを見ても織物には見えない。しかし、視野を広めにとって、顔料粒子の集まりに見え隠れし、点々と付着している黒い部分を追っていくと、断続的に遺存している繊維の一部と判断することができる。したがってこのように見える黒い部分は、顔料が塗り籠められた絹地の一部である。

黒い付着物について、このような視点でとらえなおすと、軸1の絹絵の遺存範囲が、当初見えていたよ

りもずっと広がってくる。

なお、軸1で確認されたこの絹地の見え方は、軸2の画絹が不明瞭な部分においても確認することができる(PL.4 4)。

ところで、軸1の軸木表面には、赤色の直線部分以外にも、赤い顔料が直接付着しているように見える部分があり、その部分を斜めから見ると、黒いものが挟まっていると観察される(PL.4 6)。この黒いものについても、不明瞭ながら絹地の痕跡と推定する余地がある。ただし、絹地であった場合、軸木に密着している赤い顔料の位置づけがより困難なものとなる。未解明の課題である。

## 2 顔料

思井堀ノ内遺跡の中世墓から出土した2本の軸の表面において、現時点で観察される顔料の色は、白、赤と緑である。また、顔料か埋土の付着か明確にできなかったが、黄とみえる部位がある。本出土事例において、顔料は絹絵の彩色表現のほか、軸木装飾にも用いられている。なお、顔料以外に墨描きの痕跡と見える黒色部分がある。

顔料については、成瀬正和氏によりX線分析調査が実施され、当時の絵画等に用いられた正統な顔料であることが報告されている(本報告293頁)が、本項では、基礎的な観察記録として、肉眼あるいは顕微鏡を用いてとらえられた色調の違いを整理する。

表面的な色見え方に注目すると、白、赤、緑の各色は、さらに白4種、赤4種、緑2種以上に分けてとらえることができる。この細分は、色相・明度・彩度の見え方の差、および、顕微鏡下でとらえられた顔料粒子の見え方の差を指標とした区分である。いうまでもなく、色は観察時の光の環境によって微妙に変化してしまうため、掲載した画像の再現性も含め、相対的な色調の違いを示す区分である。

### (1) 白

**白1** 軸1・分析5部分 明確な白である。顕微鏡で観察すると、白く角張った、透明度が高くない粒子の集まりとして観察される(PL.5 1～3)。粒子は形、大きさともにはばらつきが大きい、赤1(PL.5 9)と比較すると、粒子がとても粗い。軸1の南面～天面にかけて、一定の面的まとまりをもって遺存している(PL.1 4)。

**白2** 白といっても、ごくうすく黄～橙みをおび、やや灰みがかっている(PL.5 4)。くすんでいるためあまり目立たない。顕微鏡で観察すると、**白1**よりも粒子が小さい。軸1の地面～南面に平絹をパックするように斑状に遺存している(PL.1 3、PL.3 4～6)。

**白3** 白といっても、ごくうすく橙みをおび、やや灰みがかっている(PL.5 5)。顕微鏡で観察すると、ねっとりしたような質感に見えることを特徴とし、**白2**よりも粒子がめだたない。軸2に裏彩色として用いられている色で、広く面的に観察することができる(PL.1 8、PL.3 1～3)。

**白4** 一定の広がりをもって付着遺存している部分を肉眼でみた場合、銀色にも見える白である(PL.1 7、PL.5 6)。点々と散っている部分はきらきらと光っている(PL.4 1、PL.5 7・8)。軸2表

面の広範囲に遺存しているもので、顕微鏡で観察すると、虹色に光を反射する板状品が、うすく刷かれたように広がっている。虹色に光を反射する板状品の平面形や大きさには、全く規格がみられない。面が光を反射しない角度にある場合、個々の板状品の透明度は高く、板状品の下に半ばもぐっている顔料粒子の輪郭がぼやけながらも透けてみえる（PL.5 7・8）。

白4を構成する板状品の透明度の高さは、顕微鏡観察でまず目に入る色合いが、白4本来の色調ではないことを示している。すなわち、白4直下に広がる白3との重なりによる色調が、表面観察でまず目に入るのである。

さらに注意されるのは、本出土絹絵が軸に巻き納められた状態にあり、絹絵を画面の裏側から見ているという点である。したがって、白4直下に広がる白3との重なりによる色調は、画面に賦彩された色ではない。

白4について、画面を表からみた場合にどのように見えるかを何う手掛かりは、顔料の重なりを上下逆転してとらえることで得られる。そのような視点に立つと、面積的には小さいが、白4の上に緑の粒子がのった状態で観察される部分、あるいは画絹が被っている部分を確認できる。この観察結果から、現在確認できる部分についていえば、画面を表からみた場合に、緑の彩色の上に、あるいは画絹に直接刷かれたものが白4であると理解される。

したがって、白4は、実際の見え方としては白ではなく、きらきらと光をはなってみえるような効果を与えるために、背景および彩色部分に重ね塗りされたものと思われる。

## （2）赤

赤1 鮮明な赤である（PL.5 9）。顕微鏡の倍率をあげていくと、均質でこまかな粒子が積み上げられたような状況をとらえることができる。粒子の均質さと細かさは、同倍率の白1や緑1の粒子と比較したときより明確になる。軸1天面中央部分、および軸2の軸木両端部に面的広がり厚みをもって顕著に付着している。さらに、小面積、あるいはうっすらと遺存している範囲（PL.3 4）を含めれば、軸1のほぼ全面といってよい範囲に斑状に付着している。現状では点々という遺存状態であるが、線描のなごりを留めているように見受けられる部分もある。軸2の絹絵部分にもわずかながら付着し、赤と金箔が重ねられた状況を確認できる（PL.5 12）。

赤2 赤1よりも黄みがつよく、やや暗くにおい赤である。赤褐色ということばで表わすことができる色調であり、軸1の地面に引かれている赤い直線の色である（PL.2 7）。顕微鏡観察で、直線部分の赤2の上に、赤1が覆い被さるように付着している部分（PL.5 10）をみいだすことができ、ふたつの赤の違いを直接確認できる。赤2は赤1よりもきめ細かく見える。

赤3 赤1よりも黄みがつよい。赤2よりも明るく鮮やかな赤である。軸1西端部から剥離した漆膜上の赤い線の色で（PL.3 9、PL.5 11）、顕微鏡で観察すると赤い粒子が厚く積み重なっている様子を見てとれる。しかし、注意深く観察すると、厚みにはばらつきがあり、ごく薄く付着している部分の色は、厚く付着している部分よりも暗くにおい。顔料の厚みの違いが、見た目の赤の鮮やかさに影響を及ぼしているのとらえてよいならば、赤2とおなじ赤の見え方の違いである可能性がある。

**赤4** 赤みを帯びた中間色である (PL.5 13)。確認できるのは小面積であるが、白のバリエーションと比較すると赤みの特徴をとらえることができる。軸1の南面に遺存している。

### (3) 緑

**緑1** 鮮やかな明るい緑である (PL.5 14)。粒子の大きさと形は不均一であるが、全体的に白に比べてこまかく、粒の輪郭をはっきりとらえることができる。また、粒子によって緑の鮮やかさと明るさにばらつきがある。軸2において、斑状ではあるが広く遺存しているほか、軸1においても一定のまとまりをもって用いられている部分がある (PL.1 4)。

**緑2** 白みを帯びた明るい緑である (PL.1 6右、PL.5 15)。**緑1**に比べると粒子が明瞭でない。緑を帯びた粉のようにもみえる粒子の集まりのなかに、やや大きめの緑の粒子と白および黄みの粒子が混在しているといった状況である。軸2に認められる。

**緑・緑の粒子** 軸2は、肉眼でみたとき、全体的に緑の印象を受ける遺物である。顕微鏡で軸表面を観察すると、絹絵遺存部の最上層に緑の粒子が散在している様子を各所で見るができる (PL.4 3)。この疎らに付着している緑の粒子については、顔料層の厚みを減じながらもかろうじて遺存している**緑1**の一部である可能性がある。しかし、明確に位置づけをおこなう根拠がないことから、典型的な状態を示している**緑1**・**緑2**の部分以外は、緑・緑の粒子として記述する。

### (4) 黄か

黄みのつよい褐色である。軸1の南面、顔料層・絹絵層が比較的良好に遺存している部位周辺に、複数ブロックを抽出できる (PL.4 7、PL.5 17・18)。色調は、いわゆるローム土の色であり、地中に埋没していた環境に由来する付着物なのか、絵具としてとらえてよいものか、検討を要する部分である。

しかし、黄みのつよい褐色の細かい粒子に、黒くみえる平絹がなかば埋もれるように密着している部分があり、また、平絹の下方に、黄が面として張り付いているように見える部分がある (PL.5 17)。さらに、この黄が密着した平絹の層の上に、白い顔料がのっている部分がある (PL.5 18)。

以上の諸点から、絵具の可能性を捨てきれないと判断し、微粒子を集積させるような地中における水の動きなどを考慮すべきかもしれないが、報告の対象とした。

## 3 墨

**黒い付着物** 軸表面の様々な部位において、黒みをおびた色調が観察される。顕微鏡で観察すると、部位によって質感や構造に差異があり、煤あるいは墨に由来するとみえる黒以外に、動植物繊維由来ととらえられるの黒色部分がある。

黒色にみえる部位のうち、動物繊維に由来するのは、先に確認したように、絹地の一部で、拡大すると交差する繊維を立体的にとらえることができる。一方、植物繊維に由来する黒としては、根の攪乱という出土品特有の要素がある。出土軸の表面には、不規則な溝状に広がりをもつ、いわゆる炭化物ととらえられる漆黒の部位があるが、大半は抜け殻のようになっていて、正体不明瞭である。拡大すると、一部に溝



に沿った膜のような繊維が遺存している部分があることから、根の攪乱の痕と判断した。

**繊維も粒子も見えない黒** 顕微鏡で拡大していても、繊維をまったく確認できず、また、顔料のような粒子をも、とらえることができない黒の集積部分がある。このような黒く見える部分について、煤に由来する黒と判断した。

煤に由来すると理解できる粒子の見えない黒色部分については、筆を用いて描いた墨痕の可能性、および油煙の付着による汚れの可能性を考慮することができる。ただし、油煙の汚れとして、積極的に抽出できる部位は見いだせなかった。なお、軸1漆膜剥離部の木胎表面と、剥離した漆膜の裏面(PL.3 7)に観察される黒い付着物の由来については、全く検討が及ばなかった。

**墨線** 最も明確な墨痕は、軸1の軸端装飾に認められる黒色の線で、現状では軸木から剥離して広がってしまった漆膜上に、赤色の線と平行して引かれている(PL.2 5)。この墨線部分を顕微鏡で拡大しても、顔料の観察時にみられたような粒子はとらえられない(PL.3 8)。

一方、絹地に描かれた墨線の痕跡とみられる部位も、小面積ながら、軸2において確認されている。遺存範囲はきわめて短かつ狭いが、筆の運びに応じた輪郭が認められ、面としてのまとまりを見いだせることから、表現描写にもちいられた墨痕の一部と判断した。顕微鏡で確認すると、緑と接している黒い部分が、他の顔料層と重なりをもちつつ広がっており(PL.1 6、PL.5 16)、この点においても、顔料と同じように画面に付された墨と理解することができる。この部分を拡大しても、ほとんど粒子をとらえることができない(PL.4 2)。

#### 4 金箔

肉眼観察あるいはルーペによる観察で、じゅうぶんに金箔ととらえることができる部位が、軸1・軸2双方の表面に遺存している。

軸1には、肉眼でも金箔と確認できる部位が数か所にあり(PL.1 5)、これらは小さな面としてとらえられる。また、軸1の他の部位を顕微鏡で観察すると、肉眼では金の存在に気付かない範囲にも、細かく破碎されたような金箔片の分布を確認できる部位がある。

軸2の金箔は、地面～北面の中央付近に顕著にみられる。ルーペを用いると、線状に伸びている様子をはっきりととらえることができる(PL.1 2・8)。また、軸2の他の部位を顕微鏡で観察すると、他の部分にも点々と光を反射する金箔の存在を確認できる(PL.3 1～3)。これらは、一見、こまかな金箔片が散らされているように見えるが、重なりを構造を意識して観察すると、遺存している絹絵層の破断面から、顔料層に挟み込まれた線状の金箔の小口が顔をのぞかせている状況とわかる。40倍に拡大した画像(PL.1 8中段)上で帯状に見える金箔の幅を測ると8mm～10mm程である。つまり、軸2の線状の金箔の幅は、0.2mm前後である。

以上のように観察される金箔について、絹絵に装飾を付加する技法としてとらえるならば、軸1は截箔、軸2は截金である。

**截金** 截金とは、彫刻あるいは絵画の表面に、細い線状に截った金や銀の箔を、1本ずつ貼りつけて文

様を表現する技法をいう。直線または曲線に貼りつける際には、布海苔や膠液が接着剤として用いられる。それに対し、線状ではなく、菱形・三角形・四角形などの面をもつ形に箔を截り、これを用いて文様を表現したものを截箔という。なお、面状の箔に文様を截り透かしたものは裁文と呼ばれる。截金・截箔・裁文を、組み合わせて文様を表現することもあり、総称として、截金という用語がもちいられることもしばしばある（有賀1997）。

截金に関して、現行の技術の確認という視点から概要を整理しておきたい。素材となる箔は、金や銀を1/10000mm（0.1ミクロン）という薄さまで叩き延ばしてつくられたものであるが、截金では、それを数枚焼き合わせて（箔焼き）粘りをもたせたもの（合わせ箔）が用いられる。はじめから厚めに箔を作ったのでは細かい表現ができないという。やや黒ずんだ銀の截金に見えても、延長線上で金色に変化してしまうならば、表面は金箔だが、内部に銀を多く含む箔を挿み焼き合わせられた構造をもつ截金で、その最上層が一部剥落したものである可能性が考えられる。なお、合わせ箔であっても他の支えがなければそれ自体では形状を維持することはできない。現在行われている金箔製造では、純金では腰がなくなるため、銀や銅を少量混ぜ、その含有比率によって種類が作り分けられている。一辺長が約10.9cm（3寸6分角）の金箔から500～600本截り分けるという現行の例では、1本の線の幅は0.2mmほどになる（江里1997、芸大2007）。

## 第5章 素材の重なり・絹絵の重なり

### 1 絹絵の構造

**出土した絹絵** 絹絵であるといわれて見ても、本出土資料を肉眼観察で絹絵と認めることは相当に難しい。しかし、すこし見方を変えるならば、700年余という長い時間、台地上の地中であって直接土に埋もれ、雨水や根に侵される環境にあったにもかかわらず、顕微鏡の力を借りれば、明確に絹絵であるとわかるほどに形を留め、ここに存在している、ということもできる。

ひとたび開眼された仏像が、けっして金銅製品あるいは木製品などとよばれることがないように、絵は二次元に展開する単なる物質ではない。そのことを心に留めたうえで、本出土絵画資料の観察にあたっては、その遺存状態にしたがい、絵であることをいったん封じこめて、さまざまな素材から作り出された「もの」として向き合うこととしたい。

掛幅装絹本着色画という資料名が与えられた出土品には、制作当初のすがたに関わる情報がどのような形で残されていて、それはどのような形で観察される可能性があるのだろうか。

**絹絵観察の視点** 掛幅装絹本着色画は、掛幅という表具の形に仕立てられた、絹地という平面に描かれた絵画である。懸吊された画面は、仏像のような立体造形と対比するまでもなく、あくまでも面という広がりの中に展開する。

しかし、絵画の制作工程にさかのぼり、具体的に絵画という形を維持しているひとつひとつの素材に焦点をあてるならば、薄い絹地に描かれた絵画であっても、三次元の空間的広がりをもつ物体として、とらえることができる。

そこで、一枚の絹絵の断面構造をみるという視点から、伝世した絹本着色という品質の古代・中世の絵画の構成要素について、基礎事項を確認することとした。伝世作品の構造を指標とすることによって、出土品に残されている可能性がある情報を見落とさないようにするためである。

基礎事項の確認に際しては、観察される可能性がある要素を一点に凝集した模式図を作成した（第6図）。素材の選択と組み合わせは、その絵画が制作された目的と用途、そして、制作と流通の背景にある

			観察される可能性がある素材
装飾	描画	截金・截箔〔荘厳〕	金箔・銀箔
		線描〔輪郭線（描き起こし線）〕	顔料 墨
		暈し〔立体画法〕	顔料
		彩色	顔料 金泥・銀泥
		線描〔輪郭線（下描き線）〕	墨
基底材			画絹 / 平絹
	描画	裏彩色 / 裏箔	顔料 / 金箔
裏打ち			紙

第6図 絹絵の断面構造模式図

経済的基盤によって様ではないが、模式図は、本格的な仏画を例として、基底材である絹地（画絹・平絹）と裏打ち紙、そして絵画表現を構成する素材（顔料・墨・金銀）を描画・装飾の技法ごとに「層」としてパターン化し、図示した。

いうまでもなく、素材と技法は、一つの画面内に様々にちりばめられ、組み合わせられて絵画表現を構成する。したがって、実際に顕微鏡で観察される情報は、視野がごくわずか移動するだけで、全く異なった様相となる。そして、絵画表現の背景となる地の部分が無彩色であれば、その部分については、基底材が絹絵断面の最上層となる。

なお、模式図中に記載していないが、顔料や金銀を固着させている膠、裏打ちを密着させている糊、基底材の滲み止めや箔押し接着剤として塗布される礬水（明礬と膠）、場合によっては染料、媒染材、布海苔などが、絹絵の厚みの中に存在している。肉眼観察、あるいは通常の顕微鏡観察では、意識しても視覚的にとらえることが難しい素材によって、絹絵は形を保持している。

## 2 観察されない紙の繊維

**裏打ち紙** 薄い絹地や紙に描かれた絵画は、画面の裏側に紙を貼り合わせ、厚みを増して補強される。この補強技術「裏打ち」は、一枚の画面に対して複数層施される場合が多いが、そのうち直接画面の裏に紙を貼りあわせる作業を「肌裏打ち」と呼び、貼る紙を「肌裏紙」という。

今日伝世している薄い絹地や紙に描かれた絵画は、肌裏打ちを経たのち、掛幅や卷子（軸装）あるいは屏風や障子（幀装）といった表具に仕立てられ、鑑賞や収納、移動、保管に堪えうる形と強度が与えられ、作品として存在している。

したがって、表具の形にかかわらず、絵師のもとを離れて流通した絹絵の構成要素には、少なくとも、肌裏打ちに用いられた紙が加わっているはずである。そして、本出土品が軸木に巻き納められている状態にあるならば、重なっている1枚1枚の絹絵の間を明確に分離する層として、裏打ち紙の層が挟まっているはずである。

**楮紙** 伝統的に、裏打ちには楮紙が用いられている。楮紙は、軟らかくなるまで煮込まれた楮の韌皮繊維を主原料とする紙で、不純物をていねいに取り除き、強靱な繊維を丹念に叩きほぐして漉かれている。そのため、長い繊維が絡められていて、透き通るほどうすくても丈夫である。

このような特性をもつ楮紙は、乾燥工程における圧縮の違いにより、あるいは、主原料以外に細かく砕いた胡粉・白土などの混ぜものを加えるか否かによって、性状を異にする製品となる。そして、裏打ちに際して、各裏打ち層の目的にもっとも適した厚みと種類が選択される（岡2002、西川・増田1997）。なお、今日の完成した表具技術では、裏打ちは3層から4層重ねられており、補強という目的にくわえて、各層に固有の腰の強さや仕上がりの厚みの調整といった役割がある。

**紙の繊維** 本出土資料に紙の繊維が遺存しているとすれば、どのように見えるのかを把握するため、現在裏打ちに用いられている楮紙3種類（美濃紙・美栖紙・宇陀紙）を顕微鏡で観察し、その画像を基準資料とした。

また、本資料とともに副葬されていた化粧道具類中に遺存していた紙残欠および帖紙残欠の顕微鏡画像

も比較資料とした（PL.6 14・15、PL.7 4・6・20）。いずれも、掛幅装絹本著色画から南東へ20cm～30cmほど離れた地点に納められていたもので、蓬莱鏡の周辺に遺存していた小片である。紙残欠の状態の良い部分は、今日なお弾力を残している。

上記のような基準資料および比較資料を指標として、軸1・軸2の全面を顕微鏡で観察し（画像索引1～7）、絹絵にともなう紙の層を見出すべく観察を進めた。本資料に裏打ち紙が観察されるとするならば、軸木と絹地、あるいは、絹地と絹地に挟まれた部分であり、そのあるべき位置は絞られる。しかし、素材の重なり、絹地の重なりの中に、紙の繊維を見出せなかった。

**表装裂の有無** 紙の繊維の探索と同時に、表装裂の痕跡の有無についても注意深く観察した。しかし、基底材以外の絹地は全く確認できなかった。このことから、本出土掛幅について、少なくとも軸上に表装裂は用いられていないと明示できる。表具の用語で「下」あるいは「地」と呼ばれる部分（第2図参照）に表装裂を用いていないとき、他の部分、たとえば「上」「天」、および「柱」と表具の用語で呼称される部位のみに表装裂を用いていたとは考えがたい。したがって本出土掛幅は、表装裂を備えていなかったと結論づけられる。

**紙と絹** 裏打ち紙が見つからない、という観察結果について、紙の繊維の遺存状態が関係しているのか、それとも、元来存在していないのかを確認することが、新たな課題となった。

この課題については、正倉院事務所成瀬正和氏から、一般に、おなじ環境下におかれていた紙と絹の繊維を比較するならば、紙よりも絹のほうが傷みやすい傾向にあることをご教示いただいた。さらに、このような紙と絹の遺存度にかかわる傾向は、軸と同じ土壌内に副葬されていた銅鏡と木製台座底面に挟まれて遺存していた紙と絹製染織品残欠2種の遺存状態の違いにおいても明確に認められた（第Ⅱ部第2章2～4参照）。厳密に言えば銅鏡に接していたのは紙であり、絹製品残欠は銅鏡に直接密着していなかったという違いを考慮すべきではあるが、両者の遺存状態は著しく異なっている。

**至近の環境** 有機質素材から形作られているものは、腐朽菌の活動により分解され消滅する（高妻2002）。ただし、腐朽菌の活動が抑制される環境においては、分解速度が緩慢となり、長い時間の流れの中で、劣化しつつも形を留めることができる。

軸木と絹地が、700年間土中に遺存していたこと自体、腐朽菌の活動が抑制された環境にあったことを示しているが、そのような埋没環境において、紙のみが全く遺存できないという別の要因があった可能性はないのか、という視点から、至近の環境を整理しなおすこととした。こまかく見直していくと、絹地と紙が直接何に触れていたかという点に、違いがあったことがわかる。

まずあげられるのは、糊の影響である。現行の表具技術を参考にするならば、裏打ち紙の片面には糊が全面に塗られている。しかし、仮に、糊が紙の遺存状態に影響しているとしても、量的な差はあるかもしれないが、その糊は同時に絹絵にも付着する。

そしてもう一点は、裏打ち紙には顔料が塗られていないことである。ただし、顔料は紙に直接塗られていないにせよ、軸2であれば糊の層を挟んであるものの裏彩色の層が接していたはずである。また、巻き納められていることから、裏打ち紙の外側には、外側に巻かれた絹絵層の顔料が密着していたはずであ

る。

木棺の腐朽によって、棺内空間に埋土が流入し、軸には土圧がかかっていた。その結果、さまざまな素材は相互に密着した状態で出土した。この密着状態から見て、巻き納められた絹絵層の素材の層ごとに、埋没環境に顕著な差があったとは考えにくい。つまり、木胎と絹地が遺存している軸1・軸2において、間に挟まっている紙のみが菌類に分解されてしまう環境にあったととらえることは難しい。したがって、軸1・軸2に裏打ち紙は元来存在していないと結論づけられる。

軸木に巻き納められた、表装裂も、裏打ちも施されていない絹絵という姿が、本資料のかたちである。

**内表に巻き納められた軸** 薄くて長さのある面状のものは、丸棒を芯にして巻き納めることによって、折り目をつけることなく、移動や保管に便利な安定した状態を保持することが可能となる。そして、表現が付加された面を内側に向けて巻き納めることで、移動時あるいは保管時に、擦れたり、光や外気に触れたりして、画面が劣化することを遅らせることができる。なお、本資料には施されていないが、表装裂も画面を保護する役割を果たす。とりわけ、画面の左右に「柱」と呼称されている表装裂が付加されている場合（第2図1・2）、内表で巻き納めると、柱部分の厚みがつくる空間によって巻き納められた画面同士の間隔が軽減される。

本出土品についても、描かれた面を内側にして巻き納められた状態が想定され、のちに詳述するように、観察の過程で確認することができた。したがって、本資料を俯瞰するように観察するということは、幾層にも重ねられた状態にある絹絵を裏面から見ることになる。

今日観察できる情報は、消滅を免れ、たまたま最外面にでている部分である。顕微鏡を用いた観察でとらえることができる情報は画面のごく一部であり、しかも裏から見ているという視点をつねに意識する必要がある。

**観察の視野** 同じ絵画をみても、一度に目に入る範囲が狭くなれば、視野の移動による情報の変化は大きくなる。また、表現描写が細密であるほど、筆の線一本分観察ポイントがずれることで、視野に入る情報は全く異なった様相となる。

平面情報のみならず、断面情報についても同じことが言える。絵画あるいは文字のような「付加された表現」を読み取るための観察が、一定の質が面的にひろがる基底材の観察、あるいは個々の素材の観察から区別される要点はここにある。

したがって、顕微鏡を用いた観察記録において、一枚の画像から読みとれる顔料や金箔の重なり情報は、その観察ポイント固有の情報であり、顕微鏡観察の倍率をあげるほど、視野のわずかなずれによって、とらえられる画像の状況は千差万別となる。そのような、一つの視野から読み取れる情報の固有性を十分に意識したうえで、複数の視野、複数の画像を比較検討し、全体を見通すならば、絹絵を構成する基本パターンを読みとることができる可能性がある。きわめて遺存状態の悪い出土した掛幅装絹本着色画の画面情報を引き出すためには、このような視点から、小さな視野ひとつひとつに潜むかろうじて遺存している情報と向き合うことが求められる。このような見方は、墨書・刻字、あるいは墨画等の表現描写が付加されていない出土資料の観察において、無意識のうちにおこなっていることを、意識しておこなうことといえるかもしれない。

### 3 層の抽出

顕微鏡画像の解説という形をとり、具体的な観察結果を記述する。顕微鏡画像は、横方向が軸の東西方向（左辺が西）、縦方向が軸の曲面（上辺が北）である。掲載倍率などの撮影データは表5に一括して掲載した。

なお、表5の項目「画像索引」中の画像索引No.>撮影列>画像No.を、表6～表8「画像索引対照表」中に求め、つぎに、表6～表8中の画像No.位置に対応する画像を「画像索引1～7」に見るという手順を踏むと、拡大された画像の撮影ポイントが軸全体のどの部位であるかを確認することができる。

#### (1) 軸2の層の重なり（第7図左）

**画像解説①** (PL.1 2・8、 PL.3 1～3、 PL.5 5) 縦方向にほぼ平行に走る複数の線が、絹地の経糸である。2本1組にみえる経糸の間隔と、経糸と緯糸の交差の様子から、画絹であることがわかる。糸と糸の間は白い顔料**白3**で充填されている。糸の上にも**白3**が覆い被さっている (PL.1 8)。この**白3**の顔料層の広がりの上には、線状の金箔（拡大しているため帯状に見えるが幅は0.2mm前後）が、さらにその上に**緑1**の顔料粒子がのっている。視野を広げると、**白3**の顔料層の上に**緑**が広く分布している様子を観察できる。

**画像解説②** (PL.1 7、 PL.4 1、 PL.5 6～8) 透明度が高く、光を反射する**白4**が、**白3**の顔料層の上に密着している。この**白4**の上に、**緑**の粒子がのっている部分がある。

**画像解説③** (PL.1 2左上部分・6、 PL.5 16) **緑**と**墨**が接して見える。境界部分を拡大すると、**墨**の層の上に、**緑**の粒子が散っている様子を観察できる。**緑**の下、**墨**の層の中あるいは下に画絹の糸がもぐっているとみえるが、**墨**層と画絹層の上下はよくわからない。

**素材の重なり** 白い顔料層**白3**は裏彩色である。この裏彩色の面にのっている線状の金箔すなわち截金と**緑**の顔料粒子は、巻き込まれた状態で上層に重なっている画面からの転写である。**白3**が表面に塗られた下地層でないことは、截金と**緑**の顔料層の上下から把握できる。絹絵の重なりを理解するうえからも首肯される。**白3**と**白4**の重なりについても同様にとらえられる。

裏彩色の顔料層は、画面側の情報を被覆しているが、転写という形で、上層画面の情報を保持している。以上のような素材の重なりは、軸2の広い範囲に認められ、現状で観察される遺存部に関していえば、標準的な様相といえる。裏打ちの紙が存在しないことを確認できる。

**絹絵の重なり** 1枚の絹絵の単位が把握されたところで、**緑**の顔料に注目すると、**緑**の顔料がぎざぎざと蛇行しながらも、ほぼ一定の幅で観察される部分があることに気づく。そして**緑**を境に、その両側にひろがる画絹の経糸の流れがくいちがっていることを読み取れる (PL.3 3)。この表面情報は、**緑**部分が破断面であり、破断面を挟む形で、その両側に裏彩色の施された画絹の面が、上下2層分みえていることを示している。破断面に連なる**緑**の顔料は、上層の画絹にほどこされた表現描写のごく一部で、破断面の奥に面として広がるものと想定される。複数層の画絹、裏彩色および転写した顔料層や截金が、破断面をと

もない確認されているにもかかわらず、紙の繊維はまったく観察されないことを、あらためて確認できる。

素材の層、あるいは絹絵の層の重なりを念頭に観察をおこなった結果、最も厚みをもって絹絵が遺存している地面を中心とした部位において、少なくとも5層分の絹絵が巻かれている状況を確認できた。

なお、後述の軸1を含め、ほとんどの場合、最上層としたに絹絵の層は、粒子がまばらに散っている程度の遺存度である。層と表記するのはためられる部分も多いが、二次的な付着ではなく、元来、よりしつかりした顔料層であった上層からの転写の痕跡と理解されるものについては、層として扱った。

## (2) 軸1の層の重なり (第7図右)

**画像解説①** (PL.1 3、PL.3 4～6) 画像縦方向に走る黒く見える筋が、平絹とみえる織物の経糸である。糸と糸の間が白い顔料白2で充填されている。倍率を上げると、黒くみえる糸の上に糸に、白い顔料、あるいは赤い顔料が点々と付着している様子を観察できる部分もある。あまり黒くない繊維が見えるところもある。

**画像解説②** (PL.3 6下段、PL.4 5～7、PL.5 17・18) 軸木の上、あるいは顔料の塊の周囲に黒い付着物があり、交差する繊維の様相から、絹地の広がり把握できる。黒い繊維のみが集まり顔料層が観察されない部分 (PL.3 6下段) と、白、赤、黄色など、顔料粒子が面的に密着している部分とがある。

**画像解説③** (PL.1 4、PL.4 5) 黒く見える地を背景として、顔料が一定のまとまりをもって観察される部分がある。顔料が一定の範囲にまとまりをもって遺存している傾向をよみとれるのは、裏彩色が存在しないことによるものと理解される。

**素材の重なり** 軸1の絹絵は、軸2以上に素材の重なりをとらえにくい遺存状態にある。しかし、顔料層の中に絹地がもぐりこんでいる、あるいは絹地の下に顔料層が貼り付いていると見える部分が、広範囲に点々と確認される。また、一部に白と赤が重ねられていると観察される部分があるほか、金箔が顔料層に付加されている状況がわかる。

**絹絵の重なり** 最上層に点々と付着している顔料粒子は、すでに消失した絹地の表面に賦彩されていた顔料層の一部が、一層下の絹地裏面に転写したものと理解される。小さいながらも面として遺存している平絹の糸と糸の間を充填している顔料層と金箔層は、平絹の表面に描かれた彩色、あるいは彩色の上に付加された截箔ととらえられる。顔料層と軸木表面の間に挟まるように観察される黒い付着物は、組織を直接確認できる状況にないが、他の部分の観察情報を敷衍して、絹地ととらえる余地が十分にある。

絹地と捉えうる黒くみえる層を鍵として重なりを構造をおいけていくと、南面の顔料が厚く残って見える部位において、4層分の遺存を確認できる。したがって、軸1の絹絵について、遺存状態はきわめて悪いながらも、金箔および白、赤、緑の顔料、あるいは黄色い顔料をもちいた絹絵が軸木に巻かれた状態にあると判明する。

絹地が複数層重なっている状態を確認できているにもかかわらず、紙の繊維はまったく観察されない。



(注)

- ・観察ポイントごとに素材の重なりを柱状図として模式化し、絹絵の一単位と判断される層ごとに便宜的に番号を付した。
- ・軸1の柱状図①～③間の層の面的なつながりは、確認されていない。
- ・軸1柱状図①～③の平絹は、多くの部分では黒い付着物と観察されるものだが、遺存状態のよい部分で確認された繊維と組織を敷衍した。
- ・軸2柱状図①-1層のaとbの上下は不明瞭で逆転する余地を残す。また、2層aとした緑について、一部分を1層cとみる推測も可能である。
- ・軸2柱状図②-1層は、柱状図①-3層の上にとみられるが、4層の(欠落している裏彩色の)上である可能性が全くないかどうかについて厳密には未確定である。
- ・軸2柱状図②-2層bは、比較的厚みのあるもので裏彩色の可能性もある。また、2層aの下に顔料層が挟まれている可能性があるが不明瞭。

4	b	顔料 (緑)	2	b	顔料 (白)
	a	金箔		a	画絹
3	d	顔料 (白3)	1	b	画絹
	c	画絹		a	顔料 (白4)
	b	顔料 (緑)			
2	a	金箔			
	c	顔料 (白3)			
1	b	墨			
	a	画絹			
軸木			軸木		
(PL.1 2) 中央付近 柱状図①			(PL.1 2) 右上部分 柱状図②		
軸 2					

4	顔料 (緑)	3	b	平絹	3	顔料 (赤)	2	a	顔料 (白)	2	b	平絹	2	a	顔料 (白)	2	a	顔料 (白1)
			a	顔料 (白)														
2	c	平絹	b	顔料 (緑)	1	平絹		1	平絹									
	b	顔料 (緑)	a	金箔														
	a	金箔																
1	平絹																	
軸木			軸木			軸木			軸木									
(PL.1 4) 中央付近 柱状図①			(PL.1 4) 中央付近上部 柱状図②			(PL.1 4) 中央上辺付近 柱状図③												
軸 1																		

第7図 観察された素材の重なり

## 第6章 軸木と絹絵の接点

### 1 形の痕跡

**画面の大きさ** 画面の基底材である絹地について、明確に左右の端部と判断できる部位を見出せなかった。そのため、正確な画面幅は不明である。しかし、軸端部分にも絹絵の痕跡がある（PL.2 6、PL.4 4）ことから、軸木長とほぼ同じ画面幅<sup>11)</sup>、すなわち、軸1・軸2ともに、21cm～23cm前後というおよその画面幅を想定することができる。

画面長については、軸の直径から円周を求め、確認できた絹絵層の数をかけることで、およその最小値を求めることができる。軸1には4層分、軸2には総合すると5層分の絹絵層が遺存しているため（第7図）、軸1・軸2ともに、23cm前後の画面長を最小復元値として提示できる。ただし、最小値とはいえ、巻き始めの位置が不明であるため、それぞれ1周弱分（5cm前後）を限度とする長めの数字が出ている可能性がある。

**内表・外表** 現行の一般的な掛幅においては、本紙と呼ばれる画面の上下あるいは四周に表装裂がめぐらされ、その下端部に軸木が取り付けられている（第2図1・2）。軸を懸け広げたときの見え方、すなわち、軸装全体の調和をはかるため、軸木表面のうち、懸吊時に表面に出る半周分は表装裂で覆われる。表装裂を用いないかわりに、当該部分を本紙と同じ基底材に描いて表現する「描表具」と呼ばれる形式においても、描かれた表具の下端部が懸吊時に表側となる軸木部分を覆い隠す。すなわち、軸木は、表具の用語で「下」あるいは「地」と呼称される部位の下端裏面に糊付けされている。

したがって、表具裂の有無を問わず、画面を内向きに巻き納めた状態にある軸において、軸木との接着部のみは外表となるのが基本の形である。

**軸木と絹絵の接点** 思井堀ノ内遺跡から出土した掛幅装絹本著色画において、確実に存在するのは、軸木と絹本著色画本紙のみである。裏打ち紙、および、表装裂と判断される染織品は、まったく確認されていない。したがって、描表具の有無に関わらず、軸木と本紙の接着部分において、絹絵が外表となって貼りついている可能性がある。

そこで、内表に巻き納められた絹絵が、下端部で外表となる折り返された部分が遺存しているのではないかという視点から、観察を行った。軸木に接着していた部分が無地である可能性も念頭に入れて探索したが、絹地の遺存範囲内に、折り返しの痕跡を見出すことはできなかった。

**描かれた輪郭線と付加された金箔** 巻き納められた軸装の構造確認に重点を置いて観察を進める一方、描かれている主題に関わる手がかりが潜んでいないかという視点も失わないよう心掛けた。しかし、現時点で表に出ている顔料層が遺存する部分において、画面に表現された具体的なモチーフを抽出することはできなかった。

とはいえ、筆で描かれた墨線の一部（PL.1 6）を軸2において見いだすことができ、また、モチーフに関わる痕跡として、金箔による装飾の付加を軸1・軸2双方に確認することができた。

墨線の痕跡としてとらえられたのは、軸2の軸木直上に、黒い微粒子が集積し弧状の輪郭をもって遺存している部分である。この黒色範囲の上には、緑の顔料粒子が疎らながらも面と把握できる状態で覆いかぶさっている(PL.5 16)。仮に、この部分が外表であれば、輪郭線と見える墨線は、下描きの線であるということになる。

軸1においては、描画痕跡を見いだせなかった。一定のまとまりをもって付着している顔料層部分に賦彩の輪郭の可能性を想定したが(PL.1 4)、筆で載せられた顔料層の周縁であると明確におさえられる部分を抽出できなかった。

金箔による装飾の付加は、肉眼観察でも容易に認めることができるほどに明確である。軸1においては、顔料による色づけとあわせて、截箔が用いられている(PL.1 4・5、PL.4 6)。顕微鏡を用いると、肉眼では認めることができない部位にも、細かな金箔が点々と貼りついている様子を確認できる。

軸2においては、細く切られた金箔の線が交差して面的に展開している(PL.1 2・8)。顕微鏡を用いれば、さらに破断面にも、幅狭の金箔が点々と挟まれている様子を確認できる(PL.3 1～3、PL.4 3・8)。したがって、軸2には、顔料層に重ねられた截金が、現在表面に出ている以上に広範囲に展開しているとわかる。

これらの金箔は、明確に光を反射する。軸木に巻き込まれ、土に埋められる以前にも、同様であったはずである。絹絵に貼付された金箔は、どのような光を受け止め、反射していたのであろうか。軒先から差し込む光、屋内に拡散する光、あるいは、屋内にゆらめく灯明だったのであろうか。

平安時代後期に全盛期を迎え、鎌倉時代においては金泥描とあわせ用いられることも多くあった金箔を画面に付加する手法－截金－は、光の表現として突出した装飾性を画面に付与する仏画の荘嚴技法である(泉1998a)。

**掛幅・時代・截金・場** 本出土資料において、描かれた主題を具体的に示すモチーフを抽出することはできなかった。しかしながら、中島博先生から賜った御教示をもとに本絵画資料の性格、および主題に関わる到達点を提示する。

本出土資料は、画絹、裏彩色、截金という要素を備えた本格的な絵画である。そして、簡略ながら掛幅という形式の表具をもつ。掛幅装絹本着色画と把握された本出土品の性格と主題に関して、鎌倉時代後期という墓の造営年代をあわせ考えるならば、花鳥画など観賞用の絵画の可能性を考えることはむずかしい。また墓という場を考えるならば、肖像画とみる以上に、仏画の可能性を十分に考えることができる。

## 2 共存する二軸の関係

**軸の員数** それぞれについて絹絵が複数層重なった状態で付着していた2本の軸木は、平行にならんで出土した。このような遺存状態にある軸の員数を二幅と見るか、一幅と見るかという、最も基本的な課題を保留したまま観察をすすめてきたが、現段階においても断定するに至っていない。

二幅と見る場合には、出土した2本の棒状品について、それぞれが掛幅を懸け広げたとき下端にくる軸木と理解する。一方、一幅とみる場合には、1本を軸木、1本については、掛幅を掛け広げたとき上端にくる八双と理解する。

以下に記すように、一幅の可能性は極めて低いととらえられるが、員数の二通りの解釈について、それ

ぞれの根拠と、各々の場合に想定される副葬状態を再整理しておきたい。

**二幅か** 根拠は、軸1・軸2それぞれの断面形状がほぼ円形を呈することにある。軸木は、掛け広げた掛幅の面を安定させる重石の役割を果たせる重みをもつことと合わせて、何よりも、本紙を巻き納めるときの芯棒となることから、画面を傷めないため丸棒であることが求められる。一方、画面の上方に取り付けられる八双には、掛幅を垂下し保持できる強度をもちながらも、巻き納めのおさまりの良さを備えた形、すなわち、円筒形をなす軸外形の曲面になじむ薄さをもつことが求められる。したがって、八双に丸棒という形はなじまない。この点において、2本の丸棒は、それぞれが別の掛幅の軸木であるとするのが自然である。

また、八双であれば備わっているはずの、懸吊機能を果たす掛緒の取り付け痕跡が、軸1・軸2のどちらにも見られないこと、くわえて、それぞれの軸木に付着遺存している絹地に違いが見られることも、二幅と解釈する要素として矛盾しない。なお、掛緒を含む八双周辺部分がすでに消滅したとみることに關しては、棺材が完全に消失している土中の環境からみて、全く無理がない。

二幅の絹絵が副葬されていた、とみてよいならば、日々の暮らしの中で身近な存在であったと思われる平絹に描かれた掛幅と、絵を描くために織られた特別な絹地である画絹に描かれた掛幅とが、一幅ずつ被葬者の枕元に並べ置かれていたということになる。

**一幅か** 端から端まで絹絵が付着遺存していた2本の軸木は、1cm前後のすきまを保ちながら平行する形で出土した。視点を退いて見るならば、2本の軸木の一方を八双とみて、一幅の軸が被葬者の枕元に納められたという想定も可能な出土状態といえる。このように想定した場合、画面の両端部分がそれぞれ何周分か丸棒に巻き取られた形で納められていたことになり、少し押し広げれば、画面の中ほどを見ることができるような状態で副葬されていたことになる。丸棒ゆえ八双ではないと言い切るのにためらいをいだかせるのは、両軸とも、今日の掛幅の形からは逸脱した要素をもっている点である。具体的には、軸端に漆塗りあるいは彩色による装飾の跡を留めるにもかかわらず、それらを覆い隠すように絹絵が付着している軸2の形、一端のみに漆塗の軸端装飾があった可能性がある軸1の形、および「切り合せ」という仕掛けが備わっているにもかかわらず、軸長と絹地の幅の調整されていない軸1の形を掲げることができる。なお、八双であれば伴っているはずの掛緒の取り付け痕跡が遺存していないことについては、今日の完成した表具の形にとらわれないのであれば、金具を使わないさまざまな工夫による懸吊の形を想定することによって、解釈の余地を残すことができる。

繰り返しの使用を前提とせず、継承を考慮する必然性のない簡略な掛幅の姿を思い描くならば、変様を考慮する余地は十分にあり、一幅であった可能性を完全には消去しきれない。とはいえ、一幅とみる場合、絹地が軸1・軸2で異なっていることを説明するのが困難であり、やはり、その可能性はきわめて低いといえよう。

## 第7章 裏打ちのない絹絵

### 1 絹絵の出土事例

思井堀ノ内遺跡の発掘調査によって、鎌倉時代後期、在地領主の館が営まれていた台地の縁辺に、周溝をめぐらせた方形の墓域を占有する墓が築かれており、そこに一人の女性が埋葬されていたこと、その被葬者は、土壙内木棺直葬という主体部に、北枕西向きの姿勢で埋葬されており、足元には青磁碗・皿が、後頭部付近には化粧道具類が、そして、枕元には、掛幅装絹本著色画が副葬されていたことが明らかとなった。そして、この掛幅装絹本著色画について、明確に主題を示すモチーフを見いだすことはできないが、仏画の可能性を十分に考えることができる要素を保持していることを確認した。

以上のような遺跡・遺構・一括遺物にかかわる情報をもつ出土絵画資料は、どのような性格をもつ遺物なのであろうか。なぜ、掛幅装絹本著色画は、伝世されることなく、墓に副葬されたのであろうか。そのような課題に向き合うための基礎作業として、絹絵の出土事例を探索した。

とはいえ、日本国内において掛幅装絹本著色画が出土したという報告は、これまでのところ、ほかに例を見出せていない。そこで、先覚から賜ったご教示を礎として、品質形状、遺跡・遺構の性格、地域や時代について広めに関わりを求め、(1) 中尊寺金色堂清衡棺内遺存絹本墨画像、(2) 大陸東部の遺跡から出土した絹絵類の二項を柱とし、(3) 内陸アジア乾燥地帯から出土した絹絵類、(4) 中国古代の帛画にもふれるかたちで、絹絵の出土事例を概観する。

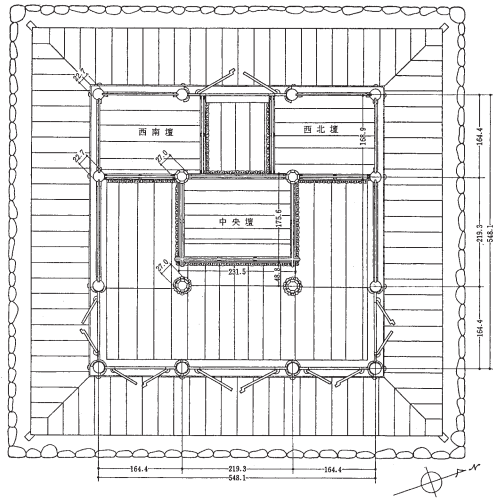
対象資料の広がりを示すならば、品質形状については、掛幅以外の形状および絹本墨画を含み、一部紙本・麻本にもふれる部分がある。遺跡・遺構の性格という点では、葬堂を含み、塔など寺院関連遺跡からの出土品にもふれる。また、中世の日本を基軸に据えた比較の場の設定において、気候風土や墓が営まれた時代背景の隔たりがきわめて大きい事例についても、「絹本」という点で、中国を中心とした絹の文化圏を視座にすえるという意味から概略を確認することとした。

各事例について、背景をふくめた理解の不足をおそれるものであり、もとより網羅には及ばないが、時間の移ろいのなかで、どのような空間にどのような性格の絹絵が在り続けたのかという視点から、各項末に掲出した参考文献からの引用あるいは要約をもって、絹絵の出土事例を整理する。この作業を通じて、諸事例と思井堀ノ内遺跡出土掛幅装絹本着色画のあいだにある共通性あるいは差異を具体的に確認していきたい。

#### (1) 中尊寺金色堂清衡棺内遺存絹本墨画像

・絹本墨画像残欠（重要文化財 金色堂須弥壇内納置棺及副葬品のうち）岩手県西磐井郡平泉町金色院  
縦84.8cm 横51.5cm（注：ほかに復原された小片〔縦15.0cm〕あり） 平安時代

国宝中尊寺金色堂（第8図）は、天治元年（1124）、奥州藤原氏初代清衡により建立された方三間、宝形造の阿弥陀堂である。木製の瓦が葺かれた屋根以外、すべての部分が金箔押しにより荘厳された皆金色で、堂内中央、一間四方の内陣には、宝相華文を基調とする意匠が、漆芸や金工の粋を尽くして施されている。内陣に設けられた東面する須弥壇上には、阿弥陀三尊を中心として六地藏と二天がまつられており、さらに、内陣の四隅に立つ螺鈿で飾られた4本の巻柱上部には、白銅板を打ち付けた月輪内に蒔絵技法で描か



〈出典〉

大岡 実 1971 「建築」藤島亥治郎監修「中尊寺」河出書房新社

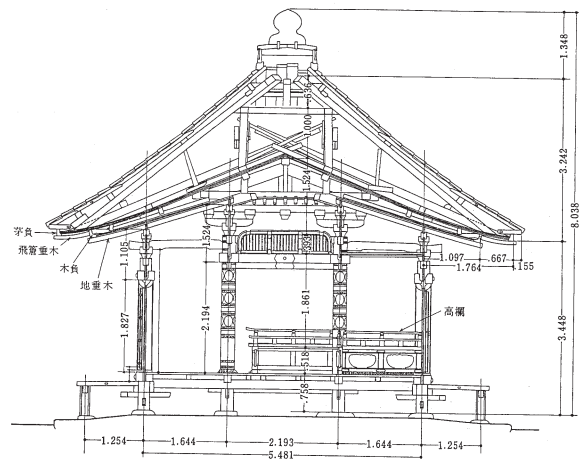
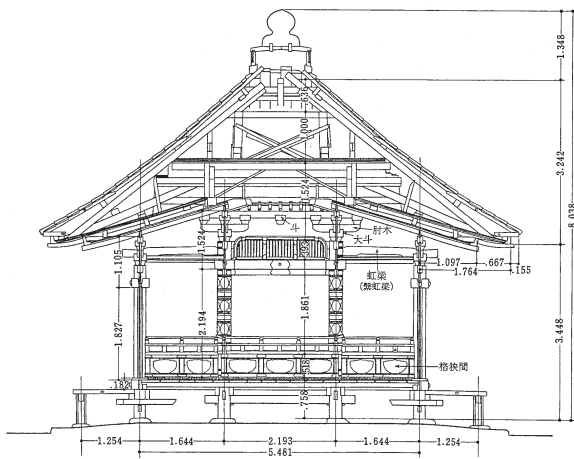
左上 211頁 36 金色堂平面図

左下 215頁 42 金色堂横断面図

右下 215頁 41 金色堂縦断面図

0 5m (縮尺1/150)

0 1 2 3 4 5m  
0 1 2 3 4 5 10 15 16 尺



第8図 絹本墨画像残欠遺存金箔押木棺（清衡棺）納置中尊寺金色堂須弥壇

れた菩薩像計48体が配されて、須弥壇上の諸尊をとりまわっている。また、須弥壇にめぐらされた格狭間羽目板には、様々な姿態の孔雀が牡丹の花とともにあしらわれている。

この荘厳された内陣空間の基底部、須弥壇（中央壇）内部には、大治三年（1128）に没した清衡の遺体が安置されている。また、中央壇に倣い、創建時よりやや遅れて外陣に設けられた2基の須弥壇（西北壇・西南壇）内には、二代基衡と三代秀衡の遺体が納められている。金色堂は、奥州藤原氏三代の遺体を護りつけてきた葬堂としての性格をもつ堂宇である。

昭和37年から43年にかけておこなわれた金色堂の解体修理に先立ち、昭和25年、三つの須弥壇内の調査が実施され、その調査において、中央壇に納置されていた清衡棺の中から、絹本墨画像が発見された。

各須弥壇におさめられている金箔押木棺の中には、安置されていた清衡・基衡・秀衡のミイラとともに、いずれも残欠の状態であるとはいえ、副葬された念珠類や刀類のほか、多くの染織品が残されていた。土中ではなく、葬堂内にあったことから形をとどめているものがある一方、大正七年頃には3棺とも中央壇内にまとめて置かれていたというように、後世の人の手が加わっているという側面をもつ。それぞれの金棺および副葬品の遺存状態にはばらつきがあり、また鼠害を被るなど、葬堂ゆえの副葬品の散逸混乱も生じている。

清衡棺は、長さ189.5cm、幅61.9cm、高さ30.9cm、底板の厚み2.0cm、ヒバ材で作られており、蓋と底板は、2枚の板を中央で接いでいる。全面に拭漆を施し、木の矧目や木口には布着せを施して、棺底裏面を除く内外面に金箔を押ししているが、蓋にある二字棧（1本は後補）の両端は切り放しであり、蓋表もその両脇は素地が出ている。棺底の遺骸背部やや上寄り、腰部にあたる位置には、長方形の孔が穿たれている。

清衡棺内には、刀4口分と刀装具類、念珠残欠一括、金塊1個、染織品類が納められていた。棺底、こゝに足の方には1cm～3cm位砂が入っており、その砂中から金塊が発掘されたという。金塊は重さ32g、大きさ2.6cm×3.5cmほどで、表面の磨滅している状況からみて砂鉢床から採取されたままのものと考えられている。棺底の砂について報告された保坂氏は「当時砂のあることを、さしたることとも思わなかったもので、特別にそれを注意したり、保存もしなかったのであるが、今にして考えてみれば、葬礼に棺内に「呪砂」を加えることは前述の通り平安時代の文献に散見することであるから、あるいはそれであったかと悔やまれる。たしか川砂であったように記憶する。」と記述されて、棺中の砂の存在に注意を喚起されている。また、保坂氏は、同棺の括枕の下面には藺草を思わせるものがいくらか付着していた点、また全面に畳目がついていた点についても注目され、これらが『玉葉』にみえる御筵のままかずき奉って御棺へ御移ししたという記事に一致することを指摘されている。

清衡棺にともなう染織品および布帛類について、山辺知行氏の報告に基づき調査時の状況を整理すると下記のようなになる。

- 1 清衡棺から発見された染織品は、その量からいけば3棺の中では最も多いが種類は比較的少ない。形状を残した布帛製品は、袴2腰、および、遺体を覆った掛け布団のようなものであったと考えられる衾（ふすま）・枕・不明品各1点、あわせて5点のみである。
- 2 形状を残していない染織品断片としては、平絹7種、綾4種、真綿断片の計12種がある。
- 3 遺体の損傷は3棺の中で最もはなはだしく、従って衣類なども着装したような形では発見されていない。大体において遺体の上半身から腰のあたりに衣類が掻き集められたような形で、いつの時期にか棺内が人為的にかき廻されたのではないかと思われるような状態であった。
- 4 従って形状を残した衣類その他も入棺した時着装されていたものか、あるいは一部は副葬品的に納められたものかは判明しない。

山辺氏は、清衡棺にともなう染織品および布帛類の以上のような状況を総合して、「袴と衾があつて衣に相当するものがなにも見当たらないというのは、棺に納める時にすでにミイラ化した遺体を裸に近い状態で棺に納め、上からなにか（清衡の場合は衾）で覆うような着せ方をしたのではないかということも考えられるが、いかがなものであろうか。」と報告されている。

絹本墨画像は、上記2項目に掲げた「形状を遺していない染織品断片」の「平絹7種」中の1種がこれにあたる。

白地の平絹に墨で描かれている画像は、両腕を体側に沿わせたほぼ等身の仰臥像で、断片化しているが画面の情報をおおむねとどめている。瞑目し、両肩に念珠を掛け、腰から下にのみ裳をまとった姿で、頭部（額）、体部、両腕の計8箇所には梵字が書かれている。体部以下については当初からその存在が知られていたが、首から上の部分は、当初の調査後、残された断片類の整理中に見出され、昭和46年に初公表された。

この梵字の描かれた墨画像について、清衡の遺体にかけていた曳履曼荼羅であると昭和25年の時点

で指摘されたのは司東真雄氏である。司東氏は、書かれている梵字の内容について、不明な部分を文献で補い、(額) 仏眼仏母真言、(胸中央上方) 阿弥陀如来種子、(胸中央下方) 宝楼閣随心陀羅尼、(左胸脇) 大威徳明王小咒、(右胸脇) 不動明王一字咒、(臍上) 聖観世音菩薩小咒、(左腕) 即身成仏真言、(右腕) 決定往生浄土真言と推定復元されている(司東1971)。清衡棺に遺存していた白地の平絹に墨で描かれた画像は、院政期に用いられた曳覆曼荼羅の唯一の実物資料として注目を集めている。

曳覆曼荼羅(えいふまんだら)とは、亡者曳覆曼荼羅(もうじゃひきおおいまんだら)を略していうもので、文字通り、亡者に曳き覆う真言陀羅尼が書かれた白い衣をいい、滅罪のために死者に着せるものである(密教大辞典再版委員会1983)。なお、亡者という言葉には、成仏していない魂を祭によって鎮める必要がある死者という意味あいがある(中村他1989)。真言宗において密教儀礼の作法のひとつとしてはじめられたのち、他宗にも広くおよび、経帷子とも呼ばれている。読みの音訓(えいふ、ひきおおい)は流派により、また、曼荼羅書様あるいは書かれる経文・名号などは、流派・宗派により様々である(密教大辞典再版委員会1983)。

保坂三郎氏は、院政期の曳覆曼荼羅を伝える資料として、『玉葉』『兵範記』にみえる「野草衣」「野草御衣有梵字」、あるいはより具体的に作法が記された記事を紹介されているが、『兵範記』にみえる記事に関して、五体それぞれの位置に真言を配したものであったことは知られるが、画像を伴うものであったかどうかはわからないことを確認されている。

贅を尽くして荘厳された皆金色の葬堂という空間において、清衡のミイラとともにかるうじて形をとどめていた絹本墨画像(曳覆曼荼羅)は、棺内に遺されていた様々な情報とともに、文献にみえる葬制を直接確かめることができる貴重な仏教的遺品であると位置づけられている。

#### 参考文献

- 保坂三郎・山辺知行 1971 「棺内副葬品」 藤島亥治郎監修『中尊寺』河出書房新社  
司東真雄 1971 「清衡棺の曳覆曼荼羅と金色堂の性格」 藤島亥治郎監修『中尊寺』河出書房新社  
大岡 実 1971 「建築」 藤島亥治郎監修『中尊寺』河出書房新社  
中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士 1989 『岩波仏教辞典第二版』岩波書店  
密教大辞典再版委員会編 1983 『密教大辞典 縮刷版』法蔵館

#### (2) 大陸東部の遺跡から出土した絹絵類

**葉茂台7号墓** 中国遼寧省北部、遼河と内蒙古自治区との間に位置する法庫県葉茂台において、1974年、遼代の墓が発見され、遼寧省博物館等により発掘調査が実施された。広大な田畑と原野が広がる西山の南斜面に立地するこの葉茂台7号墓は、造営年および被葬者を特定する文字資料を持たなかったが、同じ西山にあって、1976年に発掘調査がおこなわれた遼墓(蕭義墓)からは墓誌が出土し、この付近一帯が、遼朝(916~1125)における特権貴族階級、蕭氏一族の墓群であることが明らかとなった。

葉茂台7号墓には、二幅の掛幅、花鳥画(絹本著色)と山水画(絹本墨画著色)各一幅が副葬されていた。これらは、一人の老婦人が眠る大型の石棺が安置された墓室内に、掛け広げられた状態をとどめて出土したものであり、制作当初の表具がそのまま残されている点も含め、遼代の確かな鑑賞用絵画の遺品として、他に例をみない貴重な作例と評価されている。



葉茂台7号墓の保存は完全であった(第9図右上)。墓の全長は約16.7mで、長さ9.7mの墓道の奥に、長さ7m、幅5.6mの磚築墓室が築かれている。ほぼ南に開口する墓門内は2層の磚で封じられ、外側にはさらに1層の石門が設けられていた。地表下約50cmのところ墓頂がある磚築墓室は、主室、前室、前室左右の耳室からなり、方形の平面形をもつ各室には、染織や漆工、木工などの資料や双六を含む多種多様な副葬品が遺存していた。この墓の造営年代は、石室の平面形、および磁器をはじめとする副葬品の年代から、遼代前期、10世紀後半代に位置づけられている。

掛幅がきわめて良好な状態で遺存していた環境に関して、もっとも注目されるのは「小帳」とよばれている小型木造構築物の存在である(第9図)。磚築墓室の最奥部、主室内北寄り部分に南面する形で設置された「小帳」は、内部に大型の石棺を納めていた。すなわち「小帳」は、棺の覆屋、ならびに棺床の機能を果たす構築物である。二幅の掛幅は、この「小帳」内に懸吊されていた痕跡を明確に留めて出土した。

復元された「小帳」は、桁行3間(259.1cm)、梁間2間(168cm)、柱高102cm、総高228.5cmである。入母屋型の屋根に瓦は無い。前面の中央に扉、左上部に連子窓がある。軒先前面左隅には、垂下された幔幕の一部が遺存していた。

高欄がめぐらされた基壇に相当する部分が棺床で、その高さは44cmである。棺床は、平行する7条の磚の列を基礎とし、その上に木材を敷き連ねて床面としている。基礎の磚列は、各条とも磚を7層積み上げている。

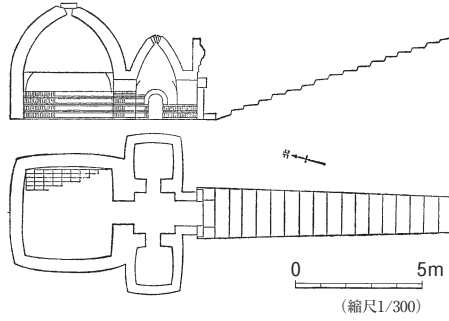
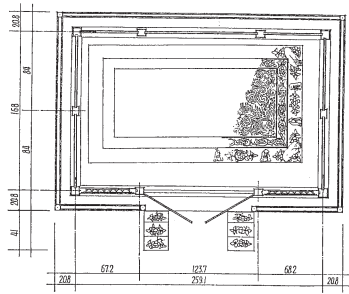
「小帳」に納められた石棺は、6枚の大きな砂岩の板石を組み合わせたもので、長さ225cm、幅124cm、高さ88cmである。底板以外の各面を埋め尽くすように、四神や植物文様などが彫り出され、彩色が施されている。

棺内には、老年女性の骨と、刺繍をふくむ様々な服飾品、琥珀・水晶・瑪瑙をもちいた装身具類が納められ、それらは金の箔糸を用いた「縹絲」(こくし)とよばれる綴れの技法で文様をおりだした屍被で覆われていた。また、蓋石上には、唐代の海獣葡萄鏡をふくむ化粧道具類をおさめた精巧で美しい六稜形の漆塗手箱が置かれていた。

絹絵が発見されたのは、「小帳」と石棺の間の狭い空間である。最初に、東側の床板の上から、山水画が見つかった。軸は外れていたが、八双と天の綾裂の端から端まで通った元来の細い緒は、鉄釘の上にそのまま掛かっていた。一方、西側の床板の上には、花鳥画があった。軸の部分は表装が外れていた。これらの出土状態は、掛け広げられていた掛幅が、上方から墜落した痕跡であると理解できる。したがって、埋葬時においては、被葬者の眠る空間を仕切る「小帳」東西の板壁に、掛幅が一幅ずつ掛け広げられて「小帳」内を飾っていたことがわかる。

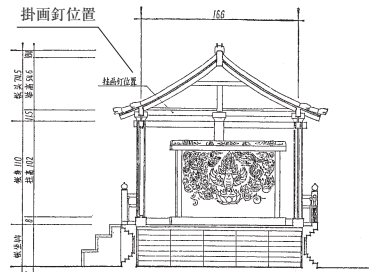
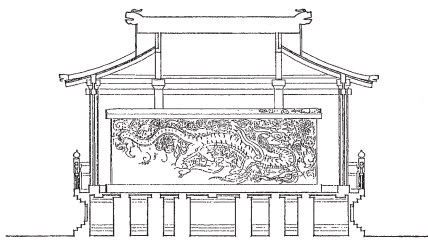
出土した掛幅は、一部に傷みや欠損があるものの、二幅ともに画面の状態はよく、主題は明瞭である。東壁に掛け広げられていた山水画には、墨で描かれた奥深い山中、一部に緑の山肌が覗く山間にたたずむ朱塗りの楼閣の前で、囲碁を打つ人物などが描かれている(「山弈候約図」さんえきこうやくず 絹本着色 縦106.5cm 横54.0cm 遼寧省博物館)。西壁に掲げられていた花鳥画には、細い竹にとまる三羽の雀と二羽の兎、たんぽぽなどの草花が、生き生きとした緑の葉とともに描かれている(「竹雀双兎図」ちくじゃくそうとず 絹本着色 縦114.3cm 横56.0cm 遼寧省博物館)。

表具に関しては、綾絹で包まれた軸木には傷みがあるが、竹を用いた八双は、竹の肌目がはっきり見て取れる遺存状態であった。「山弈候約図」の表具について、以下に小川裕充氏の解説を引用する。「その表



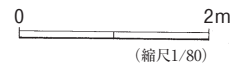
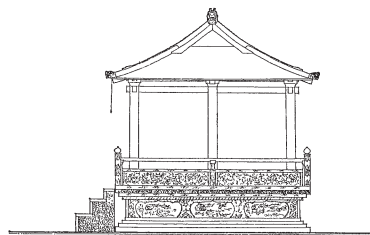
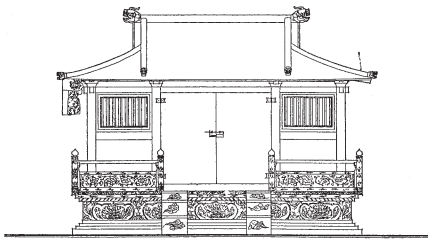
磚築墓室

〈出典〉  
遼寧省博物館・遼寧鉄嶺地区文物組発掘小組  
1975「法庫葉茂台遼墓記略」『文物』1975-12  
27頁 図3



小帳復元図

〈出典〉  
曹 汎 1975「葉茂台遼墓中の棺床小帳」  
『文物』1975-12 (一部改変)  
左上 61頁 図21  
左中 62頁 図25  
左下 61頁 図22  
右中 62頁 図24  
〔「掛画釘位置」注記を拡大加筆〕  
右下 62頁 図23



第9図 葉茂台7号墓

具は、宣和装に代表される宋代の形制の整った表具とは相当の懸隔のある、むしろ唐代のそれに近い簡潔なものにすぎないとはいえ、制作当初のまま現存・復原されている点で、絵画鑑賞史の立場から見ても重要である。」

参考文献

- 遼寧省博物館・遼寧鉄嶺地区文物組発掘小組 1975「法庫葉茂台遼墓記略」『文物』1975-12  
 楊仁愷 1975「葉茂台遼墓出土古画的時代及其他」『文物』1975-12  
 曹 汎 1975「葉茂台遼墓中の棺床小帳」『文物』1975-12  
 楊仁愷 (杉本達夫訳) 1985「葉茂台第七号遼墓出土の古画に関する考察」『国華』1080号  
 温麗和 1989「遼寧法庫県葉茂台遼蕭義墓」『考古』1989-4  
 小川裕充 1988「山弈候約図」「竹雀双兔図」『世界美術大全集』東洋編第5巻 小学館

**魯荒王朱檀墓** 明墓から宋元画が出土した初の事例として知られている魯荒王朱檀墓は、中国山東省鄒県、九龍山の南麓にある。

朱檀（1370－1389）は、明の初代皇帝太祖（朱元璋 在位1368－1398）の第十子で、魯王に分封されたが、若くして亡くなった。諡は荒である。牆、門址、大型石柱の基部、龍文瑠璃瓦当などが散在する陵園の広さは南北206m、東西80mという規模をもち、堅固に地固めされた封土の面積は約13000㎡である。

1970年春から1971年初めにかけて、山東省博物館により、朱檀墓の墓室の発掘がおこなわれた。ほぼ南北に主軸をとる磚築墓室の全長は20.6mで、墓門・前室・墓門・甬道・後室からなる（第10図）。墓門を設けた金剛牆の北方には、未発掘の墓道があり、墓道を含めた全長は70m余と推定されている。

地下20m余の深さに築かれていた墓室は密閉されていて、内部には水がたまっていた。そのため、出土品のなかには、水に浮いて移動していたものもあるが、磁器や玉・金属でできた品々のほかに、多種多様な有機質素材からなる副葬品が良好な状態で遺存していた。

冠服類、隆興甲申（1164）紀年銘をもつ琴、元刊書籍7種21冊、画、筆・墨・玉硯・紙などの文房具類、布や紙に包まれた化粧道具類、漆工品や木製家具類、「魯王之寶」と篆刻された木製金貼の印、儀仗隊をあらわした400点をこえる木彫彩絵俑群、古制に倣った葬儀用の木牌など、伝世品を含む数多くの副葬品が出土している。

画は、棺槨・棺床を中央に安置した後室内、西側の空間に、琴・基石・書籍・文房四宝類とともに置かれていた。卷子装四巻が出土したが、一巻はすでに腐朽していた。画面の判明する三巻は、花鳥画と山水画である。いずれにもこれらの画の収蔵機構を示す鑑蔵印の半印「司印」が押されていた。

出土した花鳥画の一巻は、宋代に描かれた絹本彩色による扇面で、背面には南宋初代皇帝高宗（在位1127－1162）による金字の跋文がある。また、元の4代皇帝仁宗（在位1311－1320）の姉、魯国大長公主がかつてこの絵を所有していたことを示す鑑蔵印「皇姉図書」が押されており、さらに、元代の題跋が附されている。もう一巻出土した花鳥画は、宋末から元初に活躍した画家、銭選（1239－1301）による紙本淡彩色画で、画家自身による題跋が書されているほか、「皇姉図書」の鑑蔵印と元代の題跋がある。山水画一巻は、宋代の絹本彩色画であるが、画面に傷みが生じており状態はよくない。

以上、画面の内容が判明した三巻の絵画は、鑑蔵印、およびそえられた題跋から、宋、元代を通じて大切に伝世されたのち、明の王族の蒐集品となったという伝来がわかる遺品であり、これらは、朱檀の死後、現世の続きとして地下の宮殿に住まいを移した亡き王の生活を彩るために、琴や基石、書籍や文房四宝とともに、死者の靈魂が住む空間と考えられた陵園内の墓室に持ち込まれたものであったことがわかる。

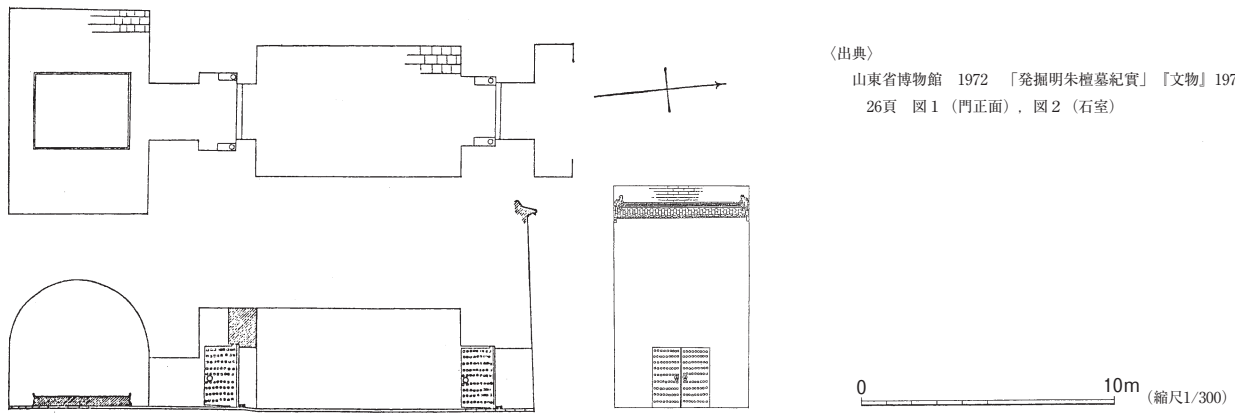
#### 参考文献

山東省博物館 1972「発掘明朱檀墓紀實」『文物』1972－5

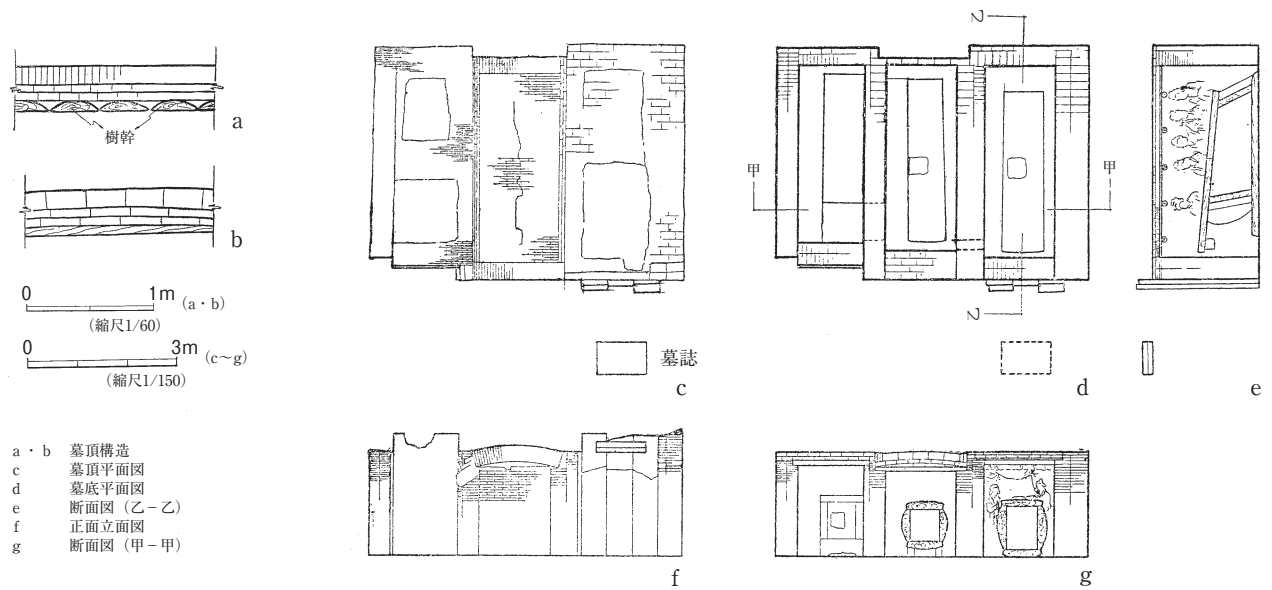
劉九庵 1972「朱檀墓出土画卷的幾個問題」『文物』1972－8

**楊公佐墓** 画そのものはすでに遺存していなかったが、掛幅の軸木1点が出土した事例として、中国江蘇省淮安県にある楊公佐墓が知られている。楊公佐墓は、1959年、江蘇省文物管理委員会により発掘が行われた北宋代の墓5基のうちの1基（2号墓）で、墓誌（紹聖元年1094）をもつ壁画墓である。

調査された5基の宋墓は、近接しており、いずれも一辺5m前後の規模の墓室をもつことから、相互に関わりをもつと考えられている。嘉祐五年（1060）紀年銘が刻まれている壁画のある1号墓のみは、磚積みの単室墓であるが、他の4基の墓室は、磚と木材を併用した特異な構造で、木材の腐朽により墓室天井

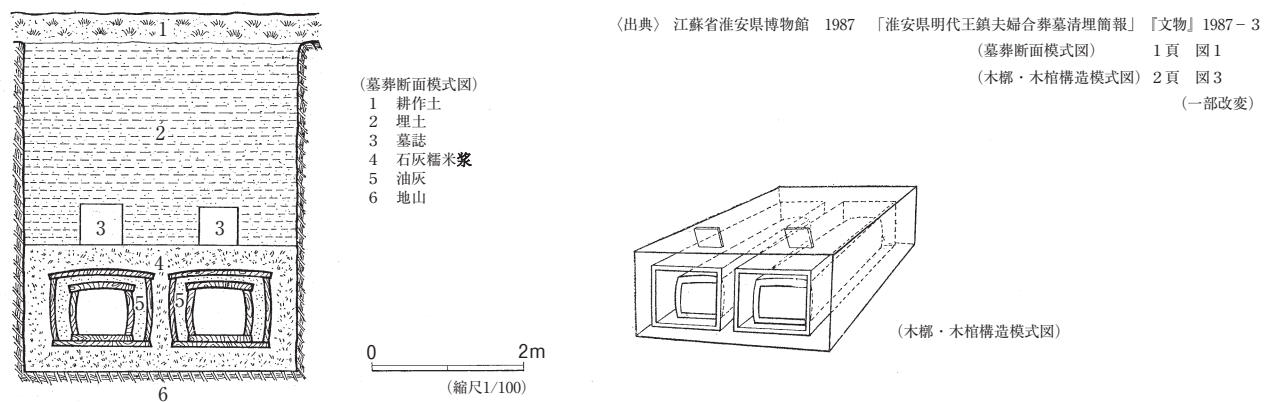


第10圖 朱檀墓



〈出典〉 江蘇省文物管理委員會·南京博物院 1960 「江蘇淮安宋代壁畫墓」『文物』1960-8·9 (a·b) 46頁 圖8 (c~g) 49頁 圖17 (一部改變)

第11圖 楊公佐墓



第12圖 王鎮墓

部（第11図 a・b）が崩落していた。いずれの墓も、造営後あまり遅くないある一時期に盗掘を被った状況が観察されたが、磁器や金属製品のほかに、状態のよい多くの漆器をはじめ、几・机・燭台、磁器の壺を封じている栓、櫛、買地券、建築物の明器などの木製品や木棺材が出土した。

この遺跡は、現在の運河の西岸から200mほどのところにあり、上部には厚さ2mに達する黄色い沖積土が堆積していた。墓のレベルは運河河床の下面にあり、墓室は水に浸っていた。かつての黄河はしばしば氾濫し、黄土地帯から運んできた多量の土砂を華北平野に堆積させて河道の大変動をひきおこしたことが知られているが、黄河と淮河の間であって、その影響を受ける区域内にあった5基の宋墓の上に堆積していた土層は、金代の明昌五年（1194）、黄河が氾濫して淮河に注ぎ、その土砂が淮河の流れを止める大規模な氾濫があったと伝える文献の記述と符合するものである。

軸を出土した2号墓は、南東に開口する長方形の3室が並列して構築された墓で、東・中央・西の各室それぞれに木棺1基を納めていた（第11図 c～g）。墓誌の出土位置と内容、3室の構築順序から、東室が、墓の主人、宋代の武階官で正九品の左班殿直であった楊公佐の墓であり、他の2室は夫人の墓と判明した。

楊公佐墓（東室）には、軸木のほかに、漆器、筆床、文鎮、基石、銅銭が遺されていた。棺をとり囲む石灰が塗布された三方の壁には、9人の女楽人と、机の前で腕を捧げ持つ侍女・唾壺捧げ持つ童僕、合わせて11人の人物が描かれている。

木製の軸は、一端の軸首がすでに朽ち落ちている状態であった。画を副葬したが、画はすでになくなってしまい、軸木のみが遺存したものと報告されている。

#### 参考文献

江蘇省文物管理委員会・南京博物院 1960「江蘇淮安宋代壁画墓」『文物』1960-8・9

**王鎮墓** 明の弘治九年（1496）に葬られた王鎮の墓の棺内から、絹本6図、紙本19図、計25図の絵画が出土した。これらは、もともと繋げて表装され二巻に仕立てられていた元、明の観賞用の絵画である。絵画を携えるように埋葬された王鎮について、墓誌は、こよなく書画を賞玩した資産家であったと伝えている。

中国江蘇省淮安市淮城東郊にあるこの墓は、1982年、地元で「大官蕩」と呼ばれている明、清時期の墓葬区において、農民が整地をしていたときに発見し、掘り出された遺跡である。江蘇省淮安市博物館が、後に知らせを聞いて現場に赴き、整理を行った。

墓は、南北3.5m、東西3.48mの方形の土壙内に設けられていた。地表下約3mに墓頂があり、墓頂からおおよそ1.5mで墓底に至る（第12図）。墓内に並べ置かれていた2基の棺槨上に、それぞれ墓誌が置かれていたことから、王鎮と、弘治十六年（1503）に葬られた妻劉氏の墓と判明した。棺の大きさと棺槨材に差異がみられるものの、棺槨の基本構造は同じである。王鎮の棺槨は檀香木、妻劉氏の棺槨は杉で作られていた。

絵画が副葬されていた王鎮が眠る槨の大きさは、長さ2.9m、幅1.23m～1.34m、高さ0.9m～0.98m、槨板は7cmの厚みをもつ。棺は長さ2.36m、幅0.84m～0.9m、高さ0.71m～0.78mで、棺材の厚みは棺底6cm、棺壁9cm、蓋12cmである。

土壙の深い位置にあり、埋め戻されていた墓の中は、充填物で密封された状態にあった。すなわち、両槨の周囲は、石灰糯米漿で充填され、槨内、棺との間は、桐油と石灰を攪拌した灰白色の油灰で充填されていた。そして、王鎮の棺内を充填していた液体を取り除くと、保存状態のよい遺骸、衣服とともに絵画二卷25図が見出されたという。

二卷は、被葬者の両脇の下に一巻ずつ副葬されていた。左辺の軸（総長33.8cm）は水晶の軸首をもち、絹本6図を含む8図が巻き納められていた。右辺の軸（総長28.1cm）には花梨木の軸首があり、紙本17図が巻き納められていた。

蒐集家の死去に際し、蒐集品の一部を副葬する事例があったことを伝える北宋代の文献の記述を実証する事例として注目されている（楊 [杉本訳] 1985）。

#### 参考文献

江蘇省淮安市博物館 1987「淮安市明代王鎮夫婦合葬清理簡報」『文物』1987-3

徐邦達 1987「淮安明墓出土書画簡析」『文物』1987-2

尹吉男 1988「關於淮安王鎮墓出土書画的初步認識」『文物』1988-1

楊仁愷（杉本達夫訳）1985「葉茂台第七号遼墓出土の古画に関する考察」『国華』1080号

**白象塔** 中国浙江省の南部、温州市甌海区南白象鎮に所在していた白象塔から、絹絵の仏画が発見された。総高31.3m、基壇一辺の長さ7.3m、六角7層、磚木混造の白象塔は、その西にあった古刹瑜伽寺とともに、温州湾に注ぐ甌江の下流域に位置していた楼阁式の塔であったが、倒壊の危険が高いと判断されたため、1965年に解体調査が行われた。白象塔は、史書に詳細な記述をみないものの、塔の様式と、納められていた遺品の組成、そして、塔壁内の穴蔵文物坑上の蓋磚にのこされた朱筆による紀年銘から、北宋の政和五年（1115年）に竣工したと考証されている。

解体調査のうちに、塔内から、北宋代の大量の文物が発見された。彩絵泥塑菩薩像をはじめとする小型の彫像類、版本および写経による経典、小金銅仏、仏画、小型宝篋印塔、漆器、銅銭（唐・五代を含む）、小銅鏡、磁器など、北宋文物の代表的優品を多く含む多様な遺品がある。

総数の9割以上は、1層及び2層を構築していた各6面の壁の内部、すなわち、厚さ2.2mを測る壁内に設けられた方形の穴蔵に納められていた。北宋代の文物は、台基と3層、4層、5層にも若干あり、また、4層と5層には中華民国時代の経典、磁器、木柄鉄斧の追納があった。3層以上および台基から見出された文物の出土状況は不詳である。なお、地宮は早くに掘られていて何も遺されていなかった。

絵画は計11件あり、2層に絹本4件、1層に紙本1件と絹本4件、台基に絹本2件が納められていた。ほとんどみな朽ち壞れていて粉末状を呈しており、表装は無い。

ただ、絹本2件（2層3面および台基出土）と紙本1点（1層6面出土）のみが、敷き広げて画面の概況をうかがい知ることができる状態を保持していた。これら3件には、いずれにも、顔料に彩られた美しい菩薩像が描かれている。なかでも2層3面の壁内に納められていた絹本著色普賢菩薩像は、北宋早期仏画中の佳作と評価されている。この緻密に描かれた普賢菩薩像は、煤の付着がひどいことから、描かれてから塔に納められるまでの間、どのような空間にあったのかを推し量ることができる。

## 参考文献

温州市文物処・温州市博物館 1987「温州市北宋白象塔清理報告」『文物』1987-5

### (3) 内陸アジア乾燥地帯から出土した絹絵類

**出土状態** 出土した絹絵類として、質量ともに群を抜いた存在であり、古くから知られているのが内陸アジア乾燥地帯の資料である。それらについて、極端な乾燥という自然環境のなか、人の手によってどのような空間にもたらされ、砂塵の中に埋もれることとなったのかという視点から、大まかな様相の整理を試みることにした。

内陸アジア乾燥地帯から出土した絹絵に関して、他地域の事例にはみられない要素として掲げることができるのが、集積された事例がある、という点である。周知の通り、20世紀初頭に発見されたハラ・ホト遺跡と敦煌莫高窟藏経洞には、仏画を主体とする大量の絹絵類が納められていた。集積という出土状態は「軸装」という形がもつ収納保管の特性を示している。さらに、この著名な2遺跡の事例は、出土後の経緯においても、「軸装」という形がもつ運搬移動に関わる特性を如実に示している。

以下、概観に際しては、まず、集積が明確な事例とそれ以外という2つの型に分け、さらに後者について、都城あるいは寺院・塔・石窟から出土した事例と、墳墓から出土した事例に項を二分して、各項末に掲出した参考文献からの引用あるいは要約をもって輪郭をなぞることとしたい。

**集積の場** 中国内蒙古自治区の西端近くにあるハラ・ホト（土隗口故城、黒城）の城壁内外から出土し、コズロフによってロシアへ将来された絵画は300点以上にのぼる。それらは、西夏時代（1032～1227）のチベットの密教、あるいは中国宋代絵画とのつよい関わりを示す仏教絵画を主体とするもので、絹本のほか、麻布や木綿を基底材とするもの、および、板絵や紙本版画が含まれている（井手1998）。

ハラ・ホトの絵画のほとんどは、西夏文字による典籍・古文書類をふくむ大量の書跡とともに、城壁外、西門から約400m西方にある塔内から発見された。一体の遺骸が座った姿勢で埋葬されていたという集積の場については、コズロフが発掘した数年後に同地を調査したスタインによって、塔の東側中央部に設けられていた直径約4mの円形の部屋がその場であったことが示され、さらに、この塔は、遺跡内の他の塔とは形が大いに異なることが報告されている（松田1950）。

中国甘肅省、敦煌莫高窟藏経洞（第17窟）は間口2.8m、奥行2.7m、高さ約3mの小洞である。晩唐に開鑿された大型石窟（第16窟）の甬道北壁に、床を約1m高く上げて穿たれた空間で、北壁のみに壁画がある。壁画には、小鳥が飛び交い、頭陀袋や水瓶がかけられた双樹の下に、侍女、あるいは比丘尼が佇む図が描かれている。そして、その下方に花をくわえる双鹿と双履が描かれた低い檀が設けられている。

洞内西壁に嵌め込まれた唐大中五年（851）洪誓告身勅牒碑から、河西で尊崇を集めた高僧洪誓（こうべん）の遺徳をたたえるために、同じく晩唐に開鑿された洞であることがわかり、絵画や書類が運び込まれ密封される以前には、かつて第362窟に移されていた結跏趺坐する洪誓像（彩塑、骨灰袋納入、高さ94cm）が南面して安置されていた御影堂であったことが判明し、復元されている。

なお、第16窟は晩唐の開鑿ながら、西夏時代に改修され、壁画の多くは描き改められている。1900年、王元籙によって藏経洞入口が開封された時、一部が欠落した甬道側壁の壁画も西夏のものであり、これらは藏経洞が密封された直後に描かれたものと推定されている（敦煌文物研究所1982）。

密閉されていた空間の、天井までいっぱい積み上げられていた大量の経典や文書、絵画類は、4世紀から11世紀初頭の作になるもので、5万件以上あった。漢文のほか、チベット語、ソグド語、ウイグル語、ホータン語、クチャ語、サンスクリット語の文章が含まれている。これらの多くは、スタイン、ペリオ、大谷探検隊の吉川と橘、オルデンブルグ等の手に渡り、海外に流出した。各国で公刊された目録類によれば漢文による経典や文書の数は約22000点にのぼり、大部分を占める仏教経典は必ずしも網羅的でないこと、道教や儒教に関する貴重書があること、文書類には公私にわたる各種が含まれており、紙背文書が多いことなどが明らかにされている（臺信2002）。

絵画類の総数は、大小合わせて一千幅近くあり、絹本・麻本・紙本がある。仏画を主体とし、隋代から北宋代、とくに晩唐から五代のものが多い。幡絵も多くある（水野ほか1996）。

#### 参考文献

- 松田一政 1950「西夏の死都カラ・ホトの調査の概要について」『東方学報』京都第19冊  
井手誠之輔 1998「西夏の絵画」『世界美術大全集・東洋編』第5巻 小学館  
コズロフ（西義之訳）2004『西域探検紀行選集 蒙古と青海』白水社  
敦煌文物研究所 1982『中国石窟 敦煌莫高窟』第4巻・第5巻 平凡社  
敦煌文物研究所（解説鄧健吾・安田治樹）1982『敦煌石窟』平凡社  
水野敬三郎・田口榮一・朝日新聞社文化企画局東京企画部 1996 『砂漠の美術館 永遠なる敦煌 中国敦煌研究院創立50周年記念』朝日新聞社  
臺信祐爾 2002『大谷光瑞と西域美術』『日本の美術』No.434 至文堂

**都城・寺院・塔・石窟** ハラ・ホト遺跡では、集積された一群のほかにも、城壁内外の諸地点、寺院遺構や仏塔跡から、絹本・麻本の絵画が出土している。なかでも幡とおもわれる絹本の断片などが相当数出土しているといい、また、少数であるが書跡中の挿絵類、水墨画なども発見されている。

また、中国新疆維吾爾自治区トゥルファン地方の諸遺跡からも、数多くの絹絵類が20世紀初頭に発見されている。2つの都城遺跡、西北のヤール・ホト（交河城）と東南のカラ・ホージャ（高昌城）を核とし、高昌城東方のトユク石窟寺院、北方のムルトウク寺址などの諸遺跡からも収集されている絹絵類は、7世紀から10世紀頃の仏画を主体とするもので、幡絵もふくまれている。花鳥画の断片類もみられる。

#### 参考文献

- 松田一政 1950「西夏の死都カラ・ホトの調査の概要について」『東方学報』京都第19冊  
コズロフ（西義之訳）2004『西域探検紀行選集 蒙古と青海』白水社  
韓国国立中央博物館 1989『中央アジアの美術』学生社  
東京国立博物館・京都国立博物館・朝日新聞社 1991『ドイツ・トゥルファン探検隊西域美術展』  
東京国立博物館 1996『シルクロード大美術展』  
臺信祐爾 2002『大谷光瑞と西域美術』『日本の美術』No.434 至文堂  
佐川美術館 2002『絲綢路の至宝 旅順博物館仏教美術名品展』



**墳墓** トゥルファン地方のアスターナ墳墓群から、麴氏高昌国の半ば頃から唐が西州都護府を置いた時代（6世紀半ば頃～8世紀半ば頃）の絹絵類が出土している。それらは性格を異にする二群に分けてとらえることができる。ひとつは、屏風に仕立てられた唐風の絹絵であり、もうひとつは、絹地あるいは麻布に描かれた伏羲女媧図である。

1972年、新疆維吾爾自治区博物館がおこなった発掘調査で、8世紀前半の墓3基から唐風の絹絵が出土した（金・衛1975、李1975）。アスターナ230号墓（張礼臣墓）の舞楽屏風六扇、187号墓（張氏夫婦合葬墓）の囲棋士女図、188号墓（張某の妻麴仙妃墓）の牧馬屏風八扇である。いずれの墓も早い時期に荒らされていたために、絹絵の残りは良好でなく欠損が多いが、修復を経て、画面をみることができる状態に保持されている。これらは墓室という空間を飾るために持ち込まれた絵画と考えられている。

類品として、紙本ではあるが、大谷探検隊が関わったアスターナの一墳墓から発見され、屏風の二扇と想定されている樹下人物図2点が知られている。この樹下人物図には、反故となった唐西州の戸籍が裏打ちされていることから、公文書廃棄の時期を勘案して、730年頃という制作年が推定され、この年代は、制作年が判明している他遺跡の壁画や俑などの事例と比較して矛盾の無いことが指摘されている（臺信2002）。このほか、紙本著色の唐代の花鳥図がアスターナ105号墓とカラホージョ50号墓から出土している。

伏羲女媧図は、肩を組み曲尺あるいはコンパスを掲げた男女一對の神を、絡み合う蛇身をもった姿で描き、周囲に日月星辰を配した縦長の画面をもつ絵画である。戦後の中国による発掘調査事例が28例、大谷探検隊が収集した資料9例が知られているが、図像上共通するものは、漢代以降の中原を本として、墓室や石窟の壁画、画像石や画像磚、石棺や木棺の蓋など様々なところに見ることができる（岡内2000）。

アスターナから集中的に出土している絹本または紙本の伏羲女媧図について、岡内氏は、墓室の天井に画面を下に向けて木釘で留めた事例、壁にかけた事例、棺を覆った事例、たたんで棺の周辺に置いた事例など、多用なあり方を確認されている。また、アスターナ303号墓（趙齡達墓 高昌国 和平元年 [551]）、301号墓（唐 貞観十七年 [643]）、302号墓（趙松柏墓 唐 永徽四年 [653]）にみられるように、一族の墓域において、図像の変遷をともないながら連面と用いられている様相が岡内氏により示されている。

ところで、ロシア南部、カスピ海と黒海の間横たわるコーカサス山脈西部北麓の岩陰墓地から、絹本著色画の断片（縦18cm 横16cm 国立エルミタージュ美術館）が20世紀のはじめに発見されている。

この遺跡モシチェヴァヤ・バルカは、峠の道の近く、峡谷の急斜面の高所、砂岩が風化して形成されたテラスに営まれた古墓群（8～9世紀）で、乾燥していることから、中国の絹のほか、中央アジア西方産の絹織物断片、木製品、革製品などが良好な状態で遺存していた。

絹絵が副葬されていた墓については、ともに出土した漢文で書かれた金銭出納帳（紙本墨書）の断片から、8世紀、西方への旅の途中で死亡した中国人商人の墓であろうと推定されている（古代オリエント博物館1991）。絹絵の画面には馬に乗った人物や区画などが描かれており、わずかに箔が残っている。図録において、あるいは仏教的な図様の一部を示すものかもしれないと解説されている（東博ほか1985）。

#### 参考文献

金維諾・衛 辺 1975「唐代西州墓中の絹画」『文物』1975-10

李 征 1975「新疆阿斯塔那三座唐墓出土珍貴絹画及文書等文物」『文物』1975-10

岡内三眞 2000「中央アジアトルファン出土の伏羲女媧」『シルクロード学研究』10 シルクロード学研究セン

ター

臺信祐爾 2002『大谷光瑞と西域美術』『日本の美術』No.434 至文堂

東京国立博物館 2002『日中国交正常化30周年紀年特別展 シルクロード 絹と黄金の道』東京国立博物館・NHK・NHKプロモーション

東京国立博物館・大阪市立博物館 1985『シルクロードの遺宝－古代・中世の東西文化交流－』日本経済新聞社

古代オリエント博物館 1991『南ロシア騎馬民族の遺宝展』朝日新聞社

#### (4) 中国古代の帛画

絵を描く面として絹地が用いられた現存最古の遺品は、中国湖南省長沙市陳家大山にある戦国中期(B.C.4世紀)の楚墓から出土した帛画「人物龍鳳図」である。

帛画とは、絹の上に描かれた中国古代の絵画をいうもので、その出土地は、当時、水運の中枢として栄えた長沙を核に、戦国の楚の地および前漢初、中期(B.C.2世紀後半)までその遺風が及んだ楚の故地に限られる。

帛画が副葬品として遺されていた遺跡として、陳家大山楚墓のほか、同じく長沙の近郊に営まれた子彈庫楚墓(「人物御龍図」 戦国晩期)、前漢初期の馬王堆1号漢墓、馬王堆3号漢墓、そして、戦国後期に領土を拡張した楚の占領下にあった山東省臨沂市金雀山9号漢墓(前漢中期)が知られている。湖北省荆州市江陵馬山1号楚墓、金雀山13号墓、金雀山14号漢墓からも帛画が出土しているが、これら3遺跡の事例は画像の内容を判別できない遺存状態であった。なお、『老子』『周易』などの帛書も遺されていた馬王堆3号漢墓には絹本著色の地形図もあり、また、1942年に盗掘された子彈庫楚墓(戦国後期)には絵画をともなう絹本著色の帛書も副葬されていた。

帛画を出土した楚墓、およびその伝統を継承した漢墓は、いずれも地山あるいは岩盤に深さ7m~10mに達する堅穴を掘り、壙底に堅固な棺槨を納め、これを良質の粘土で覆ったうえで堅穴を版築で丁寧な埋め戻すという構造をもっている。最も深い馬王堆1号漢墓では、深さ16mである。そのため、地下水の影響を受け、また、気密が保たれる環境にあったことから、被葬者の遺体をはじめ、帛画、帛書、簡牘、絹や麻の織物、木胎・竹胎・夾紵胎の漆器などが良好な状態で遺存していた。

馬王堆3号漢墓の6点出土という事例以外、帛画は1点ずつ出土した。馬王堆3号漢墓の5点(「車馬儀仗図」「車馬遊楽図」「劃船遊楽図」「神祇図」「導引図」)をのぞく、各墓に1点ずつ副葬されていた帛画は、それぞれに時代の変化が反映して差異が認められるものの、被葬者の靈魂が昇仙する過程を描くという主題を共有するものであることが明らかにされている。なお、子彈庫楚墓の「人物御龍図」、馬王堆および金雀山9号漢墓の昇仙図は、発掘時、棺上に広げて置かれていたものであり、「人物御龍図」はその上部先端に竹を一本渡し、紐で吊るす仕組みになっていた。

これらの昇仙図は、墓葬と絵画のあり方を端的に示すものとして、また、神話伝説世界が後世の潤色を受けることなく、新たに図像という形を通して開示されたという点で深い意義をもつことが指摘されている(曾布川1998)。

## 参考文献

- 岡村秀典 1988「秦漢帝国の遺産」『世界の遺跡9 古代中国の遺産』講談社  
曾布川寛 1998「秦漢美術の性格」『世界美術大全集・東洋編』第2巻 小学館  
曾布川寛 1998「漢代墳墓絵画に描かれた世界」『世界美術大全集・東洋編』第2巻 小学館

## 2 軸装の出土事例

**表具の存在** 鎌倉時代後期に営まれた思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓とは、時代的にも地域的にも大きな隔たりのある遺跡を含め、絹絵の出土事例を概観してきた。そのなかで、唯一国内の資料として掲げることができたのが、中尊寺金色堂清衡棺に遺存していた絹本墨画像（曳覆曼荼羅）である。

曳覆曼荼羅は、亡者の滅罪を目的として遺骸に曳き覆う形で棺内に納められる布帛である。真言陀羅尼が主体である曳覆曼荼羅は、その明確な機能と用途において、造形作品としての絵画とは異質であるが、真言陀羅尼とともに、ほぼ等身大の仰臥像が墨書されている清衡棺の曳覆曼荼羅に関しては、葬制に関わる場にもちこまれた絹本に描かれた絵の中世以前に遡る実物資料という点で、思井堀ノ内遺跡中世墓から出土した絹絵と共通の要素をもっている。

一方、両者の間には明確な差異も認められる。品質において、思井堀ノ内例は著色画であるが清衡棺例は墨画である。形状において、思井堀ノ内例は、きわめて簡略化された形ながら掛幅という表具をもっているのに対し、清衡棺例に表具はない。思井堀ノ内例は巻き納められていたが、清衡棺例は広げられていたと想定される。

棺に納められた絹地に描かれた絵の実物資料として、国内で確認されている2点間にある差異のうち、形状の違い、すなわち、掛幅という表具の有無は、両者の用いられ方に、それぞれ独自の形があったことを示していると考えられる。

そこで、絹絵から、掛幅という表具の形に焦点を移し、国内に比較資料を探し求めることとした。とはいえ、掛幅と判明している出土品を見いだせないことから、軸木に注目する形で、すなわち、巻きを含めた軸装という視点から出土事例を確認することとした。

**軸装の出土事例** 国内出土品を対象として、巻きに関わる類例を求めると、比較的多くの事例を見出すことができた。経塚から出土した紙本経である。

思井堀ノ内遺跡の中世墓から出土した絹絵と、経塚に埋納されていた経典とでは、仏画の可能性が高い絵画と写経、掛幅と卷子、絹本と紙本という遺物の性格ならびに形状品質に違いがある。そして何よりも、墓と経塚という遺跡の種類がもつ本質的性格の違いがある。

しかし、ともに祈りをともなう儀礼の中で、地中に意図的に埋められた軸装であるという点において、両者に共通する要素や課題を見出すことができるのではないだろうかという観点から、経塚出土軸装の概要を確認することとした。

**埋経の目的** 日本では、末法思想のひろまった平安時代後期に、仏教の経典を書写して地中に埋納することがさかんに行われるようになった。その行為、あるいは埋納した経典を埋経といい、埋納した塚を経塚という。

現存する最も古い紀年銘をもつ埋経遺物は、奈良県吉野郡天川村金峯山経塚（石田・矢島1927）から出土した長徳四年（998）の奥書をもつ「紺紙金字法華経残欠」と「紺紙金字無量義経残欠」である。これらは、修験道において、役小角が蔵王権現の湧出を感得した地として崇められている山上ヶ岳（標高1719m）山頂にある大峯山寺の本堂、および前庭南端にある蔵王権現湧出岩一帯において、元禄四年（1691）から明治・大正にかけて数次にわたり出土した経塚遺物の一部である。したがって、長徳四年銘埋経の出土状況は不明であるが、藤原道長が寛弘四年（1007）8月11日金峯山に参詣し埋納した経緯を記す511字の銘文を刻んだ銅経筒に、寛弘四年の紀年をもつ埋経とともに収められていたものと推定されている。

近畿地方において造営が始められたと考えられている経塚は、平安時代から江戸時代まで造営され、国内各地において、これまでに千数百箇所が確認されている。釈迦の入滅後、56億7千万年後に弥勒菩薩がこの世に現れて説法をする時まで経典を残すという信仰に基づき始められた経塚であるが、極楽往生を合わせ願うことが、初期の段階から行われ、さらに、時代的・地域的な広まりとともに変化が生じて、中世以降には、追善供養などが主な目的となっていくことが銘文などからおさえられている。また、小石に一字ないし数文字の経文を墨書する一石経と呼ばれる埋経も中世以降に始まり、江戸時代に最盛期を迎えた（奈良博1977）。

**埋経の軸木の形** 経塚から出土した軸装の諸要素のうち、出土品ゆえの特徴を端的にみることは、軸木の形である。このことは、岡崎譲治氏、稲垣晋也氏、河田貞氏、阪田宗彦氏による『経塚遺宝』第二部（種類別経塚遺物）「経塚埋納の写経」の項、紙本経に関わる解説中において明らかにされている。『経塚遺宝』解説において、軸木の形は、A～Eの5類に分類されている。

- A 切り合わせの特徴をもつ軸木
- B 単なる円箸様の軸木
- C 円箸を縦割りに二分して合わせた軸木
- D 角箸状の四角柱の軸木
- E 竹ヒゴ

そして、A・Bは一般写経に通例のものであること、経塚出土紙本経の大部分はB～Eに分類されること、さらに、C～Eは経塚出土例の埋経に特に顕著な形であり、その簡素なつくりは軸木が重視されなかったことを示唆していると指摘されている（『経塚遺宝』375頁）。以下に、『経塚遺宝』掲載資料から抜粋転載する形で、A～Eの具体例を掲げる。

Aには、金峯山藤原道長経塚（奈良県吉野郡天川村 寛弘四年 [1007]）出土品や、高野山奥院経塚（和歌山県伊都郡高野町 天永四年 [1113]）出土品がある。山形に切った経紙巻末が糊付けされている軸木には、撥形や八角形の金銅あるいは鍍銀の軸端が装着されている。金峯山藤原道長経塚から出土した紙本経は、いずれも紺紙に銀泥で界線を引き金泥で経文を書写したものであるが、経巻下半部が腐食している。高野山奥の院経塚例では、切り合せのある軸木を本紙の幅に合わせて接ぎ合わせ、紺紙の帯で巻きとめている状態がよく残っている。また、八双の細い組紐も遺存している。

Bには、木口に多少のふくらみがある柏尾経塚（山梨県甲州市 康和五年 [1103]）出土品や、木口に柄を削り出した四王寺山第三経塚（福岡県太宰府市 平安後期）出土例がある。柏尾経塚出土経軸残欠は8本あり、径は1.7cm、残存最大長5.5cmである。宋代の褐釉六耳壺内に遺存していた四王寺山第三経塚例

は、紙本経は灰化していたが、経軸10本と、強い繊維よりなる紐の長短3～4条が遺存していたという。現存する経軸9本は、両端に軸端装用の柄を削り出した断面円形の白木で、長さは27.3cm、径は1.1cmである。

Cには、日石寺裏山経塚（富山県中新川郡上市町 仁安二年 [1167]）出土8本がある。炭化した紙片が付着遺存している軸木は、棒軸を半截したものを2本合わせて一本としたもので、長さ25.3cm、径0.6cmである。また、出土当時、経筒内に経巻片が付着した経軸8巻分があったと記録されている稲荷山経塚（京都市伏見区 平安後期）例も円箸形を二つに割って合わせたものであった。

Dには、割り箸状の2本の軸木で本紙端部を挟む朝熊山第三経塚（三重県伊勢市 平治元年 [1159]）から出土した例（長さ約24.2cm）がある。

Eには、粉河経塚（和歌山県紀の川市 天治二年 [1125]）出土紙本墨書法華経八巻の軸木や、伝大分県（個人蔵 康治二年 [1143]）出土紙本朱書法華経・般若心経一巻の軸木がある。粉河経塚例では、径0.2cmほどに丸く削った竹ヒゴを用いている。現在経巻と経筒が分蔵されている伝大分県出土例は、塊状であったものを近年開巻したもので、表紙と巻頭部分を若干汚損する以外は巻末までほぼ完全に遺存している。全巻朱書経であるが、その巻末は竹ヒゴに巻いて巻子の芯とし軸にみたてている。

なお、ヒゴという細さではないが、断面不整形の荒削りな素木の例が、堂ヶ谷経塚（愛媛県伊予市 久安六年 [1150]）から出土している（長さ24.1cm 径0.8cm）。麻紙が固着しており、竹製の八双（残存長15.5cm 幅0.2cm）も遺存している。

また、経塚出土紙本経の軸のあり方として注目される形に、「無軸」がある。無軸の例として、朝熊山第三経塚（三重県伊勢市 平治元年 [1159]）出土紙本経、浄土寺経塚（京都市左京区 正応二年 [1289]）出土紙本経、松溪経塚（愛媛県西予市 徳治三年 [1308]）出土紙本経がある。

**巻き納めの姿** 軸木の簡素な形、あるいは無軸という姿に、伝世資料にはなじみのない経塚出土紙本経の特徴を見てきたが、この軸の形以外にも注目される要素がある。それは、巻き納めの形である。

経塚から出土した紙本経は、その巻納めのあり方について、巻首から巻き読誦し終えた状態、すなわち、巻末を表面に出して埋納されるのが一般的であると指摘されている。しかし、同時に、その意図はなお解明に至らないことも指摘されている（『経塚遺宝』375頁）。以下、特殊な軸装の形をもつ3件の事例について、『経塚遺宝』第一部（経塚と遺物）「地域別主要経塚遺物」中の稲垣晋也氏による解説を抜粋引用し、具体的様相を確認しておきたい。

### 三重県伊勢市朝熊山第三経塚（平治元年 [1159]）

13巻の経巻が遺存していた。太巻（径約2.4cm）10巻、細巻3巻がある。もとは13巻を一括して和紙で巻き、紙紐で3段に縛ったらしい痕跡が包紙に残る。太巻10巻は、法華経8巻および開結の2巻（無量義経・観普賢経）と考えられているもので、うち3巻が開かれている。太巻は、割り箸状の軸木2本で巻頭を挟み、巻きあげた上で中央を別の細い紙紐で縛っている。したがって、読み終わった状態で巻いてある経巻の奥書は表に出ており、かなり傷んでいる。

無軸であったのは細巻の3巻である。軸木を用いない3巻は、般若心経1巻、一切如来心中心真言と随求陀羅尼の小呪1巻、仏頂尊勝陀羅尼1巻で、いずれも幅1.5cmほどに折りたたみ、中央を幅3mmほどの

紙紐で結んでいた。心経にはこの上から金剛界五仏の種子を朱書し、仏頂尊勝陀羅尼には別記の奥書がある（『経塚遺宝』317頁）。

### 京都市左京区浄土寺経塚（正応二年 [1289]）

経巻は、楮紙に朱墨で書写された法華経ほか17巻である。巻き方は、巻末より巻いたものも2巻あったが、他は書写するにしたがって巻初から巻いている。特に注目すべきは、経軸を用いない代わりに、巻きはじめを1.5cmほど折り返し、これを細かくたたんで軸の代わりとしている点である。ある程度固く巻いたのち、錐で穴をあけ、この穴に米粒くらいの紙礫を詰めて巻き戻らぬように栓をして、またいくらか巻いては、同様の作業を繰り返している。経巻の上部、4行目毎くらいに見える白い孔はその栓の痕跡である。巻きあがったところで、紙の端を0.5cmほどの幅で半分まで裂き、これを巻きつけて帯封としている（『経塚遺宝』312～313頁）。

### 愛媛県西予市松溪経塚（徳治三年 [1308]）

出土した経巻は、法華経47巻分（朱書35巻・墨書10巻・朱墨書継2巻）である。発見時の混乱で一巻が散逸したとみられており、本来、法華経六部48巻を、同形の銅板製鍍銀経筒2口に3部ずつ納めていたと推定されている。楮紙を用いた経巻には、各巻とも軸木がない。写経後いったん巻き戻し、第一紙の端を下から三分の二ほど裂き、これを左へまわして上から挟み込んで留めている（『経塚遺宝』336～337頁）。

**出土軸装の特徴** 『経塚遺宝』に導かれながら、経塚出土紙本経における巻子の軸装の特徴を整理した。そして、その過程において、簡素な軸木の形や、巻き納めの姿の多様性など、埋められることが織り込まれている軸装には、伝世資料とは異なる要素が多々あることを確認した。

経塚から出土した巻子の表具において確認することができた諸相は、思井堀ノ内遺跡の中世墓に副葬されていた掛幅の表具にみる簡略化された形についても、全く想定できない形として排除する必要がないことを示しているといえよう。

すなわち、思井堀之内遺跡の中世墓に副葬されていた掛幅装絹本著色画の表具に見られる、裏打ちがない、丸棒の両端に赤色顔料が塗布されている、あるいは、切り合せのある丸棒の一端にのみ漆塗りが施されている、主軸に沿って赤い線が引いてあるなどといった特徴は、完成された今日の日本の表具の形と対比すると理解がむずかしい要素であるが、土に埋められることを前提として製作された軸装の特殊性として位置づけるならば、表具の一つの形として理解しうるといえる。

## 3 経塚出土絹本および彩絵資料

**出土絹本の類例** 紙本の経巻や願文がきわめて良好な状態で遺存していた高野山奥院経塚には、絹本墨書種子曼荼羅3面も良好な状態で遺存していた（『経塚遺宝』298～300頁）。

三十六坪に折り畳んで、上から金胎・法華の順に重ね、内筒の底に敷いてあったが、3面とも広げることができる。基底材の剥ぎ合わせ方や、周縁の始末の仕方が判明している点でも貴重な資料である。

・**絹本墨書胎蔵界種子曼荼羅** 縦50.2cm、横46.2cm、平絹2枚を縦に合わせ、周囲をまつり縫いして一枚の絹地としている。界線、円相、胎蔵界諸尊の種子のほか、菱文の地文や獅嚙文らしきものが墨書され

表3 彩絵および金銀・雲母を用いた装飾のある経塚出土遺物

番号	遺物の種類	出土地	時代	基底材	遺物の形状・寸法および遺存状態 顔料の種類・モチーフ等	所蔵者	奈良博1977 『経塚遺宝』	
							掲載頁	No.
1	経筒	福岡県太宰府市 太宰府天満宮経塚	平安後期	土製経筒	白色顔料による下地塗が施された素焼き円筒形経筒の身側面から内面上部にかけて、仏像が描かれている。磨滅・剥落しており、現在では、中尊の一部と左脇侍半身がわずかに見えるのみであるが、金箔と赤・緑などの彩色が遺存している。蓋にもわずかながら彩色の痕跡がある。経筒の総高31.8cm、身口径11.7cm、蓋上面径10.8cm、底裏に久安三年（1147墨書）紀年銘がある。	個人蔵	416 ～417	144
2	檜扇	愛媛県今治市 奈良原山経塚A経塚	平安後期	檜薄板	雲母地に彩絵がある檜扇。上部と鳥形金銅金具を用いた要周辺のみ遺存、中央部は腐蝕している。中庭左手に百花爛漫の梅の大樹を配し、冠を戴く引目鉤鼻の貴人が、烏帽子姿の従者に傘をさしかけさせて、樹蔭から右手の門に向かい歩む様が描かれている。また、扇の裏面にも、表面の絵が反転した形でうつっている。23橋からなる檜扇は、親橋も檜の薄板。	奈良原神社	331 ～334	24 -7
3	檜扇	愛媛県今治市 奈良原山経塚B経塚	平安後期	檜薄板	白銅製の親橋と21橋の檜薄板（縦30.3cm、幅3.36cm）からなる完形品の檜扇一柄。表裏とも雲母引き。	奈良原神社	331 ～334	24 -18
4	檜扇	岡山県倉敷市 安養寺第一経塚	平安後期	檜薄板	骨の小片十余枚を残すのみの残欠。発見後しばらくはわずかに絵画の痕跡がみとめられていた。	勝福寺蔵	322 ～323	18
5	檜扇	鳥取県東伯郡湯梨浜町 伯耆一宮経塚	平安後期	檜薄板	六橋分の残欠。彩絵の大和絵の籬の一部がみられる。経筒銘文（15行236字）中に康和五年（1103）紀年あり。	倭文神社	325 ～326	20
6	蝙蝠扇	和歌山県田辺市 高尾山第二経塚	平安後期	紙	漆塗骨5本と、折りたたんだ幅が2センチほどの地紙断片。雲母引きに金銀の切箔をちりばめた地紙に彩絵が遺存する。散る松葉と、一もとの木の幹がわずかに判明する。	東京国立博物館	30	5 -31
7	高杯	和歌山県 伝 白浜経塚	平安後期	木製高杯	天板・軸・基台の三部分を結合させた木製高杯大小3基が出土。うち、2基（高11.3cm・天板径16.0cm、高11.0cm・天板径16.2cm）に彩色花文がある。他の1基は残片。経塚出土高杯の唯一の事例だが、経塚の実態・埋納状態は不明確。	奈良国立博物館	448	206 -2
8	経典 表紙絵 見返絵	和歌山県伊都郡高野町 高野山奥院経塚	平安後期	紺紙	蓋表に天永四年（1113）紀年銘が陽鑄されている銅経筒内に、類まれな良好な状態で保存されていた、外包紙と経帙に巻かれた13巻の経巻の見返絵（釈迦説法図）および表紙絵（宝相華唐草文様）。いずれも金泥・銀泥による。	金剛峯寺	298 ～300	2
9	経典 表紙絵 見返絵	奈良県吉野郡天川村 金峯山・藤原道長経塚	平安後期	紺紙	長徳四年（998）、寛弘四年（1007）の紀年銘ある紺紙金字経巻および紺紙金泥見返絵残欠合わせて20余例が各所に分散し伝えられている。紺紙に銀泥で界線を施し金泥で経文を書写した経巻は、いずれも下半部が腐蝕しているが、見返しに金泥で釈迦説法図が描かれている。見返絵残欠には、銀泥蓮華唐草文様（表紙文様の反転付着）、金泥による鈕をなびかせて飛ぶ琵琶や散花、樹木、山の山稜、靈鷲山を背にした釈迦説法会とその左方の岩窟内に坐す老人などが描かれている。	金峯神社 金峯山寺 東京国立博物館 五島美術館 個人蔵	296 ～298	1
10	檜扇	三重県伊勢市 朝熊山経塚	平安後期	檜薄板	要の部分は朽ち、留金具も欠失しているが、漆塗りの親骨一枚と檜薄板31橋を残しており、当初の形状をおおむね知ることができる。檜板一橋長28.8cm、幅2.4cm。白色地に、墨・朱・緑青・群青で彩絵。寺社の景色を想わせる堂宇や籬を描くが、剥落が多く埋経時の華麗な片鱗をうかがわせるのみで、全容は定かでない。	金剛証寺	447	204
11	蝙蝠扇	三重県伊勢市 朝熊山経塚	平安後期	紙	竹製黒漆塗の骨19本で一柄をなす。骨最大残存部分長29.7cm、幅1.4cm。紙の部分はほとんど腐朽し、骨の部分に痕跡をとどめるのみの残欠であるが、紙片・骨の全面に大小の金切箔・野毛・砂子が散らされている。	金剛証寺	447 ～448	205
12	檜扇	岐阜県瑞浪市 桜堂経塚	平安後期	檜薄板	長さ13.7cm～18.2cm、幅約2.4cm。残片一括資料であるが、金銀箔ちらしと絵文様の二種がみとめられる。	東京国立博物館	352頁	38
13	檜扇	千葉県千葉市 千葉寺経塚	平安後期	檜薄板	幅1.3cmの断片一括。黒色漆地に赤色漆をかけ、金銀箔を散らす。	県立千葉高等学校	363 ～364	48
14	蝙蝠扇	千葉県千葉市 千葉寺経塚	平安後期	木	残欠。長さ9.0cm、幅0.7cmの一片は、素木に雲母地を残す。幅0.5cmの一片は、赤色漆地に金銀箔を散らす。	県立千葉高等学校	363 ～364	48
15	木片	埼玉県熊谷市 妻沼第三経塚	平安後期	薄板	木片は4.3cm×2.9cm、三個の小孔を穿つ薄い板状のもので、表面に雲母が塗られている。ほかに棒状の木片2点あり。	東京国立博物館	362 ～363	47

ている。

・絹本墨書金剛界種子曼荼羅 縦52.0cm、横47.2cm、平絹地の右側と下に細長い平絹を縫い付けて一枚の絹地としている。3面のうち、一番上にあつたため、経巻などの軸端が当たり、十数か所孔が開いている。接ぎ合された3枚の平絹のうち、もっとも大きな縦44cm、横50cmの平絹地に、界線と円相、金剛界諸尊の種子を墨書する。細長い裂の一枚には、各種の真言・陀羅尼・小咒が墨書されている。

・絹本墨書法華種子曼荼羅 縦39.0cm、横46.0cm、縦に2枚縫い合わせた平絹地の左端に、無地の細長い絹地を縫い付けて、一枚の絹地としている。縦に2枚接ぎ合わせた部分に、界線と円相、法華曼荼羅諸尊の種子を墨書する。

**出土彩絵資料** 埋経の軸装を確認する過程において、卷子の表紙（第2図4②）、あるいは見返しと呼ばれる表紙裏部分（第2図4③）に、筆を用いて描かれた絵画が良好な状態で遺存している事例を確認した。見返絵は、伝世作品において多くの名品を見ることができるが、出土品においては、限られた埋経のみ見ることができる。

見返絵が描かれている埋経として、高野山奥院経塚の紺紙金字法華経ならびに開結十卷、紺紙銀字般若心経・阿弥陀経一卷、および、金峯山藤原道長経塚出土紺紙金泥見返絵残欠が知られている。これらには、経典の内容に即して、釈迦説法図や琵琶、散華、樹木、山稜などが描かれており、見返絵の表側である表紙部分にも、金泥あるいは銀泥で宝相華唐草文様あるいは蓮華唐草文様が描かれている。

さらに、見返絵・表紙絵以外の出土彩絵資料を求めて『経塚遺宝』に目を通すと、遺存状態の程度を問わなければ、土製経筒、木製高杯、檜扇、蝙蝠扇地紙に、筆で描かれた著色画の出土事例をみいだすことができた（表3）。いずれも平安時代後期の資料である。

**絵画表現の転写** 経塚出土彩絵資料を確認する過程において、思井堀ノ内遺跡から出土した軸木に巻き納められた著色画の構造理解を助ける重要な要素を見出すことができた。

絵画表現の転写である。開巻された埋経の見返絵に表紙を飾る唐草文様が反転付着している例、檜扇表面の絵が裏面に転写している例がある。これらは、基底材に膠で固定された金泥・銀泥・顔料などが、長い年月の間に、相対する面に転写してしまった痕跡で、遺物の形状に関わらず、顔料や金銀で装飾された出土品を観察する場合には、重なりや接触による転写の可能性を念頭に置く必要があることを示す基準資料である。そして、これらは、思井堀ノ内遺跡から出土した軸において観察された、顔料や截金の層的重なるの観察結果を側面から支える出土事例である。

#### 4 埋められた絹地と木

**土中の有機質素材** 有機質素材から作り出された形あるものは、食物連鎖の大きな環の中に存在しており、分解者と呼ばれる菌類によって、最終的に水や二酸化炭素などの無機物に分解される（高妻1998）。したがって、太陽光線にさらされることがないため紫外線による劣化が抑えられる地中であっても、酸素が遮断されていない環境においては、動植物に由来する素材から作られた遺物は、菌類に食べられてしまい、大半が消滅してしまう。日本列島の台地上など、水はけの良い土地に営まれた遺跡の埋没環境は、その多くがこのような環境下にあるといえる。したがって、台地上の遺跡から出土する遺物の多くが、粘土



や岩石・鉱物などに由来する土器や石器、および、玉などの石製品・ガラス製品・石製品や金属製品である。

一方、低地の発掘調査では、しばしば大量の木製遺物が出土する。地下水位が高い埋没環境では、酸素が十分でないことから分解者である腐朽菌の活動が抑制され、分解がきわめて緩慢に進行するため、長い年月を経てなお、木製遺物は形をとどめることができる（高妻2002）。しかし、そのような木製遺物が残りうる環境にあっても、紙や麻・絹などの染織品、皮革製品等が出土することはほとんどない。

今日の日常の生活において、絹は虫に食われやすく、和紙は比較的強く、木材にいたっては千年をこえて風雪に耐えうると経験済みであるように、それぞれの有機質素材自身がもつ耐久性には大きな開きがある。摩擦や押圧に対する抵抗力の違い、バクテリア・紫外線・温湿度変化に対する耐性など、それぞれの素材がもつ強さの違いが、遺跡から出土する遺物の遺存状態に偏りをもたしている。

思井堀ノ内遺跡という台地上に営まれた遺跡の中世の木棺直葬墓には、被葬者を囲むように納められた様々な副葬品が遺存していた（表1）。そのうち、土中において分解されることなく出土した有機質の素材について、第Ⅱ部で報告する化粧道具類をふくめて記すならば、木と紙と絹を掲げることができる。

一方、これらの副葬品が納められていた木棺については、土層の違いとしてその痕跡が検出されたものの、棺材自体は完全に消滅していた。そのような埋没環境を思うとき、脆弱な素材である木や紙や絹、とりわけ、本稿に関わる遺物でいえば、掛幅装絹本著色画の絹絵について、根の攪乱や雨水の浸透にさらされていたにもかかわらず、残欠となりながらも、よくぞ形を留めていてくれたとの思いを強くする。

**至近の環境** 絹本や紙、あるいは木製品が、土中において遺存できた理由について考えをめぐらせるならば、それらの周囲に腐朽菌の活動を抑制する要因があったという想定に思い至る。

そのような観点から、より広く出土品を思い浮かべると、金属製品に付着するという形で遺存している紙や織物の断片や痕跡を、様々な遺跡の報告例に見いだすことができる。思井堀ノ内遺跡中世墓においても、蓬萊鏡上面に紙と染織品2種、木製台座が密着して遺存しており、また、蓬萊鏡の下方には断片化してはいるものの櫛や帖紙などが遺存していた。

経塚は、低地以外に立地する遺跡のなかでは、有機質遺物の遺存が際立っている。とはいえ、最も大切な書写された経典は消滅してしまい、経筒のみが出土することのほうがはるかに多い。経塚においても、開卷できるほどに良好な状態で紙本経が遺存しているのはごく一部であり、それらは、銅製経筒内に納められ丁寧に封じ込められた埋納当時の状況が破られることなく保たれてきた希有な事例である<sup>12)</sup>。

思井堀ノ内遺跡中世墓における軸の出土状況をみると、軸の周囲に、銅製の容器、あるいはその他の金属製品が存在していた形跡はまったくない。そのようななかで、絹地遺存の鍵として思い浮かぶのは、絹地に塗り込められた顔料である。絹絵に用いられていた顔料には、成瀬正和氏の分析調査により、朱・岩緑青・鉛白色物質などが含まれていると確認されている（本報告293頁）。これらの無機顔料の密着が、かろうじて絹絵を遺存させうる環境を形成していたと推測することができるのではないだろうか。

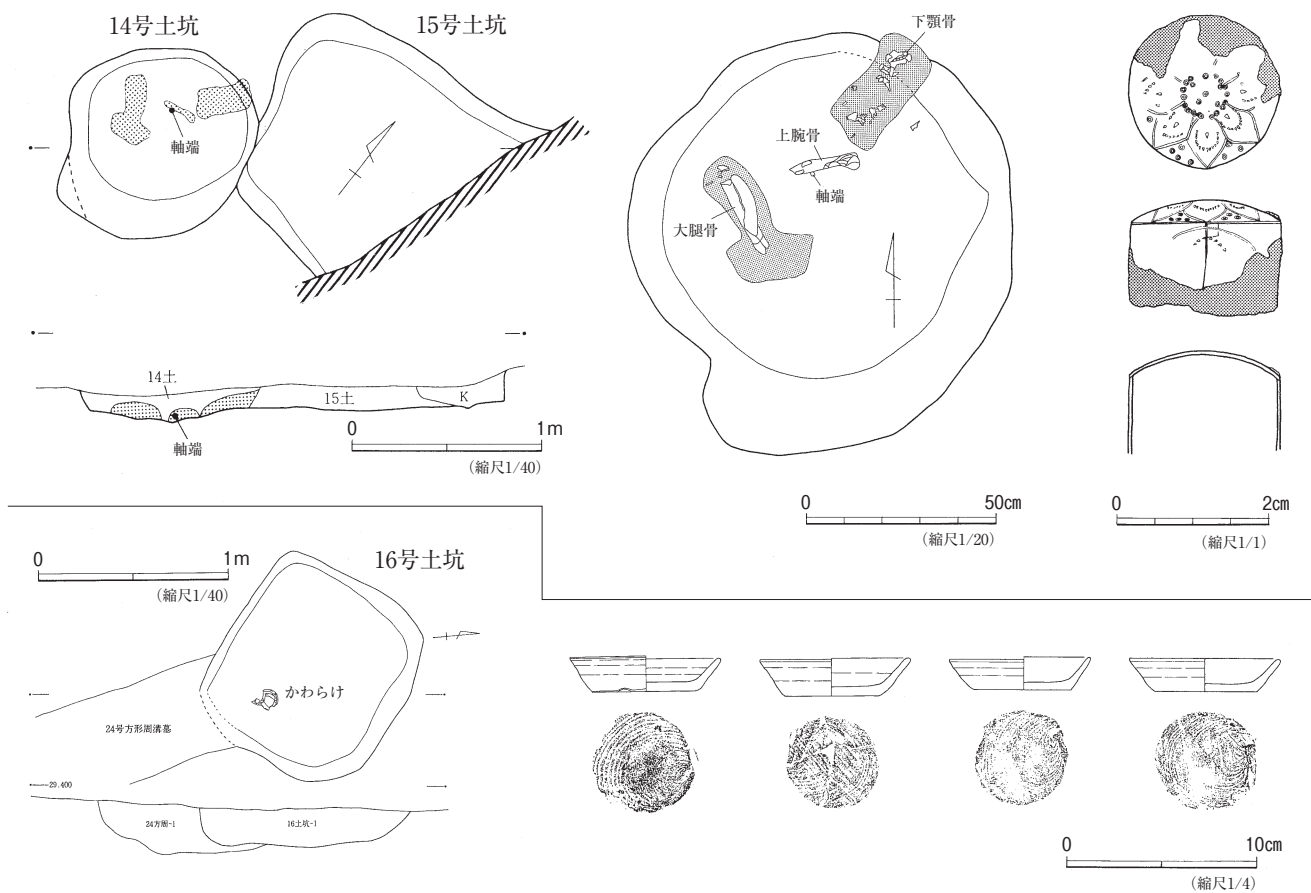
顔料が絹地の劣化を遅らせているのではないか、という想定は、裏彩色がほどこされた軸2の絹絵のほうが、裏彩色のない軸1の絹絵よりも遺存状態がよい点、および、中島博先生からご教示いただいた、伝世の絵画作品において、絹地の余白部分は、顔料が賦彩された部分よりも傷みがすすんでいる事例が多く見られるという様相とも矛盾しない。

このように考えてよいならば、逆に、葬堂という環境下において傷みながらも遺存していた中尊寺金色堂清衡棺に納められていた絹本墨画像の存在が示すように、顔料を用いない絹本あるいは紙本の絵画が土壌に納められていた場合、あるいは顔料を用いて描かれていたとしても、広げられた状態で土壌内に副葬されていた事例があった場合、それらはあとかたもなく消え失せてしまうと理解できる。

**軸端出土土壌** 絵画副葬の裾野の広がりについて、可能性を直接確認できる出土品は見いだせていないが、注目される調査事例として、金銅製軸端が出土した千葉県袖ヶ浦市境遺跡第3次（平成5年度）調査区内の中世墓の様相をみておきたい。

台地上、縁辺部にある4基の中世土坑墓のうちの1基、14号土坑は、円形に近い平面をもつ土坑である。規模は一辺1.00m、検出面から底面までの深さは0.14mであった。出土した副葬品は軸端1点のみであるが、調査時に遺存していた土坑の深さからみて、軸端1点のみが副葬されていたと限定する必要性は低い。遺存していた人骨は壮年の男性と鑑定されている（梶ヶ山・馬場1995）。おおむね北枕西面するかたちで、側臥屈葬されていた被葬者の上腕骨付近に、金銅製軸端1点があり、経典を副葬した事例と考えられている（鈴木1995）。

鎌倉時代から室町時代には、仏像に仏画を納入することが盛行するが（倉田1973）、その大多数は紙本



〈出典〉 鈴木久美子 1995 『境遺跡発掘調査報告書 第3次調査』 財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第106集  
 上段（左）14・15号土坑実測図 22頁 第13図 （中央）14号土坑の人骨遺存状況と軸端出土地点 23頁 第14図 （右）金銅軸端 23頁 第15図  
 下段（左）16号土坑実測図 24頁 第16図 （右）16号土坑出土かわらけ 25頁 第17図 （一部改変）

第13図 千葉県袖ヶ浦市境遺跡の中世墓と副葬品

墨摺であり、絹本著色画が像内に納入された事例はごくわずかである。日本の中世における仏画あるいは経典の副葬という行為が、具体的にどのような広がりをもっていたのかを解き明かす資料の増加が待ち望まれる。

## 5 副葬された絹絵の背景

**画絹の幅** 思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓から出土した掛幅装絹本着色画の観察過程において、筆で描かれた具体的なモチーフを見いだすことはできなかった。しかしながら、これまでに確認してきたように、截金や裏彩色という本格的な技法を用いて描かれた絹本著色画であること、鎌倉時代後期という時代に営まれその後大きな人為的改変を受けていない遺構出土品であること、そして、一人の女性の亡骸をおさめた墓の棺内、すなわち埋葬儀礼の実際の場に持ち込まれた掛幅であることから、本出土資料の主題に関して、仏画の可能性を十分に考えることができるという結論に至っている。

そして、以上のような属性をもつ本出土品に関して、もう1点おさえられている要素がある。画絹の幅である。軸木に巻き納められた状態で副葬されていた絹絵は、まさに残欠という遺存状態にあった。そのため、縦の寸法は不明である。しかし、表具裂を伴わない掛幅であることと、軸木の長さから、画面の横の寸法に関して、21cm～23cm前後とおさえることができる。

掛幅という形に仕立てられた、仏画の可能性を十分に考えることができる横21cm～23cmという寸法の絹本着色画とは、どのような性格をもつ絵画なのであろうか。

そのような課題に対し、管見に触れた範囲でのきわめて表面的な情報整理であることにためらいを感じつつも、出土品を理解するための試みとして、画面の横の寸法に焦点を当てて、伝世する小さな仏画の様相を垣間見ることとした。

**小画面の掛幅** 制作年代のわかる仏画に用いられた画絹幅（一副）は50cm前後のものが多く、大きな画面の場合には、さらにこれを接ぎ合わせて幅広の画面とすることが通有である（有賀1996）。すなわち、思井堀ノ内遺跡から出土した絹絵の画面幅は、一般的に用いられていた画絹幅の半分ほどである、ということができる。

とはいえ、本格的な絹絵の仏画のなかにも、比較的小さな画面をもつ名品が伝えられている。具体例として、横26.3cmの「二河白道図」（重要文化財 鎌倉時代 13～14世紀 絹本著色 縦71.0cm 奈良国立博物館）や、横30.7cmの「普賢菩薩像」（重要文化財 平安時代後期 12世紀後 絹本着色 縦62.0cm 奈良国立博物館）を掲げることができる（奈良博1993）。

また、数多くの作品が伝えられている中世の仏画の中で、絵師以外の手になる作例に、小さな掛幅を見ることができる。足利尊氏の自画自賛による「地藏菩薩像」二幅である。絹本と紙本、各一幅の寸法は、前者が横29.2cm（鎌倉市指定文化財 文和五年〔1356〕 絹本墨画 縦57.0cm 高德院）、後者が横24.2cm（鎌倉市指定文化財 承和五年〔1349〕 紙本墨画淡彩 縦69.0cm 浄妙寺）で、ともに稚拙味にあふれているが、深い信仰に基づき描かれたことがわかる武士の手による絵画として紹介されている（村野2006）。さらに、比較する範囲を紙本の高僧の肖像画にひろげるならば、横16.3cmの「大道和尚像」（重要文化財 室町時代 明德五年〔1394〕 紙本墨画 縦47.0cm 奈良国立博物館）や、横15.8cmの「法然上人像（信実御影）」（鎌倉時代 14世紀 紙本淡彩 縦26.3cm 京都・知恩院）に小さな掛幅をみることができる。

前者は禅宗の肖像画であるが、威儀を正した礼拝用の頂相ではなく、軽妙自在な筆線で描かれた墨画で、図上の讚から、淡路の安国寺に入った大道和尚の徳を慕う領主が大道和尚の弟子であった絵師に描かせた作品であることがわかる（中島1993）。後者は現存する法然上人像としては最も小さな作品のひとつであり、「足曳御影」や「鏡御影」といった横80cm前後の大幅の法然上人像に対して、個人的な受容のために描かれた可能性が推測されている（瀬谷2011）。

なお、画絹幅は小さいが小画面ではない特異な作品として、画絹を横に用い、全面に小さな尊像を配し、背景に彩色を施した「千体愛染王画卷」（平安時代 [12世紀] 縦19.2cm 長558.0cm）がある（泉1998b）。

**繡仏** 小画面の掛幅は、繡仏にも見ることができる。繡仏とは、絹地に描かれた墨線の下絵にそって一針一針糸を刺し、仏の姿を浮かび上がらせたもので、鎌倉時代以降、阿弥陀三尊来迎図、種子阿弥陀三尊図などの繡仏が盛行した（伊藤2005）。画面の周縁部分、表具裂に相当する区画を散華や蓮華唐草、蓮池などの刺繡で荘厳した例も多い。伊藤信二氏作成「阿弥陀三尊来迎図（斜め形式）繡仏リスト」および「種子阿弥陀三尊図繡仏リスト」によれば、鎌倉時代から室町時代の作例では、全体の幅が25cm～40cmほどの作品が数多く残されており、最も小さな画面をもつ作品として、表具部分を除いた本紙部分の幅が10.2cmという奈良県高林寺所蔵の「阿弥陀三尊来迎図繡仏」（室町時代 縦23cm）が掲げられている（伊藤2005 33頁表1・39頁表2）。繡仏の制作に当たっては、糸の代わりに黒髪を用いることも頻繁におこなわれており、小さな画面の制作の背景に、個人的な思いをみることができる遺品と位置づけられている（伊藤2005）。

**小さな厨子に納められた絵** 阿弥陀三尊図以外にも小さな繡仏がある。春日明神を象徴的に現わす「刺繡鹿曼荼羅図」（推定室町時代 本紙横9.4cm 縦16.4cm 東京・個人蔵）で、小型厨子内に貼られていた可能性が指摘されている（伊藤2005）。

そこで、小さな厨子に納められた絵画作品に目を転ずると、縦18.3cm、横18.5cmという小さな画面に極めて精緻に描かれた彩絵の「両界曼荼羅（厨子入り）」2面（重要文化財 平安～鎌倉時代 [12世紀] 奈良国立博物館）や、両手で捧げもつことができるほどに小さな「五輪塔嵌装舍利厨子」（重量文化財 鎌倉時代 [13～14世紀] 高さ20.0cm 奈良・不退寺）に納められている「鹿島立神影図」および「仏涅槃図」を掲げることができる。前者は、檜板に布着せをし、白土下地を施した上に描かれている（梶谷1993）。また、後者の2面の彩絵を納める厨子は、分解して携行することが可能であることから、個人の礼拝用の舍利厨子であったかと推定されている（内藤2007）。

**小さな仏画** 大切に守り伝えられてきた仏画の多くが、国家権力や貴族の保護を受けていた寺院や、宮中、貴族の邸宅などの儀礼の場で機能した掛幅である。それらには、その儀礼空間にふさわしい大きさが求められた（京博1998）。そのような傾向がみられるなかで、天平絵画の名品として知られる「吉祥天像」（国宝 奈良時代 麻布著色 縦53.0cm 奈良・薬師寺）は、横31.7cmと小画面である。新年の天下太平・五穀豊穡を祈願する奈良時代における国家的規模の法会の本尊であるにもかかわらず、礼拝像としては異例の小幅であると紹介されている作画の背景には、寸法を含めて強い規範となる經典の存在があったことが指摘されている（谷口2005）。

大切に守り伝えられてきた小さな仏画には、前掲「吉祥天像」のような特別な作例もあるが、一般的傾向としていうならば、小画面の掛幅とは、個人的な崇拜の対象として、身近に掛けることができ、親しく向き合うことができる大きさに仕立てられた絵画であるにとらえることができる。

さまざまな品質形状の小さい仏画の一角に、思井堀ノ内遺跡出土掛幅装絹本着色画を置くと、墓に副葬された絹絵の背景に、個人的な信仰の姿を読みとることができるといえよう。

**市の仏画** ところで、人々の声が聞こえてきそうな寺院門前の市の賑わいの場景が描かれている『餓鬼草紙』第二段（国宝 平安時代 [12世紀] 紙本着色 縦26.8cm 長538.4cm 京都国立博物館）には、様々な品質形状の仏画が、画中画として描かれている。

寺院の扉には、着色された仏画の掛幅が半ば吊るされた状態で二幅並べられ、その隣には、画面上端のみを扉に止めた、表具のない墨画ないし墨摺りとみられる大判の仏画が貼られている。扉には、仏像や塔の表現をもつとみてとれる小さな札のようなものが2枚貼られている。そして、門前で、市女笠をかぶった女性が右手に印判をもち、仏教版画とおぼしき版画をつくり売っている（小松1987）。

以上のような場景は、この絵巻が制作された平安時代後期には、仏画、とりわけ摺仏や印仏が人々の暮らしの中で身近な存在となっていたことを伝えている（菊竹1984）。

仏教版画の中には、彩色を施すなど絵画的様相をもつ作例も伝わるが、多くは、紙本墨摺りである。したがって、制作工程の簡易さという点で、木枠に張り整えられた絹地に向き合い、一筆一筆描かれた絵画とは、趣を異にする。しかしながら、仏教版画は、仏の図像の民衆の日々の暮らしへの浸透を具体的に伝える作品群であり、棺内という極めて個人的な空間にもちこまれた出土絵画資料の位置づけを考えるうえで、重要な示唆を与えてくれる。

**簡略な表具** 表具は解体が可能である。書画本体を傷めることなく解体できるという特性が、表具の修理や新調の基本にある。紙による裏打ちのない出土絹絵の表具について、墓に納めるために、もともとの表具を解体して簡略な形に改装したと、捉える余地はあるのだろうか。

そのような視点から、掛幅の表具をともなわない状態で長い時間伝世された稀有な絹絵の事例を確認することとした。仏像の像内に畳み込んで納入されていた仏画である。奈良国立博物館蔵の「千手観音像」（重要文化財 絹本着色 縦93.8cm、横39.5cm）は、平安時代末の「木造観音立像」（重要文化財 木造漆箔 像高53.0cm）のほっそりした像内に納められていた（中島1993、泉1998）。また、熊本市報恩寺蔵の絹本着色十一面観音像（重要文化財 縦80.0cm 横29.0cm）は、正元二年（1260）に造像された十一面観音像（重要文化財）に納入されていたものであるが、折り畳まれたうえで、建長六年（1254）の墨書銘をもつ木箱（縦18.6cm、横6.7cm、高6.2cm）に入れられていた（文化庁1998）。仏像内に納入されていた仏画2図について、表具に関わる情報の詳細を確認できなかったため、具体的な構造を比較することはできないが、再び掛け広げられて人々の目に触れることがなくなった仏画は、通常の掛幅の表具を伴わない形であったことがわかる。

副葬された掛幅に関して、本格的な表具を何らかの事情で解体し、簡易な形に改めた可能性が皆無であるとはいいきれない。しかし、墓の棺内空間のひろがりを見るならば、小画面の絹絵を副葬するに当たり、表具を解体する必要性は低く、ましてや、裏打ち紙をわざわざ剥がさねばならぬ事情があったとみるのは

不自然である。したがって、思井堀ノ内遺跡から出土した掛幅は、当初から、裏打ちや表装裂をもたないきわめて簡略な形であったと考えることができる。

このような簡略化された表具のあり方は、先に確認したように、経塚出土紙本経の軸装（奈良博1977）においても共通の要素を見出すことができるものであり、伝世を前提としない軸装特有の形と理解する余地がある。

**制作当初の画面** 内表で巻き納められているとはいえ、破断面の多い遺存部分を顕微鏡で観察する限りでは、思井堀ノ内遺跡から出土した絹絵には、画面に煤などの汚れが付着した痕跡はみられない。

白象塔の事例でみたように、画面に煤が多く付着している仏画は、埋納以前、灯明などの煤がただよう空間に掲げられていたことが想定される。逆に、くり返し用いられることが無く、長期間煤が付着するような場に掛け広げられる機会がなかった絵画は、顔料層はきれいな状態のまま巻き込まれ遺存している可能性が高い。

出土品については、長い年月土中にあったことによる汚れや傷みを識別しなければならないという課題があり、さらに、画面全体が残っていない状態では、判断をあやまる危険性がある。しかし、それらについての検討を経たうえでなお、顔料層表面がきれいであるならば、描かれた当初の画面の状態が変わらぬうちに、副葬されたと考えることができる。

**絹絵出土事例との比較** 掛幅装絹本着色画の副葬事例は、日本国内においては類例がない。そのため、比較資料として、思井堀ノ内遺跡の中世墓とは時代的にも地域的にも隔たりがある遺跡の諸事例について、概要を先に確認した。

数多くの絹本着色画が出土している内陸アジア乾燥地帯では、ハラ・ホト、蔵経洞、トゥルフアン地方の都城遺跡内出土品に、掛幅の仏画を見ることができたが、それらの大部分は、寺院にかかわる遺跡・遺構内に集積あるいは散在する形で遺存していたものである。また、塔内へ納置された掛幅装絹本着色画の遺存例が中国浙江省南部の白象塔にあることを確認した。

副葬された絹絵としては、一定地域に根付いていた文化・習俗にかかわる事例を確認できた。それらは様々な基層信仰の上に別個に展開されたものであるが、絵画の機能という視点からみるならば、大きく二つに分けることができる。ひとつは、葬送の儀礼の場で機能する絵画、もうひとつは、被葬者が死後の世界で楽しむための絵画である。

葬送の儀礼の場で機能する絵画は、西域アスターナ墳墓群の伏羲女媧図、あるいは中国古代の帛画、そして中尊寺金色堂清衡棺の曳覆曼荼羅において確認した。これらは、全く異質の文化・習俗を背景としながらも、被葬者を埋葬する際に必要とされた絵画という点では、共通する要素をみることができる資料である。なお、モシチェヴァヤ・バルカ墓は、仏画の可能性が指摘されている絹絵の副葬事例という点で同類といえるが、中国の絹文化圏の西のはずれにある遺跡の立地や、伴出した金銭出納帳の存在からみて、単発の様相が想定されており、副葬品の性格については明確ではない。副葬絵画の性格を把握するには、歴史的背景および遺跡・遺構・出土状態といった副葬品をとりまく周辺情報がいかに大切であるかを明示する事例である。

副葬された絹絵の機能という面からみて、葬送の儀礼の場で用いられた絵画と対照的存在といえるとい

えるのが、被葬者の来世の生活に彩りを添えるための観賞用の絵画である。内陸アジア乾燥地帯のアスタナ墳墓から屏風絵が出土しているほか、大陸東部の葉茂台7号墓、魯荒王朱檀墓、楊公佐墓、王鎮墓から掛幅、卷子、団扇に仕立てられたものが出土している。それらに描かれているのは花鳥画、山水画であり、被葬者が来世において、鑑賞するために副えられた品々と位置づけられている。

思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓に副葬されていた絹絵について、その主題を直接画面上で確認することはできないが、中島博先生のご教示をもとにすでに確認してきたように、鑑賞用の絵画ではなく、仏画である可能性を十分に考えることができる。したがって、花鳥画や山水画が副葬されていた大陸東部の副葬事例と、思井堀ノ内遺跡中世墓の事例を比較するとき、掛幅を副葬するという行為の背景に関して、それぞれに独自の思想や信仰が展開していたととらえることができる。

**臨終の場の絵画** 思井堀ノ内遺跡の中世墓に副葬された掛幅装絹本着色画は、どのような思想・信仰を背景として、葬送の儀礼の場に持ち込まれたのであろうか。

その課題について考える際、鍵となるのが、臨終の際、枕元に置かれたという伝承をもつ屏風の形に仕立てられた仏画の存在と、絵巻物に描かれている臨終の場面に設えられた掛幅の存在である。

枕本尊という伝承をもつ仏画として知られている作品の一つに、13世紀末の作と考えられている三曲一隻の屏風に描かれた「山越阿弥陀図」（重要文化財 鎌倉時代 絹本着色 縦101.0cm 横83.0cm 京都・金戒光明寺）がある。なだらかな山稜越しに、皆金色に表わされた阿弥陀三尊の半身が大きく描かれ、往生者を迎える本尊の転法輪印を結ぶ指先には、五色の糸の痕跡が残っている（大原2011）。

一方、臨終の場面に、掛け広げられた掛幅が描かれている絵巻として著名な作品に『法然上人絵伝（四十八巻伝）』（国宝 鎌倉時代 紙本着色 京都・知恩院蔵）がある。

平安時代の終わりに浄土宗を開いた法然（1133-1212）は、「南無阿弥陀仏」と仏の名を称える「称名念仏」を往生するための唯一の行として選び広め、あらゆる階層の人々の救済を願った。法然の事跡を記した『法然上人絵伝（四十八巻伝）』は、13世紀末から14世紀前半頃、法然の百年遠忌を契機として制作されたと想定されている作品であるが（若杉2011）、そこには、臨終をまつ人が西に向かって端座し、あるいは西を向いて北枕で横たわり、西方極楽浄土の阿弥陀如来が衆生を救うために諸菩薩をしたがえて迎えに来る、来迎をたのむ姿が描かれている（小松1990）。

『法然上人絵伝（四十八巻伝）』に描かれている往生の場面のなかで、往生者の近くに掛幅が懸吊されている情景は18例あり、法然の父漆時国、時国を夜襲した定明、執権北条時頼、御家人熊谷次郎直実をはじめ、公卿、尼、遁世僧、そして、湛空・源智・証空・隆寛・重源といった法然の高弟たちの往生の場面にその存在を見出すことができる（表4）。臨終の場面に描かれている掛幅は、合掌して臨終を待つ主人公の正面、壁や長押あるいは架台に、一幅ずつ掛け広げられているが、場面によって、大小さまざまに描き分けられている。

掛幅のほとんどは、絵巻の画面のなかで、主人公の左側に描かれており、西方からの阿弥陀の来臨を示す空間が描かれていると理解できる。少ないながら、合掌する主人公の奥に置かれたものもあるが、画中の主人公が西を向いて北枕で横たわった場合には、枕元に来迎図が懸けられていたことを示す光景とみることができる。

表4 国宝法然上人絵伝（四十八巻伝）に描かれた臨終の場の掛幅

巻・段	往生者	往生年	往生者の姿勢と位置	掛幅が懸吊されている場所	画面の向き	表具裂の表現の有無 (一は該当部分の描写なし)			描かれている畳短辺と比較したときの掛幅の幅の割合	備考	
						上	下	柱			
1 巻1 第四段	美作国久米南條 稲岡庄押領使	法然の父	漆時国	保延七年 1141	西向き、端座、合掌 (畳の上の病床)	室内の周縁 (白壁前/推定長押)	往生者の正面	東向き	— 無 無	7~8割	画面背景は青地
2 巻2 第一段	稲岡庄預所職 堀川院滝口武者	時国を夜襲した武者	明石定明	—	西向き、端座、合掌 (畳の上)	室内の中程 (架台)	往生者の右脇	南向き	— 有 無	5割程度	西側に縁台のある庵室西方は開放されている
3 巻12 第三段	公卿。権中納言。正四位。右京権大夫 法然に帰依した後白河法皇の命により、法然の画像を描いたという逸話が残る宮廷絵師		藤原隆信 (法名 戒心)	元久2年 1205	西向き、端座、合掌 (畳の上)	室内の中程 (架台)	往生者の正面	東向き	— — —	7~8割	架台の背面側から描かれているため画像は見えない。背面は白い面
4 巻12 第六段	藤原北家の一。野宮左大臣。後鳥羽上皇の討幕計画をいさめた		徳大寺公継	嘉禄三年 1227	西向き、端座、合掌 (畳の上の病床)	室内の周縁 (白壁前/長押)	往生者の正面	東向き	有 有 有	7~8割	
5 巻16 第五段	高野山 遁世僧	(少納言信西(通憲)の子)	明遍	貞応三年 1224	西向き、北枕仰臥、合掌 (畳の上)	屋内外の境界 (開放空間/推定長押)	往生者の正面	東向き	— — 無	7~8割	仰臥だが、顔のみ西に向ける
6 巻19 第四段	尼		聖如房		西向き、端座、合掌 (畳の上)	室内の周縁 (障子前/長押)	往生者の正面	東向き	有 有 無	7~8割	
7 巻26 第四段	鎌倉幕府5代執権 相模守。正四位下。		北条時頼	弘長三年 1263	西向き、椅子に座り、合掌 (畳の上)	室内の中程 (架台)	往生者の右脇	南向き	— 無 無	7~8割	
8 巻27 第五段	法然を師として剃髮出家した武蔵国御家人。		熊谷次郎直実 (法名 運生)	承元二年 1208	西向き、端座、合掌 (板の間の礼盤の上)	室内の中程 (架台)	往生者の右脇	南向き	— — 無	7~8割	仏画はかつて法然から拝領したもの
9 巻43 第二段	法然の弟子	(もと寂空上人の弟子、専修念仏の行者)	西仙房心寂	元久元年 1204	西向き、端座、合掌 (地面に敷いた板上の薦の上)	屋外に設けられた薬圃い念仏所の周縁 (開放空間/貫)	往生者の正面	東向き	有 有 無	推定 7~8割	
10 巻43 第三段	法然の弟子 (嵯峨)	(徳大寺の左大臣実能の孫、大納言律師公全)	正信房湛空	建長五年 1253	西向き、北枕側臥、合掌 (畳の上)	室内の中程 (推定長押)	往生者の正面	東向き	— 無 無	5割程度	
11 巻43 第四段	法然の弟子	播磨国朝日山に隠遁、のち洛東鳥部野	信寂房	寛元二年 1244	西向き、北枕側臥、合掌 (畳の上)	室内の中程 (推定長押)	往生者の正面	東向き	— 無 無	5割程度	
12 巻44 第四段	法然の弟子	(少納言資隆の三男。もと寂山の学僧。長楽寺の律師)	隆寛	嘉禄三年 1227	西向き、端座、合掌 (畳の上)	室内の周縁 (白壁前/推定長押)	往生者の正面	東向き	— 無 無	5割程度	来迎図に繋がれた小さな五色の幡の足を両手に持っている
13 巻44 第六段	法然の弟子	(入道少納言通憲の子、俗名信濃守足憲)	遊蓮房円照		西向き、端座、合掌 (畳の上)	室内の周縁 (開放か不明瞭/長押)	往生者の正面	東向き	有 有 有	7~8割	円照愛用の浄土曼荼羅図(一鋪半)。臨終の場面は吹抜屋台で描かれている
14 巻45 第一段	法然の弟子	(備中守平師盛の子、重盛の孫)	勢親房源智	暦仁元年 1238	西向き、北枕側臥、合掌 (畳の上)	室内の中程 (架台)	往生者の正面	東向き	— 無 無	5割程度	
15 巻45 第三段	法然の弟子	造東大寺勸進職	俊乘房重源	建久六年 1195 (備考参照)	西向き、北枕側臥、合掌 (畳の上)	室内の周縁 (障子前/推定長押)	往生者の枕頭	南向き	— 無 無	5割程度	重源の没年は建永元年(1206)
16 巻47 第四段	法然の弟子 (西山、粟生光明寺を継承)	久我家の出身。恭敬修の僧	善恵房証空	宝治元年 1247	西向き、端座、合掌 (畳の上)	室内の周縁 (障子前/推定長押)	往生者の正面	東向き	— 無 無	7~8割	善恵房は沙門源弘の夢に十一面観音の化身として出現
17 巻48 第五段	法然の弟子	(もと寂山の天台学僧、遁世僧)	念仏房	建長三年 1251	西向き、端座、合掌 (畳の上)	室内の周縁 (開放空間/長押)	往生者の正面	東向き	— 有 無	7~8割	
18 巻48 第六段	法然の弟子		真親房感西	正治二年 1200	西向き、北枕側臥、合掌 (畳の上)	室内の周縁 (障子前/推定長押)	往生者の枕頭	南向き	— 無 無	3割程度	

〈注〉 国宝法然上人絵伝(四十八巻伝)：紙本着色 鎌倉時代(14世紀) 京都・知恩院蔵  
 〈出典〉 小松茂美編 1990 『法然上人絵伝』上・中・下 (『続日本の絵巻』1・2・3) 中央公論社  
 〈参考文献〉 京都国立博物館 2011 『法然上人八百回忌 特別展覧会 法然 生涯と美術』



**光の透過** 絹は経年により黄変して弱くなる。また、虫にくわれて孔が開くことも多い。しかし、蚕の繭から繰り出される天然の長繊維から生み出された新しい絹地は、しなやかで光沢をもっている。そして、衣類その他さまざまな用途に対し、実用に耐えるだけの一定の強度を備えている。

画絹は、絵を描く際、絹目がそろろうように木枠にぴんと張り込まれるが、「透き写し」という下図を転写する技法や、裏側からも透けて見える図像の必要な個所に裏側から顔料をのせる「裏彩色」という技法が発達したことに示されているように、木枠に固定された画絹は張りがあり透けている。そして、著しく劣化が進行していない画絹は、木枠からはずした後にうねりやゆがみが生じることを別とすれば、短期間であれば、裏打ちがなくても形を保持できるだけの一定の強度をもっている。

ひとつの試みとして、紙による裏打ちのない画絹を掛け広げてみた。用いたのは、画材として現在用いられている機械織りの画絹である。その一端に丸棒を仮止めする。もう一方の端は、画絹の幅より少し長いやや薄手の角棒2本に挟んで仮止めする。合わさった角棒の両端、画絹から飛び出た部分を繋ぐように紐を取り付ける。とても表具とは呼べないほどに簡易な形に仕立てた画絹を軒先に垂下すると、風に揺らきながらも、木の丸棒の重みで平面を保ち垂下することができた。絹地自体の強度に全く不安はない。

垂下した画絹を見通すと、背景にある樹木や電信柱が影となってぼんやりと透けて見える。夕刻、太陽が少しずつ画絹の背後に回り込むと、低い位置から差し込む眩い西日が絹地を透過し、そして、影となる樹木を囲む背景は、夕景の色に染まった。裏打ちがない画絹には、このような光に満ちた場景を映し出すことが可能である。

裏打ちのない掛幅を垂下した時、背景に浮かび上がるこのような色と光が意図されたものであったのか、否かは実証できないことがらである。しかしながら、偶発的であった可能性も含めて想像することが許されるならば、西から差し込む光を背景とした来迎図の前に、心からの祈りを捧げる中世の人々がいた情景を思い浮かべることができる。

## おわりに

思井堀ノ内遺跡の中世墓から出土した2本の棒のようにみえた副葬品は、掛幅装絹本着色画であった。絵画資料として見るならば、まさに残欠であるが、台地上の遺構から出土した有機質素材の遺物という点では、良好な遺存状態をとどめているといえる。直接主題を示すモチーフを抽出することはできなかったが、発掘調査成果の全体像の中に分析鑑定成果を重ねるとき、その主題についての解釈として、仏画、なかでも来迎図の可能性を提示することができる。

本出土資料は、在地領主層が掛幅装絹本着色画を所有しており、それを埋葬の場にもちこみ被葬者とともに埋めたことを示す遺物である。同時に、来迎図の可能性を考えることができる、という主題についての解釈が首肯されるならば、絵巻に描かれている中世人の極楽浄土への往生を願う信仰の姿、臨終来迎を重視する儀礼のひとこまを具体的に伝える実物資料と理解することができる出土絵画資料である。

『法然上人絵伝（四十八巻伝）』の法然が往生する場面に、掛幅は描かれていない。また、信空など、法然の高弟の臨終の場面に掛幅が描かれていない例もある。ここで明確に伝えられているのは、掛幅といった目に見える装置を保有することが最も大切なことではないということである。しかし、心から求める人々にとって、臨終という場面において、来迎図が大切なものであったこともまた確かであることを絵巻は伝えている。

ところで、仮に、屋根裏や蔵の中から単独で再発見された資料に対して調査の縁が生じ、「棒状木製品」が「掛幅装絹本着色画」であると判明した、という状況を想定してみる<sup>13)</sup>。あるいは、出土品であっても、偶然の機会に採集された資料である場合、遺構の性格や時代を示す手掛かりを伴わない出土状況であった場合を想定してみる。そのような仮定を経ると、今回の調査において「棒状木製品」が、「掛幅装絹本着色画」であると判明したことの意義をより明確に示すことができる。

思井堀ノ内遺跡の掛幅装絹本着色画は、鎌倉時代後期の在地有力者層の館の傍らに営まれた墓から出土した。その墓は溝で区画され独立した空間を占有していた。区画された墓域内に埋葬された被葬者は女性であり、壮年後半から熟年で亡くなったと推定される。墓域の中央付近に掘り込まれた土坑の中に安置された木棺内の被葬者は、北枕西向き側臥の姿勢で葬られており、被葬者に対面する棺の西北隅、頭上付近と推定できる部分には鉄釘が1本打ちこまれていた。足元には青磁の椀と皿が伏せて置かれていた。被葬者の後頭部近くには、小型の木製台座や水晶片、染織品とともに蓬萊鏡や梳櫛、白磁皿といった化粧道具類が納められ、枕元には掛幅装絹本着色画が納められていた。直接土中に埋められた墓に関わる地上標識は遺存しておらず、発掘調査が実施されるまで、墓の存在はわからなかった。墓域および埋葬施設の一部は後世の攪乱を受けていたが、木棺直葬の埋土の状況から、副葬品などの出土状態について、一括遺物と認定できる。したがって副葬品の出土状態は埋葬時の状態を保持している。

以上のような、掛幅装絹本着色画をとりまく具体的な記述は、長期間にわたり多くの発掘調査担当者・整理作業担当者により積み上げられてきた遺跡全体についての調査成果があって、はじめてもたらされたものである。

思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓の埋葬施設内に副葬されていた掛幅装絹本着色画は、遺跡・遺構・一括遺物の総体としてとらえたとき、絵画資料としての遺存状態の悪さを越えて考古資料としての価値を

提示する。

#### 謝辞

中島博先生には、本出土資料について本格的な絵画であるとの評価を示していただいたことを出発点とし、資料名称および画絹・截金という要素や絹絵に関わる用語の確認、および、軸2の広範囲に観察される白い顔料層は裏彩色であるのご指摘、そして、白象塔の事例のご教示ならびに文献等の御恵与、軸木の色調と接着剤との関わりをはじめとする数多くのご助言、ご指導を賜りました。

谷口耕生氏には、日本国内における発掘調査出土品としては前例のない「副葬された絹絵」を理解する手がかりとして、曳覆曼荼羅、葉茂台遺跡出土事例、繡仏についてご教示いただき、報告の方向性を定める鍵となるご指導を賜りました。擱筆にあたり明記して心から感謝の意を表します。

## 注

- 1 西平井根郷遺跡については、流山市教育委員会により発掘調査が行なわれている。同遺跡においても、中世墓の調査事例があり、思井堀ノ内遺跡の墓制を考えるうえで注目すべき成果が報告されている。中世墓SK127は、主軸を南北にとる長方形の土坑墓で、長さ1.75m、幅0.55m、土壙内中軸線上、北よりの部分に菊花双雀鏡（径11cm、151.33g、鎌倉時代前期）と短刀1口が副葬されていた。鏡は鏡面を上にもうけて床面直上から出土したもので、鏡面全面に和紙が付着していた。さらに鏡面上には人骨片、植物繊維、麻紐と鉄片が遺存し、その下には柾目板状木製品の一部が遺存していた。また、鏡の南部、短刀との間にあたる地点の西方、土壙の壁際から、幅の狭い短冊状または棒状の輪郭をもつ木製品が1点出土している（北澤2003a・2003b・2011、流山市教委2009）。
- 2 中世以前の創建が伝えられる近隣に所在する寺院として以下の三寺が知られている（圭室編1992）。思井堀ノ内遺跡の南方1kmほど、台地の南端には、平安時代の創建を伝える真言宗東福寺がある。また、坂川の対岸、思井堀ノ内遺跡から直線距離で東南東へ1.7kmほどの小支谷が複雑に入りこんだ下総台地上には、本土寺（松戸市平賀）がある。本土寺の開創は文永六年（1269）、開基は日蓮に帰依した蔭山土佐守と伝えられる。開創当初の草庵が風水害で倒壊した後、建治三年（1277）、日蓮の檀越であった八幡荘曾谷郷の領主曾谷教信が現在地にあった地藏堂を法華堂に改め、日蓮の弟子で初期日蓮宗教団を隆盛に導いた日朗が迎えられて開山となった。本土寺から、南方へ約3.2kmの水戸街道沿いにある万満寺（松戸市馬橋）は、千葉頼胤が鎌倉極楽寺の忍性を招いて開いた真言律宗の大日寺を、正和元年（1312）に千葉貞胤・氏胤父子が夢窓疎石の高弟古天周誓を中興開山として招き改号、禅密兼学の道場としたといわれる（圭室編1992）。
- 3 本報告の対象である出土品の観察、ならびに、絹絵および表具に関わる具体的な観察結果の記述に際しては、主に下記の文献を参考とさせていただいた。

有賀祥隆 1996 『仏画の鑑賞基礎知識』 至文堂

泉 武夫 1998a 『美術館へ行こう み仏の絵に近づく』 新潮社

岡 岩太郎 2002 「絵画」『文化財のための保存科学入門』京都造形芸術大学編 角川書店

東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室編 2007『図解 日本画用語事典』 東京美術

西川杏太郎・増田勝彦 1997 「表具技術の記録」『表具の科学－特別研究「軸装等の保存及び修復技術に関する科学的研究」報告書－』 東京国立文化財研究所

また、参考文献・引用文献は、本文中の該当箇所に著者と刊行年をかつこ内に記し、各部末尾に掲載した文献一覧と対応させた。ただし、著者については、文献一覧との対応に混乱が起きない範囲で、（有賀1996、泉1998a、岡2002、芸大2007、西川・増田1997）などと略記した。なお、第7章の絹絵の出土事例の出典に関しては、各項末本文中に挿入し明記した。
- 4 切り合せ面の暗褐色の色調について、接着剤に由来する可能性があるのではないかという問題提起は、中島博先生からご指摘、ご教示いただいた。
- 5 奈良市興福寺旧境内北東隅の発掘調査において出土した80点余の経軸については、紙および布などの有機物の痕跡は認められなかったことから、軸木に紙本経が巻かれていたかどうかは明確ではないと報告されている（西藤2003）。この経軸は、室町時代の方形土坑（東西3m、南北2.1m、深さ0.9m）内に、地藏菩薩本願経を書写した柿経約26束分（約540枚分）とともに埋納されていた（西藤2003）。

80余点のうち、39点に切り合せの加工がある。半截部分を組み合わせて復元された軸木は14組あり、その復

元長は23cm～30cmである。切り合せ軸の径は0.8cm～1.4cm、軸端がすぼまるものと、小口を平滑に切り落とした形を呈するものがある。どちらのタイプも軸端には漆が塗られ、各片の長さの三分の二以上が半截されている。切り合せのない棒状品は44点ある。いずれも軸端に漆塗などの装飾などをもたない簡素なつくりであり、平均的な寸法は、太さ0.5cm前後、長さ30cm前後である（西藤2003）。

- 6 関秀夫氏が作成された「経塚の遺跡と遺物の地名表」には、「紙本経」出土事例が残欠・残塊を含めると150件以上、「経軸」出土事例が21件掲載されている（関1990 659～799頁）。なお、本報告第7章2で概観するように、「紙本経」のなかには木製の軸を伴わない事例も含まれている。
- 7 軸木表面に墨書がある中世以前の遺品として、奈良市春日大社に伝わる軸木が知られている。神護景雲年間に常陸の鹿島神宮より武甕槌命が白鹿にのって春日御蓋山に姿をあらわし春日第一殿の祭神（春日明神）となったという春日大社の草創を物語る伝承を描いた「鹿島立神影図」（縦106.5cm 横35.9cm）の旧軸で、現在は取り外されて保管されている。制作年（永徳三年 [1383]）と制作の事情、絵師の名前が墨書されている（春日大社社務所1973、奈良博1995）。なお、軸木の内剥面に墨書がある事例もある。兵庫県尾道市浄土寺の絹本着色両界曼荼羅図の旧軸には、制作年（文保元年 [1317]）と絵師の名前が記されている（中島1985）。また、京都府木津川市海住山寺の絹本着色阿弥陀浄土図の軸木には、紀年をとともう別筆の修理銘が計3か所に記されている（北澤2012）。
- 8 日本では奈良時代頃までは、麻布が基底材として用いられていた。平安時代からは絹が主流になる（東京芸大2007）。なお、麻布が基底材として用いられている作品の現存例は少ないが、かつて東大寺法華堂に伝来した麻布着色「法華堂根本曼荼羅」（ボストン美術館）、正倉院宝物「墨画仏像」（すみえのぶつぞう）、国宝「吉祥天像」（薬師寺）などの名品がある。
- 9 綾織の絹地を基底材とした掛幅としては、紫あるいは紺の綾地に金泥・金銀泥で描かれた「両界曼荼羅図」（平安時代 神護寺／子島寺／上杉神社）、綾本着色「毘沙門天像」（鎌倉時代 知恩院）がある。額装「聖徳太子絵伝」（平安時代 東京国立博物館）、四曲屏風「法華経絵（旧宇佐八幡神輿障子絵）」（鎌倉時代 細見美術財団）も綾地に描かれている（文化庁1997）。
- 10 平絹を基底材として用いた絹本着色画の事例について、梶谷亮治氏による「普賢十羅刹女像」（重要文化財 鎌倉時代 [12～13世紀] 絹本着色 縦72.3cm 横39.1cm 個人蔵）の解説を引用し、確認しておきたい。

「普賢十羅刹女のうち、十羅刹女像が女房装束姿に描かれる例である。和装の十羅刹女像は、扇面法華経冊子（90・91）の表紙や、平家納経（84）の涌出品と観普賢経に描かれるのが知られる。おそらく平安後期の宮廷の女性の信仰の中から生まれたものであろう。本図は普賢菩薩像とともに描かれる和装の十羅刹女像としては現存するもっとも早い画像である。

細緻な截金文様と金泥彩色をあわせ使用するところから、製作は鎌倉時代に入ってからのもので推測される。とくに十羅刹女の表現が、近い時代の紫式部日記絵などの王朝物語絵を彷彿させる作り絵的なものであるのが注目される。なお、料絹には、一般の画絹ではなく、平絹を用いている。おそらく本図発願者の身近の人にゆかりの布地かとも想像される。

なお、こうした普賢十羅刹女像は、高貴な女性の供養のために、女房自らが描いたこともあったことが、『玉葉』養和二年（1182）正月十二日条からも知られる。」（梶谷2003）
- 11 本紙幅と軸木長が同じ事例として、岡岩太郎氏により、表具の古い形を伝える軸装の例として紹介されている如意輪観音坐像がある。この軸装は、昭和26年から29年にかけて行われた奈良市元興寺極楽坊本堂の解体修

理の際に、天井裏から発見された摺仏（縦61.4cm 横29.9cm）の軸装で、宋代版画の要素がみられる本紙の裏面には、貞応三年（1224）の墨書がある。上部は欠損しているが、下部に蓮唐草文様を刷った紙が貼り足されていて、幅と同じ長さの軸木に巻かれていた（岡2022）。なお、元興寺極楽坊の本堂や禅堂の天井裏や軒裏からは、印仏・摺仏・板絵・千体仏・柿経・経典・祭文・和讃・暦・塔婆・位牌など、極楽坊における中世の仏教信仰形態を伝える大量の仏教民俗資料が発見されている（菊竹ほか1974、菊竹1977）。

- 12 高野山奥院経塚（天永四年 [1113]）は、昭和39年、植樹中に偶然発見された経塚である。底石もなかったという無柵式の土坑内、地表下1mのところを経筒が直立状態で埋納されていた。経筒は、陶製外筒、銅経筒、漆塗檜曲物内筒という3重構造であったが、そのなかに、外包紙と経帙に嚴重に巻かれた13巻の経巻・作善目錄・願文が類まれな良好な保存状態で遺存していた。内筒の底には、経巻などの下に敷かれる形で3面の絹本墨書種子曼荼羅も遺存していた。一方、外筒と銅経筒の空隙に納置されていたものらしい紙本墨書の法華経および経軸は、残欠の状態であった。同じ経塚に埋められた埋経であっても、至近の環境の違いによって、紙本経の遺存状態が左右されると理解できる事例である（和歌山県教委1975、奈良博1977）。
- 13 伝世資料の再発見であっても、寺社空間の奥深くに納置されていた場合など、由来が明確な資料、とりわけ、納置・密封された状況を確認できる資料であれば、評価は全く異なるものとなる。

#### 引用文献・参考文献

- 天野 努 2006『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1－流山市思井堀ノ内遺跡（中世編）－』千葉県教育振興財団調査報告第549集 財団法人千葉県教育振興財団
- 石田茂作・矢島恭介 1927『金峯山経塚遺物の研究』皇室博物館学報第8冊
- 伊藤智樹・栗田則久・落合章雄 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2－流山市思井堀ノ内遺跡（旧石器時代～奈良・平安時代編）－』千葉県教育振興財団調査報告第635集 財団法人千葉県教育振興財団
- 稲葉政満 2002「紙」『文化財のための保存科学入門』京都造形芸術大学編 角川書店
- 大三輪龍彦 1985『鎌倉の考古学』考古学ライブラリー32 ニュー・サイエンス社
- 梶ヶ山真理・馬場悠男 1995「境遺跡第3次調査出土人骨」『境遺跡発掘調査報告書 第3次調査』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第106集 財団法人君津郡市文化財センター
- 菅野和博 2011「仏具について」『上人壇廢寺跡』須賀川市文化財調査報告書第59集 福島県須賀川市教育委員会
- 北澤 滋 2003a「埋葬されたのは鎌倉時代のお姫様？－流山市西平井根郷遺跡の調査から－」『第3回千葉県北西部地区文化財発表会～貝の今昔物語～』千葉県北西部地区文化財行政担当者連絡協議会
- 北澤 滋 2003b「東葛飾郡北部の中近世遺跡の調査・研究動向（関宿・野田・流山・柏・我孫子・沼南）」『房総中近世考古』第1号 房総中近世考古学研究会
- 北澤 滋 2011「古代から中世へ～国府と郡衙の中間にあった村（流山市）」『第7回千葉県北西部地区文化財発表会・巡回展 ムラから村へ－掘りおこす土地の歴史－』船橋市飛ノ台史跡公園博物館・千葉県北西部地区文化財行政担当者連絡協議会
- 研修道場用地発掘調査団 1983『研修道場用地発掘調査報告書－鶴岡八幡宮境内の中世遺跡発掘調査報告書－』鶴岡八幡宮
- 高妻洋成 1998「出土木製品の保存処理」『博物館学芸員教材テキスト－考古学・続編－』財団法人放送大学教育振興会

- 高妻洋成 2002「木材」『文化財のための保存科学入門』京都造形芸術大学編 角川書店
- 斉木秀雄 1993『佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
- 西藤清秀 2003『興福寺旧境内－県分庁舎建設に伴う調査－』奈良県文化財調査報告第78集 奈良県立橿原考古学研究所
- 鈴木久美子 1995『境遺跡発掘調査報告書 第3次調査』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第106集 財団法人君津郡市文化財センター
- 関 秀夫 1990「経塚の遺跡と遺物の地名表」『経塚の諸相とその展開』雄山閣出版
- 滝川ちか子 1996「宮城・市川橋遺跡」『木簡研究』第18号 木簡学会
- 永嶋正春 2011「上人壇廢寺跡出土軸端・金鼓等のX線調査」『上人壇廢寺跡』須賀川市文化財調査報告書第59集 福島県須賀川市教育委員会
- 流山市教育委員会 2009『中世の流山を探る 附.流山市内板碑集成』流山市博物館調査研究報告書26
- 奈良国立博物館 1977『経塚遺宝』東京美術
- 奈良国立文化財研究所 1986『平城宮木簡四』奈良文化財研究所史料第28冊
- 奈良国立文化財研究所 1990『平城宮発掘調査出土木簡概報』23－長屋王家木簡二－
- 奈良国立文化財研究所 1995『平城宮発掘調査出土木簡概報』30－二条大路木簡四－
- 奈良国立文化財研究所 1996『平城宮木簡五』奈良文化財研究所史料第42冊
- 奈良文化財研究所 2002『大和山田寺』（『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報第63冊）吉川弘文館
- 奈良文化財研究所 2004『平城宮木簡六』奈良文化財研究所史料第63冊
- 奈良文化財研究所 2010『平城宮木簡七』奈良文化財研究所史料第85冊
- 奈良文化財研究所 木簡データベース（奈良文化財研究所ホームページ）  
<http://www.nabunken.go.jp/Open/mokkan/mokkan2.html>、2012年2月
- 成瀬正和 2002『正倉院宝物の素材』『日本の美術』No.439 至文堂
- 成瀬正和 2002「顔料」『文化財のための保存科学入門』京都造形芸術大学編 角川書店
- 馬淵久男ほか編 2003『文化財科学の事典』朝倉書店
- 皆川隆男編 2011『上人壇廢寺跡』須賀川市文化財調査報告書第59集 福島県須賀川市教育委員会
- 横田賢次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 和歌山県教育委員会・高野山文化財保存会 1975『高野山奥之院の地宝』和歌山県文化財学術調査報告書第6冊
- 渡辺晃宏 1990「奈良・平城京跡」『木簡研究』第12号 木簡学会

〈絵画・表具・繡仏・摺仏・像内納入品等〉

- 有賀祥隆 1996『仏画の鑑賞基礎知識』至文堂
- 有賀祥隆 1997『截金と彩色』『日本の美術』No.373 至文堂
- 泉 武夫 1998a『美術館へ行こう み仏の絵に近づく』新潮社
- 泉 武夫 1998b「千体愛染王画卷（作品目録番号46作品解説）」『王朝の仏画と儀礼－善をつくし 美をつくす－』京都国立博物館
- 伊藤信二 2005『繡仏』『日本の美術』No.470 至文堂

- 江上 綏 1992『扇面画（古代編）』『日本の美術』No.319 至文堂
- 江里佐代子 1997「截金の技術と工夫」『截金と彩色』『日本の美術』No.373 至文堂
- 大原嘉豊 2011「山越阿弥陀図（作品目録番号111作品解説）」『法然上人八百回忌 特別展覧会 法然 生涯と美術』京都国立博物館
- 岡 岩太郎 2002「絵画」『文化財のための保存科学入門』京都造形芸術大学編 角川書店
- 春日大社社務所 1973『春日大社古神宝宝物図録』
- 梶谷亮治 1993「両界曼荼羅（厨子入り）（作品目録番号33作品解説）」『奈良国立博物館名品図録（増補版）』奈良国立博物館
- 梶谷亮治 2003「普賢十羅刹女像（出品目録番号93作品解説）」『女性と仏教－いのりとほほえみ－』奈良国立博物館
- 菊竹淳一ほか 1974『元興寺極楽坊Ⅴ』日本仏教民俗基礎資料集成 第5巻 中央公論美術出版
- 菊竹淳一 1977「印仏 摺仏 板絵 千体仏」『大和古寺大観』第3巻 元興寺極楽坊ほか 岩波書店
- 菊竹淳一 1984『仏教版画』『日本の美術』No.218 至文堂
- 北澤菜月 2012「海住山寺に伝来した一対の浄土図－貞慶の浄土観に関わる新発見－」『御遠忌八〇〇年記念特別展 解脱上人貞慶－鎌倉仏教の本流－』奈良国立博物館・神奈川県立金沢文庫
- 京都国立博物館 1998『王朝の仏画と儀礼－善をつくし 美をつくす－』
- 京都国立博物館 2011『法然上人八百回忌 特別展覧会 法然 生涯と美術』
- 久米康生 1995『和紙文化辞典』わがみ堂
- 倉田文作 1973『像内納入品』『日本の美術』No.86 至文堂
- 小松茂美編 1987『餓鬼草紙 地獄草紙 病草紙 九相詩絵巻』（『日本の絵巻』7）中央公論社
- 小松茂美編 1990『法然上人絵伝』上・中・下（『続日本の絵巻』1・2・3）中央公論社
- 瀬谷 愛 2011「法然上人像（信実御影）（出品リスト番号4作品解説）」『法然上人八百回忌 親鸞聖人七百五十回忌 特別展 法然と親鸞 ゆかりの名宝』東京国立博物館・NHK・NHKプロモーション・朝日新聞社
- 谷口耕生 2005「奈良時代の悔過会と造像」『古密教－日本密教の胎動－』奈良国立博物館
- 圭室文雄編 1992『日本名刹大事典』雄山閣
- 東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室編 2002『図解 日本画の伝統と継承－素材・模写・修復－』東京美術
- 東京芸術大学大学院文化財保存学日本画研究室編 2007『図解 日本画用語事典』東京美術
- 東京国立博物館・NHK・NHKプロモーション・朝日新聞社 2011『法然上人八百回忌 親鸞聖人七百五十回忌 特別展 法然と親鸞 ゆかりの名宝』
- 内藤 栄 2007「五輪塔嵌装舍利厨子（出品目録番号37作品解説）」『特別陳列 おん祭と春日信仰の美術』奈良国立博物館
- 中島 博 1985「修理報告 絹本着色両界曼荼羅図二幅 附 旧軸木二本」『学叢』第7号 京都国立博物館
- 中島 博 1993「千手観音像 木造観音立像（作品目録番号40作品解説）」『奈良国立博物館名品図録（増補版）』奈良国立博物館
- 中島 博 1993「大道和尚像（作品目録番号50作品解説）」『奈良国立博物館名品図録（増補版）』奈良国立博物館
- 中島 博 2001「金剛般若経（出品目録番号127作品解説）」『仏舎利と宝珠－釈迦を慕う心－』奈良国立博物館



- 奈良国立博物館 1993『奈良国立博物館名品図録（増補版）』
- 奈良国立博物館 1995『春日大社名宝展』
- 奈良国立博物館 2003『女性と仏教－いのりとほほえみ－』
- 奈良国立博物館・東京文化財研究所情報調整室編 2006『奈良国立博物館所蔵 国宝絹本着色十一面観音像』 中央公論美術出版
- 西川杏太郎・増田勝彦 1997「表具技術の記録」『表具の科学－特別研究「軸装等の保存及び修復技術に関する科学的研究」報告書－』東京国立文化財研究所
- 西山 厚 2002「法華経 卷八 運慶願経（出品目録番号98作品解説）」『大仏開眼一二五〇年 東大寺のすべて』奈良国立博物館
- 毎日新聞社手漉和紙大鑑委員会編 1975『手漉和紙』標本紙編 毎日新聞社
- 文化庁監修 1978『重要文化財』別巻Ⅰ像内納入品 毎日新聞社
- 文化庁監修 1978『重要文化財』別巻Ⅱ像内納入品 毎日新聞社
- 文化庁監修 1997『国宝・重要文化財大全』1 絵画（上巻）毎日新聞社
- 文化庁監修 1998『国宝・重要文化財大全』3 彫刻（上巻）毎日新聞社
- 文化庁監修 1999『国宝・重要文化財大全』4 彫刻（下巻）毎日新聞社
- 宮 次男・真保 亨・吉田友之 1995『角川絵巻物総覧』角川書店
- 村野真作 2006「地蔵菩薩像（出品目録番号14・15作品解説）」『特別展 武家の古都鎌倉－世界遺産登録にむけて－』鎌倉国宝館
- 山本 元 1993『表具のしおり－表装の歴史と技法－』芸艸堂（1922年刊行和装本『表具のしをり』の増補改訂版）
- 若杉準治 2011「法然上人絵伝（四十八巻伝）について [概説]（作品解説）」『法然上人八百回忌 特別展覧会 法然 生涯と美術』京都国立博物館
- 渡邊明義 1999『古代絵画の技術』『日本の美術』No410 至文堂

表5 巻頭図版 (PL.1 ~ PL.5) 撮影データ

PL.	写真No.	内 容	備 考	掲載 倍率	顕微鏡画像				
					画像索引			撮影 No.	
					No.	撮影列	画像No.		
1 副葬された軸	1	上	木棺内北部の副葬品出土状態	報告書より加筆転載	—	—	—	—	—
		下	掛幅装絹本著色画の出土状態	同上 (部分拡大)	—	—	—	—	—
	2	軸2の絹絵	合成展開	—	5 / 6	軸2	南1.5 南 地 北3 北2	765 545-547 515-517 1128 1094-1095	—
	3	軸1の平絹と顔料	分析ポイント軸1-⑦	*	2	軸1	地	638-639	883
	4	軸1の顔料と金箔	合成展開	—	2 / 3	軸1	南2 南 地5 地4.5	1389-1390 669-673 1328-1332 1358-1362	—
	5	軸1の顔料と金箔	合成展開	—	1 / 2	軸1	地2 地 地-1 地-2	1233-1235 629-631 1167-1169 1201-1202	—
	6	左	軸2の墨と顔料 (左は墨の輪郭の痕跡と緑の顔料。右は墨の輪郭の痕跡と白と緑の顔料)	5	5	軸2	北3 北2 北	1121-1122 1088-1089 480	2043b
		右		5	5	軸2	南2 南1.5	688-689 756-757	3227b
	7	上	軸2のきらきら光る部分 (顔料白4部分)	*	5	軸2	南2.5	1606	963b
		中		10					964a
		下		20					965a
	8	上	軸2の截金と顔料 (緑の粒子、金箔、白3、画絹の重なりから、裏彩色の存在と裏打ちの非存在を確認できる。)	*	6	軸2	南 地	547 517	439a
		中		40					442a
		下		80					444a
2 軸の形状	1	軸2の全体像	接写画像を合成	—	—	—	—	—	
	2	上 下	軸2東端の赤彩	*	7	軸2	南 地	565	1148b
				60				535	1154
	3	上	軸1の切り合わせ面 同上(エッジ部分に被さった顔料層)	合成	3	軸1	北 天4	614-619 1499-1505	352-359
		下左		20	371				
		下右		20	361a				
	4	軸1の全体像	接写画像を合成	—	—	—	—	—	
	5	左	軸1西端の漆膜 (裏面) 同上 (表面) 同上 (表面赤外線撮影)	接写画像	—	—	—	—	—
		中		接写画像	—	—	—	—	
		右		接写画像	—	—	—	—	
6	軸1西端漆膜表面の付着物痕跡		40	—	—	—	3286a		
7	軸1と漆膜との境界 (朱線部分)		10	1	軸1	地	623-624	414a	

(注) \*は任意の倍率で撮影

PL.	写真No.	内 容	備 考	掲載 倍率	顕微鏡画像			
					画像索引			撮影 No.
					No.	撮影列	画像No.	
3 素材の重なり (1)	1 上 下	素材（画絹と顔料と金箔）の確認		20	6	軸 2 北 3	1128 - 1129	972a
				40				973b
	2 上 下	素材（画絹と顔料層と金箔）の重なり		20	6	軸 2 北 3	1128	982b
				40				983b
	3 上 下	絹絵の重なり		10	6	軸 2 北 3 北 2	1128 - 1129 1095 - 1096	1968
				20				1984
	4 上 中 下	素材（平絹と顔料）の確認	分析ポイント軸 1 -⑦	20	2	軸 1 地	638 - 639	892b
				40				893
				80				895
	5 上 中 下	絹地の見え方のばらつき (1)		20	2	軸 1 地	638 - 639	2956a
				40				2957a
				80				2959a
6 上 中 下	絹地の見え方のばらつき (2)		*	2 / 3	軸 1 地 地-1	639 1177 - 1178	897b	
			20				899b	
			40				900a	
4 素材の重なり (2)	7	軸 1 西端漆膜裏面の黒色部分		80	—	— —	—	860
	8	軸 1 西端漆膜表面の墨線部分		80	—	— —	—	846a
	9	軸 1 西端漆膜表面の朱線部分		80	—	— —	—	834
	1 上 下	黒く見える画絹		*	6	軸 2 南1.5 南	766 547 - 548	3345a
				20				3347a
	2 左 右	粒子をほとんど確認できない黒い層	分析ポイント軸 2 -③	*	6	軸 2 北 2 北 天 3	1094 - 1095 485 - 486 1060 - 1061	433a
				80				438b
	3 上 下	顔料層に覆われた黒く見える画絹		10	6	軸 2 北 3 北 2	1129 1095 - 1096	1992a
				40				1994a
	4 上 下	白い顔料層に埋もれている黒い繊維	軸 2 東端	10	7	軸 2 南 地	565 535	2986a
				40				2988a
	5 上 下	白い顔料層に埋もれている黒い平絹		*	3	軸 1 南 地 5 地 4.5	675 1333 1363	3117
				40				3120b
	6 上 下	赤い顔料層と軸木表面の間		10	2	軸 1 天	573	2141b
				80				2145a
	7 上 中 下	拡大すると平絹と確認できる黒い部分 (黄の顔料の可能性ある部分)		10	3	軸 1 南 地 5	676 1333 - 1334	915b
20				916b				
60				918				
8 上 中 下	画絹亀裂部分破断面の層の重なり		10	6	軸 2 北 3	1132	2029b	
			20				2031b	
			40				2032a	

(注) \* は任意の倍率で撮影

PL.	写真No.	内 容	備 考	掲載 倍率	顕微鏡画像			
					画像索引			撮影 No.
					No.	撮影列	画像No.	
5 顔 料	1	白 1	分析ポイント軸 1 -⑤'	80	2	軸 1 南 4	1422	933
	2	白 1		80	2	軸 1 南 5 南 4	1435 1420	3357a
	3	白 1	分析ポイント軸 1 -②	80	2	軸 1 天 2	1449	926
	4	白 2		80	2	軸 1 地	639	888
	5	白 3 (裏彩色)		80	6	軸 2 北 3	1128	975b
	6	白 4	分析サンプル 1	80	5	軸 2 天 2	1026	3011b
	7	白 4	PL.1-7 の部分拡大	80	5	軸 2 南 2.5	1606	968b
	8	白 4		80	6	軸 2 南 1.5 南	767-768 549-550	3274a
	9	赤 1	分析ポイント軸 1 -①	80	2	軸 1 天	577-578	392b
	10	赤 1 (画面左上) と赤 2 (画面右下)	赤 2 は軸木に引か れた赤い線	80	2	軸 1 地	631	867
	11	赤 2 (画面中央) と赤 3 (画面右端)	漆膜上の赤い線	80	—	— —	—	2966a
	12	赤 1 (軸 2 の小面積の赤と金箔)		80	6	軸 2 北 2	1098	3385b
	13	赤 4 (中間色)		80	2 / 3	軸 1 地 5 地 4.5	1332 1361-1362	3315b
	14	緑 1	分析ポイント軸 2 -②	80	5	軸 2 北 2 北	1089 481	432a
	15	緑 2	PL.1-6 右の部分 拡大	80	2	軸 2 南 2	688	3329c
	16	緑の粒子		80	5	軸 2 北 3	1122	2041
	17	黄の顔料か	PL.4-7 上・中段 の部分拡大	80	3	軸 1 南	676	3133b
	18	白と黄の顔料か		80	2	軸 1 南	3077	3161b

(注) \* は任意の倍率で撮影

表6 画像索引対照表(軸1長片)

軸 撮影列	画像索引1			画像索引2			画像索引3			画像索引4		
	(頁内左側区画)	(頁内右側区画)	(頁内左側区画)	(頁内右側区画)	(頁内左側区画)	(頁内右側区画)	(頁内左側区画)	(頁内右側区画)	(頁内左側区画)	(頁内右側区画)	(頁内左側区画)	(頁内右側区画)
南5		1428 1429 1430 1431	1432 1433 1434 1435 1436	1437 1438 1439 1440 1441 1442 1443								
南4		1411 1412 1413 1414 1415 1416 1417 1418 1419 1420 1421 1422 1423 1424 1425 1426 1427										
南3		1393 1394 1395 1396 1397 1398 1399 1400 1401 1402 1403 1404 1405 1406 1407 1408 1409 1410										
南2		1372 1373 1374 1375 1376 1377 1378 1379 1380 1381 1382 1383 1384 1385 1386 1387 1388 1389 1390 1391 1392										
南		652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684										
地5		1312 1313 1314 1315 1316 1317 1318 1319 1320 1321 1322 1323 1324 1325 1326 1327 1328 1329 1330 1331 1332 1333 1334 1335 1336 1337 1338 1339 1340 1341										
地4.5		1342 1343 1344 1345 1346 1347 1348 1349 1350 1351 1352 1353 1354 1355 1356 1357 1358 1359 1360 1361 1362 1363 1364 1365 1366 1367 1368 1369 1370 1371										
地4		1284 1285 1286 1287 1288 1289 1290 1291 1292 1293 1294 1295 1296 1297 1298 1299 1300 1301 1302 1303 1304 1305 1306 1307 1308 1309 1310 1311										
地3		1254 1255 1256 1257 1258 1259 1260 1261 1262 1263 1264 1265 1266 1267 1268 1269 1270 1271 1272 1273 1274 1275 1276 1277 1278 1279 1280 1281 1282 1283										
地2		1225 1226 1227 1228 1229 1230 1231 1232 1233 1234 1235 1236 1237 1238 1239 1240 1241 1242 1243 1244 1245 1246 1247 1248 1249 1250 1251 1252 1253										
地		620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651										
地-1		1157 1158 1159 1160 1161 1162 1163 1164 1165 1166 1167 1168 1169 1170 1171 1172 1173 1174 1175 1176 1177 1178 1179 1180 1181 1182 1183 1184 1185 1186 1187 1188 1189 1190										
地-2		1191 1192 1193 1194 1195 1196 1197 1198 1199 1200 1201 1202 1203 1204 1205 1206 1207 1208 1209 1210 1211 1212 1213 1214 1215 1216 1217 1218 1219 1220 1221 1222 1223 1224										
北4		1567 1568 1569 1570 1571 1572 1573 1574 1575 1576 1577 1578 1579 1580 1581 1582 1583 1584 1585 1586 1587 1588 1589 1590 1591 1592 1593 1594 1595 1596										
北3		1538 1539 1540 1541 1542 1543 1544 1545 1546 1547 1548 1549 1550 1551 1552 1553 1554 1555 1556 1557 1558 1559 1560 1561 1562 1563 1564 1565 1566										
北2		1506 1507 1508 1509 1510 1511 1512 1513 1514 1515 1516 1517 1518 1519 1520 1521 1522 1523 1524 1525 1526 1527 1528 1529 1530 1531 1532 1533 1534 1535 1536 1537										
北		594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619										
天4		1475 1476 1477 1478 1479 1480 1481 1482 1483 1484 1485 1486 1487 1488 1489 1490 1491 1492 1493 1494 1495 1496 1497 1498 1499 1500 1501 1502 1503 1504 1505										
天3		1459 1460 1461 1462 1463 1464 1465 1466 1467 1468 1469 1470 1471 1472 1473 1474										
天2		1444 1445 1446 1447 1448 1449 1450 1451 1452 1453 1454 1455 1456 1457 1458										
天		566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593										

軸 1 (北側出土軸)

・上記の表は、軸1長片表面を西から東へ撮影視野が連続するよう、面を追って撮影した撮影列と仮称する画像の番号を視覚索引として整理したものである。  
 ・撮影視野の周縁部は歪みを生じて合成も困難なため、観察のポイントとなるであろう情報が撮影視野の中心に来るようコマ送りをした。そのため撮影列により、撮影枚数が異なる。  
 ・表の縦列の並びは、任意であり画像は連続していない。

表7 画像索引対照表 (軸1 短片)

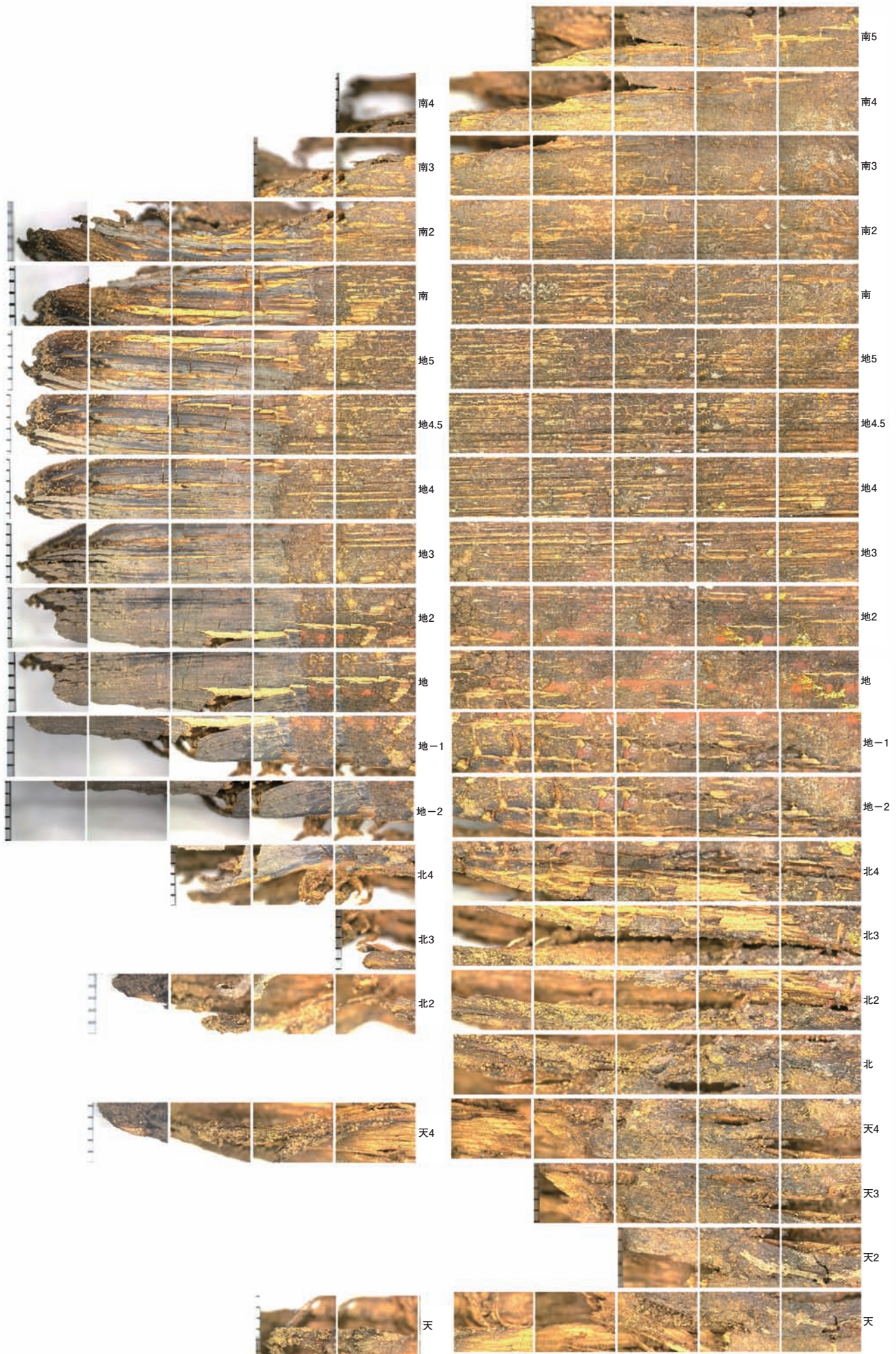
軸	画像索引4															
	撮影列			(頁内右上区画) (頁内左中区画)			(頁内左下区画)			(頁内右下区画)						
軸1 (北側出土軸)	南2	1729	1730	1731	1732	1733				1734	1735	1736	1737	1738		
	南	1739	1740	1741	1742	1743	1744			1745	1747	1748	1749	1750	1751	
	地4	1759	1760	1761	1762	1763										
	地3	1752	1753	1754	1755	1756				1757						
	地2									1671	1672	1673	1674	1675	1676	
	地									1668	1669	1670				
	地-1									1667						
	北3	1764	1765							1660	1661	1662	1663	1664	1665	1666
	北2	1767	1768	1769	1770	1771		1772	1773	1774	1677	1678	1679			
	北	1680	1681	1682	1683	1684		1685	1686	1687	1688	1689	1690	1691	1692	
	天3	1693	1694	1695	1696	1697		1698	1699		1700	1701	1702	1703	1704	
	天2	1705	1706	1707	1708	1709		1710	1711	1712	1713	1714	1715			
天	1716	1717	1718	1719	1720		1721	1722		1723	1724	1725	1726	1727		

- ・上記の表は、軸1短片表面を西から東へ撮影視野が連続するよう、面を追って撮影した撮影列と仮称とする画像の番号を視覚索引として整理したものである。
- ・撮影視野の周縁部は歪みを生じて合成も困難なため、観察のポイントとなるであろう情報が撮影視野の中心に来るようコマ送りした。そのため撮影列により、撮影枚数が異なる。
- ・表の縦列の並びは、任意であり画像は連続していない。

表 8 画像索引対照表 (軸 2)

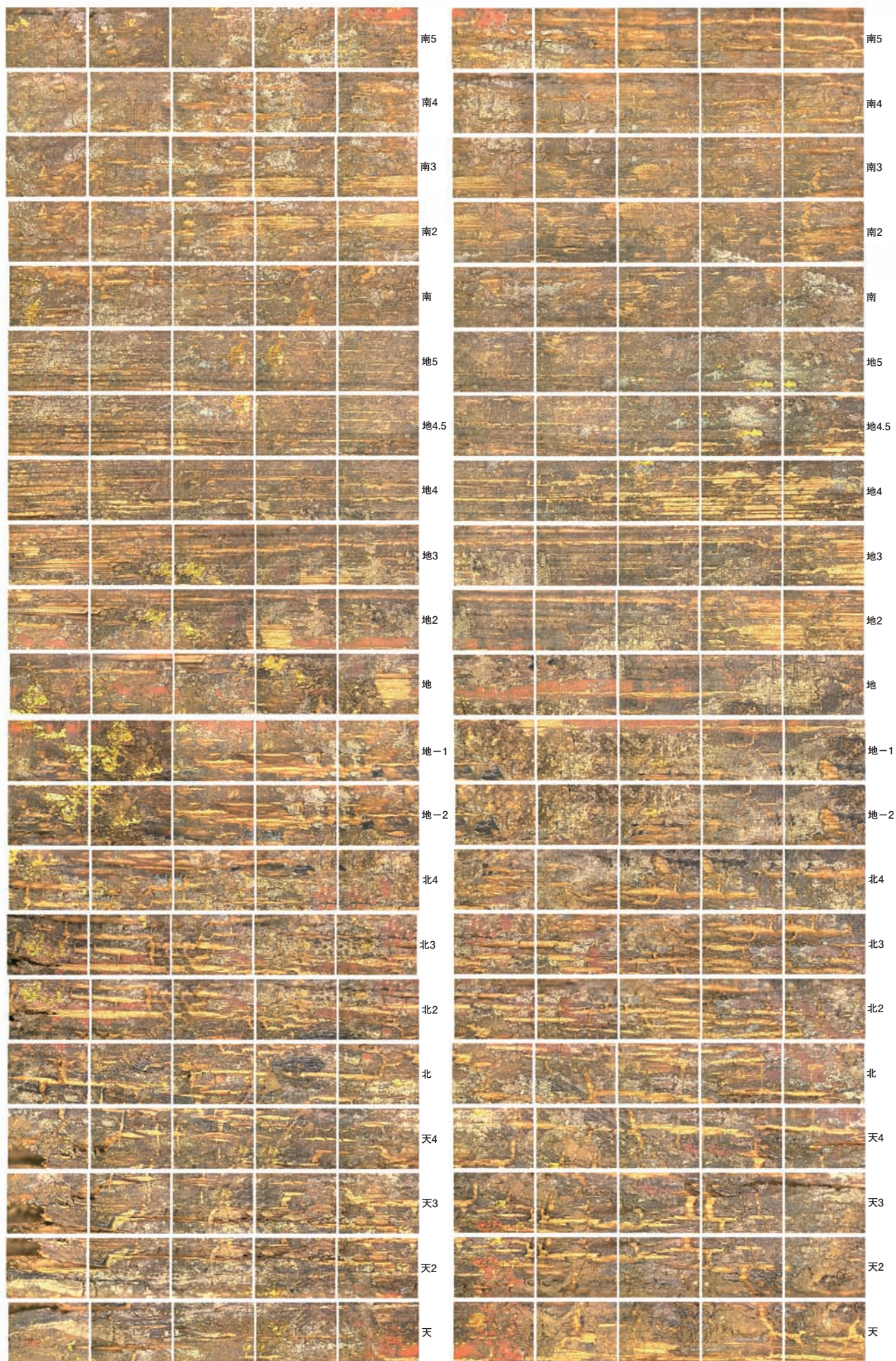
軸	画像索引 5										画像索引 6										画像索引 7																
	(頁内左側区画)			(頁内右側区画)			(頁内左側区画)				(頁内右側区画)			(頁内上部左側区画)				(頁内上部右側区画)			(頁内下部区画)																
撮影列	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995	996	997	998	999	1000	1001	1002	1003	1005	1006	1007	1008	1009	1010	1011	1012	1013	1014	1015	1016	1017					
南5																																					
南4	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821		
南3	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752			
南2.5	1597	1598	1599	1600	1601	1602	1603	1604	1605	1606	1607	1608	1609	1610	1611	1612	1613	1614	1615	1616	1617	1618	1619	1620	1621	1622	1623	1624	1625	1626	1627	1628					
南2	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718			
南1.5	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786			
南	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565							
地	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535							
北3	1117	1118	1119	1120	1121	1122	1123	1124	1125	1126	1127	1128	1129	1130	1131	1132	1133	1134	1135	1136	1137	1138	1139	1140	1141	1142	1143	1144	1145	1146	1147						
北2	1083	1084	1085	1086	1087	1088	1089	1090	1091	1092	1093	1094	1095	1096	1097	1098	1099	1100	1101	1102	1103	1104	1105	1106	1107	1108	1109	1110	1111	1112	1113	1114	1115	1116			
北	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505						
天3	1049	1050	1051	1052	1053	1054	1055	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062	1063	1064	1065	1066	1067	1068	1069	1070	1071	1072	1073	1074	1075	1076	1077	1078	1079	1080	1081	1082			
天2	1018	1019	1020	1021	1022	1023	1024	1025	1026	1027	1028	1029	1030	1031	1032	1033	1034	1035	1036	1037	1038	1039	1040	1041	1042	1043	1044	1045	1046	1047	1048						
天	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474							

・上記の表は、軸 2 表面を西から東へ撮影視野が連続するよう、面を追って撮影した撮影列と仮称とする画像の番号を視覚索引として整理したものである。  
 ・撮影視野の周縁部は歪みを生じて合成も困難なため、観察のポイントとなるであろう情報が撮影視野の中心に来るようコマ送りした。そのため撮影列により、撮影枚数が異なる。  
 ・表の縦列の並びは、任意であり画像は連続していない。

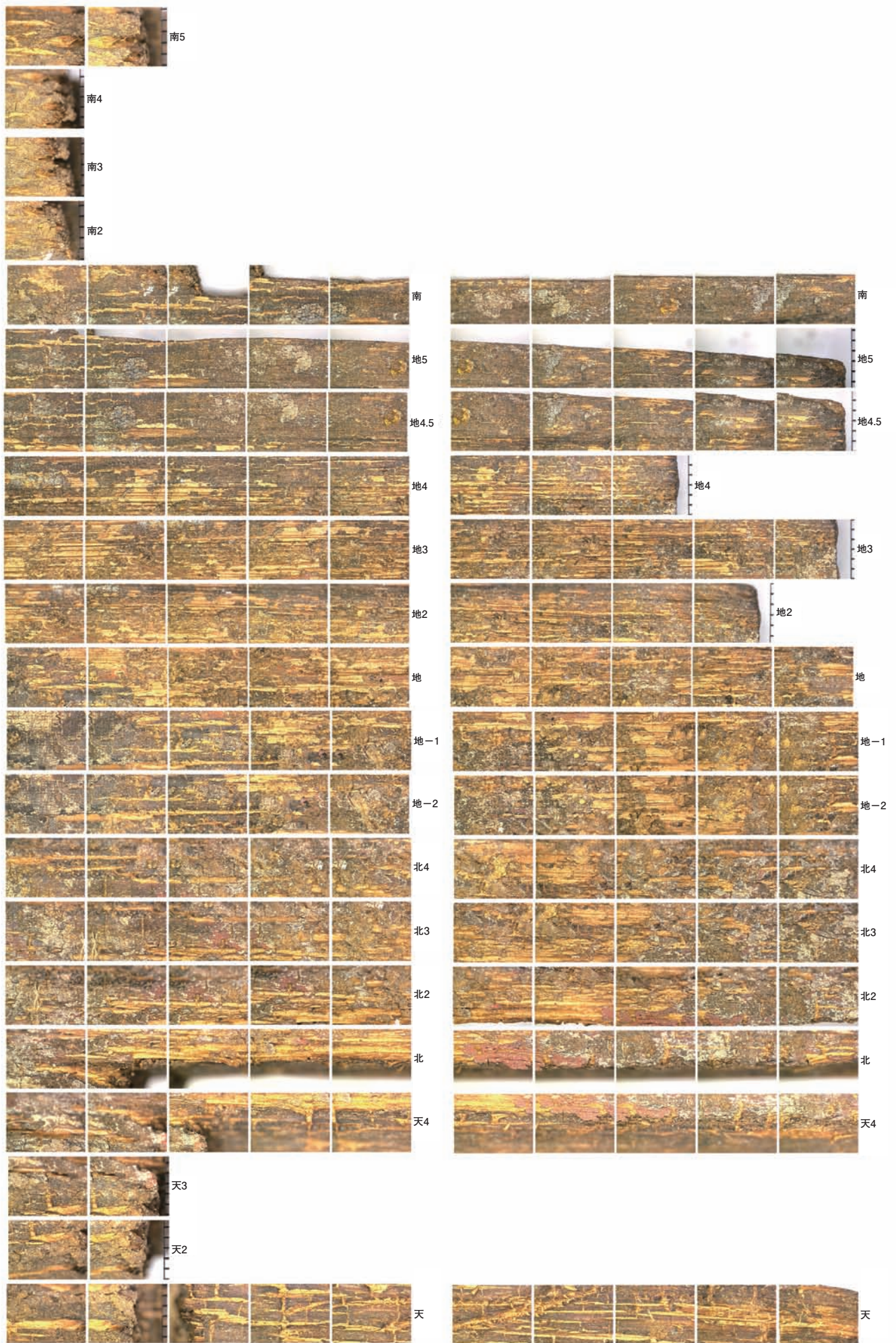


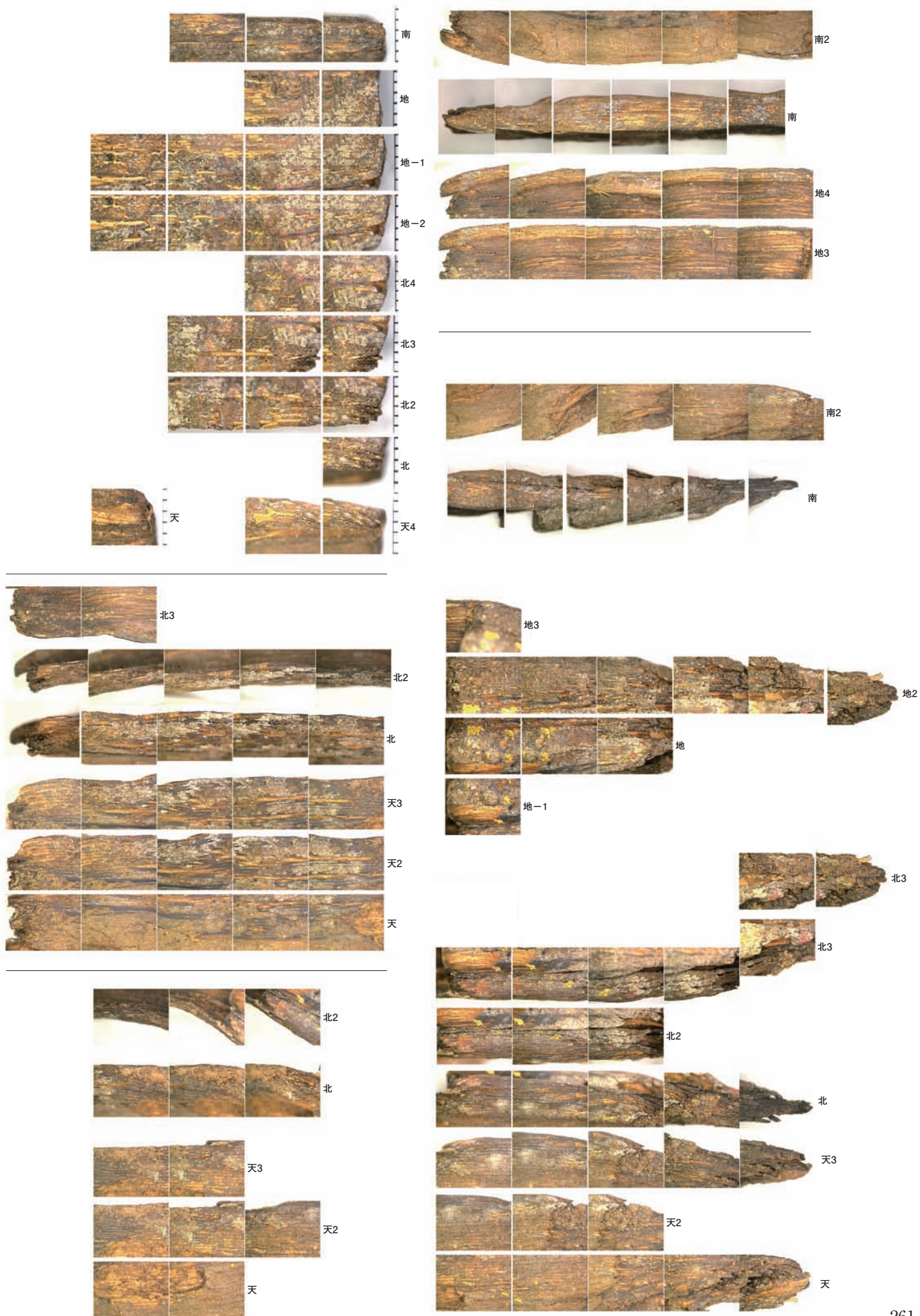
画像索引1 (軸1長片西部分)



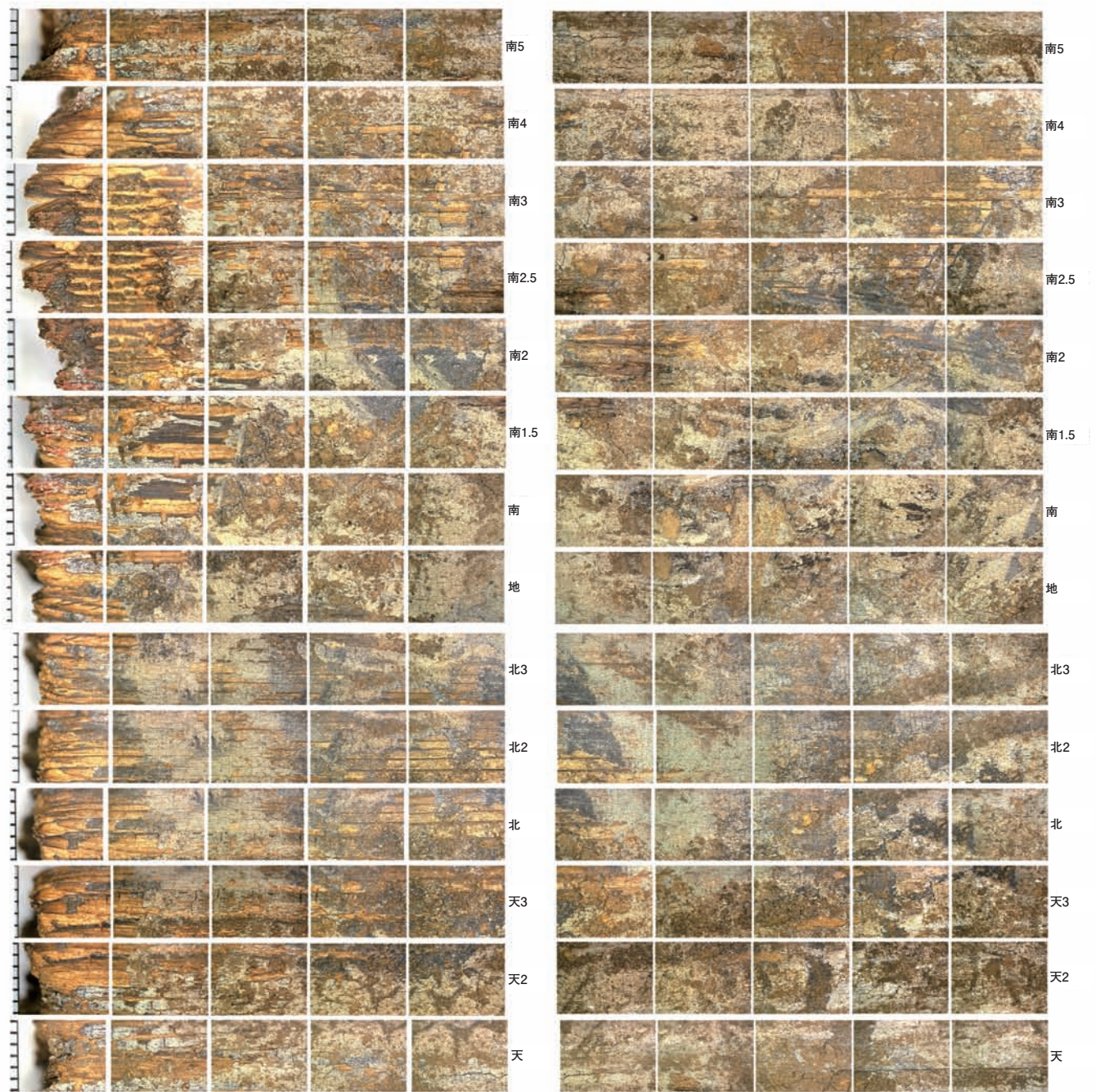


画像索引2 (軸1長片中央部分)

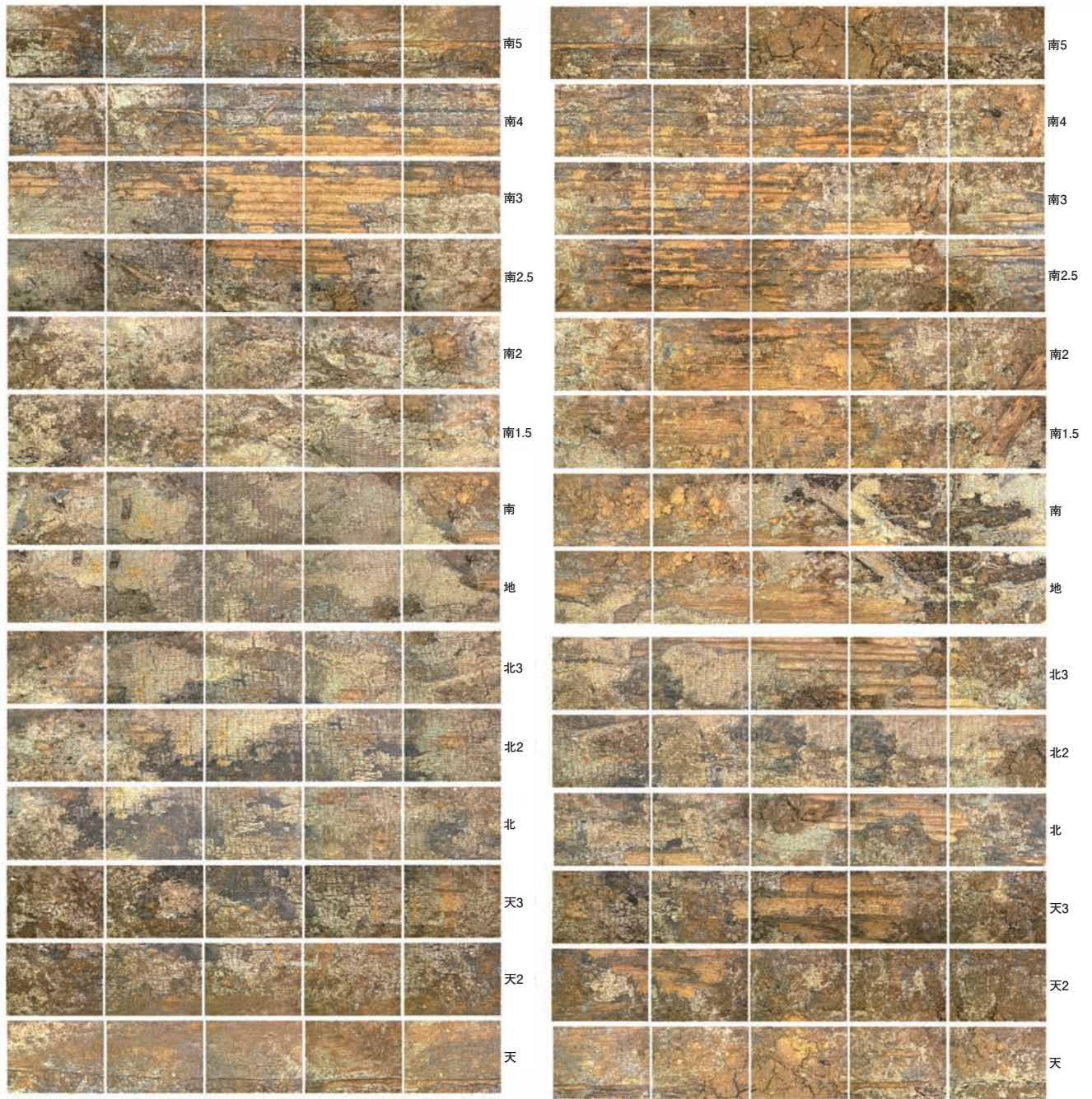




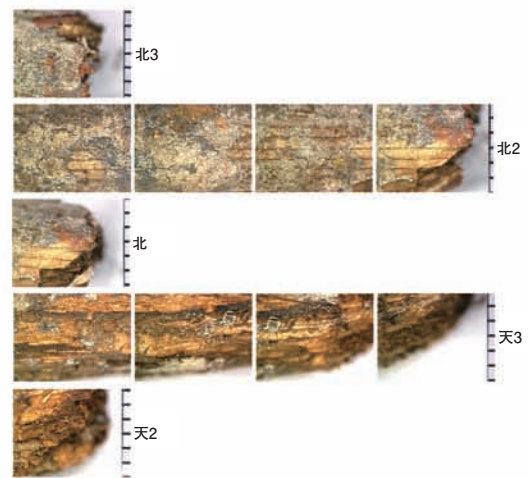
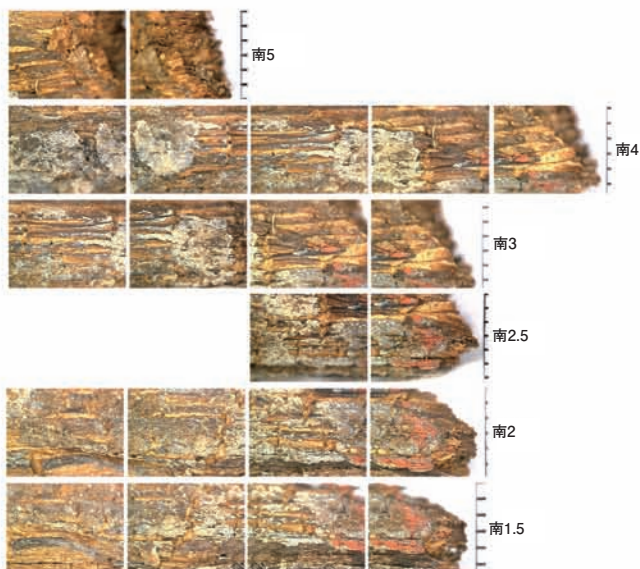
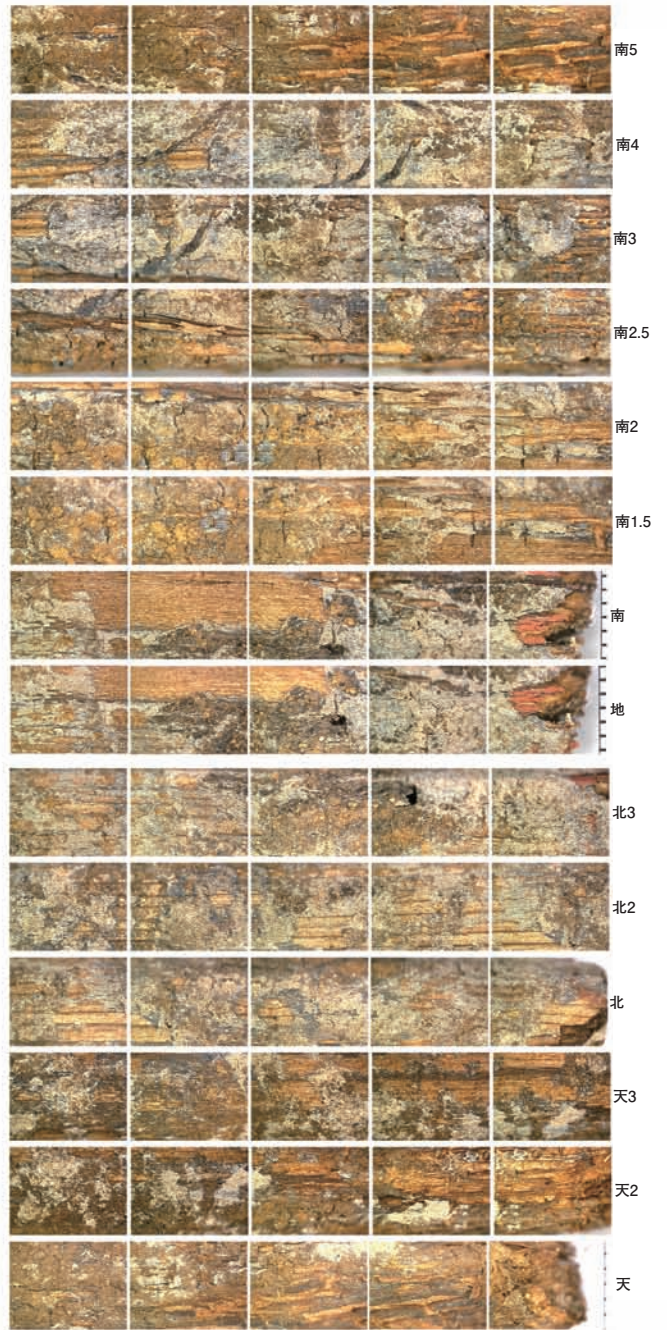
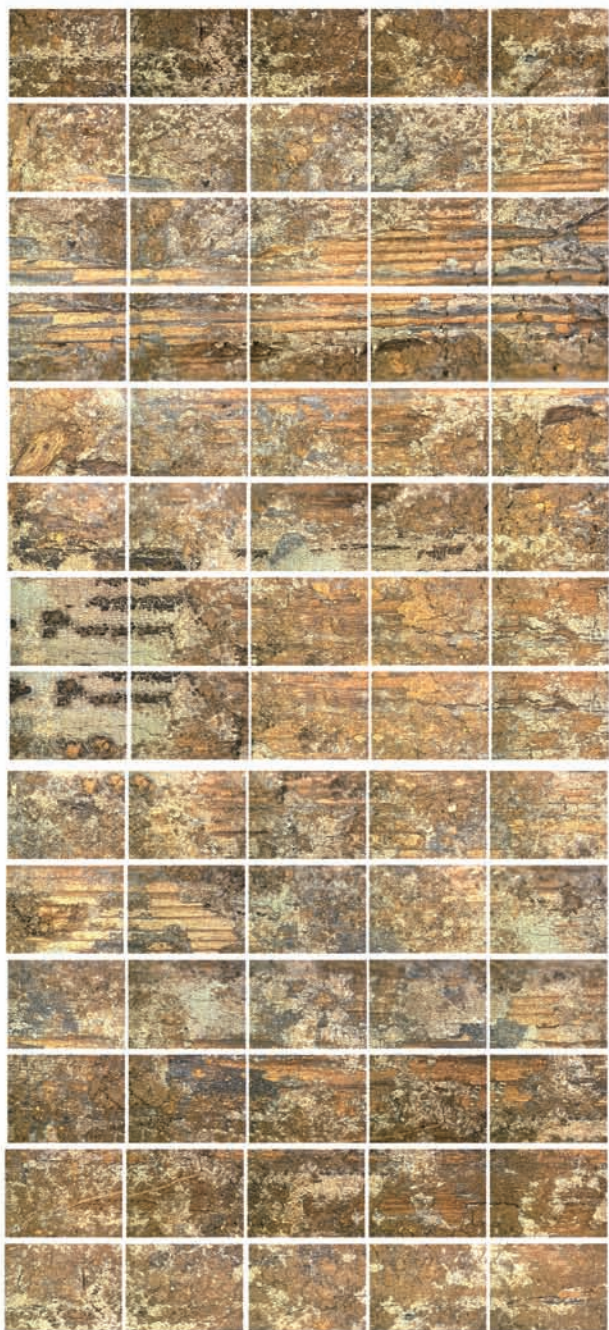
画像索引4 (軸1長片東端部分・短片)



画像索引 5 (軸 2 西部分)



画像索引6 (軸2中央部分)



## 第Ⅱ部 思井堀ノ内遺跡中世墓出土化粧道具類の組成





## 本文目次

はじめに	269
第1章 遺存状態と調査方法	269
1 出土状態	3 遺存状態と組成
2 調査方法	
第2章 副葬された品々	273
1 木製台座	8 梳櫛
2 染織品残欠(1)	9 金属製菊花形皿
3 染織品残欠(2)	10 繊維製品断片
4 紙断片	11 骨角類断片
5 蓬莱鏡	12 白磁皿
6 帖紙残欠	13 水晶片
7 鉄針	
第3章 身近に置かれたもの	283
1 副葬品の性格	2 副葬された形
おわりに	285

## 挿図目次

第1図 詳細調査で確認した副葬品の要素	3 帖紙残欠内の鉄針
1 底面に染織品残欠(1)・(2)、紙片が付着している木製台座	4 水晶片
2 金属製菊花形皿の遺存状態と復元模式図	第2図 蓬莱鏡
	第3図 梳櫛

## 表目次

表1 化粧道具類の遺存状態と組成	表2 巻頭図版(PL.6~PL.8)撮影データ
------------------	-------------------------



# はじめに

本報告は、千葉県流山市思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓（13世紀後半～14世紀初頭頃）から出土した副葬品のうち、平成17年度末に刊行された発掘調査報告書において、分析鑑定後あらためての報告が明示されていた化粧道具類についての報告である<sup>1)</sup>。

詳細調査に際しては、正倉院事務所成瀬正和氏、正倉院事務所尾形充彦氏から、多くのご指導を賜った。くわえて、成瀬氏にはX線分析調査成果についてご寄稿いただいた（本報告293頁）。

本稿は、既刊報告書（天野2006）の成果を継承し、これに成瀬氏と尾形氏によるご教示と調査鑑定結果、そして、調査未了であった脆弱な遺物、すなわち、木製品ならびに断片資料類についての顕微鏡観察成果を加え、一括遺物の組成を報告するものである。

報告の主要点は、木棺が痕跡のみ残して完全に消滅している台地上の埋没環境のなかで、劣化、あるいは断片化しつつも遺存していた絹や紙をはじめとする脆弱な素材からなる出土品の情報を提示するところにある。

## 第1章 遺存状態と調査方法

### 1 出土状態

#### (1) 納置されていた空間

化粧道具類は、周溝で方形に区画された一辺12.6m前後の墓域中央部、土壙に納められた木棺内から出土した（第I部第1図1～3参照<sup>2)</sup>）。

木棺は腐朽し全く形を留めていなかったが、土壙埋土の堆積状況から、箱形の木棺が直葬されていたことが明らかにされており、その寸法は幅約70cm、深さ45cm、長さ1.6m程であったと復元されている。

木棺痕跡内には、被葬者の歯列と骨片が遺存していた。歯列の出土地点とその出土状態から、被葬者の埋葬姿勢について、北枕西向き側臥であったと想定することが可能である。また、被葬者の年齢・性別について、壮年（25～40才）後半から熟年（40～60才）あたりで亡くなった女性と推定されることが、歯列の鑑定結果として報告されている。

化粧道具類の出土地点は、被葬者後頭部の東方である。出土状態の特徴として、複数の遺物が上下に重なっていた点が注目される。歯列の東端（白歯）と化粧道具類の西端（蓬萊鏡の西端）は約16cm離れていた。

歯列、化粧道具類ともに、原位置を保持していると認定できる様相を留めていたが、土壙内木棺直葬であったために、木棺の腐朽に伴う棺内空間への土の流れ込みは不可避であり、出土状況について、ある程度の位置のずれが生じていることを押さえておく必要がある（PL1 1上）。とはいえ、歯列および副葬品について、埋葬後に大きな人為的改変を受けていない一括遺物であることを埋土の堆積状態から確認することができる。

なお、原位置からのずれを引き起こした具体的な要因として、埋土の流入にともなう遺物の移動、埋土

の土圧による遺物の変形、腐朽菌の分解作用による有機質素材の劣化・消滅、侵入した植物の根の攪乱による断片化と移動などが想定される。遺物の出土状況および後述する遺存状態は、これらの要因が複合した結果、もたらされた形である。

## (2) 遺物の重なり (PL.1 1、PL.6 5、PL.8 5・19)

上下に重なって出土した化粧道具類の中でもっとも大きく目立つのは、蓬萊鏡(径11.7cm)である。鏡面を上に向け、水平より少し傾斜した状態で出土した。東北側が高く、南西側が低い。取り上げ時に裏返したときの記録から、菊亀甲亀鈕の亀の口が南西を向いた状態で副葬されていたこと、亀鈕頂部付近に「銀色の付着物」があったことがわかる。

鏡の上、鏡面北東部分に内接する位置には、直径7.5cmのほぼ円形を呈する木製品が載っていた。鏡面に密着していた木製品下面には、紙と染織品残欠(絹製品)2種が貼りついた状態で遺存しており、木製品と鏡面の間に3種の遺物が層をなして存在していることがわかる。なお、この木製品については、後に詳述するように低い六脚を削り出していると確認できたことから、以下、木製台座と記述する。

鏡の下、その輪郭の南西方には、伏せられた白磁皿の一部が顔を覗かせていた。最下部から出土した口禿の白磁皿の口縁は床面に密着していた。伏せられた皿の中には土が入っていたが、ふかふかでつまってはいること、中の土を取り除くとその下からロームの地山がでてきたことが発掘調査時に確認されている。

遺物の明確な重なりの中で、発掘時に注意が払われたのが、蓬萊鏡の下方にあった「炭化物を多く含む土」(PL.8 5)である。一括資料として保管されていたこの「炭化物を多く含む土」には、顕微鏡観察によって、絹・紙・骨または角、そして、薄手あるいはごく細い金属でつくられた遺物の断片が多数遺存していることが判明した。また、小さな水晶片が混在していることも確認された。なお、炭化物は鏡の周囲からは出土していないことが記録されている。

## (3) 遺存状態の全体像

発掘調査時に確認された遺物の重なりについて、副葬時の形を復元するという視点から注目される要素を抽出する。なお、全体像を明確にするため、資料名などについては後述する組成の情報を先取して記述する。

- 1 上下に重なって出土した円形の輪郭をもつ3種の遺物、木製台座と蓬萊鏡と白磁皿の中心は一致していない。
- 2 最上部にあった木製台座の中心には、心棒を立てた痕跡がある。心棒に固定されていた「もの」の素材や形、大きさをたどる具体的情報はない。
- 3 鏡面を上にした蓬萊鏡とその上に載っていた木製台座は、出土時には密着していた。両者の間には、面的な広がりをもつ染織品(絹製品)2種と紙が挟まっていた。すなわち、台座の直下に、ループのようにも見える隙間をもつ絹製品があり、その下に、目の細かい平織の絹地があり、これら2層の絹製品の下に紙の広がりがあり、その下方に鏡面を上にした蓬萊鏡があった。
- 4 棺床面に対して傾斜していた蓬萊鏡の下方には「炭化物を多く含む土」があり、その中に、脆弱な

素材で作られた複数の遺物が断片化した状態で遺存していた。梳櫛、金銀の切箔で装飾された帖紙、帖紙に挟まれた鉄針、金属製菊花形皿、骨角類断片、繊維製品断片が含まれている。

- 5 「炭化物を多く含む土」の中に、櫛以外の木製品の断片、および、漆膜の破片は全く含まれていない。また、鏡面に密着する形で紙・絹製品・木製台座が遺存できる環境であったにもかかわらず、鏡面上に台座以外の木製品の痕跡、および漆膜の破片はない。以上のような、鏡至近に遺存している木製品の情報、および漆膜がないという情報から、蓬萊鏡は鏡箱をとまわらない形で副葬されていたと判断できる。
- 6 伏せて置かれていた白磁皿の底面には、有機質の遺物が密着していた痕跡が全面に認められた。
- 7 水晶片は、「炭化物を多く含む土」中から抽出された資料であるが一括遺物のどの位置に納められていたのかを特定する付着物情報がない。
- 8 最下部から出土した伏せられた白磁皿の中には土が入っていたが、ふかふかでつまってはいること、中の土を取り除くとその下からロームの地山がでてきたことが発掘調査時に確認されている。したがって、化粧道具を納めていた手箱の有無を判断する要素は全く遺存していない。

## 2 調査方法

### (1) 観察の手順

断片化した資料群は、回収状況の記録とともに分別保管されていた。分別は下記の3種12区分である。

- ・発掘調査時、鏡取り上げ後に回収された、鏡と白磁皿の間にあった資料（2区分）・・・A、B
- ・出土後、鏡から剥落し、回収されていた資料（9区分）・・・C、D、E、F、G、H、I、K、N
- ・出土後、白磁皿から剥落し、回収されていた資料（1区分）・・・M

12に区分された保管状況にある資料群を顕微鏡で観察すると、それらの多くは、さまざまな特徴をもつ断片の複合体であることが判明した。そして、12の区分をこえて、共通する特徴が見られる断片が多くあることを確認した。このような概要をふまえ、観察は、以下のような手順を進めることとした。

まず、材質と形の特徴をもとに、区分ごとに細分類をおこない、A～Mのアルファベットに-01・-02などの枝番号を任意に組み合わせた資料番号を付与した。ひとつの資料番号には、共通する特徴をもつ複数断片が含まれている場合も多い。

次に、資料番号のついた細分類された遺物について、当初の12の区分をこえて、特徴を共有するものを抽出し、統合した。複数の資料番号からなる統合されたグループが、おおむね、遺物の種類に相当する。

### (2) 重なるの痕跡

細分類、および統合作業で課題となったのが、「付着物」の位置づけである。相互に接していた遺物の一方、ないし双方が断片化した場合、より大きな資料あるいは断片に、より小さな断片が「付着している」と観察される。

本来はそれぞれが独立した「もの」の一部であり、「付着」は、副葬状態を復元する鍵となる情報である。しかし、実際に作業をすすめるにあたっては、より遺存状態の良い断片を主体として分類せざるをえ

なかった。

脆弱な素材で作られた遺物が付着している場合、その由来には次に掲げる4つのパターンが混在していると想定される。

- ①副葬時点で相互に接していた遺物の重なり
- ②遺物の劣化・腐食により、副葬当初確保されていた土中の空間が崩壊して生じた接触の痕跡
- ③細い根の攪乱により、脆弱遺物が破碎され、その碎片が移動して二次的に接触した痕跡
- ④出土後、保管中に接触した痕跡

以上のように、付着物の由来をパターン化して確認する目的は、副葬状態を反映する情報（上記①②）を、二次的接触（上記③④）から識別すること、すなわち、副葬状態の復元に活用できる情報の抽出基準を明確にすることにある。

本事例の場合、③④になりうる対象として、櫛歯の先端とおもわれる破片と、雲母のように光って見える碎片が注意された。とりわけ、雲母のように見える碎片については、細くなればなるほど、動きやすくなり、それらの微細片が他者表面のくぼみなどにいったん入り込んだり張り付いたりした場合には、容易に遊離しなくなる。

### 3 遺存状態と組成

断片化した出土資料について、名称や用途を明らかにできた度合いは一様ではない。原形の復元に至らなかったもの、名称や用途を特定できなかったものも数多い。そこで、現時点で確認できた組成を整理するにあたり、遺存状態を5段階に区分し、名称や用途の判明した度合いに応じた組成を提示することとした（表1）。

表1 化粧道具類の遺存状態と組成

遺存状態の区分		遺物の名称・種類	員数	備 考
1	概ね原形をとどめている独立した資料	木製台座	1	木製台座、蓬莱鏡、白磁皿には多くの付着物情報がある。それに対し、水晶片は「炭化物を多く含む土」中に含まれていたものの、付着物情報がない。
		蓬莱鏡	1	
		白磁皿	1	
		水晶片	1	
2	素材の劣化は進行しているが、他者に密着することで、部分的に元の形や特徴を保持している資料	染織品残欠(1)	1	木製台座下面と鏡面の間に挟まれていた3層の繊維類である。台座あるいは鏡面との密着部以外は遺存していないため、元来の大きさや製品としての形は不明である。
		染織品残欠(2)	1	
		紙断片	1	
3	素材の劣化や断片化は著しいが、およその原形を復元あるいは把握できる資料	金属製菊花形皿	1	鏡の下方から回収された一括資料中の一部が該当する。
		梳櫛	1	
4	素材の劣化や断片化が著しいなかにも特徴的な部位を留めており、品名・種類等を絞り込める資料	帖紙残欠	1	鏡の下方から回収された一括資料中の一部である。出土後に鏡あるいは白磁皿から剥落し、回収保管されていた断片資料の一部も含まれる。原形を完全には復元できないが、断片ゆえに構造を直接確認できるという側面をもっている。
		鉄針	3	
5	素材の劣化や断片化が著しく、原形は不明であるが、素材の特徴により他の断片から区分され、抽出できる資料	繊維製品断片。織物およびかごの可能性がある断片を含む	—	鏡の下方から回収された一括資料中の一部である。また、出土後に鏡あるいは白磁皿から剥落し、回収保管されていた断片資料の一部もここに含まれる。肉眼では特徴をとらえるのが困難な資料も多い。
		骨角製品の可能性をのこす断片	—	

## 第2章 副葬された品々

### 1 木製台座（第1図1、PL6 1～6）

化粧道具類とした一括資料群の最上部に、1基の木製台座があった。直径7.5cm、総高は0.7cmである。円盤のように見えるが、出土時の下面側6か所に、低い脚が削り出されている。天板の中心には、径4～5mmの孔が1か所穿たれており、孔内に軸基部の痕跡とみられるものが嵌っている。天板下面が広く付着物に覆われているため、孔が貫通しているか否かを直接確認できないが、孔内に遺存する軸が、天板の下方に突出しないことは明確である。木取りは柾目、樹種鑑定は未実施である。

天板の輪郭は、現状では楕円状である。しかし、出土直後に撮影された写真では、より正円に近い形が記録されている。くわえて、繊維方向に直交する部位の径がもっとも小さいことから、乾燥による収縮が生じていると考えられる。反りは生じていない。

上面には硬い土がこびりついていた。この土を慎重に除去したところ、細い根が木目に沿うように食いこんでいて、天板上面はかなり荒れていることが判明した。この面には、黒みをおびた褐色部分が多く見られる。

側面および下面に漆や顔料を塗った痕跡は全くなく、白木作りの台座と判断できる。天板上面のみが暗褐色を呈する現状について、その要因は不明であるが、可能性として、植物の根の影響、すでに消失して全く形を留めていない軸に固定されていた作品の素材の影響、また、上面に敷物などを貼っていた接着剤の影響等を考えることができる。

天板上面の傷み具合は、側面の遺存度に連動している。元来の高さを保っている天板側面は、約1/3周分で、ほとんど厚みのない部分も多く、一部は欠損が天板下面に達している。

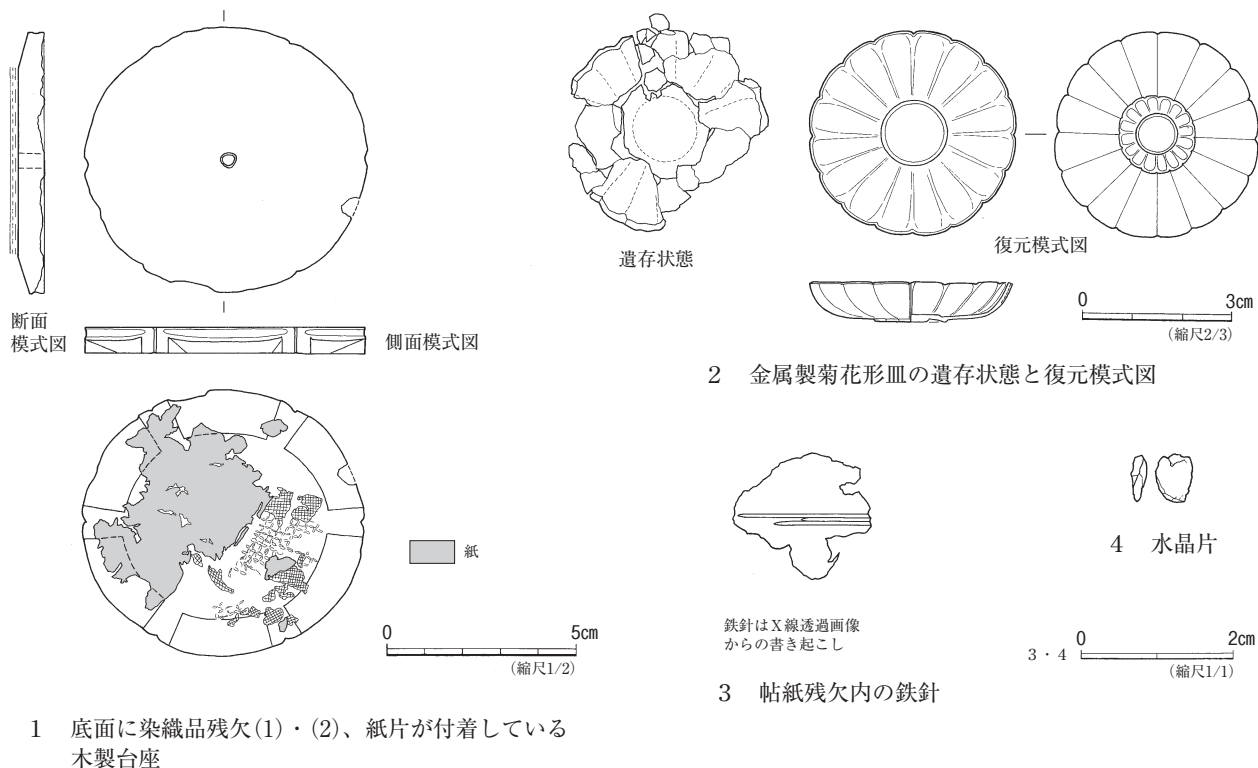
脚は、天板下面周縁部に6か所削り出されている。乾燥収縮による変形を考慮すれば、六脚は等間隔に割りつけられていると理解でき、うち、一対は、繊維方向に配置されている。

下面側から俯瞰すると、各脚は、天板の中心に向かって幅を減じる矢羽形に彫り残されている。各脚の幅は、周縁側で8.5mm前後、中心側で6mm前後、長さは10mm前後である。天板下面の周縁部、脚と脚の間は、外縁が薄くなるよう斜めに削り取られている。厚さ7mmの板から削り出された脚は、天板側面の高さ分約3.5mmを削り残していることから、脚の高さは、最も高い周縁部で約3.5mmである。中心に向かって周縁部との段差が徐々に小さくなり、段差や区画線をもうけないまま、平滑な天板下面に移行する。

各脚の正面中央には、天板上面まで通る断面V字状の細い縦線が1本刻まれている。この縦線を挟んだ両側は、凸面となるよう削り込まれている。この脚正面と、天板側面のあいだに区画線や段差は設けられていない。したがって、天板を俯瞰すると、その円形に見える輪郭には、雁が両翼を広げた形のごく小さな刻みが6か所等間隔に入った形となっている。すなわち、この木製台座の天板の平面形は、極限まで退化した六花形である<sup>3)</sup>。なお、遺存状態の良い天板側面においては、脚によって区画された範囲ごとに、横方向のごく浅い溝が彫りこまれていることを観察できる。

### 2 染織品残欠(1) (PL6 5～11)

繊維の流れがループの連なりのように見える染織品の残欠である。平滑な台座下面に密着し、密着した



第1図 詳細調査で確認した副葬品の要素

範囲において、面的な広がりを持続した状態で遺存している。既刊報告書において「籠状繊維製品」と報告した資料で、繊維の流れがループの連なりのように見える点で、経糸と緯糸が直交している染織品残欠(2)から、明確に区分される。

繊維の種類について、正倉院事務所尾形充彦氏に鑑定していただいた結果、外観上の特徴から絹と判断された。

ループ状の組織が見られる染織品残欠(1)は、正位置で出土した木製台座の底面に付着している3層(染織品残欠(1)・染織品残欠(2)・紙断片)のうち、もっとも台座側にある資料である。したがって、実際の出土状態では、3層の中で、染織品残欠(1)の出土レベルが最も高い。

なお、以下の観察結果の記述においては、便宜上、実際に遺物を手に取って観察する時の上・下の状態、すなわち、台座の底面を上にして俯瞰した状態での上・下を用いる。したがって、この上・下は、出土時の天地とは逆転しているが、観察記録である顕微鏡写真(PL6)と対応している。

上記の基準で重なりを確認すると、紙断片が最上面に、そのすぐ下に、次項でとりあげる染織品残欠(2)が、その下に、染織品残欠(1)が広がり、染織品残欠(1)の糸と糸の隙間に、平滑に仕上げられた素木の台座下面が見えるということになる。

染織品残欠(1)・染織品残欠(2)を直接確認できる範囲は、俯瞰状態で表面に出ている部分のみ、すなわち、より上にある層が面的に欠落している部分にかざられる。具体的には、紙が遺存していない範囲に、染織品2種を観察できる。なお、台座に密着している染織品残欠(1)よりも、後述する染織品残欠(2)の方が劣化の進行が著しいため、最下層の染織品残欠(1)について、とらえやすくなっているという状況が生じている。



染織品残欠(1)を現状で確認できるのは、長径5 cm前後、短径2 cm前後の不整形な範囲である。状況から、紙残欠と、その下の染織品残欠(2)に覆われている範囲にも、面的に遺存しているものと推定できる。

状態のよいところで観察される糸の流れは、ほぼ正円のループを描く。一単位の径は2 mmである。撚りがほとんどない糸の上には、染織品残欠(2)が劣化した微塵と理解できる粉が点々と付着している。そのため、編物の遺存を面的に把握できる部分であっても、顕微鏡で拡大し、ループを描きながら重なり合う一本の糸の流れを連続して追うのはきわめて難しい<sup>4)</sup>。

色調は、暗褐色を呈する部分がほとんどであるが、一部に、灰白色・黒色を呈する部分がある。現状の色調の違いが、染色の状況の反映なのか、あるいは埋没環境に由来するのかは不明である。糸が込み合っ見える部分について、上記の一単位を念頭にみると、ずれをもって2枚重なっているようにも見える。また、歪んだ状態で貼りついていると見える部分がある。

### 3 染織品残欠(2) (PL.6 5・6・8・12・13)

木製台座下面と鏡面との間に遺存していた繊維3層のうち、中位に遺存している平織の織物断片である。尾形充彦氏により、糸にほとんど撚りが見られないことから、絹と鑑定されている。

以下、観察報告中に記す遺物の重なりに関わる上下の記述は、台座底面を上にならして俯瞰した状態で観察できる重なりの上下である。したがって、出土状態での天地とは逆転している。

染織品残欠(2)は、重なっている3層の繊維の中で、もっとも遺存状態が悪い。紙に覆われた部分には、露出部よりも良好な形で広がっていると推定できるが、現在直接見ることができる部分については、劣化・崩壊が進行中で、徐々に粉になってしまう状態である。

遺存状況は厳しいものの、繊維の特徴を確認できる部分において、組織は平織であること、そして、経糸が2本一組であるという特徴を確認できる。経糸密度は40本/cm前後、緯糸密度は35本/cm前後である。

下に重なっている染織品残欠(1)と比較すると、糸の太さ、および、繊維の流れの特徴において、両者の違いは明確である。

現状では灰白色の部分が目立つが、暗褐色を呈する部分もある。一部緑色を呈するのは、鏡に由来する緑青が染み込んだためと理解できる。

織糸とは別の撚りのかかった太い糸が、平絹に突き刺さるように遺存している部分があり、縫糸あるいは刺繍糸と理解できる。

出土時の正位置に、視点をもどして、絹製品の副葬状態を想定すると、染織品残欠(1)のループの隙間から透けるように、目の積んだ染織品残欠(2)の下地が見えることになる。

### 4 紙断片 (PL.6 5・14・15)

木製台座下面と鏡面との間に遺存していた繊維製品3層のうち、出土状態では一番下、鏡に密着していた紙である。台座底面を上にならして俯瞰した状態では、一番上にあり、木製台座下面の半分ほどの範囲に、平織の染織品残欠(2)を覆うように密着遺存している。

重なっている絹製品2種に比べ、繊維の遺存状態は良好で、破断面付近には弾力を保持している部分もある。緑青がしみこんでいる部分が斑状にみられるが、繊維自体は白い。鏡面から剥落した断片資料にも同じ特徴をもつ紙断片が観察され、鏡面の広範囲に密着していた状況を想定できる。一方、鏡背に同様の

紙が付着していた痕跡はみられない。

なお、鏡背には、特徴を異にする紙の断片類が付着していたが、これについては帖紙残欠の項で記述する。

## 5 蓬萊鏡（第2図、PL.8 1）

被葬者の後頭部付近から鏡面を上に向けて出土した円鏡である。面径11.7cm、重量400g、小型ながら重量感のある蓬萊鏡で、下向きの菊亀甲亀鈕が中心に配され、鏡背の文様表出は明確である。

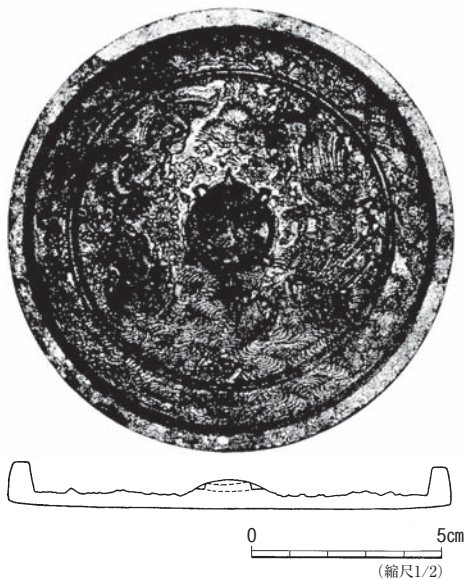
縁は直角式中縁で（中野1969）、わずかに凸面をなす平滑に磨かれた鏡面から縁上面までの高さは1.1cm、上面幅は4.5mmを測る。内区と外区をわける界圏は中線単圏で、断面の頂点がやや外区寄りにある。鏡胎の厚みは、平均的なところで3.5mm前後、界圏および肉高の部分で5mm前後、鈕頂部で7.7mm前後あり、肉取りの高低による立体的な表現で蓬萊文様のモチーフが余白を残さずに施されている。

なお、鏡面には紙断片が、鏡背には帖紙残欠が、点々とはあるがそれぞれ広範囲に付着していた。

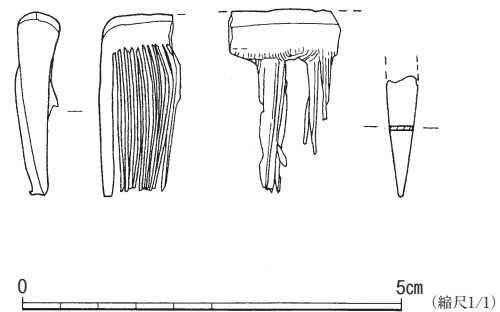
材質に関しては、成瀬正和氏により、銅、鉛の2成分合金であるという分析結果が報告されている（本報告293頁）。

出土時、鏡面上には木製台座が密着し、両者の間に、染織品（絹製品）残欠2種と紙が遺存していた。しかし、鏡箱の存在を示す木胎あるいは漆膜の断片は遺存していなかった。また、鏡背側には炭化物を多く含む断片化した資料群があり、その中に梳櫛が遺存していたにもかかわらず、櫛以外の木製品の痕跡は全くなく、また、漆膜の断片もなかった。

漆塗手箱の懸子、鏡箱の底板厚は、実測図・計測値が公表されている三嶋大社の伝世品を例に確認すると5mm前後ある（中里1986）。伝世資料の木胎の厚さを念頭に置くと、この蓬萊鏡が副葬されたとき、鏡の周囲に鏡箱が存在した可能性は低いと判断できる<sup>5)</sup>。さらに、白磁皿と鏡のあいだに板材よりも脆弱な繊維製品が遺存していたことを考えるならば、懸子についても存在していた可能性は低いと判断できる。



第2図 蓬萊鏡



第3図 梳櫛

〈図2・図3出典〉 天野 努 2006 『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書 1 -流山市思井堀ノ内遺跡（中世編）-』千葉県教育振興財団調査報告第549集 112頁 第40図

## 6 帖紙残欠 (PL.7 1~24)

すべて断片化した資料である。薄くて非常にもろい。金属とはみえないが銀色に光る面をもつことによって、他の断片類から明確に区別できる。この特徴的な面については、雲母引きの可能性が考えられる。そして、雲母引きの可能性のある面には、金の切箔・砂子が散らされている(1~4)。黒ずんだ灰色を呈する切箔・砂子や野毛が観察される断片もあり、銀などの箔も併せ用いられているとみられる(5・6)。

鏡取り上げ後に回収された一括資料を主体とするが、鏡背面に付着していた断片にも同じ特徴をもつ資料がある。また、白磁皿の底面から剥落した断片資料(23・24)にも共通する特徴を見いだせる。同種多数の断片中に、複数個体の可能性を示す要素の確認はできていない。

最も大きな破片で30.2mm×20.6mmほどの大きさであるが、鏡背面に残されていた付着痕跡の範囲から、蓬莱鏡(面径11.7cm)とほぼ同じか、それ以上に大きな面を持つものであったことがわかる。

加工痕として特筆されるのは、角の始末として折り込まれた部分(7・8)が遺存していることである。この直角に仕上げられた加工部の存在と、折り畳まれた山の部分とみられる断片(13・14)の存在、想定される大きさ、そして、金銀による装飾性が明確であることから、帖紙と判断した。

帖紙は、王朝服飾の成立とともに用いられるようになった懐中に入れる紙である(長崎1999)。折りたたみ懐中する紙は、多様な用途に供されるが、美しく飾られて装身具としての機能を付与されたものが発達し、実用的な紙を懐紙、装飾性の強いものを帖紙と呼び分けるようになったと言われている(長崎1999)。

中世以前にさかのぼる帖紙類の伝世資料としては、奈良市春日大社の秋草蒔絵手箱(重要文化財 鎌倉~南北朝時代[14世紀])内容品の帖紙・懐紙(奈良博2007)、および和歌山県新宮市熊野速玉大社古神宝類(国宝)中の紅帖紙附懐紙(明徳元年[1390]頃)がある(和歌山県博2005)。

本出土品は、まさに残欠であるが、破断面の多い遺存状態ゆえに、構造を直接観察できるという側面もっている。

破断面を顕微鏡で観察すると、金銀で装飾された雲母引きの可能性のある面の下に、紙の繊維の層、あるいは黒色の層、黄褐色の半ば透明な膜状の層など、色調や質感を異にする薄い層が幾重にも重なっている様子を確認できる。

雲母が用いられている可能性のある層の断片中には、ごく薄い同質の層が何枚も重なっている部分もある。このような構造をもつ部分は、ごく薄く剥離して、微塵のようになっても特徴をとらえることができる。

ベースとなる紙について注意されるのは、からまりあう繊維の空隙が、土のようなもので充填されている点である。充填物は、観察に用いた顕微鏡では粒子をほとんど確認できないほど細かく、緻密な板のように観察される(4・6・20)。填料として土が漉きこまれた状態か、具引きの痕跡かは未確認である。

肉眼で黒色に見える部分を顕微鏡で観察すると、全く特徴を異にする二種があることがわかる。ひとつは、拡大してもほとんど粒子を確認できない墨とみえる層(15・16)であり、もうひとつは、拡大すると繊維の特徴を観察できる黒色部分(PL.8 13・17)である。

前者の墨のように見える黒は、雲母引きと見える層と交互に重なっている部分があり(15)、帖紙に包まれていた内容物<sup>6)</sup>ではないことがわかる。同一物か否かの確認はできていないが、浮き上がるなどして裏が見える状況にある金切箔の片面にも黒い面があり、これらの黒い部分について、接着剤などの痕跡で

ある可能性を想定する余地がある。なお、色調と質感を異にするが、半ば透明な黄褐色の膜状の層（9～12）についても、接着剤の可能性を想定できるかもしれない。

帖紙片に付着している黒い物質のうち、繊維状の特徴をもつ部分は、帖紙とは別個の繊維製品の一部と判断できる（後述、繊維製品断片の項参照）。

なお、帖紙片中に、顕著な鉄錆のにじみが観察される資料（17～20）があり、次項で記述する鉄針が挿みこまれていることがわかった（21・22）。

帖紙に類する資料の出土事例として、和歌山県田辺市高尾山第二経塚（平安時代後期）に副納されていた小型山吹双鳥鏡（径8.6cm）を納めた鏡箱の敷紙がある（奈良博1977）。また、状態は良好ではないが、黒漆塗の手箱の懸子内、湖州六花鏡を中心とした方形範囲（11cm×13cm）に痕跡をとどめていた事例が、福岡県太宰府市大宰府条坊跡第50次調査ST320木棺墓（平安時代後期）の報告にある（佐川・山本1999）。

## 7 鉄針（第1図3、PL.7 17～22）

帖紙の断片中に、輪染みのように広がる褐色を呈する部分がある資料が含まれていた（17）。その破片の大きさは18.3×16.5mm、厚み0.8mmである。もっとも褐色の濃い部分の破断面を観察したところ、鉄製品の割れ口を確認できた（18・19）。鉄製品は、帖紙の破断面部以外においては直接確認することはできない。したがって、鉄製品は紙に挿まれた状態にあるとわかる。

X線透過撮影画像（21・22）により、帖紙内に、複数の細い棒状の鉄製品が並んで密着している状況を確認できた。棒状品はいずれも一端が尖っている。挟み込まれた先端部の位置にずれがあることから、残存長には、ばらつきがあり、最も長いものでこの帖紙片の最大長よりわずかに短い17.5mmである。他に残存長12.7mmの破片1本があり、くわえて、不明瞭ながら8.6mm分の影が読み取れることから、計3本の鉄製品が存在するとわかる。

一端を破損しており、全形、とくに他の一端に針穴がある頭部を持つか否かを確認できないという弱みはあるものの、大きさと先端部の形状から、針と判断した。

帖紙の破断面に露出している鉄製品の断面は、外観上、うすい楔形のようにみえるが、X線透過画像の情報から、0.8mm前後の幅をもつ3本の棒状品の破断面の集まりであり、紙に挟まれた隙間を錆が充填している形と理解できる。

鉄針の副葬例として、鳥取県米子市（旧西伯郡淀江町）福岡遺跡2区SX-01土壌墓出土品がある。網薄双鳥鏡（径7.3cm、平安時代末）、木製合子（底径13cm、トチノキ製ロクロ成形）、梳櫛、解櫛とともに副葬されていたもので、3本出土した鉄針のうち、2本は、骨が入り込んだ合子身の内面から出土した。熟年被葬者の性別は不詳であること、合子は埋葬から比較的短時間のうちに二次的に動いた可能性があることが報告されている（太田ほか1992）。

副葬品ではない出土事例としては、神奈川県鎌倉市千葉地東遺跡から出土した完形の針（長3.95cm、径0.8mm）の報告例がある。中世に護岸の木組が打ち込まれ室町時代前期まで流れていた河川の澱みに堆積した覆土腐植土層中から、陶磁器類・骨角製品・石製品・木製品とともに出土した金属製品中の1点である（服部・宍戸1986）。

伝世品では、南北朝時代の遺品として、熊野速玉大社古神宝類（国宝 明德元年 [1390] 頃）中の銀縫針（銅製鍍金の上に鍍銀）7本が知られている。神宝目録類の記述から、当初はひとつの手箱につき3本

の針が納められていたことが安永拓世氏により明らかにされている（和歌山県博2005）。

また、鏡や櫛などとともに伝世された平安時代にさかのぼる縫針の事例として、三重県津市四天王寺の薬師如来像（重要文化財）の像内納入品が知られている。この薬師如来像には、縫糸付の縫針7本のほか、唐草双鳳鏡1面（径10.3cm）、櫛3枚（長9.3～11.2cm）、漆塗木製扇骨5橋、タカラガイ2箇、牙賽子2箇（0.6cm角）、瑠璃玉1箇（径0.6cm）、絹製小袋1口、絹製包裂1枚、麻布1枚、麻糸1束、康平五年（1062）の年紀をもつ民部田所勘注状、そして、承保四年（1077）の年紀をもつ結縁交名や貢進状が納められていた。結縁交名は、この像について、開眼を見ずして亡くなった願主、物部美沙尾の後をうけて、寺家目代僧が多数の結縁者を募り造像したと伝えている。なお、これらの納入品は文化二年（1805）、同寺薬師堂の秘仏修理時に取り出されたもので、このほかに今日伝わらない鏡1面、「カタギヌ」「綿烏帽子」があったことが、大正三年の解体修理の際に発見された文化二年修理時の奉納記からわかる（文化庁1978）。

## 8 梳櫛（第3図、PL.8 2～4）

直線的な棟をもつ梳櫛である。親歯（厚1mm）を含む断片2点のほか、厚さ0.4mmの歯先58枚分が遺存する。大きめの破片において、7mmの間に薄い歯が11枚挽き出されていることから、歯の密度は1センチあたり約15～16枚と復元できる。親歯が2枚遺存していることから、鏡背の内側におさまる長さを最大とする形を推測できるが、歯先数と密度から復元した長さは約3.6cm分にとどまる。棟厚は5.3mm、刃先から棟までの幅は24mmである。樹種鑑定は未実施で、肉眼では黒褐色に見える。

棟から歯にかけて遺存している破片は、全体が幅方向に反っている。凹面側には、ところどころ櫛歯を覆うように帖紙と判断される付着物がみられる。帖紙残欠以外にも、複数の歯を覆うように、黒褐色の膜状の付着物や、織物の特徴をもたない繊維が付着している部位がある。

## 9 金属製菊花形皿（第1図2、PL.8 6～12）

蓬萊鏡の下方から回収された断片資料中に、同一個体とみられる30点以上の脆い碎片（総重量5.2g）が遺存していた。風化した表面の色調は、うっすらと橙褐色をおびた灰白色であるが、破断面は、やや青みをおびた暗い灰色ないし灰色である。破片表面には亀裂や剥落が入り、劣化が著しい。これらの素材については未確認であるが、風化した鉛あるいは錫製品のような外観を呈している。

未接合ながら、口径4.0cm、高さ0.75cm、16弁の菊花形皿に復元することができる。口縁端部は傷みがひどく、ごく一部のみが遺存する（PL.8 6～8▽部分）。また、体部上半から口縁にかけて、約1/4周分が欠損している。

最も厚みをもっているのは、底部片（1.3g）で、見込み中心部の厚みは1.55mmである。内面中央部分には、円形の平坦な低い突出部（径1.3cm）が作り出されているが、表面が荒れているため、線刻などによる蕊の表現の有無は不明である。また、突出部表面の色調が他の部分と異なる様相は見られない。

底部外面には、ごく低い円形の段（径1.5cm）がある。円形段は、中心部に径8mmの円をもつ、同心円状に見えるもので、外周区域は、中心に向かって傾斜している。この傾斜した部分をよくみると、小さな浅いくぼみが、中心の円を取り囲むように、低い稜線を挟んで放射状に並んでいる。表面が風化し、くぼみ周縁ほど欠損しやすい状態にあることから、確認できるのは部分的であるが、くぼみの底と判断される部分をもとに割り付けると16個のくぼみが環状に並ぶ姿を復元できる。したがって、きわめて低く、かつ

退化の様相が著しいものの、萼形の高台を意図した痕跡ととらえることができる。

口縁端部には、幅1.0mmの平坦面が作り出されているが、内湾して立ち上がる体部上半の厚みを計測すると、1.4mm前後と比較的しっかりしている部分から、0.7mm～0.8mm前後と薄手の部分まで、ばらつきがある。体部下半、とりわけ中心の円形部分との境界付近が薄い。

内面の花卉の境が比較的甘い稜線であるのに対して、外面の花卉の境は比較的シャープな溝となっている。内外面の差について、表面の磨滅の程度の違いが影響している可能性もあるが、輪郭の特徴と、厚みの不均一からみて、型の内側に鉛の板状素材を置き、叩いて形成した可能性を想定する余地がある。

なお、内面のところどころに、鉄錆に近い色調の橙褐色を呈するしみのような部分がある(9)。類似の様相を示す橙褐色を呈する部分は、破断面、灰白色の風化した表面と、風化がすすんでいない青みを帯びた灰色の本体の間においても、層状に挟まった状態で観察される。鉄漿など、使用痕に関わる付着の可能性もあるかもしれない。

一方、体部外面には緑、白、黒の付着物が観察される。緑色部分は緑青とみられる点状のしみで、蓬莱鏡に由来するものなのか、あるいは別に小さな銅製部品があったことを示唆するものなのかは不明である。白色部分(10～12)は、体部下半に面として見られるもので、不規則に交差する繊維がぶつぷつ切れた状態で遺存している部分と、粉のような状態で遺存している部分とがある。紙の繊維が崩壊しかかったもののようにもみえるが未確認である。黒色部分は、口縁部外面に広がっており(10)、粒子をほとんど観察できない墨のように見える。雲母のような微粒子を伴う部分も多い。

化粧道具における金属製菊花形皿の位置づけは、16弁の銀菊花形皿が3点一組で含まれている熊野速玉大社古神宝類(南北朝時代 明德元年[1390]頃)の手箱内容品において明確になっている。熊野速玉大社古神宝類中の、菊花形皿の口径は4.6cm～6cmほどで、高さや立ち上がりの角度、高台の形状など、細部の作りにばらつきがある。しかし、いずれも見込みには、蕊をあらわす釦のような突出部があり、浅い格子状の線刻が密に施され鍍金されている(奈良博1989、和歌山県博2005)。なお、熊野速玉大社の古神宝類中の化粧道具類の素材に関して、国宝の指定名称で銀とされている作例の多くが、銅製鍍銀、あるいは銅製鍍金の上に鍍銀されたものであることが報告されている(安永2005)。

金属製菊花形皿の出土事例として、鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡上層(14世紀代)方形竪穴建築址37から出土した銀製菊花形皿(口径5.4cm、器高1.8cm)(原1993)、鎌倉市今小路西遺跡御成小学校内第5次調査出土銅製菊花形皿(口径4.2cm、器高1.5cm)(河野1993)、中世末の福井市一乗谷朝倉氏遺跡出土例が知られている(福井県教委・朝倉氏遺跡調査研究所1980・1984・1985、福井県立朝倉氏遺跡資料館1988・1999・1992・2007)。

出土した金属製の菊花形皿は、複数の部品を組み立てて成形するものと、一体成形とみえるものの二種に分類できるが(大久保2012)、思井堀ノ内遺跡例は、後者の一例である。

## 10 繊維製品断片(PL.8 13～17)

繊維製品の本体がほとんど消滅した状況下であって、帖紙と面的に接触していた部分のみが、かろうじて形をとどめたと理解できる資料群である。

断片資料中には、ループ状の繊維断片(13・14)、平織(13)、平織ではなくあるいは振り織の一種にもみえる組織を持つ断片(15)、平行に走る繊維(16)などが、帖紙片など、より丈夫な断片に付着する形

で遺存している。

繊維製品の場合、特徴の把握には面としての広がりが必要であり、細部をみて判断できることがらには限界が多いが、多様な資料が存在したとみることができる。

平行に繊維が遺存している部分については、歯黒筆あるいは眉作の一部分を想定することもできるかもしれない。ただし、織物において、面を構成する経糸と緯糸、それぞれに用いられた糸の品質、染料や媒染剤の差異により、一方のみが劣化が進行する事もあることを尾形充彦氏からご教示いただいた。そのため、平行に繊維が遺存している資料であっても、織物ではないという別の積極的根拠がない場合には、判断を慎重に行う必要がある。

なお、筆類とは異なるが、櫛払いの痕跡や、水引の痕跡が確認されている貴重な事例として、博多遺跡群築港線関係第2次調査V面683号木棺墓（12世紀中頃）に副葬されていた桜花文研出蒔絵手箱とその内容品（湖州八稜鏡ほか）がある（力武・大庭1988）。

糸の劣化や消滅、欠損がないと把握された上で、なお、経糸と緯糸の組み合わせが交互ではないと確認された場合、あるいは、一見して平織のようだが一方の糸が一定のパターンで浮いている場合などには、組織で文様が織り出されている織物と理解される。また、太さの異なる糸が突如あらわれたように見える場合には、刺繍や縫糸の可能性がある。希少な織物であるほど、端裂は活用されることが想定されるが、出土事例として、福岡市箱崎遺跡第22次調査SX0050木棺墓（12世紀後半）から出土した鏡を包んでいたと推定される織物片について、顕紋紗の可能性が報告されている（片多・比佐2004）。

一方、全体の形はわからないものの、厚みのある心材と、薄い編み材が直交している断片（17）があり、籠の部分とみて矛盾しない資料である。表面に付着し光っているものは雲母の可能性が考えられ、帖紙との接触痕と理解される。雲母と編み材の間には、撚りの掛かっていない細い糸が面的に拡がっており、薄い絹製品の痕跡と考えられる。

かご類の出土例として大分県の2例が知られている。日田市朝日宮ノ原遺跡4号墓では、竹籠が、湖州鏡、龍泉窯系青磁椀、紅皿、鉢などとともに、頭位付近から出土した（友岡・土居・行時1990）。また、宇佐市吉久遺跡3号墓（13世紀前半）に副葬されていた湖州六花鏡の鏡面には、四ツ目状に編んだ植物繊維が付着遺存していた（佐藤1990）。

## 11 骨角類断片（PL.8 18）

断片化した資料中には、貝殻か骨が崩れかかったようにみえる断片が含まれていた。しかし、原形を復元する情報等は抽出できなかった。

骨製品が化粧道具類とともに出土した事例として、大分県宇佐市吉久遺跡3号墓（13世紀前半）がある。骨製品は、湖州六花鏡、毛抜あるいは鉢の可能性のある鉄製品、青磁椀片などとともに副葬されていた（佐藤1990）。

骨角類を用いた製品を、化粧道具類という範疇の中で求めると、筭あるいは刷毛軸などを想定することができる。鎌倉市内の中世の遺跡からは、鹿骨を素材とした髪搔や眉刷毛の軸とみられる筒などが出土している（小松1989）。また、春日大社の秋草蒔絵手箱内容品（鎌倉～南北朝時代 [14世紀]）には、繊細な作りの美しい骨製筭が含まれている（奈良博2007）。

## 12 白磁皿 (PL.8 19・20)

口径8.2cm、底径5.5cm、高さ1.8cm、横田・森田編年の白磁皿区類(13世紀後半～14世紀初頭頃)に分類される口禿、無文平底小皿の完形品である(横田・森田1978)。重なりをもって出土した化粧道具類の中では最も下位にあった。伏せられた状態で出土し、口縁は棺底面に密着していた。

当初、底面の広い範囲に銀色の付着物があり、その中央部分には、黒色の付着物があった。黒色部分の端部に緑青の付着がみられたことから、銅製品が接していた可能性がある。また、体部外面のうち、出土時に鏡背下に隠れていた部分にも、黒色の付着物があった。内面に付着物の情報は無い。

## 13 水晶片 (第1図4、PL.8 21)

長さ6.5mm、幅4.8mm、厚さ1.8mm、重量0.06g、無色透明の水晶片である。透明度の高いきれいな剥片であるが、玉として研磨加工されたものではない。

鏡取り上げ後に回収された一括資料中から抽出した時点では、全面が土に覆われていた。そのため、他の資料との関わりを示す付着物情報をもたない。他の断片化した資料の多くに炭化物や雲母片様の付着がみられる状況と比較すると異色といえる。付着物がみられないという情報は、水晶片が置かれていた地点、あるいはその周囲の環境を反映している可能性がある。

研磨されていない水晶片の出土事例を、生産遺跡以外で求めると、地鎮具等に比較資料を見出すことができる。

兵庫県川西市満願寺の発掘調査(岡野ほか1985、森1985)では、長さ3.3cm、幅1.8cm、厚0.4cm、無色透明の水晶片が1点出土した。出土地点は、13～14世紀頃に建立され、南北朝時代頃に焼失したと考えられている「建物2」の基壇上面を覆っている炭層(V層)である。

材質こそ水晶ではないものの、共通の要素を見出せるガラス片が、おなじく満願寺から出土している。南北朝から室町時代頃に建立され、室町時代末頃に焼失したと考えられている「建物3」の基壇築成時の埋納品で、水晶の結晶1点(長さ2.8cm、径1.1cm)とともに、銅製花瓶内に納入されていた。ガラス片は青色で、長さ6mm、幅4mm、厚さ3mm、不整形な形状である。水晶の結晶とガラス片が納められていた花瓶は、形態から鎌倉時代の伝世品かとされている(岡野ほか1985、森1985)。

石のかけらが大切に扱われていた事例は、像内納入品にもみることができる。清凉寺釈迦如来像(国宝 北宋 雍熙二年[985])の像内には、文書類・経典・紙本墨摺仏画・水月観音鏡像・絹製の五臓・雲母幢・水晶珠などとともに、厚さ約0.7cmの方解石1点が含まれていた(文化庁1978b)。

このほか、近世の地鎮具においても、水晶片をともなう事例がある。京都御所東方公家屋敷群跡の調査で出土した賢瓶には、海成真珠37点、象牙製玉1点、金箔片、五穀(米・麦・豆・胡麻)、梱包和紙などとともに水晶片3点が納められていた(卜田2001、能芝・小檜山2001)。



## 第3章 身近に置かれたもの

### 1 副葬品の性格

被葬者の後頭部付近に積み重ねられた状態で遺存していた副葬品の組成について、断片化した資料を含めて分類整理し（第1章、表1）、それぞれの概要を確認した（第2章）。

把握した組成は、名称や原形を把握できた8種、木製台座・蓬莱鏡・梳櫛・帖紙・鉄針・金属製菊花形皿・水晶片・白磁皿と、名称や原形は不明ながら素材の特徴から抽出できた5種、染織品残欠(1)・染織品残欠(2)・紙断片・骨角類断片・繊維製品断片の計13種である。

これら13種に区分された副葬品を、それぞれがもつ機能に視点を据えて見直すと、以下のように整理できる。

a 化粧道具	鏡、梳櫛、帖紙、菊花形皿、骨角類断片（筭か刷毛軸か）
b 汎用ながら化粧道具と位置づけうる資料	白磁皿
c 裁縫道具	鉄針
d 敷物・掛物あるいは包み	紙断片、染織品残欠(1)、染織品残欠(2)
e 詳細不明	繊維製品断片（織物断片、一部は籠断片か）
f その他	木製台座、水晶片

a～fの区分のうち、a・b・c、およびd・eの一部は、広い意味での女性の装身具（長崎1998）や道具と理解できる、あるいはその可能性を考えることができる遺物である。

一方、名称や原形が不明で素材の特徴から抽出したd・eの一部、および原形の把握は可能ながらその他としたfについては、化粧道具、あるいは女性の装身具という範疇におさまりきらない可能性が想定される遺物である。これらのうち、d・eに区分された一群については、情報量が限られており、詳細を検討する糸口を見つけるのが難しいが、fに区分された木製台座、水晶片については、一定の情報量をもっている。

木製台座と水晶片は、化粧道具という枠をはずすことで、これらを副葬品にもった被葬者像の一端を解き明かす鍵となる遺物といえよう。

### 2 副葬された形

13種の副葬品は、被葬者の傍ら、限られた範囲内から、重なりをもって集中的に出土した。このような出土状態は、箱あるいは包みのような、複数のものを一定の空間にまとめる何らかの拵があったことを想起させる。

化粧道具の副葬状態を明確にしめす報告例として、内容品をともなう「手箱」<sup>7)</sup>そのものが出土した事例がある<sup>8)</sup>。本事例においても漆塗手箱の存在を念頭において情報の整理を試みたが、その痕跡は全く遺存していなかった。

いうまでもなく、木製品の遺存状態は埋土中の環境に左右される。本事例においては、木棺が完全に消

滅する環境下にあった。したがって、より小さな木製の手箱が存在したか否かを検証することはできない。しかしながら、梳櫛や紙にくわえて繊維製品が断片化しつつも遺存していたことと、それらの集積中に漆膜や木胎の痕跡が全く含まれていないことを合わせ考えるならば、少なくとも漆塗の鏡箱などの小箱や懸子が存在していた可能性は低い。

一方、化粧道具を小さな空間におさめていた拵として、漆塗手箱以外にどのようなものがあるかを考えると、袋あるいは包み、たとえば旅装のすがたの一部としての表差袋あるいは幣袋の類を、候補の一角に掲げることができる。そのような形を思い浮かべる時、現存部分のみでは実証できないことがらではあるが、染織品残欠(1)、染織品残欠(2)という二枚重ねられた絹地を「包み」の候補として掲げることにも可能である。二重の絹製品がどのような形に仕立てられていたのかを捉えることはできないが、積み重なった状態で出土した副葬品群のなかで、下方に置かれた化粧道具と、最上位に置かれた木製台座のあいだを明確に仕切る面として存在していたと理解することができる。

## おわりに

思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓の木棺内に、化粧道具のセットとともに副葬されていた木製台座と水晶片について、課題と展望を整理し、むすびとしたい。

木製台座は、化粧道具類とした一括遺物の一番上に置かれていた。簡素なつくりの小さな白木の台座に、どのような形あるものが据えられていたのかを伝える具体的情報は遺存していない。しかし、極限まで退化しているとはいえ、六花形の台座に、心棒に支えられる形で固定されていた形を思い描くならば、信仰の対象となる造形であったと想定する余地がある。伝世作品における六花形台座の事例を参考とするならば、仏像<sup>9)</sup>、あるいは、舍利を納める容器の類を候補として思い浮かべることができる。

なお、台座が必要とされた意味あいに注目するならば、台座の下面に付着していた二種の絹地について、化粧道具を覆うと同時に、台座に据えられた造形を荘厳する敷物としての機能があったとみることも可能となろう。

一方、水晶片も、仏教に関わる信仰との接点を推測できる遺物である。鎌倉時代以降、日本の中世社会で高揚した釈迦信仰にともなう仏舍利への信仰は、水晶を用いた舍利容器の優品を数多く生み出した（奈良博2001）。舍利を崇拜・供養することは、古来アジア諸国で広く行われているが、多くの場合、水晶などが舍利を象徴するものとして代用されている（『岩波仏教辞典』第二版、471頁）。とりわけ注意されるのは、玉のように研磨されていない水晶片にも、一定の価値が認められている点である。このことは、地鎮具に加えられている水晶片の存在において具体的に確認できる。

ところで、水晶の剥片は、一乗谷朝倉氏遺跡（南2001）等の調査事例にみるように、水晶加工に際して、結晶を割る際に大量に生じる遺物である。水晶加工をおこなった生産遺跡で出土した剥片と、地鎮具などに含まれている水晶のかげらのあいだに、整形技法においてどの程度の違いがあるのかという基礎的な事実確認を経たおらず、実証には至らないが、数珠玉あるいは舍利容器などを制作する過程で生じた剥片を素材として、儀礼や信仰の場面で独自の役割を果たす水晶のかげらが生み出されたと推測する余地がある。

中世の日本社会で仏舍利と称される小さな玉などが、信仰の対象として広く出回っていた様相については、鎌倉時代の中流貴族平経高の日記『平戸記』仁治元年（1240）12月14日を出典として、本郷恵子氏により、あざやかに描き出されている（本郷2004、245～264頁「浄土の演出」）。以下に、本郷氏の著作から、水晶の流通の一場面を抜粋引用する。

「ところで経高は、かねがね釈迦仏を造立して、その胎内に仏舍利をおさめたいと考えていた。ところが、かれが所持している舍利は出所や来歴がよくわからない（「予の持ちたてまつるところの舍利は慥なる相伝なし」とある）。そこで、伝来のたしかな仏舍利を手に入れたいものだと、ずっと念願していた。

そんな最中に経高のもとにひとりの女性がやってきた。かれは、先日ふとしたことで、この女性から、仏舍利を一粒分けてもらっていたのである。この女性は「京の鄙女」と記されているので、京都かその近辺に住む身分の高くない女性であろう。彼女は、思いがけないめぐりあわせで仏舍利を手に入れたと称し、これを袋に入れて首にかけ、あちこちまわっていたのだという。その舍利が「神変をあらわす」として評判になったのを聞きつけて、経高がぜひにと懇願して一粒分けてもらい、大変感謝しているというしだい

であった。」(本郷2004 247~248頁)。

本郷氏が紹介されている中流貴族が得た舍利が、具体的にどのような品質形状をもつものであったのかはわからないが、水晶の玉であった可能性が高いと考えてよいであろう。

硬度の高い水晶の研磨や穿孔は、容易な作業ではない。そのような作業を経た玉等と比較すると、打ち割る工程で整形を終了する水晶片は、加工の手間や、大きさと質を含めた原石となる結晶の入手し易さにおいて、格段の差があり、数量的にたくさん存在した可能性がある。そのようなとらえてよいならば、水晶片は相応に安価であり、より流通しやすい可能性をもった物であったと思われる。山や溪に自ら足を踏み入れて鉱物資源を採掘あるいは採集する機会のない人々、あるいは、水晶加工に携わらない人々にとって、水晶片は、玉のように磨かれていなくても、購入するなどして手に入れる対象であったと考えることもできる。とするならば、思井堀ノ内遺跡中世墓の副葬品に含まれていた水晶片も、そのような1片ではなかったかと想像される。

本郷恵子氏は、「中世に生きる人々は、収入や資産の多寡にかかわらず、すこしでも余裕が生じれば信仰に投じていた。神仏に結縁し、浄土に生まれかわる望みを積みたてることによって、心の平安を得たのである。」と記されている(本郷2004 246頁)。

鎌倉時代後期、思井堀ノ内遺跡292号方形周溝区画墓に埋葬された女性に副えて棺に納められた品々－化粧道具・絹製品・台座・水晶片・掛幅装絹本着色画・青磁－は、この墓を含めた広範囲の発掘調査によって明らかにされた遺跡全体の情報(天野2006)と照らし合わせると、来世へ旅立つ被葬者と、被葬者の冥福を祈る在地領主層の人々がいただいていた信仰のかたちの一端を伝える遺品と理解することができる。

#### 注

- 1 詳細調査の結果、化粧道具の範疇におさまらない性格の遺物が含まれていることを確認したが、一括資料の総称として便宜的に「化粧道具類」を用いることとしたい。
- 2 思井堀ノ内遺跡および292号方形周溝区画墓全般に関わる発掘調査成果の記述は、すべて既刊報告書に拠るものである(天野2006)。なお、化粧道具類とともに出土した棺内副葬品のうち、棒状木製品として報告されていた資料については、詳細調査の過程において掛幅装絹本着色画であることが判明し、本報告第I部で報告した。
- 3 極限まで退化しているとはいえ、六花形六脚ととらえることができた台座の形に関して、祖形を考えるうえで基準となる造形を伝世作品に求めると、仏像の台座に容易に見出すことができる。なお、仏像の台座においても、花卉との対応が明確な事例から、簡略化がみられるものまで、そして、大型品から小型品まで多様な事例がある。六花形のほか、五花形五脚の例もある。また、比較するのがためられるほど豪華な13世紀後半以降の舍利容器の台座にも、六花形を見ることができる(奈良博2001)。
- 4 糸が連続してループを描く染織品として、刺繍あるいは編物がある。しかし、遺存状態により細部の組織を明確にできない本例について、糸がループを描いているように見える理由は明らかにできていない。

なお、日本の中世以前に遡る絹編物としては、伝世品2例が知られているのみである。そのうち1例は、円形に広がる平面をなすもの、他の1例は、立体に造形された袋である。

前者は、奈良市唐招提寺蔵「方円彩糸花網」(径27.3cm)である。昭和29年に奈良国立文化財研究所の美術工芸研究室が主体となって行った唐招提寺宝蔵調査の際に確認された絹編物であり、鑑真和上が唐より請来した

仏舎利三千粒を納めた白瑠璃製舎利壺を安置する金亀舎利塔の一具として国宝に指定されている。調査報告によれば、この調査以前には、唐招提寺代々の長老の方々以外には知られることなく、宝蔵の隅に納められた黒漆塗の箱のなかで大切に保管されてきた。絹編物が納められていた黒漆塗の箱（縦21.5cm 横23.5cm 高さ13cm）の蓋表には「大和尚御袈裟」と金泥で描かれているが、納められている袈裟は、建仁二年（1202）に唐招提寺の東室を修理して釈迦念仏会を創始した、当時笠置寺に遁世していた解脱上人貞慶（1155-1213）のものとして寺側で承知されている。この折り畳まれた袈裟を覆うように、絹編物（方円彩糸花網）は被せられていた。そのため、箱の平面形にしたがって当初方形に見えたといい、周縁部は傷んで欠失している（守田1962、奈良六大寺大観刊行会1969）。

後者は、奈良市伝香寺に伝わる木造地藏菩薩立像（重要文化財 鎌倉時代）の像内納入品である。鎌倉時代に作例の多く見られる裸形着像のひとつとして名高い地藏菩薩立像は、近世末には興福寺延寿院地藏堂に安置されていた像である。1868年、神仏分離令により子院が廃止された折に、唐招提寺末寺の伝香寺に安置された（松本1950）。絹編物は、地藏菩薩立像の頭部に奉籠されていた碧瑠璃舎利容器（径5.1cm 高さ4.5cm）を包む編み袋である。像内にはこのほかに、薬師如来小像、十一面観音小像、般若心経、法華経、安貞二年（1228）の年紀が認められる解深密経および比丘尼唯心の願文、貞慶の名が含まれる結縁交名などがある（太田1950）。願文は三通納められていたが、そのうちの一通、主たる比丘尼妙法の願文により、舎利（釈迦如来）、薬師如来、地藏菩薩、十一面観音という藤原氏の氏神である春日四所明神（第一殿武甕槌命〔常陸国鹿島大神〕、第二殿経津主命〔下総国香取大神〕、第三殿天児屋根命〔河内国枚岡大神〕、第四殿比売神〔河内国枚岡大神比売神〕）の本地仏の力添えと、春日四所の目に見えぬ力添えを願った像であることが伝えられており、神仏習合の祈りの形を具体的に伝える遺品として注目されている（倉田1973、文化庁1978）。

- 5 病草紙（平安時代後期）や住吉物語絵巻（鎌倉時代後期）などの絵巻物において、円鏡は鏡面を上にして鏡箱に納めた状態で手にする道具として描かれている（小松1989）。また、熊野速玉大社古神宝類の鏡箱において、鈕を下に鏡が納められていたことが、鏡箱の内面に貼られた織物の傷み方から判明している（安永2005）。これらのことから、鏡面を上にした状態で出土した和鏡が、鏡箱に納められていた可能性は十分にあるといえよう。

なお、鏡面を下に向けて出土した事例で、鏡面下に遺存していた鏡箱が蓋であると判明した事例がある。千葉県船橋市印内台遺跡群第27次調査054土坑墓（12世紀後半～13世紀前半）に副葬されていた鏡とその鏡箱である。印内台054土坑墓の鏡は、瑞花双鳳五花鏡（径11.8cm）で、被葬者の胸部付近、上腕骨の下、土坑の底面上5cmほど離れたところから、鏡面を下にした状態で出土した。そして、その下方および側面部分には、箱材が遺存していた。注目されるのは、鏡面下方に密着して遺存していた円形の鏡箱の漆塗面に白色で梅花文が描かれていた点で、このことから、鏡面下方にあった箱材が鏡箱の蓋であると判明し、漆塗梅花文鏡箱に鏡面を上になめられた鏡が、箱ごと裏返しの状態になっていたという出土状況が解明されている（白井2002）。

- 6 帖紙の内容物について速玉大社の古神宝を調査された安永拓世氏は、『熊野山新宮神宝目録』中の記事「紅帖紙一雙 一ヶ入白粉 一ヶ入黛」をあわせて紹介されている（和歌山県博2005）。同様の記事は『香取大神宮造営目録』『香取宮遷宮用途記』『盛殿遷宮用途記』にもみえる（『続群書類従』神祇部巻第70・71）。また、小松大秀氏は、白粉や「はいずみ」（眉作りに用いる墨）の包み紙として、帖紙を用いている例が『堤中納言物語』にあることを紹介されている（小松1989）。

- 7 手箱は、身の回りの様々な品を納める箱であり、室内に置かれていた調度のひとつである。深さのある箱本体に懸子とよばれるごく浅い箱を縁にかけて落としこみ、箱内の空間を上下に仕切ることによって、小さな道

具類を整理収納することができる。内容品として化粧道具をとまなう古神宝の手箱が伝存するほか、絵巻に描かれた手箱に、手箱の用いられ方の一端をみることができる。『伊勢新名所絵歌合』（鎌倉時代後期）河辺里には、蒔絵が施された手箱を前に、鏡を手にして自ら化粧をする女性の姿が描かれている。また、『病草紙』（平安時代後期）には、化粧道具を納めた手箱を前にして、鏡に見入る女性の姿が描かれている（奈良博20007）。

ところで、『男衾三郎絵詞』（鎌倉時代後期）第二段には、地方武士の館の奥の間で、櫛を手にした二人の侍女が武士の娘に仕える場面が描かれている。この場景に描かれている化粧道具は、低い脚が付いているとも見える蓋のない長方形の浅い箱のようなものに並べられている。懸子のみが描かれている可能性もあろうが、他の絵巻に見えるように、蓋がなくても手箱と判断できる描写とは異なった形に表現されている。なお、手箱以外の容器に収納された化粧道具の出土事例として、平安京右京三条三坊十町地区SX46木棺墓（10世紀前半）出土品が知られている。化粧道具は、漆皮の折敷に納められていた。なお、この事例については、箱の可能性もあるが蓋を伴わなかったため一応折敷と呼称し報告すると記されている（平尾ほか1990）。

- 8 手箱の出土例は5例ある。滋賀県野洲市八夫遺跡木棺墓〔11世紀～12世紀〕（辻1999）、三重県津市雲出島貫遺跡SX329木棺墓〔12世紀末～13世紀前葉頃〕（伊藤2000、井上ほか2000）、福井県越前市家久遺跡礫槨墓〔13世紀前葉～中葉〕（内川1993、小淵1997）、福岡市博多遺跡群築港線関係第2次調査V面683号土壙出土品〔12世紀後半頃〕（力武・大庭1988）、福岡県太宰府市大宰府条坊跡第50次調査ST320木棺墓出土品〔12世紀後半頃〕（狭川・山本1999）が知られている。なお、家久遺跡の手箱の内容品は化粧道具ではなく、硯箱である。

上記のほか、萩双鳥鏡・青白磁合子・白磁皿・毛抜などを出土した福岡市七反田遺跡SK01土坑墓において、周囲とは異なった土が長さ28cm、幅20cmの不整形の範囲に薄く広がっている状況が検出されており、手箱の痕跡と把握されている（佐藤・吉武1990）。

- 9 台座上面に緑青や鉄銹の痕跡が見られないことから、木を素材とした造形を候補として出土事例を探索すると、小型の彫像を数例見出すことができた。しかし、いずれも台座と一体で彫られている。

## 参考文献

- 天野 努 2006『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書1－流山市思井堀ノ内遺跡（中世編）－』千葉県教育振興財団調査報告第549集 財団法人千葉県教育振興財団
- 伊藤裕偉 2000『島拔Ⅱ』三重県埋蔵文化財調査報告212 三重県埋蔵文化財センター
- 井上美知子・菅井祐子・下野聖・小村真理 2000「雲出島貫遺跡出土漆箱の分析と保存処理」『島拔Ⅱ』三重県埋蔵文化財調査報告212 三重県埋蔵文化財センター
- 河野真知郎 1993『今小路西遺跡（御成小学校内）第5次発掘調査概報』今小路西遺跡発掘調査団 鎌倉市教育委員会
- 内川隆志 1993「中世礫槨墓の移築・副葬品の保存処理とその活用－福井県武生市家久遺跡－」『國學院大學博物館學紀要』第18輯 國學院大學博物館学研究室
- 卜田健司 2001「賢瓶を探る」『リーフレット京都』No.152 財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館
- 江上 綏 1999『料紙装飾 箔散らし』『日本の美術』No.397 至文堂
- 大久保奈奈 2012「金属製花形小皿の出土事例」『研究連絡誌』第73号 財団法人千葉県教育振興財団
- 太田古朴 1950「伝香寺裸体地藏立像と胎内奉納物」『史迹と美術』203号
- 太田正康・原田雅弘・西川徹 1992『福岡遺跡 一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』鳥取県教育

- 文化財団調査報告書27 財団法人鳥取県教育文化財団
- 小笠原小枝 1998『染と織の鑑賞基礎知識』 至文堂
- 岡野慶隆ほか 1985『川西市満願寺』 川西市教育委員会
- 小淵忠司 1997「家久遺跡の中世墓について」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会  
桂書房
- 春日大社社務所 1973『春日大社古神宝宝物図録』
- 片多雅樹・比佐陽一郎 2004「箱崎遺跡第22次調査出土青銅鏡付着繊維の調査について」『箱崎17－箱崎遺跡第22  
次調査報告（1）－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第811集 福岡市教育委員会
- 久下 司 1970『化粧』ものと人間の文化史4 法政大学出版局
- 久保智康 1999『中世・近世の鏡』『日本の美術』No.394 至文堂
- 久米康生 1995『和紙文化辞典』わがみ堂
- 倉田文作 1973『像内納入品』『日本の美術』No.86 至文堂
- 小松茂美編 1978『男衾三郎絵詞 伊勢新名所絵歌合』（『日本絵巻大成』12）中央公論社
- 小松茂美編 1978『住吉物語絵巻 小野雪見御幸絵巻』（『日本絵巻大成』19）中央公論社
- 小松大秀 1989『化粧道具』『日本の美術』No.275 至文堂
- 狭川真一・山本信夫 1999『大宰府条坊跡X I－50次調査－』太宰府市の文化財 第42集 太宰府市教育委員会
- 佐藤一郎・吉武 学 1990『都地・七反田遺跡－市道野方・金武線建設に伴う埋蔵文化財の調査－』福岡市埋蔵文  
化財調査報告書第223集 福岡市教育委員会
- 佐藤良二郎 1990「宇佐の中世墳墓」『大分県地方史』137号 大分県地方史研究会
- 佐原市教育委員会 1999『香取神宮史料調査報告書－建造物・美術工芸品・考古資料編－』
- 白井太郎 2002『印内台遺跡群（27）』埋蔵文化財センター調査報告第21集 財団法人船橋市文化・スポーツ公社  
埋蔵文化財センター
- 田中 重 1999「料紙装飾における箔の技法」『日本の美術』No.397 至文堂
- 中世墓資料集成研究会 2004『中世墓資料集成－東北編－』
- 中世墓資料集成研究会 2005『中世墓資料集成－関東編（1）－』
- 中世墓資料集成研究会 2005『中世墓資料集成－関東編（2）－』
- 中世墓資料集成研究会 2006『中世墓資料集成－北陸編－』
- 中世墓資料集成研究会 2005『中世墓資料集成－中部・東海編－』
- 中世墓資料集成研究会 2006『中世墓資料集成－近畿編－』
- 中世墓資料集成研究会 2005『中世墓資料集成－中国編－』
- 中世墓資料集成研究会 2004『中世墓資料集成－四国編－』
- 中世墓資料集成研究会 2004『中世墓資料集成－九州・沖縄編（1）－』
- 辻 広志 1999「黒漆塗手箱を納めた木棺墓の調査」『滋賀文化財便り』No.257 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 長崎 巖 1999『女の装身具』『日本の美術』No.396 至文堂
- 中里寿克 1986「鎌倉時代漆芸技法資料 I－梅蒔絵手箱 三島大社蔵－」『保存科学』第25号 東京国立文化財研  
究所
- 中野政樹 1969『和鏡』『日本の美術』No.42 至文堂

- 奈良国立博物館 1989『特別展 古神宝 - 神々にささげた工芸の美-』
- 奈良国立博物館 1995『春日大社名宝展』
- 奈良国立博物館 2001『仏舎利と宝珠 - 釈迦を慕う心-』
- 奈良国立博物館 2007『特別展 美麗 院政期の絵画』
- 奈良国立博物館 2007『おん祭と春日信仰の美術』
- 奈良国立文化財研究所『唐招提寺寶物調査目録：文部省科学研究費による』
- 奈良六大寺大観刊行会編 1969『奈良六大寺大観』第12巻 唐招提寺一 岩波書店
- 成瀬正和 2002『正倉院宝物の素材』『日本の美術』No.439 至文堂
- 能芝 勉・小檜山一良 2001「京都御所東方公家町跡」『発掘された日本列島2001新発見考古速報』朝日新聞社
- 原廣志編 1993『由比ガ浜中世集団墓地遺跡 (No.372) 由比ガ浜二丁目1034番地1外地点』鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9 (第1分冊)』鎌倉市教育委員会
- 平尾政幸・加納敬二・鈴木久男・岡田文男 1990『平安京右京三条三坊』『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第10冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1980『草戸千軒町遺跡 - 第24~26次発掘調査概要 - 1978-』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1993『草戸千軒町遺跡発掘調査報告 I - 北部地域北半部の調査-』広島県教育委員会
- 福井県教育委員会 朝倉氏遺跡調査研究所 1980『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XI - 昭和54年度発掘調査整備事業概報-』
- 福井県教育委員会 朝倉氏遺跡調査研究所 1981『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XII - 昭和55年度発掘調査整備事業概報-』
- 福井県教育委員会 朝倉氏遺跡調査研究所 1984『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XV - 昭和58年度発掘調査整備事業概報-』
- 福井県教育委員会 朝倉氏遺跡調査研究所 1985『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XVI - 昭和59年度発掘調査整備事業概報-』
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1988『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告II 第10・11次、第54次調査』福井県教育委員会 福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1992『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡平成3年度発掘調査概要 (23)』福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1999『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告VII 第35次、第56・85次、第61・62次調査』福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館 2007『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告IX 第49・50次調査』福井県立朝倉氏遺跡資料館
- 文化庁監修 1978a『重要文化財』別巻I 像内納入品 毎日新聞社
- 文化庁監修 1978b『重要文化財』別巻II 像内納入品 毎日新聞社
- 本郷恵子 2004『中世人の経済感覚「お買い物」からさぐる』NHKブックス987 日本放送出版協会
- 毎日新聞社手漉和紙大鑑委員会編 1975『手漉和紙』標本紙編 毎日新聞社



- 松本樞重 1950「伝香寺と裸地藏の伝来」『史迹と美術』203号
- 村上 隆・福島政文 1995「草戸千軒町遺跡出土の金属製品の材質について」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』  
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編集 広島県教育委員会
- 森 郁夫 1985「万願寺の地鎮具・舍利埋納」『川西市満願寺』 川西市教育委員会
- 守田公夫 1962『唐招提寺蔵「レース」と「金亀舍利塔」に関する研究』奈良国立文化財研究所十周年記念学報  
(学報第14冊) 奈良国立文化財研究所
- 行時志郎 2003『大肥中村遺跡－発掘調査概報－』 日田市教育委員会
- 横田賢次郎・森田 勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 力武卓治・大庭泰時 1988『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告(Ⅱ) 博多』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集 福岡市教育委員会
- 和歌山県立博物館 2005『熊野速玉大社の名宝－新宮の歴史とともに－』

表2 巻頭図版 (PL.6 ~ PL.8) 撮影データ

PL.	写真No.	撮影内容	備考	
6	木製台座と絹製品二種・紙	1	台座上面	
		2	台座上面	
		3	台座脚の下面	
		4	台座脚の側面	
		5	台座下面に遺存する紙・絹製品二種	
		6	台座脚の下面と染織品残欠(1)・(2)	写し込みスケール単位mm
		7	染織品残欠(1)	写し込みスケール単位mm
		8	染織品残欠(1)・(2)	写し込みスケール単位mm
		9	染織品残欠(1)	写し込みスケール単位mm
		10	染織品残欠(1)	写し込みスケール単位mm
		11	染織品残欠(1)	写し込みスケール単位mm
		12	染織品残欠(2)	写し込みスケール単位mm
		13	染織品残欠(2)	写し込みスケール単位mm
		14	台座下面に付着遺存する紙	上段 掲載倍率 約10倍 下段 掲載倍率 約40倍
		15	鏡面から剥落した紙	上段 掲載倍率 約10倍 下段 掲載倍率 約40倍
7	帖紙と針	1	帖紙片(資料番号A-03)	掲載倍率 約3倍
		2	帖紙片(資料番号A-03)	掲載倍率 約8倍
		3	帖紙片(資料番号A-03)	掲載倍率 約3倍
		4	帖紙片(資料番号A-03)	掲載倍率 約16倍
		5	帖紙片(資料番号A-03)	掲載倍率 約32倍
		6	帖紙片(資料番号A-04一括中の1片)	掲載倍率 約16倍
		7	帖紙片の折り返し部分(資料番号A-03)	写し込みスケール単位mm
		8	同上	写し込みスケール単位mm
		9	帖紙片(資料番号C-04一括)	写し込みスケール単位mm
		10	帖紙片(資料番号C-04一括中の1片)	掲載倍率 約32倍
		11	帖紙片(資料番号C-0410の破断面部分)	掲載倍率 約32倍
		12	帖紙片(資料番号C-0411の近接部分)	掲載倍率 約32倍
		13	帖紙片(資料番号G-03)	掲載倍率 約32倍
		14	帖紙片(資料番号G-09)	掲載倍率 約8倍
		15	帖紙片(資料番号B-10)	掲載倍率 約16倍

PL.	写真No.	撮影内容	備考	
7	帖紙と針	16	帖紙片(資料番号B-10)	掲載倍率 約32倍
		17	鉄錆が輪染みのようにの滲んだ帖紙片(資料番号A-04)	掲載倍率 約3倍
		18	同上(破断面の鉄製品)	掲載倍率 約8倍
		19	同上	掲載倍率 約8倍
		20	同上(紙の繊維)	掲載倍率 約48倍
		21	帖紙片(資料番号A-04)に挟まれている鉄針のX線透過撮影画像	森恭一氏撮影
		22	同上(撮影条件変更画像)	同上
		23	帖紙片(資料番号M一括)	
		24	帖紙片(資料番号M一括中の1片)	
		8	化粧道具類の組成	1
2	梳櫛断片(表・裏)			
3	梳櫛の刃先			写し込みスケール単位mm
4	櫛歯部分拡大			
5	鏡取り上げ後の状況			発掘調査報告書より転載
6	菊花形皿			ほぼ等倍
7	同上(口縁部)			
8	同上(破断面)			
9	同上(内面)			
10	同上(外面付着物)			
11	10の部分拡大			掲載倍率 約10倍
12	11の部分拡大			掲載倍率 約40倍
13	帖紙と接していた繊維製品類(資料番号B-13)			掲載倍率 約16倍
14	同上(資料番号G-04)			写し込みスケール単位mm
15	同上(資料番号G-03)			掲載倍率 約32倍
16	同上(資料番号B-02)			上段 掲載倍率 約5.5倍 下段 掲載倍率 約16倍
17	同上(資料番号A-07)			上段 掲載倍率 約8倍 下段 掲載倍率 約16倍
18	骨角類断片			等倍
19	白磁皿の出土状態			発掘調査報告書より転載
20	白磁皿			発掘調査報告書より転載
21	水晶片			写し込みスケール単位mm

## 流山市思井堀ノ内遺跡出土遺物のX線分析調査

流山市思井堀ノ内遺跡より出土した棒状木製品2点と化粧道具類の内容物である鏡などについてX線分析調査（蛍光X線分析、X線回折）を実施した。蛍光X線分析は試料に含まれる元素の種類や量を調べるための方法、X線回折は試料を構成する結晶質の化合物を調べる方法である。

X線分析の結果、棒状木製品1では、朱（HgS）、岩緑青 [CuCO<sub>3</sub>・Cu(OH)<sub>2</sub>]、金、銀、鉛白色物質などが確認された。また棒状木製品2では岩緑青、鉛白色物質、銀などが確認された。鉛白色物質は当初から鉛白などの白色化合物であったのか、あるいは鉛丹（橙色）などが経年により変質した生成物なのか不明である。いずれにしても、彩色が施されていたか、付着していたことがわかる。これらは、当時の絵画等に用いられた正統な顔料であり、庶民には縁のない顔料でもあった。

鏡はその鍍を測定試料としたが、検出された主成分元素は鉛（Pb）と銅（Cu）のみである。スズ（Sn）は全く検出されないことから、この鏡は銅、鉛の2成分合金であったことがわかる。

（成瀬正和）



## 研究紀要28

---

平成25年2月15日発行

発 行 者      公益財団法人 千葉県教育振興財団  
文化財センター  
四街道市鹿渡809番地の2  
電話043 (422) 8811

印 刷 所      株 式 会 社 正 文 社  
千葉県中央区都町1-10-6

---